女學世界

明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治四十二年五月一日發行（每月一回一日發行）



第九巻
第六號

博文館發行



美顔水と初夏の化粧

多年の經驗と最新の學理により精製せる化粧用美顔水は畏くも、九重の雲深き貴顕を始め顕門名家の貴婦人令嬢紳士淑女の方々に召され今や最新流行の化粧水として其名世界に嘖々たり

常に之を愛用すれば、色白くきめを細かにし艶美しく、又化粧下に用ふれば巧妙なる作用にて白粉濃く薄く意のまゝにのび、亦あれ性の方には最もよく、美しき姿は玉を欺き花を羞しむ

●本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ

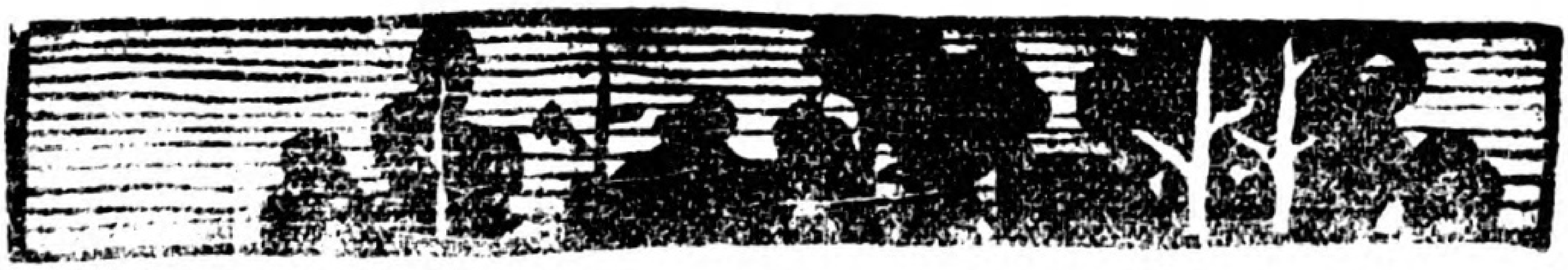
▲東京市内は勿論日本全國各地到る所の有名なる小間物店にて販賣す



越
一 兒童博覽會
一 寄切れ見切り反物賣出し
五月人形及甲冑陳列會（四月十日より開會）
一 懸賞光琳式模樣圖案陳列
一 第十七回新柄陳列會
三越呉服店
東京日本橋



女學世界第九卷





第六號目次



新製

御料たつた

純無鉛白粉

◉此白粉出で、ことしの夏こそ



◉お顔の艶の一と際見違ふべく候

東京京橋南傳馬町

電本三十番三千番、振替口座九二九三

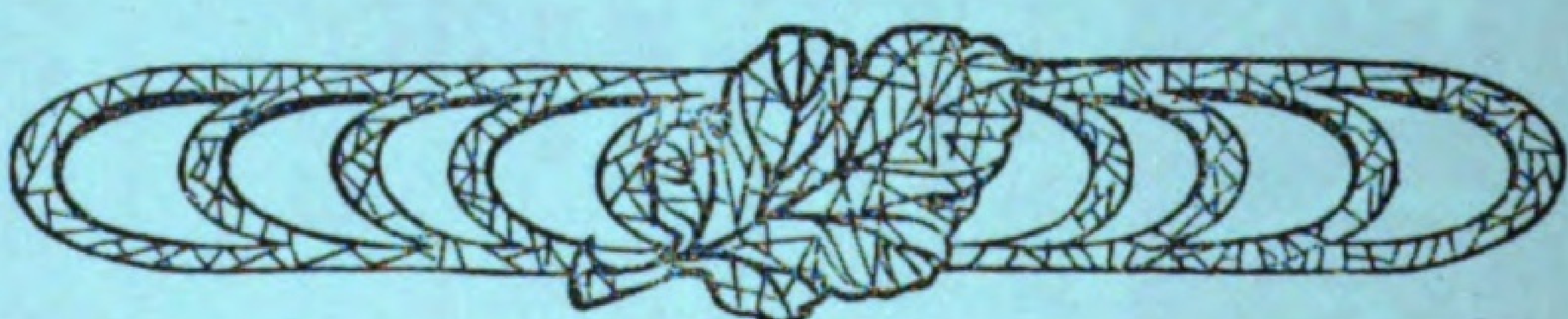
流行の横挿　大西白牡丹

(1)



(1)銀平戸七寶楓の横ざし　五圓八十錢

(2)



(2)銀臺削具細工菊水の圖　四圓九十錢

(3)



(3)銀平戸七寶芭蕉横ざし　七圓五十錢

(4)



(4)銀彫刻削具入菊の横挿　金六圓

(5)



(5)銀製削具入笹の横ざし　三圓九十錢

女(いの一)

（女、いの二）

極めて有益なる參考書

最新刊

共立女子職業學校教師
山田きよ子
種村なか子 共著

袋物細工之技術

和装美製 全一冊
正價金壹圓拾錢
郵稅金八錢

趣味ある家庭の良書

本書は袋物細工を獨習する者の參考に供せんが爲に器具材料の使用方、形紙の裁ち方、貼附方、袋物の縫方順序、積り方、仕上方等の一切を網羅し二百餘箇の圖畫を加へて最も丁寧に講述し卷末には特に實物大の形紙を添へたるものなり依て家庭に於ける姉妹の爲に又檢定試驗に應ずる姉妹の爲に極めて有益の參考書たるべし

發行所 東京日本橋通一丁目 **大倉書店**
振替貯金東京二三八番
電話本局 四一四番

裁縫おさいくもの (附 實用小物)
伊藤文子 小川錠子 高田久子 共著
和装 全一冊 正價金九拾錢 郵稅金八錢

家庭造花術全書
金子支江子 三好幸子 石川壽美子 共著
和装 全二冊 正價金壹圓六拾五錢 郵稅金十二錢

家庭編物全書
女子高等師範學校講師 森本義子 著
和装 全一冊 正價金八拾錢 郵稅金八錢


THE GEM
ゼム
花去り新緑の月來る。一粒のゼムに清新の氣を保つ。これ最も可也
▲氣分を爽にし
▲音聲を美くす
▲消化を好くす
▲疫病を豫防す
▲記憶力を增す
○頭痛 ○眩暈
○氣鬱 ○胸痞
○口熱 ○口臭
○水傷 ○食傷
○時候傷 ○渇
○舟車醉 ○宿醉
ゼム定價
小包 十錢
大包 二十錢
小箱 五十錢
大箱 一圓
容器入ゼム 廿錢
The Gem ゼム
本舗 東京大阪 山崎榮三郎 本店擴張部
衞生家必携懷中良藥

女(いの四)

玉燦々



田中製版所三色版



千代田
白粉
香油
千代田白粉と香油とは廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖々たり
白粉（大瓶卅五錢 小瓶二十錢） 水製 廿五錢
香油（大瓶卅五錢 中瓶廿五錢 小瓶十七錢） 特製 七十錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

女（ろの一）

最上醬油

「キハク印

香

醸造元
茂木七郎右衛門
千葉縣野田町
電信略號ハク又キハク

東京支店
中野長兵衛
日本橋小網町三丁目
電話浪花百七十七番

見よ◉月經なき女子◉病める婦人

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物

▲勿驚……藥力最精實…効能確保…有効無害…



博士賞賛良藥

改良 女月丸

其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止 月經滯り 經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歳になり月經なき人は二劑又毎月月經困難は二三日分にて通經す

藥價一劑六十錢二劑一圓十錢特製二圓廿錢別製分三圓卅錢送料各四錢宛

女(ろの二)

◉肥滿病新藥 プリッテー PRETTY

小供の頃美愛と賞せられし人も年頃になりてよりぶと〳〵肉太りたる爲め上圖の如く醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツォルト氏の發見藥にて脂肪多き人◉ぶと〳〵ふとり◉血太り◉肉太り◉酒太り◉水太り◉顔赤◉にきび◉ふき出物多き人◉輕症一二劑如何程の惡性も四劑分連服せば色は艶白となり暫て美顔窈窕たる美人となる事を保證す乞肥滿性の人は試みよ

諸姉妹の福音

美人となる



やせる薬

肥藥賣價 一劑一圓五十錢 二劑二圓九十錢 三劑四圓卅錢 四劑五圓半 送料十錢

發賣元 東京々橋中橋和泉町 小宮愛生堂 振替第壹〇六七七番



水晶おしろい
文明の婦人は
薄化粧を尚ぶ
水晶おしろいは
最良の薄化粧料なり
定價
金五拾錢
金廿五錢
金拾五錢
本舗
東京
大和屋

女(ろの三)

信用ある安藤井筒堂の製品

カバン形　新案特許　正價貳拾五錢



口中香水カオール

價　箱入壹圓　五拾錢　廿錢　◎袋入拾錢　五錢

本品の特効は
◎口中の悪臭を去り、口熱を起すことなく
◎咽喉を能く潤はし、音響を最も美くす
◎飲食の中毒を除き、容易く禁烟し得る
を以て交際場裡に出入する紳士淑女は必ず携帯を怠り給ふな又空氣中に浮遊して居る細菌を殺す力を有つて居りますから學校、集會、運動會等常に多人數集會の場所に於て呼吸より感染する肺病、ペスト赤痢其他恐るべき悪疫を豫防するには口中香水カオールを一二粒口中に含んで居るに限ります。

高等香油　ビューチー

價（大罎四十五錢　小罎二十五錢）送料八錢

椿油中に毛髪の營養となるべき多くの性分を含有するとは嘗て村井弦齋氏が説明せられたるがビューテーオイルは即ち椿油中より毛髪の營養となるべき主成分を採り之に適當の香料と油の通有性を去るべき藥劑を配合したる最も進歩せる煉香油なり

◎御注文の節は必ず本誌愛讀者たることを御申添を乞ふ……

香水原料　オリヂナルパーヒユーム

價壹圓貳拾錢

本品はハンカチーフ用として優等無比なるは勿論、御婦人方は花簪、リボン、まげ入等に其一雫を、紳士方は帽子、ネクタイ等に又は男女襟裏、扇子等に四時絶へず其一滴を潤はし給はゞ能く一週の永き間本品獨特の優美高尚なる芳香は坐臥常住馥郁として恰も花園の中に居給ふ如くならん。本品は一瓶の量は二百八十滴を充せる故一日に一滴宛を消費するも二百八十日如何に裕に使用するも一瓶にて優に半年以上の使用に堪ゆべし。



大拾五錢小拾錢送料貳錢

「梅の花たが袖ふれし匂ひぞと春やむかしの月にとはゞや」との昔の名歌に因みて造りたる、いとも高雅の匂袋なり

本品の一度世に出づるや東京、大阪、京都、神戸の名ある呉服店より多大の御注文に接し且つ取次販賣を快諾せられたり。本品は優等なる芳香原料の外に最も有効なる殺菌、防腐、及、防蟲等の藥劑を配合せる故に寄席、劇場、汽車、汽船などの旅行、簞笥の抽斗、長持、書齋、骨董等の間に用ゐて大なる効あり。

發賣元
東京市日本橋區蠣殼町水天宮前象印齒磨本舗
安藤井筒堂
電話浪花長二九四九番
振替貯金口座二九五〇番

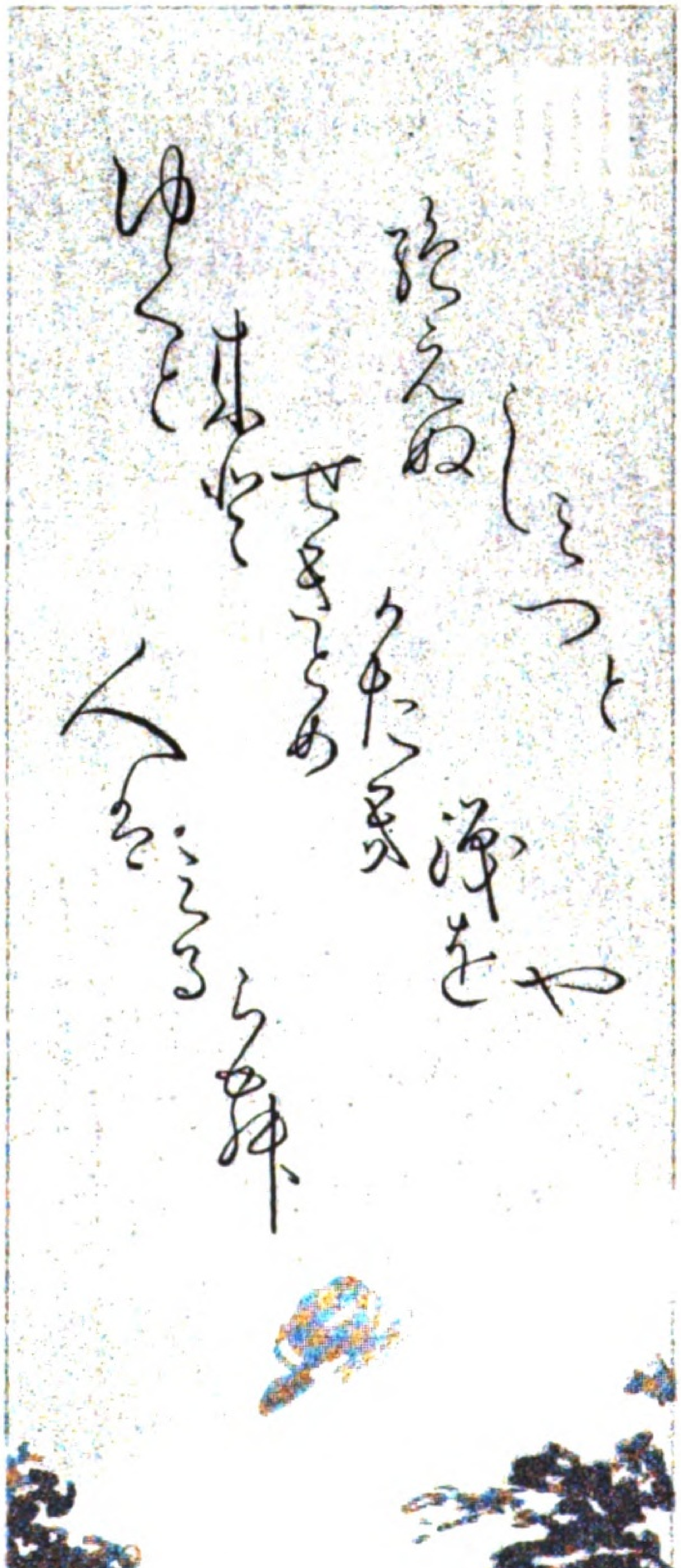
▲賣捌は全國至る處の賣藥化粧品店にあり

（ろの四）

蓬生



關屋



一條成美画
三宅花圃筆



煉香油
パール
スミレ香水
發賣元
東京市
平尾分店
横山町

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞贊好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奧なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新說を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脫毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハッポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割増の事

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
取次所ナキ地方ハ直接本舖ヘ注文アレ

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
本舖 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

●●大取次左ノ通リ●●大取次附近ノ各藥店ニアリ●●

東京市
本鄉六丁目赤門前 瓜生藥局
麴町區紀尾井町三 齋藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 森田藥局
芝田町四の一二 加藤支店
芝愛宕下町一ノ二 岩本藥局
赤坂田町四の一 竹內藥局
同青山北町五 西井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ッ谷大傳馬町二 永野藥局
高松市片原町 新明藥局
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り石藥師角
京都市下京區五條通り富小路行當り
大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 荒川長太郎
同 鐵砲町三丁目 谷田藥局
神戶元町一丁目 西村閑吏局
廣島市橋本町 萬代藥堂
神奈川青木七軒町 水崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市菱屋町 磯崎藥局
稲知 藥局
安江洋反物店

新流行指環



(1) K18 中天ルビー 兩端ダイヤ入 金參拾圓
(2) K18 クラブ形 眞珠入 金拾貳圓半
(3) K18 横爪 眞珠入 金拾貳圓半
(4) K18 眞珠入 金拾圓半
(5) K22 菊花透明 金貳拾參圓
(6) K22 梅花彫白金入 金拾五圓
(7) K22 月ニ梅白金入 金拾參圓
(8) K20 竹彫白金入 金拾圓

商品目錄出來仕候（送料四錢）

今川橋 松屋吳服店前

東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西
本局二〇四〇番振替口座一五三一四番

女（はの二）



金製指環

(但何れも天絹箱付)

(1) 十二金製電形眞珠入　指環　價一圓八十錢

(2) 十二金製水形眞珠入　指環　價一圓四十錢

(3) 十二金製中劍形光石入　指環　價一圓四十錢

(4) 十二金製櫻形眞珠入　指環　價一圓三十錢

●電話又は「ハガキ」にて御注文之節は郵送料市内五錢地方十二錢申受候



銀側時計

銀彫側片硝子十一形中蓋付器械ニツケルシリンドル頭引鍬廻シ龍頭卷　時計　價金四圓九拾錢

銀斜子側無双十二形中蓋付器械流金石入シリンドル龍頭卷　時計　價金六圓五拾錢

銀彫側片硝子十三形中蓋付器械ニツケルシリンドル頭引鍬廻シ金鍍給當龍頭卷　時計　價金五圓七拾錢

時計眼鏡貴金屬指環類

大隅商店

東京淺草區茅町二丁目六番地

電話下谷六五七番

▼意匠斬新破格廉價正札附▲



儀式用鼈甲　櫛笄

象牙蒔繪　櫛中差

金銀寶石入　簪指輪

佛國製季節向

巾廣珍柄　リボン

米國製差心持好新形　タボ櫛

珊瑚珠本場土州ヨリ直輸開始

市價ヨリ一二三割方憷に安價願候

御持古シノ小間物交換仕候

神田須田町（電話本局二〇七六番）（振替口座二八一一番）

鼈甲小間物商

三井屋德次郎

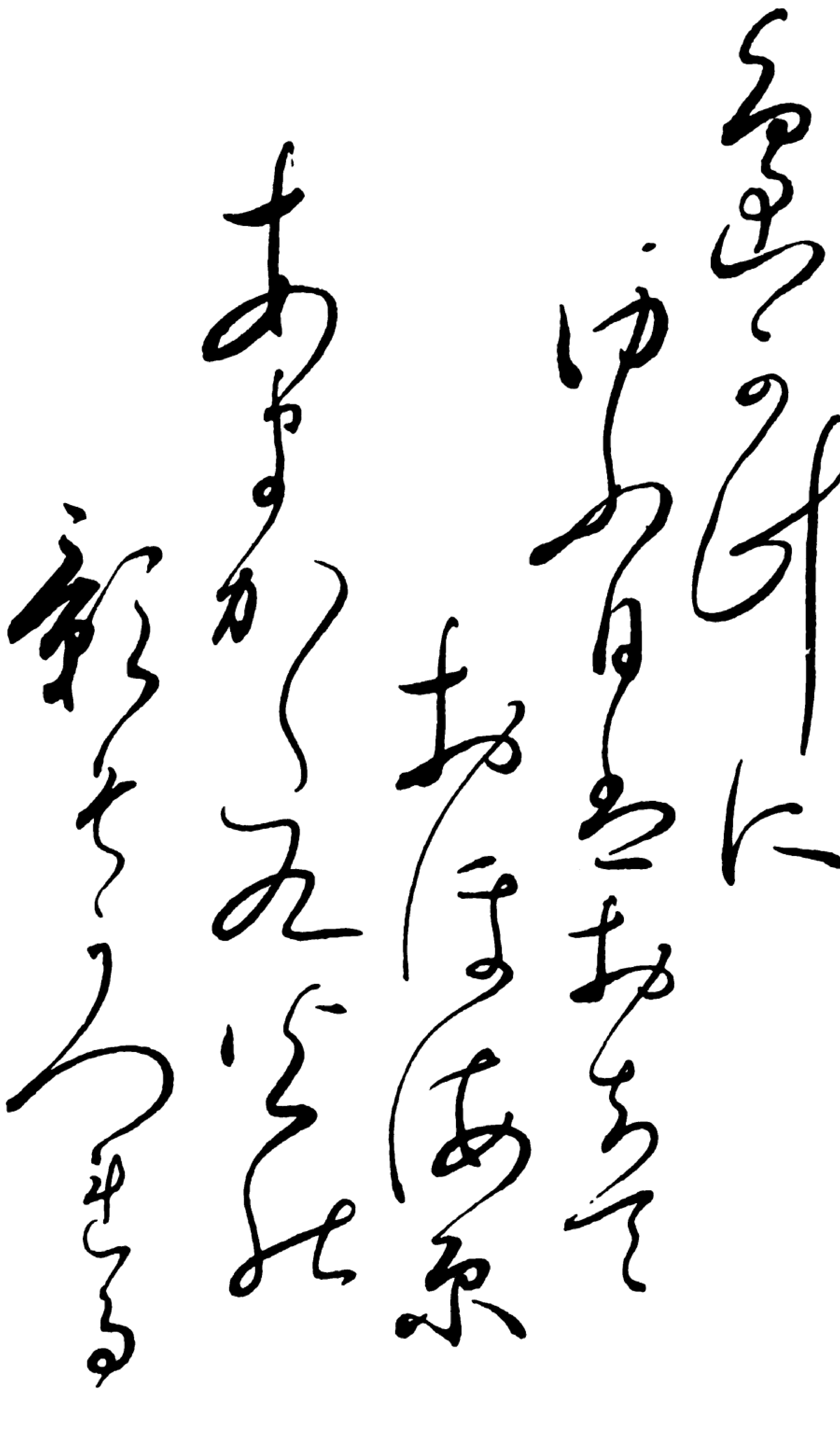
京橋新橋際　博品館内支店

神田裏神保町　東明館内支店

新綠



竹久夢二筆



早川ちふ子筆



美術造花材料
發賣御案内
最新式染料
拾貳種及拾八種
使用法説明書添附
天野卯兵衛商店
東京市日本橋區
横山町一丁目拾六番地
（電話浪花一六四三番
（振替口座四九七〇番
營業案内は郵送料四錢封入御申込あれ

女(にの二)

衛生 經濟 家事實修法

挿畫數個入
菊判最優美
正價金六拾錢
郵稅金八錢

●婦人の最も心すべきは一家經濟と衛生となりこれを外にしては家庭の幸福は遂に望むべからず

▲衛生に叶ひ經濟に適する食物として如何なるものを採るべきか。

▲衛生に適し經濟に叶ふ衣服として如何なるものを用ふべきか。

▲衛生に叶ひ經濟に適する家屋として如何なるものを擇ふべきか。

以上の外家事百般の注意、網羅して本書にあり、實用的に可成通俗的にしたるを以て、直ちに實際に應用し得べし。著者は多年の實驗と深遠なる學理とを以て本書を編述したり。家庭をして幸福ならしめんとする婦人の必ず一讀すべきものなり

下田歌子女史著

川井甚平君 千葉敬止君共著

●家庭農藝談

(再版)

菊判高尚製本
定價金四拾錢
郵稅金八錢

愛國婦人會長 岩倉公爵夫人
育兒會幹事 中山夫人題歌
東京外國語學校教授 尺秀三郎君著

●子供

再版

大和綴美本密畫百十七個入
定價金六拾錢
送料金八錢

發兌元
東京本郷森川町一
振替口座九三〇八
育成會

女子文壇

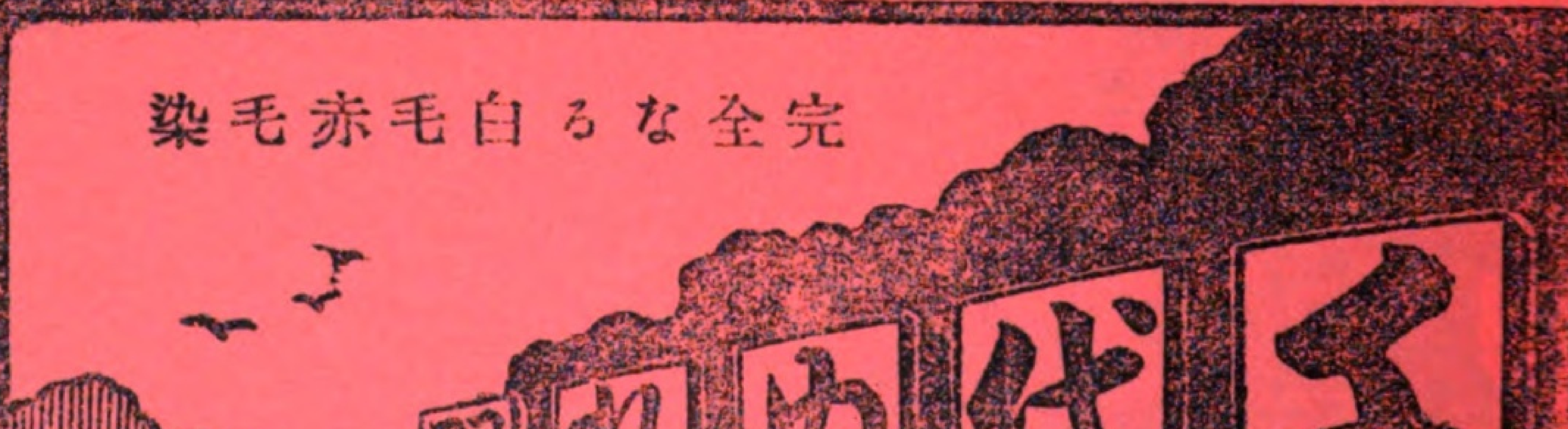
◎五巻第六號　五月一日發兌　要目

◎活動せる精神と活動せる智識……羽仁もと子
◎得られぬまで欲しがる女の心……新渡戸博士
◎天才の結婚は必ずしも不幸でない……三宅博士
◎學校を出る人への餞別……和田垣博士
◎乱とる人…上田敏◎傀儡子…横瀬夜雨
◎明日……尾上柴舟◎柳林……三津木春影
◎歌……川路柳虹◎美顏術…兒玉花外
◎純粹なる日本音樂…佐々醒雪◎虎…蒲原有明
◎運命と謂ふ語一色醒川◎戀の辭典…福光東衣
◎美文作法…西村酔夢◎花言葉……水野葉舟
◎雨を嬉べ(英文)…河井道子◎自己を欺いて戀に囚はれんとしたる當時の心持……旅の女
其他懸賞詩文數百篇雑誌界唯一の盛觀也
◎毎月一日發行　◎本文百七十頁　◎口繪鮮麗十枚
◎定價　一冊(送共)金拾六錢五厘　半年(八冊)同壹圓參拾四錢

第二増刊　新作家　五月十五日増刊　價貳拾錢送料壹錢半

發行所　東京京橋大鋸町　振替壹七貳九番　女子文壇社

◎賣捌所全國雜誌書店　◎本社に發賣より取揃あり



女(にの三)

大懸賞

あててごらん

はがき一枚で金側時計

この白粉は評判の高い大流行の無鉛白粉であります



この白粉はドコの化粧品店にても販賣されてあります

はがき一枚で寶石入指環

賞品

◎一等 婦人持十八金側時計 貳人

◎二等 寶石入金製指環 五人

◎三等 貴婦人持絹張洋傘 拾本

◎四等 最新佛國式鹽瀬織オペラバック 三拾人

◎五等 貴婦人用懐中鏡 三百人

問題

(一)この大學帽を着た美人の持てる白粉は何と云ふ名の白粉ですか?

(二)この美人の持てる丸い白粉瓶のレッテルの中に何と云ふ文字が書てありますか?

規定

前記の二問題を「はがき」に書き見た雑誌名を付記し六月十日迄に左の所へ出せばよろしいのです正解の「はがき」は東京大阪各新聞社立會の上嚴正なる抽籤法を行ひ當籤者は六月二十日以後の各新聞で發表いたします

回答申込所

東京日本橋區三代町五番地

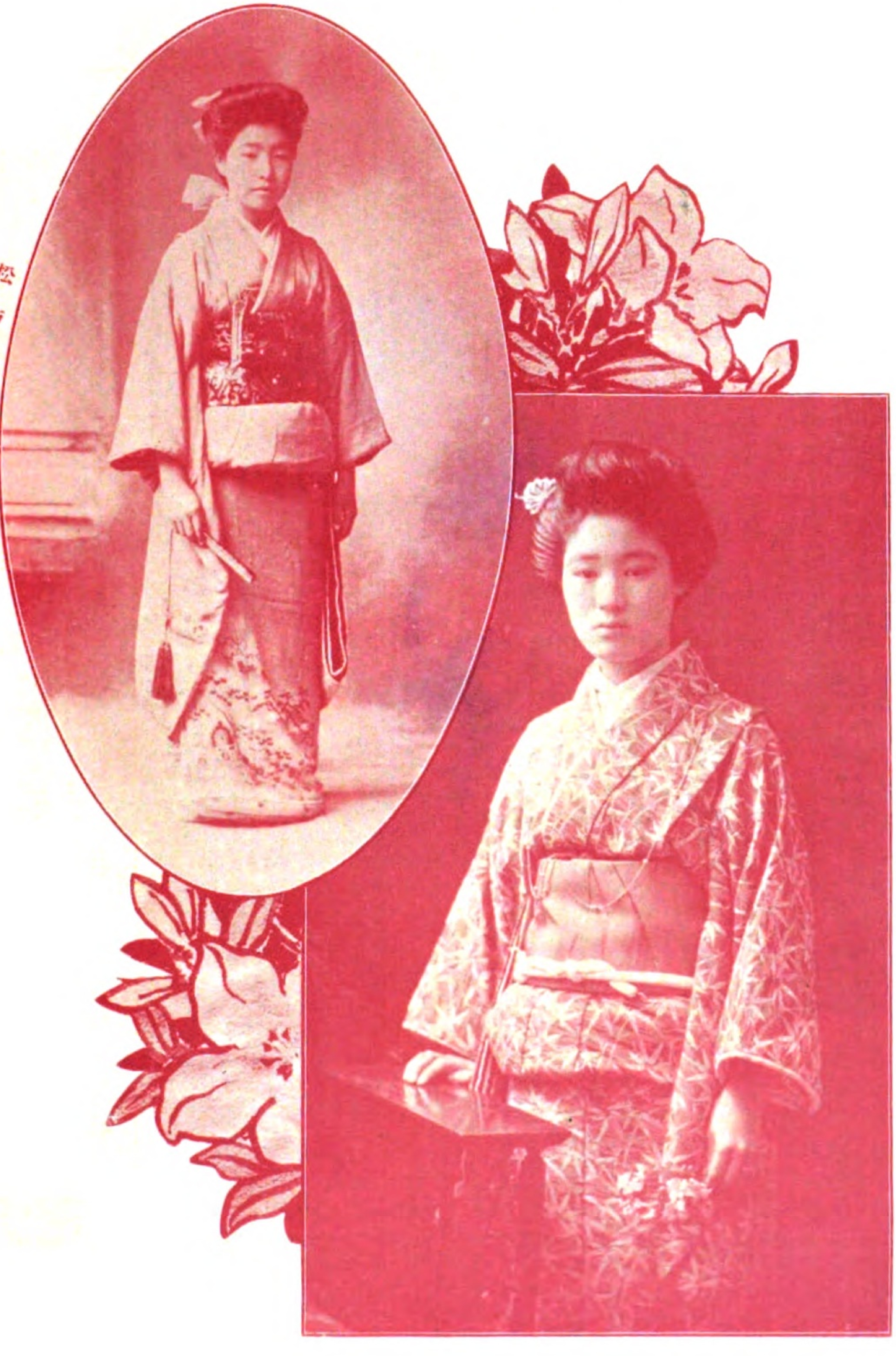
矢野芳香園廣告部出張所

女(にの四)

竹田宮妃昌子內親王殿下



名家の令孃



松方侯爵令孃梅子

木戸侯爵令孃治子

毛髮を黒く長くふさくする
椿油にて精製したる

女學世界愛讀者に限り本店は一割引

ランラン香油



毛髮の營養には椿油ほど好い者はありませぬこれは衛生大家及び毛髮を大切にせらるゝ御婦人方の實驗證明せらるゝ處でありますが此普通の椿油は厭らしき臭氣がありますから之を除去せねばなりませんランラン香油は最も純良なる椿油に毛髮の營養に必要なる藥劑を加へローズバイオレットの高貴なる香料を以て彼の惡臭を防ぎ毛髮の助育を專一としたる香油也

發賣元 大阪西區新町通三丁目 福田源次郎商店
電話西千六百壹番 振替口座六〇八六番

東京販賣所
日本橋區通塩町 佐野大和屋
日本橋區横山町 脇田盛眞堂
日本橋區横山町 森本支店
神田區橋本町 松井號支店

皮膚の營養には牛乳に勝るものなきことは皆樣の御承知のことでありますが近頃亦レモン液の肌を純白ならしめ殺菌の効あることを發見せられましたランラン化粧水は牛乳とレモン液とを調配したる最新最良の美顏劑を加へて色を白くし小皺を伸し吹き出ものを除き夏季の日燒け冬季のあれを防ぐ特効ある化粧水なり

色を白く肌を艶麗ならしむる
レモン牛乳にて製せる

兩種共一瓶定價各廿五錢送料八錢づゝ

ランラン化粧水

（其の一）

如何なる婦人も見遁せぬ雜誌

婦人世界

五月一日發行 四卷第六號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓九十錢 一年分二圓五錢

◎夫婦情愛論……村井弦齋

◎主人と女中 欄本號より新設す……女中を使ふ主人は必ず讀むべく、人に使はるゝ女中も必讀

◎如何せば夫は機嫌よく働いてくれるか……

◎本誌獨得 歷史講談 本號にも面白きもの掲

◎離婚の不幸に陷り柴田環女史を訪ふ記……婦人記者

◎天才ある婦人の結婚は果して幸福なるか……理學博士 田中正平

◎高橋男爵令孃と共に米國に送りし三年……周防京子

◎弟と共に苦學して成功せし婦人の苦心實歷……小林富子

◎新婚の西洋婦人を訪ふ記……記者

◎弦齋夫人料理談は弦齋氏の食事法…

◎米國人の家庭における育兒の實際……一記者

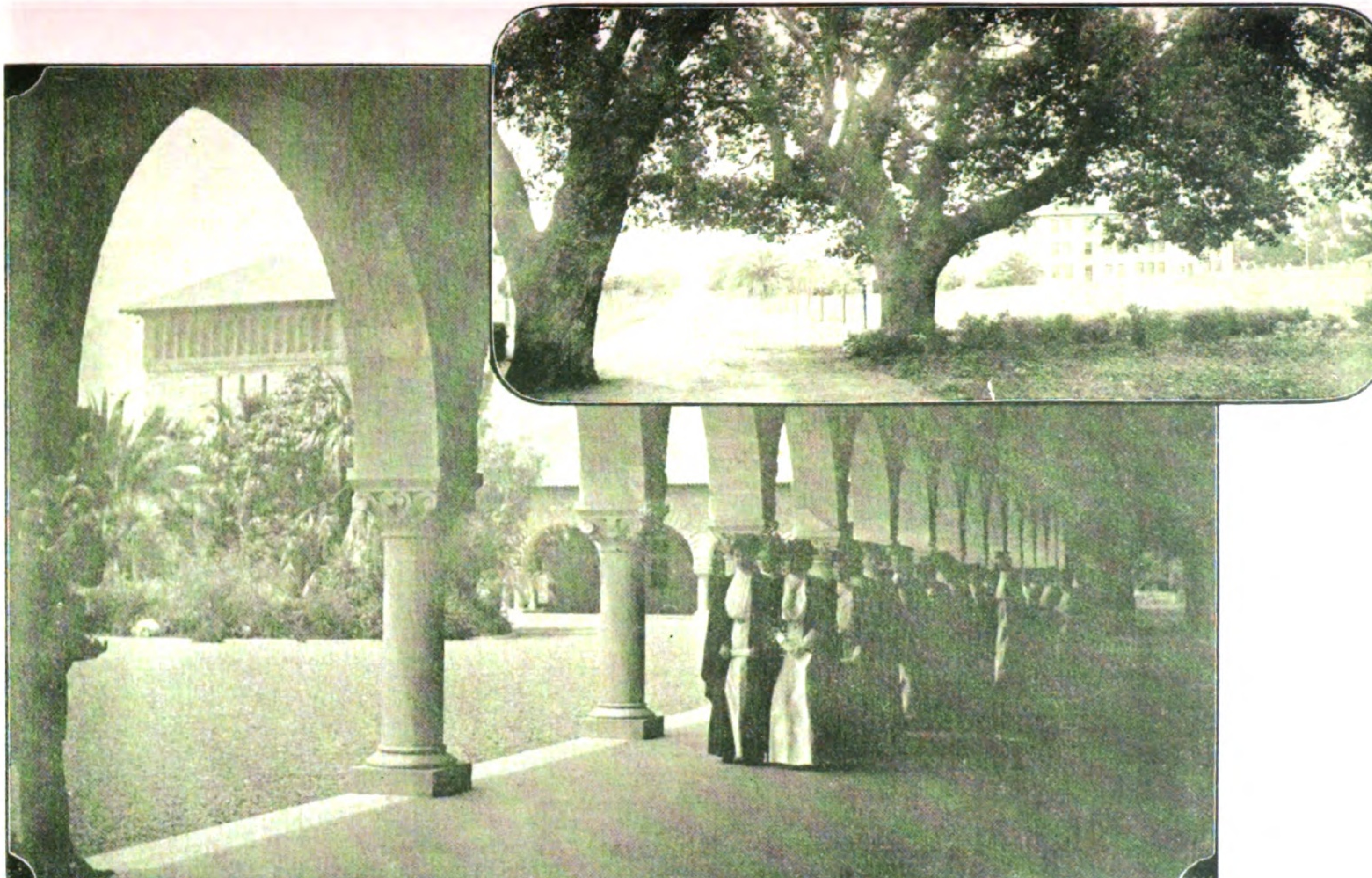
◎私は姑として如何に嫁に對するか……棚橋絢子

(女)ほの三

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 (郵便振替貯金口座參貳六番)(電話新橋八七四番) 賣捌全國書店

女（ほの四）

スタンホード大學卒業生



同校女學生の寄宿舍

清國皇族の夫人



慶親王世嗣載振妃殿下



貝子溥倫妃殿下



畏き邊りの
御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
東京芝
伊東胡蝶園
製造本舗
東京日本橋區橘町四丁目
發賣元
丸見屋商店
御園白粉
洋風化粧料
御園クレーム
御園の蕾
御園の露
御園なでしこ
御園四季の花
御園香油
御園香水
御園歯磨

新輸入 肉體美容料 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女の間に最新流行の發明藥にして如何程色黒き男女にても特別製貳瓶を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

飲んで色白くなる特効新藥 サーサパリラ

英國ロンドン「バーゴイン」製の「サーサパリラ」は峻烈なる**清血劑**にして頑強なる皮膚病、猛惡なる慢性梅毒、痳毒リウマチス等の病毒及び男女體内の**惡血毒血**惡液を體外に排泄し血液を清淨にし且つ精神を爽快にし根本的に肉色を**純白艶美**ならしむる奇効顯著の内服水劑なり(注意)従來種々の外用塗布的化粧水及誇大廣告の洗粉白粉等を用ひ其無効に歎じつゝある各位は速に此「サーサパリラ」を試みよ奏効頗る迅速確實なり(今回英國より輸入し當館にて一手專賣致候)色白新劑と「サーサパリラ」と内外双方併用せば奏効頗る迅速確實なり

價壹劑貳圓七拾錢參劑七圓五拾錢五劑十貳圓廿錢也

らい病根治新劑

癩病患者の新福音──最新發見藥──(レプロイス)

藥價送料共壹劑五圓拾錢特別製拾圓拾錢着金即刻小包密封送る

癩病は不治の病にあらず又血統病にあらず一種の癩病桿狀菌の媒介による傳染症たることを發見せり、本劑は此確乎不拔の最新發見學理を基礎とし幾多研究を重ね數千患者の實驗に徴し苦辛經營の末今回始めて完成發明したる最新藥にして其効力の峻烈顯著百發百中悉く全治すること到底他類似藥の比にあらず、患者よ彼の十九世紀的遺物たる推量的不合理に調合せし粗雜極まる無効舊式賣藥に誤らるゝことなく又古來より傳へられたる血統病或は不治症等の愚説に迷ふことなく速に本劑を試み其病菌を撲滅して病根を斷絶し生涯永久の榮華を完ふせよ、輕症は壹貳劑重症は特別製分以上にて治癒の目的を達す。

血塊流下 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滞りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用ゆれば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滞りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑及び以上各藥の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭 根治確證新發見藥

従來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者に速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓って根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる類藥と異なる處の本劑一種獨特の靈効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌せる病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲(藥價)輕症根治分參價送料共六拾錢▲重症根治分同上壹圓貳拾錢▲頑固慢性症根治分同上貳圓參拾錢▲切手代用は必ず二割增しの事▲着金即刻送藥す

以上五藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**

婦人画報

毎月一回一日發行　**五月の巻**　五月一日發行　定價一部二十五錢　郵稅二錢　六冊前金郵稅共一圓五十錢　十二冊二圓八十八錢

畫報

▼花菖蒲（石川寅二筆 彩色石版美人畫）▼女生徒製作の時代風俗人形

◉久邇宮妃殿下の御出發（當日御縁前に於て特に本誌の爲に撮影を忝せし御寫眞）

▼各女學校卒業生紀念撮影▼毛利邸園遊會▼新郎新婦……

◉御新婚の北白川宮成久王殿下と周宮房子內親王殿下

▼バザー▼婦人の柔術▼漁夫の妻▲東池の坊春季大會……

▼伊達公爵家の花菖蒲と吉野園▼實踐女學校十周年祝賀

◉各女學校優等卒業生肖像數十人……

▼令孃の立書▼女學生の自轉車と少女の劍舞・其他

讀物

▼最巧なる家庭の管理法（棚橋女史）▼訪問日記（ゆき子）▼龜井女史の料理談……

◉獨立を主張せし女の心の淋しみ（一記者）▼衣服の紋▼流行……

▼境遇に依りて墮落する婦人（三輪田女史）▼懷しき若夫人（遠山稻子）

◉婦人の藝術と結婚（加藤博士）▼臺所科學下女と主婦（西村學士）

▼臺所拜見（女記者）

▼女の不仕合（大町桂月）▼某伯爵家に初奉公の一日

◉見合の實驗談（わか子）▼夫の職業に對する妻の同情（大臣夫人）

▼家庭と人格（加藤咄堂）▼小說美文其他趣味多き記事滿載

花のすがた

臨時增刊四月十五日發行定價二十五錢郵稅二錢

◉大好評◉

神田小川町四一　**東京社**　電本三五三九

女（への三）

（への四）

巴里婦人の新粧




享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
卸小賣
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、帯留、ブローチ、手釦、紀念品一式
最新の流行品目録郵券六銭封入御申越次第進呈す
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(又ハ)コバ
振替口座七八〇七
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價

(その一)

世界無比 …… 最新發明藥

あざ

入墨は廿日 ほくろ そばかす、なまず いぼは拾日 目に必ず美麗に除去す

ろこ と

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて**美質**を完うせよ來館者へ**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかす、いぼ等の實物天然の美質は山の如き全治者の感謝狀を示すべし實に**世界唯一**の新藥也但し本劑は其製劑を二種に區別し一はあざ、入墨、ほくろを除去し又一はそばかす、なます、いぼを除去するものとす故に注文者は各自除去せんと望む所の病名及患部の模様を詳細明記して申込あれ左すれば其症に適應する藥を送附すべし價は各一劑分壹圓拾錢參劑半分參圓拾錢六劑分五圓拾錢拾貳劑分拾圓拾錢づゝにて郵券代用貳割増し(患部の面積大なる人は大劑を求むるを德用とす)着金即刻小包郵送す

色白。特効 ペーアス石鹼

此石鹼は**世界第一等**の良品にして化粧品の大王たることは苟も泰西の事情に通する者の熟知する所なれば今更喋々贅辯を要せず啻だ單に其主眼たる特効の一二を掲げん **皮膚を潤澤軟密にし色を白くし・粗糙質**を治するは此石鹼獨特の靈効なり且つ此石鹼は香氣頗る佳良にして使用後五時間は芳香馥郁として身體に附着し薫るは舘主の實驗保證する所なりとふ 昨今世上に續々顯出し誇大の廣告を以て世人を瞞着する內國製の粗悪品と玉瓦混同視すること勿れ(昨年輸入の五萬個は夙に賣切れ久しく品切中の處今回拾萬個着荷せり速に御註文を望む)

壹個代價送料共八拾五錢▲三個函入同上貳圓參拾錢

毛の必ず生る確證藥

本劑は米國醫學博士の發明に依り學理實驗に徴したる世界無比の毛髪速生藥なり、即ち男女共腫物の痕、はっぽうはげの痕、やけどの痕頭髪及はえぎわの淋き人まゆげ口ひげの淋き人、其他總て毛のあるべき所に毛のなき人等本劑特別製分を用ゆれば忽ち毛髪蒼々と發生する特効あること確證す、本劑は從來ありふれたる種々雑多の毛はゑ藥とは其効勿論同日に語るべきものにあらず(眞に天地月鼈の大差あるに付幸に玉瓦混同視すること勿れ

藥價特別製分五圓卅錢▲大瓶貳圓卅錢▲中瓶壹圓廿錢

奏効確證 美容新劑 やせる藥

本劑(藥名ヨードチリン錠)は學理實驗に徴したる現世紀唯一の發明劑にて血ぶとり。酒ぶとり。あぶらぶとり。顔赤くほてり。のぼせ症。卒中症等にて肥滿質多血質脂肪過多質の人用ゆれば無害にして著しく體量を減じ脂肪を適度に脱し美容健康を保ち程よくやせる特効藥なり故に彼の見苦しくふとりたるを苦にする諸君は速に本劑を用ひ其驚くべき偉大なる奇効を知られよ

壹劑分價送料共參圓廿錢 貳劑分六圓廿錢特別製分九圓拾錢着金即刻送藥す

聲惡しき人又は聲出ぬ方の新福音

美き聲の出る新藥

▲藥名……ウエーヌス

▲聲美くしくして…淑女は窈窕たり ▲聲麗しくして…男子に威嚴あり ▲聲は人格を高尚ならしむる要素なり…謠曲家、演說家、音樂家 藝人は聲音即ち其人の生命なり。發聲藥は古來世に甚だ多し然れども其確効あるものは恐らくは疑はし。獨り此「ウエーヌス」の發明者は十有餘年間發聲生理の原理を研究し初めて確實に美聲を發する方法を自得せり。「ウエーヌス」は實に無上の發聲藥として千古未曾有世界唯一の靈劑なり。特別製分を服すれば直に充分なる美聲を發するること確證す。」

價送料共壹劑分壹圓拾五錢特別製參圓廿五錢

(ウエーヌス有効感謝狀)……(近着の分)

一筆示し上候先達て私事貴地に於て興行中聲をいため候節あなた樣より結構なる御藥申受け候間 其御藥前夜に用ひましたら其翌夜八分通り直り尚又三日目の夜はすみやかに元の通りに全快致し誠に不思議におもひ其まゝ大阪へ歸りました折柄他の太夫竹本廣鶴竹本房七樣兩人共聲をいため候に付直に其御藥二回分づゝあげましたら私同樣に直りました故此御藥は世にまれな御藥にて太夫一同不思議におもひ右兩人より貴所樣へよろしく御禮を申のべくれと私方へ依頼を受ておりまする此御藥に付て私共迄誠に功名致しました誠に〳〵喜び居り候故に今回愚筆を以て御禮申上候 明治四十年七月十日 大阪女義太夫竹本隅照㊞

其他如斯感謝狀は積んで如山も皆大同小異に付略して爰に揭載せず

以上五種 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房


健康とクラブ
洗粉は美のフレンド
清き空氣の呼吸と
クラブ洗粉の常用は
如何に皮膚の美を増すか
未だ其の効果を試みざる淑女あるや

女（との四）

東京音樂學校女子卒業生



文學士齋藤隆三君著

近世世相史



江戸時代の三百年は我文化史上に未曾有の大發展をなしたる時代也，文物の盛極まり趣味の高上比備なし。本書は即ち此三百年間の世相を活寫したるもの、期を分つ四、章を立つ六十六、其時々の世態人情の推移を論じ衣裝修飾の變遷を說き更に美術工藝の進歩を述べ江戸と京阪の繁昌を明かにし進では遊里を敍し演劇を說き音曲を語る。敍事總て詳密，行るに流麗の筆を以てす、實に風俗史に造詣深き著者が多年の研鑽に成れるもの前代の世相風俗を知るべき唯一絶好の書也。史に志すものは素より、今日の世の據て來る淵源を知らんと欲するものは正に几上一本を備へざるべからず。

洋裝菊判總クロース
特製紙數千餘頁
正價貳圓貳拾錢
小包料拾貳錢

同君著

元祿世相志

元祿は、其風俗に於て最も趣味ある時代なり、復興の氣運熱し、革新の氣風吹きすさび、社會のあらゆる方面の勃興し、膨脹したる時代なり、此書は即ち元祿の時代觀なり、時代史なり、風俗史なり、文藝史なり、社會史なり、元祿をパノラマ的に示したるものなり二百餘年前の時勢を活動寫眞的に描きたるものなり、其如何なる觀察をなしたるか、如何なる手を以て寫したるか如何なる趣味あるや、如何なる興味あるや、本書即ち能く是れを語らん。

全一册洋裝大判美本
紙數三百四十八頁
正價金四拾五錢
郵稅金八錢

販賣用電話 本局二六二〇番

東京博文館 本町

振替貯金口座 東京二四〇番

（ちの二）

洋畫講義錄

洋畫講義錄は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に詳述す每號美麗なる挿畫數多あり、每月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯 三宅克己先生 岡田三郎助先生 大下藤次郎先生 中澤弘光先生 外大家十數名

繪畫講習錄

東京市麻布飯倉四丁目 大日本繪畫講習會

繪畫講習錄は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ每號美麗なる繪畫數葉を挿す、每月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆畫伯 川端玉章先生 荒木寛畝先生 寺崎廣業先生 梶田半古先生 外大家十數名

●新案特許一〇三六二號 衛生的なる改良かもじ發賣

●丸髷廿五錢より七十五錢迄 ●島田髷三十錢より壹圓五拾錢迄 ●銀杏髷廿錢より六十錢迄 ●送料各八錢



本品の特長

一 根元にコロップを發明せるにより舊式のものゝ如く硬からず屑ざわり軟らかに 二 皮膚を摩擦することなきゆゑ頭のはげる憂なし 三 頭痛ある婦人に用ひて爽快を覺えしむ 四 二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髮の傳染病を媒介するの憂なし

東京市神田區豐島町十七番地

●諸かもじ製造販賣(振替口座東京一八一八八番)田中金三郎

特約 京橋大西白牡丹・本郷兼康・淺草駒形百助・淺草駒形紅勘・神田須田町三井屋・日本橋通二柳屋・外到處の小間物化粧品店に在

わきが

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ

內服七合壹ノ價壹圓廿錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾五錢

本劑を塗擦すれば其成分は皮膚及び其の組織に吸收せられ其組織にある毒素を淸潔驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の藥劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●其他の所に毛なき人用ひよ毛髮増生す◉頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓廿錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ

色の白くなる

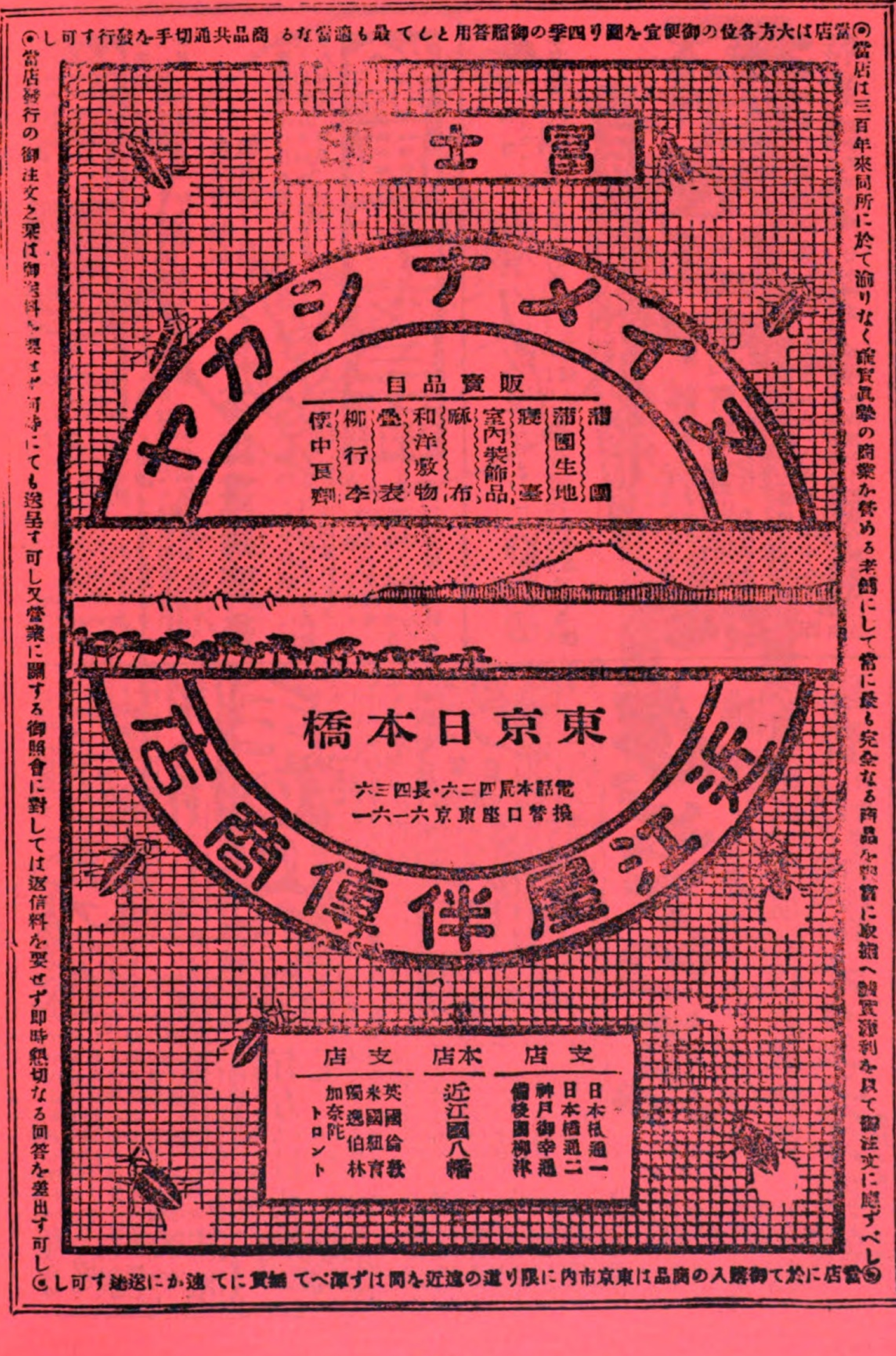
價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料拾五錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらる最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

ひざらる

メソルビン此藥は子宮を痛めず如何に長き月經とまりも必ず下る二三ヶ月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る、月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製貳圓卅錢送料拾貳錢◎東明館前交番際

專賣 東京神田小川町東明館前 オリエンタル藥館 (電話下谷二一三五番)

女(ちの三)


◎當店は大方各位の御便宜を圖り四季の御贈答用として最も適當なる商品共通切手を發行す可し
◎當店は三百年來同所に於て渝りなく確實眞摯の商業を營める老舗にして常に最も完全なる商品を廉價に取揃へ誠實薄利を以て御注文に應ずべし
◎當店に於て御購入の商品は東京市内に限り遠近の間を問はず總べて無賃にて迅速に送達す可し
◎當店發行の御注文之栞は御送料を要せず何時にても送呈す可し又營業に關する御照會に對しては返信料を要せず即時懇切なる回答を差出す可し
富士印
ヌイメナシカヤ
販賣品目
蒲團
蒲團生地
寢臺
室内裝飾品
麻布
和洋敷物
疊表
柳行李
懐中蚊帳
東京日本橋
電話本局四二六・長四三六
振替口座東京六一六一
近江屋伴傳商店
支店
日本橋通一
日本橋通二
神戸御幸通
備後國柳津
本店
近江國八幡
支店
英國倫敦
米國紐育
獨逸伯林
加奈陀トロント

神戸高等裁縫女學校



（神戸下山手通七丁目三十四番邸）

女(りの一)

天生目杜南君著

評傳 芭蕉

●全一冊洋装四六判
●紙數約二百三十頁 正價三十五錢 郵稅六錢

趣味の向上を促し、屢々の俳壇を統一し、歿後二百餘年、尚兒童走卒に其名を知らる芭蕉は、詩人と稱せんよりは寧ろ偉人たり。著者は往時を追懐し、現代を想倒して、當時の社會狀態より、彼が經歷、行動、性格及日常生活に至る迄、洽博なる材料の下に、縱橫論評して偉人芭蕉を究む。蓋し芭蕉傳の翹楚にして他に類なし。

（りの二）



角田竹冷君編

芭蕉句集講義（春の巻） 全四冊

洋装四六判並製紙數三百餘頁
卷頭蕉翁眞筆短册寫眞版入
正價三拾八錢 郵稅六錢

俳壇空前の良書出たり、之を芭蕉句集講義と爲す。實に本書は、蕉翁一代の俳句千餘句に對し、一々明解通釋を與へて、殆んど餘蘊なし。苟も俳諧に志ある者、乃至文學に趣味を有するもの、之を座右に備へずして可ならんや。

販賣用電話本局二六二〇番　東京 博文館 本町　振替口座東京二四〇番

見よ 讀め

最近絶好の新療法 醫界空前の大成功

從一位侯爵久我閣下題字、腦神經專門醫學士常持先生述

腦神經衰弱ヒステリー療法

事業家、學生、試驗前の無理勉强其他過度に精神を勞し故なく煩悶を事とする腦神經衰弱ヒステリー患者の救命主は即ち本書也

送費弍錢送れ 進上

施本所 東京京橋區弓町二十二番地 弘濟院



東京神田裏猿樂町

東洋音樂學校

女生徒補缺募集

ちゞれもくせも 二大奇法 毛はへうけあい

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒えぬ人悉く治りし故夫れで皆樣の勸めにより世間に廣く御披露せし處一人として御喜び遊ばさぬ方なし御問合せ往復はがき

女髪結師 東京麴町區飯田町四の十六 安部歌子

にきび

吹出及其根跡黒きシミ有る人は返信料送れば余が全治せるクヴルーの絶對的必治法を詳報す

東京下谷區初音町日本女子美術學校前 長田

らい病

此のらい病藥は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二ヶ六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとするの主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

ザノサール 一ヶ月分 貳圓

複方ザノサール 一ヶ月分 參圓

醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

本舖 三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

女(りの三)

◉寫眞口繪の說明

左の寫眞口繪は本店より寄贈したので、本店の調製に係る洋服と、本店より購求せられたる小兒洋服とを召された、某家の家庭を撮影した寫眞である、看よ！、その着用された風采の如何に恰好せるかを、大人方の分は、素より體格を計り適應すべきやう調製したのであるから、その切り付けたやうに出來てあるのは當然であるが、小兒方に至つては、何人か之を買入服と認むるものがあらう？、その然る所以の者は、本店に於て豫め仕立て置いた、男女小兒洋服の數多き內より、體格に相應せるものを撰擇せられた結果であるので、斯くの如く本店には小兒方の大小肥瘠を見計ひ、新柄にして優美、しかも格安なる男女子供出來合洋服を、澤山揃へてありますから、何卒御來店御一覽の上、お子供衆に恰好の品御擇み下され、お買上の程願上げます、又東京市內御注文のお方は、電話本局二九〇一番、端書ならば神田鍛冶町廿七番地へ御申越し下さらば、畫形と切れ地見本を持參早速御伺ひ、御容姿に恰好いたすやう、調進いたします。

○夏季のベビーボックス及び男女子供出來合夏服を取り別け澤山取揃へてあります

注意

地方の御方は御年齢と豫算とを御知らせ下さいますれば最も流行なる形で作つて御送り致します

中野屋洋服店

（本　店）…橫濱市辨天町通り四丁目八十番地（電話三四四番）
（東京出張所）東京市神田鍛冶町廿七番地（電話本局二九〇一番）
（韓國出張所）…韓國京城……………

女(りの四)

子供の洋服姿



中野屋洋服店寄贈



紳士淑女の袷、単衣用として
着心地善く價低廉にして品質
絹布に比し遜色なく柄ハ
嶄新にして流行の
生粋を集め
色ハ
堅牢
にして
高尚優
美なり
縞モス
全國到る處の呉服店
洋反物店に販賣す

女(めの一)

實用女學講義錄

新學期開講

▲本會は中學講義錄の發行に從ふこと既に五ケ年通信教授に於ける甚深の經驗を基礎となし今回更に女學部を新設して『實用女學講義錄』を發行せり。

▲講習期一ケ年半、此間に於いて高等女學校程度の學課は勿論、本邦家庭の事情に照らし女子必須の諸科目を講說し圓滿なる主婦を作る事を目的とす

▲講義錄は每月二回發行とし講師は教育に經驗深き斯道專門の名家のみ也講述極めて平易、總ふり假名の談話體なれば何人も解し難き憂なかる可し。

▲每月機關雜誌『新國民』を發行して會員に限り每號無料進呈す『新國民』は現代知名の專門教育家及び斯道大家の訓話學說創作及び會員の投稿を揭ぐ

▲會長尾崎行雄親しく本部を監せらる。組織整頓し取扱最も懇切也。且つ會費極めて低廉都會一ケ月の遊學費を以て優に全學科を修了する事を得べし

◎講義錄第三號‖五月一日發行……此際至急入會者には入會金を全免すべし◎

大日本國民中學會女學部

東京駿河臺

電話本局三千〇四番
振替口座四千二百番

見本つき規則 郵料進呈

女(ぬの四)



五月の鯉

疑あらば裂いて見やれ、塵をも留めぬ打つ徹しの腹は五月の鯉の吹流し、否といはゞ王侯貴人七珍萬寳も土芥の如く云ひ蹴散らし應と云はゞ無官丸腰、鐚一文にも、腕一本の手前義は背かじ、と俠を以て男を賣りしそれは徳川末世の花の夢覺めて昔を戀ふるにあらねど、せめて其心意氣丈けは、何時の世にも誰が胸にも望ましけれ男といはず女には殊に。

ともすれば、熟しかねたる梅の實の、赤くもならずつぶれもせず、胸に一物はあり乍ら三掛半の口の利きやうに相手をウンザリせさす大概の女子が此習ひ性を打ち破つて、五月の鯉の心見え透く迄になり度きものなり。

「聞かんとならば先づかたれ」絶えず此の主義に由れるものは、常に輝やける眼と、熱ある言葉を持つことを得。

秋雨

中學生を有つ母親の手加減

第一中學校長　勝浦鞆雄

▲往々無謀な事を企つ

十三四歳から十八九歳位迄、即ち中學時代は、頭腦が單純で模倣性が盛んで感化され易いから、教育を施すのに極適當な年頃であるが、併し此時代は未だ冷靜な理性が乏しくて、單だ自分の感情ばかりで押通さうとする爲に、往々無謀な事を企て大間違を仕出かす事があるから、父母たる人は能く注意しなければなりません。特に母親は家に居ることが多くて、始終其の擧動に目を配る事が出來るのですから、こゝは母親が主任となつて骨を折らねばなりません。或は子供も中學へ往くやうになると、最早母親を馬鹿にして、母親が一言叱言を云ふと十言も小理窟を列べて抵抗するから、如何しても父親と云ふ強い者が壓へなければ駄目だとて放任してゐる人も隨分世間にあるやうですが、如何に父親が強くても、母親のやうに朝から晩まで監督する暇はないから、如何しても母親が我子の手本と爲り其の長所を模倣させる事に力めなければなりません。

▲餘りに冷淡なり

そして其の注意の仕方が大切です。從來の經驗で見ると、中學一二年の頃迄は母親は屢々學校へ出掛けて來て、我子の成績や品行を問合せるが、三四年になると一向詮索に來なくなる。是は大きくなると迚も母親の手に合はぬと諦めて了ふのか、又は少々了簡が出て來たから最早大丈夫だ位で安心してゐるのか、何方だか知らんが、併し餘りに冷淡に過ぎはしないでせうか。三四年頃は追々性情の變化する時代で、一番難かしい心配な處であるから、學校の方へは度々問合せに出掛けるがよい。さも無ければ段々家庭と學校との連絡を

缺いて、とんだ心得違を一向知らずに過す事があります。

▲學校は五時間のみ

中學校では生徒を預かつて居るのは、一日の内五時間だけで、其五時間も數學とか、博物とか、英語とかを敎へると云ふ種々の仕事があるから、其の思想全體を監督すると云ふ事は却々能き難い事である。よしんば多くの時間を倫理の講義に費した處で、生徒は唯其れを諳記するだけで衷心から感化される事はない。畢竟師弟の間柄が昔の私塾風のやうな譯に行かない上に、學科に依て各〻受持敎員が違ふし、其敎員も一朝職を退けば直に路傍の人の如くなると云ふ有樣であるから生徒が師風に感化されるとの出來ないのは當然です。是は敎員が惡いのでもなく、生徒が惡いのでもない。敎育制度が昔より複雑となつた結果で已を得ない現象である。併し先づ學校と云ふ柵内に收容してある間は生徒に惡感化を與へる憂もないが、柵外に出してからの取締までは却々行屆くものではありません。宅の息子の品行を矯正するには何處の學校が宜からうと氣を揉んだり、宅の息子が漸々惡くなるのは學校の監督が行屆かないのだなぞと不足を云ふ親々もありますが、何にせよ一日の内十九時間は家庭や社會に接觸して居る生徒の取締を、僅々五時間しか預つて居ない學校の責任とするのは、甚だ酷な話であると思ひます。

▲良い人間の出來るのが不思議

中學生が十九時間接觸して居る今の社會や家庭は何樣な有樣であらうか、先づ社會の方には學生の虛飾慾を挑發する商品陳列店、學生の好奇心に投ずる無益の遊覽場、學生の性慾衝動を媒介する鄙猥な讀物なぞが跋扈して居るので、一度注意の眼を開いて世間を見渡す時は敵軍に包圍されつゝある學生の危險に戰慄するのであります。西洋では裏面は兎に角醜陋なる記事は新聞に記さぬとか、學生には烟草を賣らないとか云ふ如き公德が表面だけでも勵行されて居るから、餘程都合

が宜しけれど我社會は營利一點張を露骨に行つてゐるのです。扨又家庭の有様を見ると、不規律で、明放しで、父親は夜遲くまで太平樂を並べ、母親や姉は新聞の三面記事に熱中して、團欒の話柄は何時も此問題で喋舌り散らすと云ふ風は珍らしくない。感情の鋭い、模倣性の烈しい中學時代の青年が、斯の如き社會と家庭に多く接觸して居るのであるから、惡感化を受くるのは當然の事で、若し良い人間が出來たら不思議と云つても可い位であると思ふのです。

▲學生の品性をこはす原因

中流以上の家庭では、兩親に相應の敎育もあり、總ての設備も出來て居るから、中流以下の家庭よりも完全な學生が出る筈であるが、實際は中流以上に不完全の學生が尠くはない。それと云ふは、他でない、中流以上の家庭では、父親の内行に不感心の廉があり勝で甚しいのは如何はしい者が女王となつて居るのもある。假令斯樣な不都合のない家庭でも、兩親共交際の爲めに家を空る事が多いから、我子の監督が行屆かない處へ、無責任の下女や書生達が有害な談話を憚らずに遣るので學生の品性を破壞して了ふ。加之出入の者と云ふ厄介物が坊樣々々と煽て上るので、學生は自惚根性ばかり增長する。小遣錢が豐な所から虛飾の捕虜となり、惡い小說なぞも勝手に購讀すると云ふ風になる。斯う云ふ風の學生は、質實な中流以下の家庭に育つ學生よりも成績はズット劣る。實に遺憾千萬な次第です。

▲立派な人間とは何か

世間の親々は我子に向つて立派な人間に成つて呉れと訓戒するのだが、其立派と云ふ意味は主に權勢とか富とかに在るので、德義を守るとか國家に盡すとか云ふ考へは餘り無い樣です。父親の考は多くは其樣である。況して理義の觀念の稀薄な母親が利己一點張の敎育を遣るのは珍らしくないのです。併し斯樣な意味で煽り立てられる學生は、虛榮私慾の奴隸となるばかり

で品性の何物たるを忘れて了ふ。今日は周圍の事情が違ふから封建時代の武士の母が子を敎ふるやうな次第には、無論いかぬのですが、今日の母親も權勢富貴の外に人として大に尊ぶべきもののある事を少しは考へて貰ひたいものです。

▲たまに刺戟劑を與へよ

兒童を苦ませずに智識を注入しやうと云ふのが、今の小學敎育の目的であるから、學課は實に容易くしてある。餘り容易過るので兒童の頭腦に抵抗力が乏しくなつて來てゐる。だから丁度風邪を引かぬやうに始終頸卷を爲せたり、胃が惡くならぬやうに年中粥を食せて居る兒童は、一寸頸卷を取つたり、堅い飯を食せたりすると直に病氣になるのと同じで、兒童の腦力が軟弱になり、少し難かしい事となると解釋が出來なくなつて了ふ樣な氣味である。此の弊に對しては大に考ふべきものがあらうと思ふ。刺戟のなき者は遂に抵抗力の無いものとなる恐れがあるから時々難問題を科する事も必要である。小人閑居爲不善。學生の頭腦も餘り閑過ると兎角惡い品性に陷り易いものです。

▲埒内の訓練

良馬を養成するには、埒の中で騎手の命に服從さする習慣を付けなければならない。氣儘にさせて置いた馬は埒の外へ出してから始末にゆかぬ悍馬となる。中學生は丁度埒の中に在る馬のやうな者で、學校並に家庭の仕付の調和に依て始めて訓練の實を見る事が出來るのです。若これを誤りて彼等の氣儘を通させて置くと社會へ出てから無責任で方の付かぬ人間となつて了ふから、家庭に於て長上に服從する習慣を嚴重に仕込むのが肝心です。

▲恐るべき反動の豫防

併し中學時代の青年は家庭に於て秋霜烈日的の、ピリピリした制裁を施す事も肝要であるが、餘り極端に走ると反動を起すと云ふ患があるから、之も考へなけれ

ばならぬ。小學時代とは違つて頭ごなしにガミ〳〵叱り付た處で却々心服するものではない。敵愾心の猛烈な彼等は陰へ廻つて却つて恐ろしい爆發をやる。親の目を眩して横着を働く樣になる。是は最も恐るべき現象であるから、少し難かしい注文だが、秋霜烈日の間に春風駘蕩の手加減を施して反動を豫防しなければならぬ。其手加減は一々具體的に說明する事は出來ぬが家々の有樣や學生の性質等に應じて適當の方法を執らなければなりますまい。生活の狀態、敎育の方針、其他萬事が複雜になつて此過度時代に處して子弟を指導する母親は實に容易ならぬ骨折で、昔のやうに婦德一方で子弟を御すると云ふ次第にも行かない。臨機應變の處置を行ふ智力も大に必要であります。

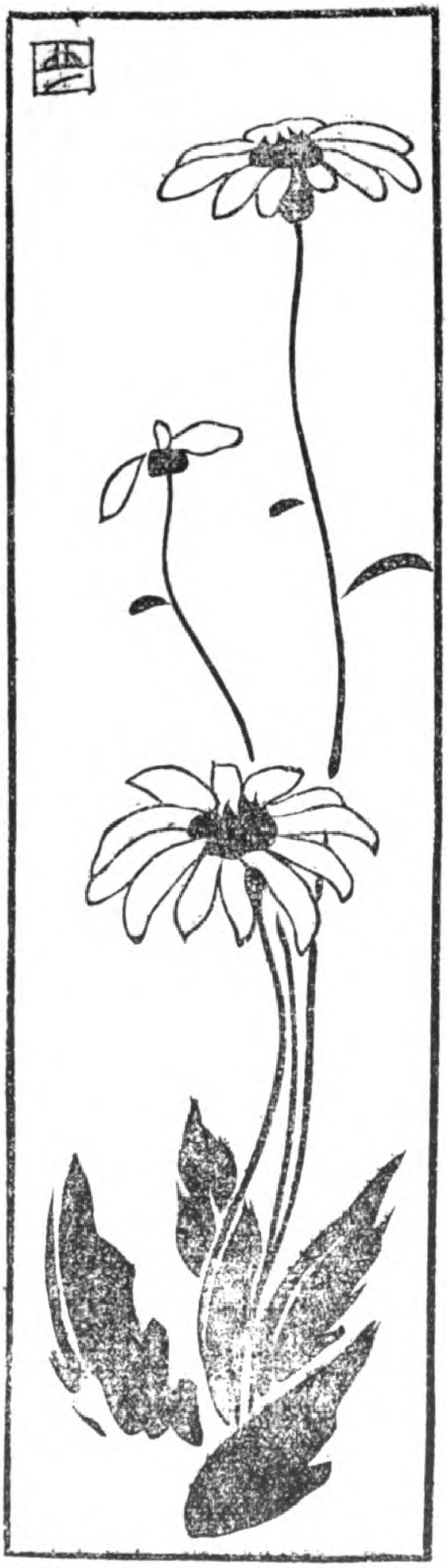
▲煎豆を嚙る時代は旣に過ぎたり

今の學生は昔の學生のやうに煎豆を嚙つて勉强したり破れた縕袍で居ると云ふ次第には行かない。質素儉約の奬勵も時代に應じて程度を考へなければならぬのです。況して可なりな生活の家庭では必要上親々が相應な物を食ひ、相應な衣服を纏ひ、相應な娛樂も取らなければならぬので、息子にばかり極端な消極主義を勵行させる次第に行き兼る。是を無理に遣らうとすれば、例の反動を起すものですから、家々の生活程度に隨ひ、比較的儉素を守らせるより外、仕方がないでせう。例之ば滋養にならぬ食物に錢を遣ふとか、要らぬ裝飾品を買ふとか云ふ事に就て制限したら宜からうと思ひます。一體學生の必要品は、親が買つて與へた方が安全であると考へますが、學生に任せた方が經濟思想を生じ物品を粗末にせぬと云ふ考へならば、成るべく切詰に金を預け、且一々帳簿に記させて置き、時々調べる事が必要です。學生の懷中に餘裕があると偶然の動機から有害の小說なぞを購讀したり、汁粉屋だの蕎麥屋だのへ入り込む樣になる。汁粉屋や蕎麥屋位は格別な弊害もない位で放任して置くと、追々飲食店へ入るのが巧者になり、遂に忌しい場所へ入る階梯とな

るのですから、小遣錢の行衛は嚴重に取締らなければなりません。

▲學生の冒險思想

學生の讀物には偉人豪傑の傳記物か、立志編的の物が一番良いでせう。小説類は近來青年の品性を害する種類の物が多いのですから、嚴重に取締らなければなりません。尤も彼等が之を讀まうと思へば何樣なにしても潜つて讀めるのであるから、迚も絶對に禁ずる事は出來ないが、せめて家庭の制裁だけでも嚴重にして置けば餘程違ひます。冒險的の讀物は惡くもありませんが、何樣も日本の青年は間違つた冒險思想を抱くので困ります。兎角常識に外れた突飛な仕事を遣るのが豪傑のやうに考へ、向ふ見ずに大袈裟な事を遣らうとする所が實際其局に當ると非常に臆病な處がある、存外意氣地の無いものです。畢竟空想に走つて腹が無いのですから、日常の難儀に耐へて心を動かさぬのが眞實の冒險であると云ふ意味を良く會得させる方が宜いと考へます。（談話筆記）



私の學生中にありし煩悶と慰藉

宮川壽美子

◎私の著しく感じた事實

女學校時代などには何の氣もなしに學んでゐたことが後になつて役立つて『成程學んで置ねばならぬものだ』と思ひ當る事が從來屢〻御座いました。中でも著しく感じた一例を申しますと、私は英和女學校で學びましたので、殊に英語は嚴ましくて、一時間に半頁か一頁、それも難解しさに往々泣きながら稽古するといふ樣な有樣でした。そんな風に苦しい思をして英國史を學んだ事が御座いましたが、そのお蔭で英國史上の人物や事蹟は、チヤンと年代を逐つて頭腦に入つてゐる位でした。處か後に英國へ參りまして、其の苦しんで學んだ英國史が役立つた事といふものは自分ながら嬉しいやうでした

例へばウエスト、ミニスター寺院へ參つて見ますと、これが何ういふ來歷の寺院で、何ういふ代々の名士俊傑が葬られてあるかといふ事が、すぐ最う此方の頭腦に浮んで來るのです。或は國會議事堂を觀ては、誰れが何ういふ時に何麽大演説を此處でしたとか、又嘗て何ういふ大事が此處に起つたとか、すぐに然ういふ事が思ひ出されて、宛がら幼馴染の地を久濶で踏むやうな想が致しました。と同時につく〲『學問はして置かなければならぬものだ』と今更のやうに感じました。

◎學校にて受けし精神教育

私の英和女學校へ入學つたのは、もと〱英語を習ひたいばかりでしたから、精神上の教訓などは格別氣には留めて居なかつたのですが、それでも又後になつて思ひ當る事が多くて、今になつて思へば私の今日恁うしてゐるのは、全くその教の力であつたと言つてもよい位です。

私は御覧の通りの女ですから、せめては學藝でもと思つて入學しましたのに、頭腦が又惡くて思ふやうに進みません。私はどうして恁うだらうと、一人教室の隅で泣く樣な事も御座いました。さういふ時に——あの宗教は妙に人を失望させないやうに出來て居まして、よく敎師からパウロの三つの刺の話などを聽かされました。パウロは家柄もよし、學問もあり、聖書の三分の二は彼れの筆に成つたといふ位な人ですのに、彼れは眼の惡い事と、身體の弱い事と、貧乏な事の三つの不幸がありました。テント張を内職にしたといふ位ですから、貧窮の度も劇しかつたと見えます。で、彼れは『我れに三つの刺あり。この刺を取り去り給へ』と屢〻神に祈りました。けれども最後に彼れは『然れども神の愛これを取り給はざりき』と言つて居ります。刺のあるのが其の人に取つては却つて惠みであつたのです。それ故敎師から『壽美さん貴女も刺のあるのを、それに挫折れてさへ了はなければ、却つて大いなる幸なのです』と、恁麽風に慰められて、又元氣を恢復した事があります。後々になつて思へば確かにそれに違ひありません。その他いろ〱後に思ひ當る節々を考へて見れば、女學校時代に受ける精神敎育といふものは、殆ど其の人に永久の力があると思ひます。

◎いろはを覺えるよりも難し

これも後に始終思ひ出して、始終私の身に役立つてゐる事ですが、或時私が非常に煩悶した事があります。何うか善い一日を送らう、他人を譏らず惡まぬ善い一日を送らうなどゝ思ふと、却つて其の日はいろ〱の厭な思ひをして了つて、『なぜ私は恁うだらう』と、堪らなくなつて了ふのでした。その時分ミス、ワイグルといふ善い敎師がありましたので、一つ行つて伺つたら又何かの慰藉が得られようかと、戸を敲いて參りました。それは夜の事で、ミス、ワイグルは燈火の下で讀書に耽つて居られました。

一什一伍を話しますと、ミス、ワイグルは莞爾な面を上げて、『壽美さん!』と呼ばれました。『ハイ』と申

しますと、「貴女イロハを忘れる事が出來ますか」。「否……」。「忘れなければ今殺すと言つたら?」。「殺すと言はれても忘れる事は出來ません」。「さうでせう。ですが、其れ程堅く貴女の物になつて了つたイロハでも、最初から貴女の物ではないでせう。その初は隨分困難して覺えたものでせう。さあ何うですか。善を爲すはイロハを覺えるより容易でせうか。ですが、善もやがて貴女の物になつて、人格になつて了へば、奪らうと言つても奪れないやうになります。何事でも皆此の通りです。些とも失望する事はありません。ツライ、アダイン。又行つて御覽なさい」。

係う言はれて、『成程然うだ』と嬉しく思つて歸つた事が御座います。其の後も何事かある毎に之れを思ひ出して、一生の内何時は此の譬のイロハを我が物に、――立派な品性を我が物にしようと希望して、ツライ、ア、ダインして居るので御座います。

◎雪の一片

女子高等師範へ私が入りました頃は、今日よりも幾層も劇しく基督教を嫌ふのが一般でした。「耶蘇なんぞする人は眞逆この學校には居ますまいねえ」などゝ話し合ふと言つた風。で、その時「汝の敵を愛せよ」と言ふのが此處だな、此の人たちと親しく出來ない樣では、と是れも思ひ當つて大層利益を得た事でした。又教生になつてから、授業してゐると校長さん初め先生方がズラリと並んで見て被居しやる。何だか氣が敗けて思ふやうな口も利けない心地でしたが、此の時も彼の巨漢ゴライアスと鬪つた小さなダビデが、「神倚に在す何ぞ恐るゝに足らんや」言つたのを思ひ起して、ホンに然うだと思つて存外沈着いて關はずやりました。沖繩へ參つた折なども、何だか係う淋しい心持に堪へられない時が御座いましたが、「やはり神倚に在す」と教へられてゐた感じが役立つて、これを思ふと何となく心丈夫で善う御座いました。

又私の英和時代に、ミス、カートメルといふ老教師があつて、これも實に善い人でした。「年老つて日本な

どへ來て、輕蔑や誤解も受けるでせうし、定めて辛いとお思ひでせうね』と申しますと、『ナニ私の骨折ぐらゐ大洋に落ちる雪の一片ぐらゐなもの。然し雪の一片でも、私の五年の次に他の人が五年、又他の人が五年と代々續けて行けばそこに幾干かの効が見えませう。たとへ雪の一片でも永遠に積めば……』と言つた風で、それは腹の大きい、偉いものでした。「雪の一片」と言ふ此の言葉も、私には屢々役立つて私を助けて居るのです。

指折つて見れば此等の教を受けたのは、總て廿餘年の昔になります。その頃は然程氣にも留めて居ませんでしたが、爾來廿餘年屢々思ひ當つて助けられて來ました。



十年間修養の實驗

伊澤千代子



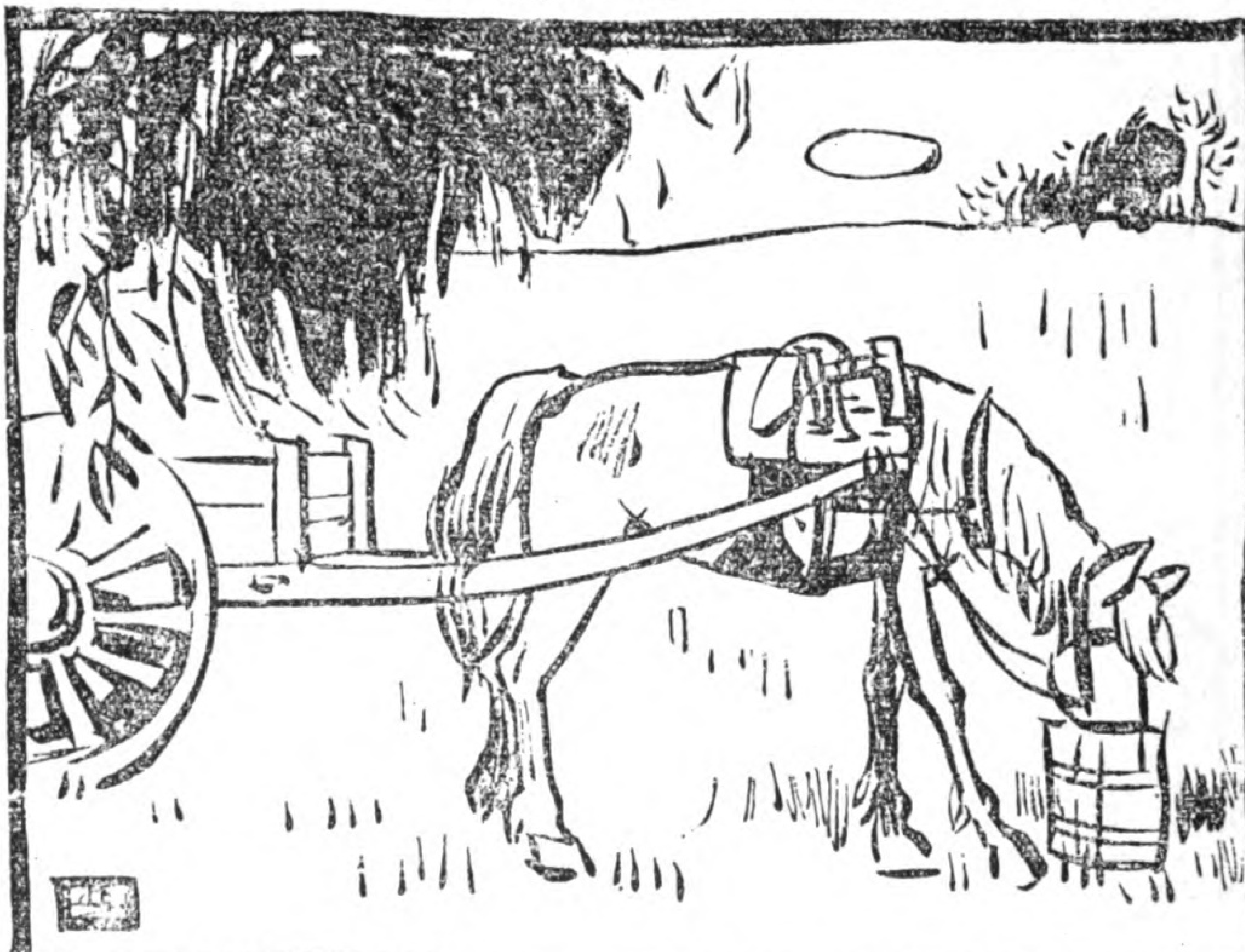
◎娘は皆人に預けて置く

娘達の教育につきましては、これと特別な考をいたして居る譯でもありませんが、たゞ各自の氣質をよく考へてやりまして、それに適當な教育を與へるやうに心懸けて居ります。そして私の傍にばかり置きませんで成るべく然るべき先生や御家庭に御願ひして躾けて頂くことにして居ります。長女は京都の妹の處にやつて置きまして彼地の女學校に通はせ、主に裁縫とか活花、茶の湯のやうなものを稽古いたさせましたが、今は文學博士の遠藤隆吉さんに嫁いで居ります。次女は工學士へ參りまして、臺灣に居りますが、此娘は小山作之助さんの御先妻が實にお立派な淑女で在つしやいましたから、其方に御願申して御薫陶を受けさせました。非常に夫人を慕ひまして、學校の往復――夫人は高等師範の先生で、娘は其女學校の方に通つて居りました――にも始終御一緒いたし、歩き方まで模倣をするやうになつて居つた位でした。此娘は後に武村耕靄さんの御弟子となつて繪を敎へて頂きましたが、もとより上手には畫けませんけれど、遠方に參つて居つてもそれが大層慰藉になるさうで、つい此頃も何か描いたものを親許へ送つて寄越して居りました。三女は今度佛蘭西から歸つたので御座いますが、この娘は小さい時から實に内氣で、口もろく〱利かぬといふ風でしたから、これは餘程よく敎育してやらないと、當節の人には相應しくなれないと思つたので、初め長谷川

きた子さんへ御願ひ申して置き、つひに洋行もさせましたやうな譯ですが、御蔭樣で性質がすつかり快活になつて歸つて參りました。末の娘は小さい時から根本通明さんの御弟子に願つて儒教風の御薫陶をうけさせましたが、此娘は餘程頭腦のかたい方で、遊藝などは餘り好きませんけれど、讀書や文章を書くことは實に好きで御座います。

◎子供には宗教は勸めず

私は禪によつて修養いたして居りますけれども、子



供等には宗教を勸めは致しません、一體私は煩悶もないものに傍から宗教をすすめては却つてよくないだらうと思ふので御座います世の中へ出て心に苦しむやうな事でも出來ましたならば、その時にそれは斯ういふ風に信仰を求めた方がよいと示してやらう位に思つて居ります。それでも「門前の小僧は習はぬ經を讀む」で各自矢張り心の落ちつけ場を知つて居る樣で御座います。書生などでも或はユニテリアン、或は禪宗と赴く所は別々で御座いますけれども、それ〲心のやり

場を考へて、宗教に傾いて居る様で御座います。人は何かに頼るといふ事は、至極必要な事で御座いますけれど、其宗教は必ずしも何の教でなければならないといふ事はないと存じますから、私は人が何宗教を信じやうがそれに就て兎や角言つた事はありません。たゞ人々の好む所に従つて、おもひ〳〵に信仰を求めたならばよいと思ふので御座います。

わけのぼる麓の道は多けれど
同じ高嶺の月を見るらん

と申す歌が御座いますが、歸する所は道は一で御座います。私の妹などは熱心なカトリックの信者で、子供達でも皆舊教の學校に入つて居りますが、きいて見ますに其儀式から申す事から餘程佛教に似て居ります。

◎必ず讀んで置くべき書物

子供等には讀書を最も奬勵いたして居ります。ことに女は嫁にでも參りますると何うしても暇がなくなりますから、結婚前にミッシリと讀書をして置く必要があると思ひます。近頃の學校では學ぶ科目がなか〳〵多くなり、外國語なども致さなければなりませんからつい和文などがあまり讀めないやうで御座いますが、三鏡や、源氏、枕、土佐日記、徒々草などは是非讀んで置く方がよろしからうと思ひます。是等の書物は、言葉のゆきみちは師に就いてしらべる事は必要でせうけれど、講釋丈けならば、源氏は湖月抄とか、枕草子は曙抄とか、徒々草ならば、文段抄のやうな物によつて讀めば、大抵の事は解ります、私共では源氏物語や東鑑などいふものは私からも讀んできかせて居ります。それから太平記や平家物語、これは文章がよいばかりではなく、其時代の歴史ですから、もとより讀ませなければならないと思つて居ります。又他家様では子供に小説を讀ませるのはよくないと仰しやるけれど世のふりあひや、交際や、また人情の事どもに就いて一々口で教へられぬ事を學ぶ事が出來ますから、私共では別に禁じないで居ります。しかし何時でしたか書生の机の上に何とかいふ雜誌のあるのを一寸見ます

と、大變なことが書いてあつたので、これは私が貰つて置くよと言つて竈に入れて燒いて了つた事があり、其後他家へ參つた時にも亦よくない書物を見ましたから、これではうつかり打捨てゝおかれぬと存じまして、それから新刊の書物は私が一通り目を通してやることにいたしました。昔は今日と違つて家庭ではよく漢文を讀ませたものですが、それはたゞ文字を覺えるといふ丈けではなく、いろ〳〵と精神上の敎を受けたもので御座います。

◎本妻の權利と妾の境遇

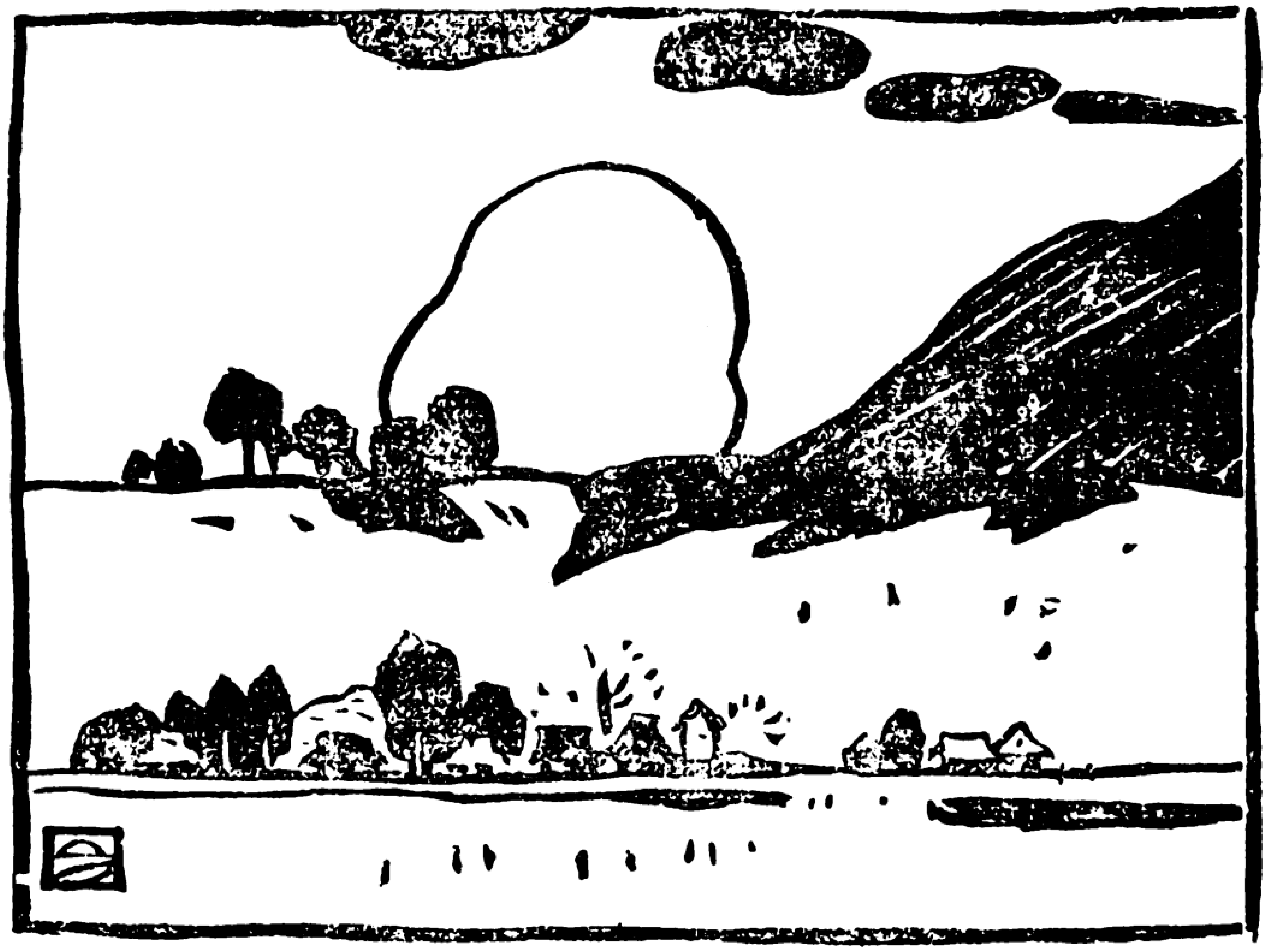


考へて見ますと昔風の敎育にも捨てゝ惜しいものは澤山御座います。私共は馬に乘ることや柳生流の小太刀なども稽古いたしましたが、斯ういふ事は身體を練る上にも萬一の場合の用意としても大變よい事ではないかと思ひます。手裏劍などは、婦人座右の護身として、ピストルなどより遙かに相應しいと思はれます昔の御殿女中などは棒なども よく心得て居りましたものでそれで大の泥棒を打据ゑたといふ話もあります。或は忍術にしましても、入る方は要ら

ぬ事ですが、守る方では是非心得て置くべきで御座います。昔の女はすべてさういふ稽古をいたして居りましたから、男が女を挑んだといふやうな場合に、眞逆樣にそれを投げつけたといふやうなことは、よく御座います。そして昔の女はなか〳〵名譽を重んじたもので、又權利もありました。彼の大名は妾手かけを置いたから夫人に權利がなかつたかと云ふに、決してさうで御座いません、大名が德川家に出して置く誓書の第一には妾を以て妻としない事、庶子を以て家督とはなさぬ事などが認めてあつた位で、妾といふものは召使と同格であつたので御座います、源氏物語などを見ましても、中宮と仰せられたものはたゞ御一人で、あとの女御更衣といふものはずつと格が違ひます。尤も中宮樣に皇子がなくて、女御腹のお子樣が陛下におなりの場合には、お子樣はお母樣と尊んで太后となされた事もあり、又德川時代でも子供からお母樣として尊ぶ事はいたしましたけれど、夫が妾を本妻のやうに取り扱ふことは出來なかつたものです。この邊の制裁はよほど嚴重で御座いました。殊に大名の妾といふものは殿樣自身が勝手に定めるのではなくして、奥樣から殿樣に進せられるといふことになつて居つたものです、彼の參勤交代と云ふのは大名が一年は江戸で暮し、一年は國元に歸つたのですが、其の奥樣は德川家への人質といつた風に江戸に留め置かれて、お國元への御同伴がかなひませんでした。そこで殿樣のお世話係として、奥樣からお妾なるものをお上げになるといふ譯でしたから、それがために奥樣の權利が削がれるといふやうな事はなく、御本妻は御本妻として立派にたてられて居らつしたもので御座います。この風は町方にも及んで居まして、お內儀さんの勢力といふものはなかなか強いものでした。それゆゑ婦人は一般に妾となる事を非常の恥辱と思ひまして、よし身分は下つても本妻たることを望んで居つたもので、今日のやうに地位と財産さへよければ如何な處へ、どんな條件がついても參るといふやうな事は決してなかつたもので御座います。

◎幼時は非常の神經質

私は若い時から非常に強い神經質で御座いましたが、それが動機となつて佛教の信者となりました、一體私の父親は陽明派の儒者でしたから私は無論儒教風に育てられて居つたのですが、廿四歳の時親戚のものから勸められて、法話を聽く樣になりました。何しろ其時分私の神經の强かつた事は、殆ど病的でしたから、自分が苦みましたは勿論、夫なども隨分困つた事と存じます。



洗はゞや御法の庭の
池水に
心にかゝる有耶無耶の
くも

これは私が禪宗に入つた時に詠んだ歌で御座います爾來修養をつとめて居ますけれど、實に申上げるのもお恥しう御座います。しかし昔の自分と今の私とを較べて見ますと非常に嬉しく思ひます。

吹く風にまかせて
なびく青柳は
うごかぬ幹のあれ
ばなりけり

◎別莊の一夜

つい、此間の事でした、たゞ一人で國府津の別莊へ參りましたが、夜中に浪の音で目がさめて何うしても眠られません。で心念修養はこのやうな時こそと思ひまして、床の上に起き直り、ランプに火を點して、冥想に入りました。其處には七十許になる留守居の老人がたゞ一人居る丈けでしたが、もしそれが昔の私で御座いましたならば嘸淋しく心細く思ふたことでせう。ましてこの樣に年を老りましては一層悲しく思ふたで御座いませうが、其時の心持は今思ふて見ましてもどうも愉快でたまりませんでした。其時。

さよふけてひとり靜けきともし火の
　　もとにこそしれ道のまことを

といふのを詠みました。これはもとより歌にはなつて居ませんが、禪の方の心持にはなつて居る積りで御座います。昨日もある會で私が御話をして、禪をいたしますと、心持が安樂々、活潑々とでもいふ風になると申しましたが、實際心持は言ひ樣もなく樂になつて參ります。前にも申したやうに、私は並はづれの苦勞性で御座いましたが、禪に入つてからは、一向物が氣にかゝらなくなりました。實に心持がゆつくりいたして居ります。二三日前ある人が參りまして、事の行違ひから大變私を罵りましたが、私はそれで少しも腹が立ちませんのみか、却つて可笑しく、可笑しいと申すよりも寧ろ氣の毒に思はれたので御座いました。

◎不思議な淘宮術

しかし私の氣質の偏の直りましたのは、餘程淘宮術のお陰があると思ひます。これは天保年中淘祖といふ人によつて始められたものなさうですが、神儒佛三敎を基としてある敎で、まあ禪宗をやさしくしたものと申してもよいでせう。至極簡易な敎で、今日の方にはちど馬鹿々々しいかも知れませんが、近頃は大分可然方々が入つて御出でになるとかいふ事で、主人なども之れに入つてから、餘程得た處があると申して喜んで居ります。前に學習院々長をなされた立花種恭さんは淘宮の先生で入らつしやいますが、神田の三組町には

容月とか仰しやるよい先生がおありだときいて居ります。この教は、入門した以上は親兄弟の間柄といへども内容に就て他言はしないといふ誓言をいたして置きますから、世間の人はあまり、知らないやうで御座います。私の從兄が曾て慰み半分に佛教、耶蘇教、淘宮術などの比較を書いた事が御座いますが、其れで私は初めて淘宮術といふものを知つて餘程不思議に思ひました。其時分は私は神經が強くて氣分が勝ぐれず、禪宗に入つて修養して居た頃でしたが、私



の知人にも矢張り困つてる人があつて其人は到底禪などのわからぬ人でしたから、これは一つ淘宮術を勧めて見やうと思ひまして、此の道では一の先生ときこえて居つた靑木十丸先生を御訪ねいたしました。これが縁で私も入門したので御座います。

◎十年間修養の苦心

私は禪宗の心念修養は絶えずつとめて居るけれど、其間に儒教もきけば、神道もきゝ、又耶蘇教の話もきゝました聖書は直譯的の、例へば御國をきたらせたまへといふ

やうな處がわかりませんで困りましたけれど、後漢譯の聖書を見ますと、經書の言葉などが引いて御座いますのでよく解りました。しかし先入主となると申すのでせうか、何の教もみな頷かれますけれども、何うも私には禪宗が一番よいやうに思はれます。仁を聽いても義を伺つても、それは禪宗の心念修養によらなければならないといふやうな氣がいたします。禪といふものはつまり自性を知つてそれを磨いてゆくのですから、これ程容易な事はない譯ですが、私共には餘程の辛抱が要る樣で御座います。私はこの十年間は讀書も交際もやめてその修養にのみかゝつて居りましたが、七年許の間に迚も駄目かと思ふて泣いた事もありました。今年は五十四歳になりますが、まあ五十を越してから漸とわかり出したやうなもので御座います。

◎禪にて親しき友達

私の初めの師匠は京都紫野の大徳寺の管長で、年に三度位上京されて法話がありました。後高嶺高等師範學校長のお母さんと御一緒に、渡邊南陰といふ方のお弟子になつて教を受けて居りましたが、其方がおなくなりになつてからは、鎌倉の圓覺寺樣の法話とか淺草の法話會とか、其他方々の御話を伺つて居ります梅香女塾の木村貞子さんは、幼少から極親しい友達で只今でもよく二人で參禪などをいたしますが、岩佐純（男爵）さんの奥さん、早川千吉郎さんの奥さん、西村節子さん、原禮子さんなども、皆信仰のあつい法友で御座います。原さんとは廿年來御交際いたして居りまして。愛國婦人會、佛教婦人會、或は淑德女學校などのためには、始終御一緒に働いて居るので御座いますが、あの方は禪學なども誠によく明らかで御出でになつて、菩提心のあつい立派な御婦人で入らつしやいます。それ故大勢のお友達仲間でも德の高いお方として尊敬せられて、誰れ一人惡くいふ人がありません。

◎洞ケ峠の明智識

洞ケ峠には水月庵と云ふのがあつて、其の庵主の橋

爪瑞琺尼は、お茶や和歌に長じた人で、かの連月や式部など〻肩を並べる程の方ですが、此の人が禪に入つたに就ては却々面白い話があります。端琺尼が昔まだ千代女と呼ばれた頃に、お茶か歌かの一座をされた事があります。其座中に水月庵の禪宗の尼さんが居られたのですが、千代女は自分の才藝を誇る氣味でもあつたものか、その尼さんに對して少し高ぶつた振舞があつたらしいのです、すると尼さんは『貴方は成程いろいろな藝に達して御出でなさる、然し死んで行く先を知つて御出でか』ときかれたのです。千代女はふつと其言葉に心をつかれて『貴方はそれを知つて居らつしやるか』と訊き返しますと、尼さんは『私は知つて居る、それは斯うして話して居るものは何かといふ風に考へて行くと終にわかる』と答へられました。と千代女は無言の儘でスウーと立つて往つて了つたので、一座の人々は驚いて、一體尼さんは何を言つて千代女を怒らせたのかと申し合つて居りました、千代女はそれから家に歸つて考へに考へたさうですが、賢い人はさすがに違つたもので、七日許りの後、さる知識にしらべてもらひますと、もうずつと上まで進んで居つたのでした、そこでつひに先きの尼さんを慕つて自分も水月庵に入つて瑞琺尼となり、女ながらも禪の方では立派な知識になられたので御座います。

夫人は教育界の元老伊澤修二氏の配、夙に賢婦人の稱あり學は和漢を兼ね禪學、武道の嗜みも淺からず子女の教養に最も力を盡さる〻、模範的家庭の主宰者たり。



支那人の忍耐力

某外國婦人の談に「支那人は實に驚ろくべき暢氣な處ろがある、我々歐羅巴人が半日遊らせられゝば直ちに生命にも關するほどの事柄を彼等は十日も二十日もつゞけて遣つて少しも疲勞しないのみならず、更らに苦痛が何處にあるかを感じない位である。

△彼等は長時間一つ處ろに居つても、別に倦むことを知らず、二六時中自動機の樣に働らいて、さのみ苦しさを感ぜず、彼の手細工をするものを見たのに鷄鳴に起きて黄昏まで殆んど休息することなく、終日齷齪として更らに職業の單調なのを感じない樣である。

△又支那の兒童を見るに、學校に在つては恰も一室に監禁され、聊かも放課の時なく、又趣味の異つた學科によつて精神を慰藉さるゝ等の事もない、假りに若し西洋の兒童をして斯る待遇を受けしめたならば、恐らくは直ちに狂疾に罹るであらう、支那の赤兒は西洋の赤兒が生るゝや否や忽ち手足を動かして踠くにも似ず、其の靜かなる樣は恰も土彫工の人形の偶像かとおもはるゝばかりである。

△それから又生理上から觀察するのに支那人は運動の必要を感じない樣である、彼等は西洋人が貴賤男女おしなべて散步を好むを見て殆んど其意味を了解する事が出來ないのである。

△廣東の一商人は曾て外國の貴婦人が、打球戯に熱心するのを見て、彼の女は幾干の金を得るつもりで彼の樣に働らくのであるかと尋ねた、其時從者の答へにいやあれは金を得る爲めではない、唯身體を動かす爲めに設けられたものであるといつた、けれども商人は猶それを信ぜず、到底運動の眞意を解する事が出來なかつたのである。

△又睡眠の一事に於ても支那人と西洋人とは頗る相違してゐる、概していへば支那人はどんな場合でも安眠が出來ぬなどゝいふ樣な事はない、彼等は如何なる喧がしき場合でもそれが爲に己れの睡眠を妨げられるといふ樣な事はない、彼等は煉瓦を枕にしても黍の莖、又は瓦、若しくは籐の類を褥にするも、又雜沓の間に於てもよく安眠し、快く眠を貪り得るのである、彼等は夏の午後二時頃、草の上にて日光に照され乍ら猶快眠を爲し得るのである。

△支那人の神經の鈍きことは身體の苦痛をよく忍ぶの一事によつて證明される、一例を擧ぐれば支那の病院に行はるゝ外科手術を見ても明かである、支那人の大半は西洋人の畏るほどの劇烈なる手術を受くるにも一切催眠藥を服せず、眼を開きたるまゝ神色自若として居ると云々。



余が觀たる清國婦人

袁世凱氏家庭顧問
法學士　吉野作造

▲家の構造からして異る

清國では男女間の區劃が非常に嚴重に立てられてあつて、男子と女子とが互に往來し、交際することの無いは勿論、殆ど顔を見、言葉を交はすといふこともない。元來清國では家の構造からして男女の室の區劃が整然と立つて居て、家族の外は女子の室へ男子は一歩も入ることを許されない。同國人でさへその位であるから、外國人殊に男子たる私等が清國婦人の實相を知るといふことは非常な困難な事であるのは云ふまでもない。然し私は僅少ながらも私自身で實見したこと、又は確實な所から聞き出したことに就いて述べやうと思ふ。

▲無理に一室に押込まる

私は清國に全三年間滯在して居たが、始めの二年間は天津に居る袁世凱氏の長男の家庭教師として朝夕袁氏の家に出入して終りの一年間は公立學堂で敎鞭を執つて居りました。袁氏の家には二年間も居たけれど未だ一度も夫人の許へは行つたことがない。何時も袁世凱氏か又はその息子に會ふだけである。或日私は袁氏の家の書齋を出で自分の車に乘らうとした時、丁度門前に當つて轣轆たる馬車の音が聞えた。すると從僕が突然私の腕を引摑んで無理に私を室の中へ押込んだ。その時は如何いふ譯とも解らなかつたが、後で訊くと是は家族が北京の袁氏の許から歸つて來たところであつたのだ。然ういふ風に婦人が通る時は苟くも男である以上一人も出ることを許されない。從僕でも車夫で

も矢張り其場に居られない。そして夫人が奥の座敷に入つて了つて既う大丈夫といふ時分になつて始めて私しは書齋から出ることを許された。それほどに嚴重であるから我々外國人が婦人と談話をすると云ふことは非常に難しい事である。

▲正妻と妾の違ひ

淸國では正妻の外に妾を置くことは一般の習慣になつて居る。袁世凱氏の家にも五六人の妾が居た。併し正妻が外出又は歸宅する時は堂々と役所の正門から出入をなし――淸國では官吏は皆役所に住んで居る――主人と同じく出門前に三發の號砲を響かして、三四十人の從者を引連れ、立派な馬車に乘つて出掛けるけれ共、妾となるとさうは出來ないで、必ず裏門から出入する。尤も是は妾ばかりでなく、子息でも、又私などでも皆妾と同樣である。家の構造からいふと、裏門を通つて玄關を入ると直ぐ應接間があつて、次が書齋となつて居る。私は毎日裏門から此の書齋に通つて袁氏の子息に敎へて居た。

それから又一體に淸國人は他人と自分とを區別することが非常に好きだから、自分の物には少しでも特色あらせやうと馬車でも人力車でも出來るだけ裝飾する又例へば最初は普通の洋燈を一つ點けて居たものだが是では明るくないからとアセチリン燈の煌々たるものに代へた。是れも一つでは景氣が悪いといふので、二つ點け三つ點けして、今では上下兩側に六個も點けて喜ぶと云ふ風である。

▲淸國婦人と日本醫師

袁氏の家には袁氏が在朝時代から雇つて居る日本の醫師が一人と、他に同じく日本醫が二人、今一人赴任後五年位になる醫學士とが出入して居る。後の三人は直接袁家に雇つて居るのではなく、袁氏が創立して日本人が執務して居る官立病院の醫員である。此等の醫師なり又はその病院の看護婦なりが袁氏の家族の病氣を診察し看護することになつて居る。淸國には女醫と

いふものが居ないから、婦人でも仕方なく男醫に見て貰つてゐるが、中には支那の醫師でなければ脈だといふ者もあると云ふのは支那の醫者の診察は、頭を下げて顔を見ずに唯脈だけ診るが、日本の醫者になると介意はず顔を見るからである。そして日本の醫者が診る時には通譯が附くが、その通譯は入つて來る時から出て行くまで頭を下げたきりで、決して顔を見る事をしない。



それから清國の婦人は、庭に出て運動する時などには、その邊に居る男子は皆追ひ拂つて了ひ、四隅に幕を垂れて窺ひ見ることが出來ないやうにしてそして始めて運動をする實に嚴重なものである。

▲禁斷の奥座敷に入る

私が曾て妻子と一緒に元といふ文部次官を勤めて居る人を訪問した時、誤つて例の男禁制の奥座敷に踏み込んだ。是は失策つたと思つたが、幸ひ此の家族は非常に開化した日本贔負の人達で、其の娘達にお京さんだ

のお雪さんだのといふ日本名前まで付けて居る位であつたから、迂濶に這入つたものだから仕方が無いと許して呉れたが、其時その夫人は『此の家が建つてから何十年となるが家族以外の男子が入つたのは貴方が始めてゞある』と言つて居た。此の位であるから却々男子が女子に面會することは難しい。男が女に對してばかりでなく、女同志でも交際することは稀である。交際するのは殆ど親類とか縁者とかに限られて、さう云ふ人達丈け一緒に塊まつて往來して居るが外に友人と云ふ樣なものは極く少いやうに思はれる。

又日本の婦人で支那の婦人を訪問するのも殆ど無いと言つて宜い、是は支那の婦人と語るほど日本婦人に支那語が出來ぬのと、又一つには交際に慣れぬ爲でもあらう。よし當方から訪問しても彼方から訪問を返すといふことがない。尤も服部博士の夫人などは大官の夫人連と屢〻會談せられた樣であるが、それは服部夫人のやうな婦人にして始めて出來ることで、一般の婦人には却々出來ることではない。

▲破天荒の夫妻招待會

一度私達天津に傭聘せられて居る若い連中が、此方も夫婦同伴で清國の夫婦を招待したことがある。其等の人々は大概日本に留學して居た人達で開けて居るから夫の方では此の招待を怪まない。夫人の方にも日本の女子美術の卒業生なども居られた。ところが言葉が通じないので婦人間には會話が始まらない。兩方とも默つて居る。支那の婦人は概して快活で談話にも巧みであるのだから、言葉さへ通じたら會は立派に成功したらうに、それが通じないばかりに、不結果に終つて了つた。その時彼方の婦人は男子が居るのを見て、飛んでもない所へ來たと言ひさうな間の惡い顔をして居た。丁度田舍の世慣れぬ人が證人として法廷にでも呼ばれた時は怎うもあらうかと思はれる程餘程迷惑がつて居ました。是は古來の教育の所爲でもあらうが、一には又清國では客を招んで男子に接する等のことが少ない爲でもあらう。此方から行かうといても彼方で避

ける位だから致方がない。

▲唯一のホーム
懐しき故郷

清國人程故郷を愛するものは無い様である。何十年住んで居やうと、如何程盛大にやつて居やうと、生地以外の土地は皆假の宿と稱して居る。生地以外の住宅は、只寓る所であつて、家庭ではない。他人に住所を訊くにしても、貴方は何處に寓るかと訊いて、決して何處に居るかとは云はない。家庭といふのは先祖代々の生れ故郷のみである。貴方の家は何處かと訊くと必ず生れ故郷を答へる。職を辭しても、商賣を止めても、



彼等の歸つて行くのは皆その故郷である。家族が死んだら何百里あらうが必ず故郷に遺骸を搬て埋葬する。交通の不便な支那のことだから、半年位も費る事があるが、それでも矢張り故郷へ葬る。決して他郷へ骨を埋めることはない。

それ故故郷に家を構へて居る人は、充分の設備を施して客を招くほどの用意もあり、又劇場なども設けて居るが、故郷以外では、假の宿として役所に住居するとか、小さい家に住んで居て、客を招ぶ設備抔はしてゐない。

▲我が棲家を隠す風習

すべて淸國では總督、知縣などゝいふ高級の官人は、皆大勢の家族と共に役所の中に

住んで居る。役所と言ふのは、表の一部が役所になつて、裏の方の建物の大部分が家族の住所になつて居るのである。そして總督に使はれて居る低い役人も亦役所の隅々にある長屋門のやうな室の中に寢起きして居る。然し此れは單身者に限られてゝ總督、知縣などの樣に妻子を連れて入ることは出來ない。大抵は妻子を故鄕に殘して置いて、段々出身して、早く妻子と同棲する程の位置に上り度い事を心掛けて居る。そして妻子と同棲するほどの力のあるものは、小さい家を借りて彼等を住まはせ、一週に一二遍宅へ行つて、その他の日は矢張り役所内に寢起きして居る。尤も開けた人や金のある人は、我々が東京に出て來て一寸した家を持つやうに家を構へぬでもないが、それとても廣い家ではない。別に一廓を構へたと言ひ得る程のものでは無い。だから直ぐと婦人が人の目に掛り易いし從つて又客も招ばぬといつたやうな風になつて居る。

商人とてもその通り、大抵は家族を故鄕に殘して置いて男ばかりでやつて居る。官吏同樣商店の中の室に寢起きして居る。然うでなくして矢張り小さな家を借りて住せて居るのもあるが、これは他人を招ばぬのは勿論、自分の住所を知らせることさへもせぬ。天津の小林商店に居る淸國人で同地では有力者の一人である者までが決して自宅を敎へない。急用でも生じた時に困るからと言つても、何某の店に來ればすぐ分明るといつて友人の家を敎へて置いて決して自分の家を敎へない。家へ來られるのが厭さに病氣の時でも無理に出勤して商店でウン〳〵唸つて居ると云ふ風、實に可笑しい程である。

▲憐れなる悲鳴を聞く

私と一緒に天津の學堂に務めて居た職員に、臺灣人が一人居ました。尤も今では日本の國籍に入つて居るが、その男が去年妻を携へて來た時、十五位の女の兒を一緒に伴れて來た。それは何者かと訊くと、奴隷だといふ尙ほ訊いて見ると、此者は幼い時分に商人から賣られたのを自分の弟の妻が嫁に來るとき實家から付

けて寄來したのだとのことであつた。此の女兒賣買の風習は勿論下等社會の事であるが、今でも矢張り行はれてゐる樣で、天津の附近に其の市場みたいなものがあると云ふ事である此處で商人が幼い時分に買取つて、遊藝を仕組み、相當の年頃になつたら醜業婦にして了ふ。醜業の方へ廻されぬ程顏の醜いものは奴隷として賣られるのである私しはまだその賣買の實況を見ないが、唯一度奉天の或る所を友人と一緒に散歩して居る時、憐れな、悲しげな彼等の泣聲を聞いたことがある。始めは何だか解らなかつた。毆たれ擲かれて泣く聲とは違ふ。何か身の中に痛みがあつて、それを訴へて泣くやうな何とも云へぬ悲しげな聲である。何だらうと訊くと、その時友人は、那れこそ四五歲の女の兒を買つて來て、それを養成して賣り出す奴隷商人の家である那の泣き聲はベンチの上に腰掛けさせて足を無理に堅く綳ひつけて居るので、その痛みに堪へずして哀泣して居るのであると答へた。



▲近頃珍らしき判決例

清國の下等社會では結婚でさへ矢張り此の賣買の觀念を離れない。之れに就て面白い判決例がある。

天津の裁判所と云ふと、支那古來の裁判法を排斥して裁判權の獨立を圖る爲に始めて設けられたもので。其所の模範裁判所として支那では有名なものである。だから、役人は多くは法律學校の職員を兼ねてゐる。何か裁判上の新事件が生じた時には、その判決前に必ず一度法律學校で討論して研究する。それほど愼重な討議を經た判決に恁ういふのがあるから可笑しい。

事實は妻が不義を働いたのを本夫が發見して姦夫に斬りつけたと云ふのである。その判決は姦夫は重禁錮六ケ月に處せられ、本夫にはそんな不貞な妻は要るまいからとて官命で離縁をさせ、尙ほ姦婦を村の世話人みたいな者に托して賣らせ、其の身代金を本夫に與へて更に新妻を貰はしめた。

是は四十一年秋の出來事であるが堂々たる天津裁判所の判決でさへ此の通りである。下等社會に賣買思想の行はれて居るのは無理ならぬことである。尤も中流以上には斯樣な賣買的の結婚は行はれない。先づ幼時から許嫁にして置くか、其他相當の手續を履んで結婚をする。

▲教育界目下の狀況

支那ではまだ學校は澤山は無いが、中流以上の家庭では、家庭敎師を聘して親類知己の子供を集めて學校みた樣なものを開くから、子弟には相當に敎育はある。程度は低いが、此頃では日本などを眞似て新しい敎育をも施して居る。此の敎育に從事して居る先生に訊いてみるに、生徒は概して我儘で餘程やり難いさうである。男子でも女子でも各自が個人的である。先生の說明だけは一同して聞いて居るが、質問となると、個人個人で、質問者自身のみしか聞いて居ない。だから又他の生徒が同じ質問を始める。質問する生徒も亦自分一人解れば宜いといふ流儀で、他人に聞えるやうに立つて質問するといふことをしない。稍時日を積むと二十人位を一團として別々に敎へる。丁度我國の寺子屋同樣の敎授法である。迚も一緒に統一して敎へることは出來ない。欠席すると昨日のところを又敎へなけれ

ば、逆も次を進めることが出來ない。
そして男女相接せぬ例は此の教育の方に於ても見られる。嘗て天津の女子師範學堂で、到底女教師では居堪えられないと云ふので、男教師を雇入れやうとしてその可否に就いて大議論が始まつた。その時などは、種種吟味した上、結局投票することとなり、結果は三分の二は男でも宜いといふことであつたが、それから總督に上申して許可を得るとか、色々手續を盡した上漸と男教師が入ることゝなつた樣な有樣である。男子の音樂養成所に女教師を入れるに就ても矢張り同樣で、種種議論を戰はせた末、外國婦人ならば宜らうと云ふ事に成たが、是も亦上申許可を得て漸く登校を許された。



▲天足會と支那趣味

支那婦人といふと直ぐ纏足を想ひ出すが、足は總ての支那婦人がやつて居るのではなくして漢人の多數がやるのである滿人と漢人中の一部は決してこんな事はやらない。そして近頃では此の弊害を自覺して天足會といふのを設け、各地に夫夫勢力を張つて、大に纏足廢止を奬勵する樣になつて來て居る。然し理論上からは弊害を認めて居るが、實

地には目下の所却々止みさうにも見えない。

可笑しいことには、支那の婦人は纒足には三つの德があると稱して居る。一には婦人に最も戒しむべき外出をせぬこと、二には非常に美であること――支那人に言はせると、大きな臀部と小さな足とでヨロ〳〵として歩くのは、恰も風の流るゝ樣な趣があつて、所謂「風流」といふ形容詞に當つて居るのであるさうな――三には脚部の肉が皆臀部に付くと信じて居る。彼等が纒足したのを見ると、脛は骨ばかりで、懷中時計の太さ位しかない。股も亦甚だしく發育不完全である。彼等は此の股と脛との肉が臀部に加はつて大きくなるのだと眞面目に言つて居る。

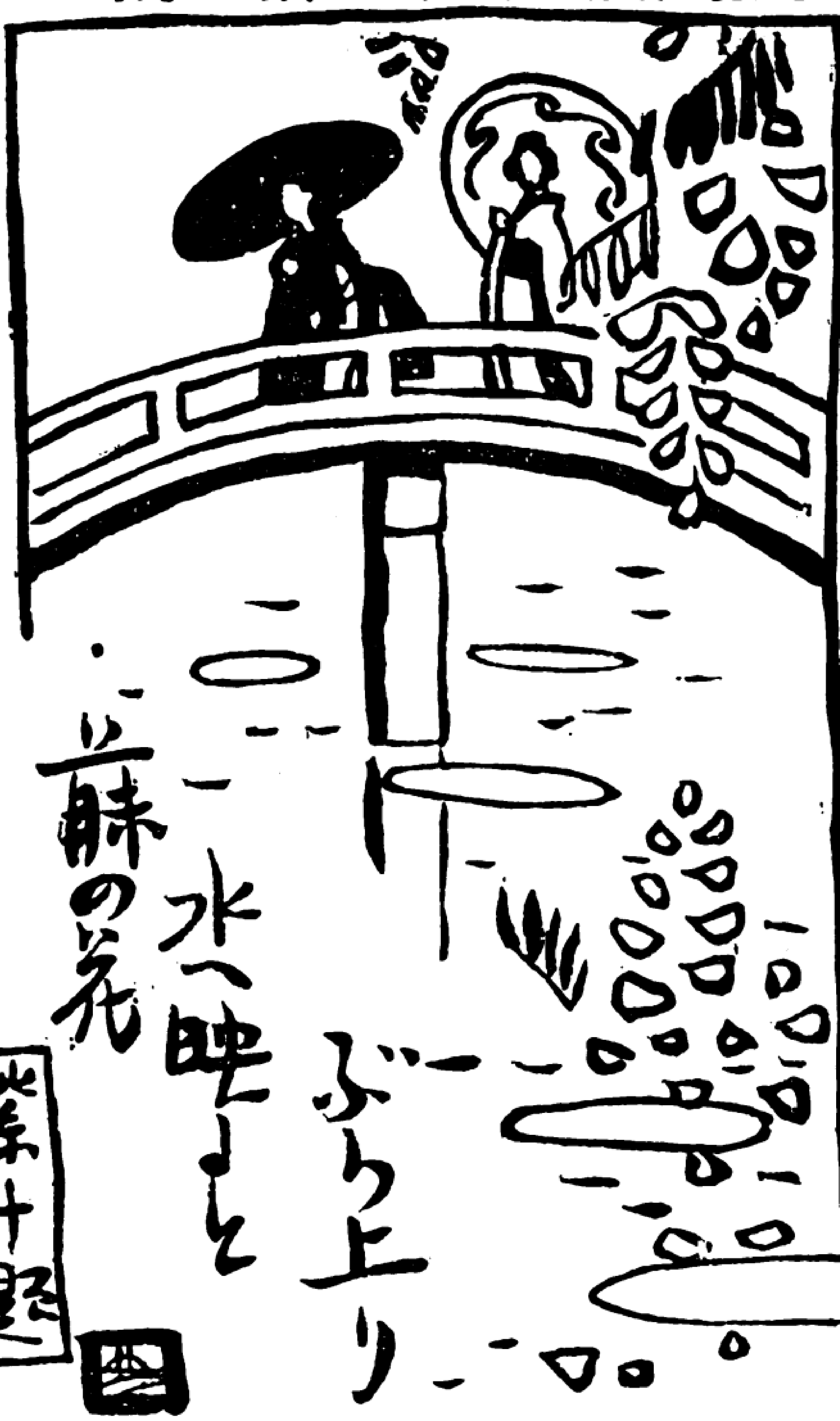
要するに足の小さいのが美人の資格で、嫁を貰ふにもなるたけ足の小さいのを搜す。たつた一握りしかないといふと大變な誇りである。だから家では痛いからとて餘り小さい靴を穿かぬが、外出する時には三分の二程小さいのを穿いて出る。

▲最も重んずるもの

先づ物質的の方面からいふと、支那婦人は着物よりも寧ろ頭や手の裝飾物を大切にする。金銀その他の珠玉で拵へた飾りものは彼等の最も誇りとする所である着物は第二に置かれてあるから、日本で工夫を凝らす模樣と云ふ樣なものは支那婦人の衣服には見る事はできぬ。尤も花や何かを織り出したのはあるが、色彩で付けたものはない。だから流行の變遷といふこともなく。從つて又種々なものを澤山拵へ度いといふ欲望も無い。絹類であるから價は高いが、日本に比すると却て質素になる譯である。併し男は之に反して衣服を尊ぶ風があつて、毛皮の服などゝなると支那男子の誇りとなつてゐる。

精神的方面に於ては、やゝ形式的に傾いて居る嫌はあるが、彼國の道德敎からしてひどく老人を尊ぶ風がある。又節操なども中流以上では餘程嚴重に守られて居るらしい。此等の一例として恁ういふことがあつた。

去年の初夏の頃、矢張り天津の裁判所に、女子師範學堂の女教師が、自分の娘が從僕と不義をしたといふので、その娘に毒を飮ませて死に致したといふ事件が持上つた。私しは、被告は母親とのみ思つて居たが、愈〻判決となると、意外にも不義の相手の男が有罪となつて、母は無罪を宣告された。是は不義した男が惡いのであつて、母親には不義者不正者を制裁する權利が與へられてあるとの理由であつた。之れは一面から見るとひどく老長者を重んずるもの〻又一面から見ると甚く節操を重んずるもの



と言ふ事が能きる。清國では父が死ぬと母の權力が非常に增大して來る。西太后が婦人の身でありながらあれ程權力を振れたのも一は此の理由から來て居るに相違ない。皇帝でも皇太后には支配される。日本では老ては子に從ふとになつて居るが清國では老人になる程權力が大くなる。形式的ではあるが孝道を重んずるとは非常なものである。併し夫婦の關係は不幸にして男女兩方共餘り重く見て居ない。從つて離婚もない。離婚があるのは夫婦間の關係を重視して居るからであるが支那では左程結婚を重大に視て居ないから、離婚するの必要をも感じないのであらう。

神戸女學院を卒業して
貿易事務に從事する私の働き振り

黒柳千代子

加奈太メールに、佛蘭西メールの拔錨は、明日の正午である。昨日は歐洲より常陸丸と、ピーオーの貨物船が入港した。船繰の都合とは云へ、斯う一時に打當かつては、千軍萬馬の猛勢で事務が、テーブルの周圍に突撃するであらう。何時もの八時間では、迚も防禦の程も覺束ない。いくら藻搔いたとて、人間以上の仕事は出來ぬ。なれど、對抗の策戰計畫だけは、腦裡に組立てゝ、常より早く出勤した。

平常閑人然と構へてゐる、倉番連中も。流石に、今日ばかりは、上衣脱ぎすて、砂塵濛々たる裡に大立廻り。一同に會釋すると、薄暗き奥より、例の先生がチック頭を振り上げ、金縁凹鏡に私を入れ、

「あゝKさん、大阪の契約書も、やつと揃ひましたから、明日の郵船に、是非間に合ふやうに、爲て下さい」

「承知しました書類は?」

「貴女のテーブルの上に」

此方を振り向けば、輸出係の春野さんは、私を待構へてゐる。

「今日はお忙しいでせうが、仕入書が澤山ありますから、正午までには、米國領事の證明を取るやうに、事によると二三通は、文句が付くかも知れませんが、何にしろ悉皆で、四拾八通ありますから」

電話係の絹子さんまでが、

「今朝二度も、貴女のお出ましは、未だか〱、と尋ねて來ますの、あの、それ、大阪の吳服屋さんが」

「高島屋ですか、マア〱お世話樣でした」

内庭には、荷造の辛と濟んだ、箱物や莚包が、所狹しと山の樣に積上げられ、小柄の自分でさへ。辛つと通るばかりの、間隙を殘すのみ。全然火事場のやう。

ゴッタ返しの大騒ぎをしてゐる。
事務室に這入て、奥を覗くと、意外！、未だ誰の顔も見えない。たゞ一心不亂に、コッ、コッ、トン、トン、印字機を鳴らしてゐる、何時も早出の木村さんばかり。定刻前にしろ、あまりに書記達は暢氣過ぎる。『木村さんの一人舞臺ね』と笑ひながら挨拶して、自席に就く。未だペン拭の掃除がしてない。ボーイに洗はしに遣る。書類が文鎭の重さに壓されて、主待顔なるもをかし。大分ある。愡閙々々爲てゐると間に合はぬ。遲くも十時迄には、飜譯して、印字機係へ廻付せねばならぬ。直ぐペン軸を握る。どれもこれも型に入れた樣なものばかり。馴れてゐるから、ペンは意の如く走る筈なのに、今日は氣ばかり焦心つて、よくスペルの誤を爲たり、數字の位を書きちがへたりする。如何したものだらう。最後に倫敦本店へ、鳥羽襟卷、絹肩衣、皮手袋、婦人帽、絹ベール、絹、綿レース、裝飾、造花、毛織物外八點、佛蘭西支店へ、紋縮子、絹リボン、婦人用懐中金側時計、同金鎖、指輪、香水、石鹼、顔料、絹織物外拾五點の注文書を認む。孰れも大阪某商店の契約品である。昨年秋、婦人用裝飾料品拾餘萬圓を、一時に輸入せし當時すら、日本婦人社會の虛榮心が、宛ら幾何級數的の速度を以て、増進し行くのに驚かされたに、今年はそれに倍加する注文。併も品質はズッと優等で、獨逸仕込の安物や、米國仕立の素人おどしは、テンデ相手にせぬ樣になつた。需用者の眼が、夫程迄に肥えたのであらうと思へば何だか末恐ろしい心地がする。
日本駐在の露國通信者某氏が、ノヴ、ウレミヤ（新聞）に書を寄せて、「東洋の羅馬は日本である」と云ふたさうなが、婦人社會の奢侈が、恁ういふ風であつて見ると、萬更皮相の觀察ではない。彼れの眼に然か映つるのが有理である。自分は頭字の刷込まれた書信紙にペンを走らしながら、墨汁を浸すごとに、日本の將來に就て轉々憂慮の念を抱かずには居られなかつた。
併し商人としては、時代の流行を追ふ樣では、商機を逸する。宜しく流行に魁すべきである。否進んで流

行を促すべきである。滿都の士女が、三越、大丸店頭へ蝟集するのは、畢竟兩商店が、絶えず此の筆法で、士女の渇するヴァニチーを滿足せしめつゝあるからで、時世を達觀する彼等の商賣振りは、頗る模範とすべきである。そして彼等に貨物を供給する貿易業者の苦心と注意を拂ふ事は更に感ずべきものがある。

自分達も此點に考慮を廻らし、形狀や模樣の時好に投ずるものを特記して、本國の注意を促し、何とかして日本人の虚榮心を滿足せしむる樣にとばかり力めてゐる。してみると、日本を羅馬たらしむるは、需用者の罪にあらずして、寧ろ供給者の罪であるかも知れぬ。

商談室には、五六人詰掛けて、番頭相手に掛引今や酣である。手を拍つたのは、契約の成立であらう。間もなく常陸丸輸入の更紗五箱、名古屋市某商店渡し、との傳票が來た。

更紗模樣は、孰れも光琳式新柄で、スカレツト地、セピヤ地、ヴオレツト地、アンバー地などに、輪廓鮮明な草木花鳥をプリントしたものである。之れは昨年春頃光琳式模樣流行の曙光が、ちらつと見えたをり、自分が館主に說き、竊に上京して、模樣を圖取りし、更に京都の圖案家に托し、更紗模樣に仕上げて英國へ送つたもので、頗る秘密にしてあつたものだが、此の新規の更紗見本を殊更大阪商人に提示せずして名古屋商人に買取らしたと云ふ番頭の深謀遠慮なる手腕には、流石にと感服した。

『商賣は牛の涎』と云ふ俚諺があるが、それは昔のことだ。今は電光石火の如く、機敏に廻はらねば、二百の利益も、みす／＼百で泣寢するやうな失敗がある。若し番頭が先づ以て見本を、大阪商人に提示したらんには、恐らくは今後五十箱の、注文をも受取ることは出來まい。なれど番頭は此の拙策を採らずして先づ新柄を名古屋の商人に買はせたのだから、やがて其の店先に飾らるゝ頃には、注文が續々大阪に入込むに違ひない。此時に機敏なる大阪商人は何とて躊躇すべき。先を爭ふての注文に、立所に三四百箱の契約が成立つは必然である。殊に印度や、露西亞更紗が、最早一般

人心を懍焉たらしめた時であるから、嗜好にも投じ、惹いて捺染界にも一變調を起すであらうし、モスリン界にも、多大の打撃であらう。

斯樣ことを考へながら、辛つと最後の文案を印字機係へ廻はす。

午飯後は、例に依て喫烟室に男館員が總て集つてゐる。事務打合せで眞面目なりしはほんの少時。低聲の内證話も、いつしか調子づき、聽て、笑ひさゞめく聲今迄靜寂なりし事務室の空氣を動かし、吾が耳を打つはいやらしき婦の噂や、賭事の吹聽である。唖聲、猫撫聲、さては黄な聲や、銅羅聲、聽くとして不快の感が起らぬものはない。あまりに堪えかねて、圖書室に入れば、こゝにも一團の男館員が洋服商相手にスタイルの評談最中。暫らくはお附合半分に、譯もなく善惡を語つたけれど、こんな所に永居は無用と又自席へかへる。

男子は何故彼樣だらう。料理屋の二階で、妖怪變化に取卷かれて、其玩弄物となり、果ては、ありもせぬ、血まで吸ひ取られる、それが、御自慢とは何の事だらう。花とか、カブとか云ふものに耽り、賭博を遣らねば、紳士紳商の仲間入りが出來ぬものと、誤解してゐる氣の毒さ。さては麻けた所で、家庭に貢献したと云ふ例も聞かず、敗れば、一家の基礎を危くするに過ぎない又容姿の美に憧憬れて、二六時中憂身をやつすのが、何で面白いのであらう。一體商館員と云へば、誰しも直ぐ、チック頭に高襟、と言つた樣な厭味なスタイルを聯想さする。氣慨のある言葉や、勇壯な行爲をする人は、薬にしたくもない。其辨髯だけは、カイゼルを學びて威風堂々たる趣はあるが。日本の貿易が這麼人等に依て取扱はるゝ間は、何程金額が上つたとて、未だ以て世界を濶歩する譯にゆくまい。

午後一寸女學世界を見る、時代の變遷、時勢の風潮につれて、大分面白い事が書いてある。一面には諷刺となつて、偉大の教訓を、與へるであらうが、少しは實務の方面にも、筆を入れて貰ひたい。世の生活難が、女子をして、獨立自活を餘儀なくせしむる時代である

から迷へるもの、疑ふもの等の指導ともなつて、ほしい。

二時總員執務。

局へ加奈太メールの郵便物を受取に遣つたボーイが歸へる。布袋入貳個、百餘通の書信到着。直ぐ整理に掛る。

文書を夫々關係者へ廻附す。食後の雜談に足らず、今までテーブル越に、饒舌て居た人等が、やつと靜まると、取調物や、帳つけで、遠來の書簡紙や、織物のパタンが、反覆する音がしきりと聞える。館外は今を必死と、丁々の荷箱の釘うつ音や、大八車に繋がれた瘠馬の嘶き。館内の人が、館外の人に交渉し、ボーイを呼ぶ、中仕を走らす、電話をかける。商談室には、京、大阪、遠く中國九州の取引商人詰掛けての談判。館主の室へは、館員共が押寄せて、事務の裁決、文書にサインをまつ。一秒一刻を爭ふ商機には、些の猶豫も出來ない。館主の訊問命令、さながら立板に水のやう、少しの澁滯もない。巨萬の商談は立所に決せられ、部下は命に從ひ、交渉、通信、遲滯のあらんことを恐るゝのみ。茲一二時間、全員が電光石火の働き振り、却々官衙などには、見られぬ圖だ。

自分が擔當する書信中に、上海の某清商が、破綻せんとする内報があるので。竊に取引關係を調べる、別段貸借はない、一應館主に内報して。將來を警戒することにした。

倫敦本店より、十月渡し、住友丁銅貳拾噸の注文が來る。海外相場は、追々好調に向ひたる、内報はありしも、本邦は頃來低落勝にて。市中の氣配沈鬱の時期なれば、無論圓滑に商談は纏るべきも。今俄に持込まんは、相手を強硬にせしむる恐れがあるから、弗々話掛けることに手筈する。

米國領事館へ、證明を取りに遣つた、輸出仕入書も、先づ故障なく、領事のサインを得た。コッピーの方へ發送日附を入れ、何時の通りシールして局へ持たたして遣る。

東京艶子さんから、郵書到着、不相變の英文。邦人

同志の通信に、何も外國語を用ゆる必要はない、が友にも斯く迄自由に、書く人があるかと憶ふと。甚だ頼母しい氣がする、けれど何時も文學上の議論滿載。オスカー、ワイルドの入獄前後の著書が奈何の、イプセン、ユーゴー、の小説は奈何の、モオパスサンや、ゲーテの著作は、彼が懺悔記錄に過ぎないの。ゾラは生粹の寫實派であるが、フローベルは寫實派の流を汲んだ浪曼流である。などゝ文學者の名を擧げて、宛がら俺は文學者であらうがなの言振り。成程其むかし母校で共に學びしをりは、其麼な噂語つた事もあるが其は母校の主義に屈し、自分は努めて調子を合せた計り。生涯に亙つて、なんの文學三昧に世を送る了見があらうぞ、活動を資本として、男子に對抗して居る自分には。三文にも爲らぬ文學論、何程英文が流暢であらうが、讀んで何等の趣味も感じない。一層これよりも、虚榮の奴隷となつて、某顯官に嫁せられた。玉枝さんのヴイル、ド、パリーの、實見記や、三越呉服店の珍柄吹聽の方が、餘程有益になる。嗚呼、自分は何時の間にやら商賣人根性になつた。

税關へ提出する輸入申告書に、館主のサインが濟んで廻送して來た。記載の英、佛、獨貨を、邦貨に換算して、關税金額の豫算を爲す。その仕事がまだ終了せぬ内に、名刺を通じて面會を乞はるゝは、大阪某商店の小賣部主任。得意先であるから麁末にならぬ、直ぐ椅子を離れ應接所に行く。流石に大店の主任だけあつて、小薩張りした厭味のない服裝。歐洲の流行を聞に來たとのこと。

「左樣ですか、巴里の支店から報告も參つてゐますが、未だ讀みません、が。別段たいした變動はなからうと心得ます、外國の流行品が日本へ參りましても其儘使用に堪ゆるものは。消耗品か小道具位のもので、衣裳などになりますと、奈何しても、折衷して仕立上ねば需用に向きませんので、それに又各人の希望や、容姿の如何もありますから、服地などは主として、東京本位の色合や、地質を輸入いたしてゐます。」

「服地で御座いますか、子供用は主に、天鵞絨で。婦

人ものになりますと、夜會杯には矢張り、佛蘭西の絹物が用ゐられますが。日本の羽二重、琥珀織杯は今にすたらん樣で御座います。」

「左樣でせう、色合は今暫らくは、薄小豆、茶、藤色、鼠杯が動かん所でせう。」

「肩掛は季節につれ、薄物に移りますが。今年は精巧な希臘式レースで、草花を編出したものを、輸入しました。」

「色合は、黑色もしくは純白が十人向でございます。形は長方形の物が多く、昨年に較べますと、稍や大きくなつてきました。併し日本では、羽二重に花模樣を染出して、それをファスシチーシヨン風に拵へたものが、昨年より流行り出しましたが。所謂和洋折衷で、當分は持囃されることゝ存じます。概して數年前に比較しますと、輸入額は減少して參りますが。品質は上等ものが、捌ける樣です。洋服用になりますと、奈何しても、オストリツチ、フエーザー物でなければならん樣になつてゐます。」

「香水も昨年頃迄は、ヴアイオレツト全盛で御座いましたが、今では鳥渡下火になりましたので。今年はパフアレペーを取寄せました、十人好のいたします芳香で御座いますから。當分勢力を持續するであらうと存じます。」

用談の未だ了らないのに、三點合圖の電鈴が鳴るのであとは番頭に賴んで、館主の室に行く。」

込入つた商用でもと思つたら、〇〇〇〇〇〇自宅へ來て呉れとの事。

館主が歸宅されてから、事務室では鬼の居ぬ間の洗濯で、そろ〳〵雜談がはじまる。

朝來曇り勝なりし日和も、夕方から降出しさうな空模樣。

一日の業を了へ、館を出でゝホツト一呼吸。獨身の私しには歸宅せしとて、何等の慰藉もないのに。心のそはぬ脚の早さ、折柄後より追越さるゝ、アーム、イン、アームの若夫婦一對。



根底のある女の教育

戸川秋骨

△百まんだらの注文

余は自分が古洋服を着てトボ／＼と往來を歩いて居ると、若い女學生達が華美やかな服裝で、新式の結髮新式のリボンの清らかなは言ふまでもなく、靴袴で少し外輪に裾をけつて意氣昂然として歩いて來るのを見る毎に、必らず自分の意氣地のないのを感じ、同時に吾が日本の後繼者はこんな立派なものであるかと密かに驚駭し且つ愉快の念の湧くのを禁じ得ないのであるこれは女學生諸君に對する御世辭でもなんでもない。實際自分の感ずるまゝを發表したまでゝある。實際余は現時の女學生を以て立派なものと考へて居る。世間では女學生が墮落したとか色々な苦情をならべ、やれ斯樣しろの彼樣しろのと百まんだらの注文をする。併し余は少々位墮落があつても結構だと考へて居る。さう言はれるのは事實女學生諸君の進んで行く狀態を證明して居るのである。昔支那に二十四孝といふのがあると言つて先方が誇つたら、日本には二十四不孝があると云つてやつたといふ話がある。これは實に痛快な話であるが、女學生墮落の考はこの二十四不孝といふと同樣で頗る愉快なる事である。

余が世間と考を異にして居る處は澤山にある。たとへば服裝とか化粧とかの事であるが、余は服裝はなる丈け奇麗にしてもらひたいと思ふ。贅澤と美麗とは異ふだらうが、結局相關連して居るといふなら、已むを得ぬから贅澤となつてもかまはぬ、奇麗にして居て貰ひ度い。男は用があつて急がしいものであるが、女

は世の飾りであるから、美しくして居て貰はなければならぬ。そんな事をして家の經濟が立ち行かぬと云ふのなら初めから學校などに行かぬ方が良い。女拂底の今日職業は餘るほどある。化粧に於ても同樣で、どうか充分に化粧して貰ひ度い。電車のなかなどへお化粧をしない婦人がまるで二十五座の外道然とした風で入つて來られるのには時々恐れ入る事がある、西鶴のものゝ中にある美人を描寫してそれを充分に賞め揚げた上、最後に其女が笑つたら齒がかけて居たので前の美所をまつたく打壞して仕まつたといふのがある。西鶴一流の皮肉な見方であるが、斯樣いふ事は日常見聞する處である。着物の裝飾も、お化粧も立派に出來て居るが手を出して見るとお百のそれの樣だつたなどゝいふのが隨分ある。斯樣いふのは決して余の注文ではない。世間の西まんだらの注文に頓着せず、何んでもどしどしやつたら良からうといふ意をのべた迄である。

△三越

「三越」の婦人の上に及ぼす影響は如何といふ樣な題目が雜誌にあつたかと思ふが、「三越」も至極よろしいあゝいふ所でなるべく、新意匠を案じ出して女に美裝させる事をするが良い。男の丸善、女の三越といふ事があるさうであるが、一寸面白い對照である。男の丸善は隨分新文運の展開に功力があつた。或る人から考へたら害と思はれる事も隨分あつたかも知れぬが、併しそんな考の人には都合のよい事には、如何いふ處が害であつたかは解らぬのである。女の三越の方も同樣風俗の上に多大の影響をなして居るであらう。併し丸善とは反對に惡いと思はれる樣な處が目立つて見える第一覿面に金がかゝるといふ事である。併し金のかゝるのは仕方がない。金などの問題は頭から考に入るべきものでない、金がかゝつて困るなら男たるものが女を左樣いふ方面に向はせない樣にするまでゝある。男にはそれ位の手腕がなくてはならぬ。

△自力家

余は女學生の墮落も賛成する、華美贅澤素より結構である、跳つかへりも宜しい。近頃では西洋文學の影響とやらで自我意識の强いのが稱贊され、女學生などでもさういふ西洋の眞似をするものがあるさうだが、それも面白い只余にも御多分に漏れず一つ注文がある。それは自我を通すなら何事にも飽くまでそれを通して貰ひ度いのである。云ひかへれば自分の事は自分で處理するのである。自分の都合の良い時ばかり自我を出して、都合の惡い時



には他力宗になる、金は父兄から出して貰ふ。する事は自分の好きな樣にする、それでは半分自分で半分他人まかせだ。そんな事では困る。西洋は、社會風俗がさういふ工合に出來て居るからでもあらうが、男でも女でも自分の事は自分でする樣になつて居る。百萬の資産あるものは知らぬが、余の一見した處では、小は衣服の世話から大は一身の處置に至るまで皆自分でやつて行く。西洋の自由結婚なるものが所謂自由結婚でない事は誰も知つて

居る處であるが、それが眞實に自由にやられた場合には即ち父兄と連絡がたえるので全く獨立獨歩して行くが、それで立派にやつて行く、些事ではあるが、余は感心した事がある。ニュウ、ヨークの廣場などゝ來ると、馬車絡繹などの形容ではとても追つかぬ。電車が交錯して通る、馬車が通る、それよりも更に自働車が縱横無盡に不規則に暴れまはる。人の數と言つたら花時の上野にも勝つて居る。其なかを婆さん達がうまくするり〳〵と通りぬけて行く。素より其通行者の多數は婦人で、それ等の濶歩して行くには不思議もないが婆さんに至つては一寸恐れ入つた。さらにこれ等の習慣ではあるが、大西洋上疾風急雨で船の傾斜は三十度位にはなつたかと思はれる時、なほ多くの人々は甲板に出て居たが、其内に七十許の此れも婆さんが杖をついてトボ〳〵と其中を運動して居た。これにも一方ならず感服した。凡て習慣ではあらうが獨立獨歩の習慣で、此の點は吾に於て未だ及ばぬ處がある。余は初めに女學生の大股に濶歩して來るのを嬉しく思つたのはそれがやがて婆さんになつたり此大西洋上疾風急雨の中を運動して居た婆さんの樣になるのかと思つたからである。

若い婦人が近時の西洋の小說や戯曲中の人物殊に其內の女の眞似をするならばそれは至極宜しい。少々家庭に困る事が起つても宜しい。併し眞似るなら形そのみ眞似ないで、其內部生命を眞似なければならぬ。これは女に限らず余は洽ねく新時代の人に望む處でありまた同時に自分自から力めてさうして居る處である。

△高等下女敎育

月に幾何かの月給を取つて家に歸ると子供の世話をする、色々家事の世話をする、余の如きは先づこんなもので、只月給が違ふのみで實に高等下男とでもいふ處である。高等だけが少し自惚れであるが、實際下男としては忠實なもので使つて頗る徳用な男であるから高等の文字を加へても良いかと思ふ。これと同じで女にも高等女中がある、否男の下男たるよりも多くの場

合女は高等女中になつて居る。今日の女子教育が高等の女中をこしらへれば良いとして居る。曰く賢母良妻即ちこれである。余は賢母良妻が惡いとは決して言はない。併しそれは高等下女である事を忘れてはならぬまた高等下女も得がたいものである事をも記憶して居なければならぬ。余は自分を以て高等下男と心得て居る。甚だ意氣地のない話であるが、それは人の考へる程恥辱とは思はない。何故なれば忠實な下男は極めて少ないものであるからそれもまた誇りとするに足ると思ふのである。うまく家事を整理し上手に子供の世話をし、朝から晩まで働いて人に依つては少々位學校に行つて給料も取るこれだけは、即ち女中にでも出來る事で、それだけに就て言へば女中と言つても良い。只高等といふ字のつくのが違ふのみである。且つこれはまた得難いもので、左樣いふ一家の妻君ならばまた誇るに足ると思ふ。これ實に今日の教育の目的として居る處で、また至極結構な事である。

併し人間は高等下男、高等下女で終つて良いものであらうか。如何にもそれで良いかも知れぬが、それだけならば、人間として大して誇る事はないと思ふ。福澤先生は鯱鉾立は藝の内にあらずと言つて、忠孝の如きは誰でも出來る事また仕なければならぬ事で至極宜しい事ではあるが、仁義忠孝の人だと言つてあまり威張れたものではない、丁度鯱鉾立をしてそれを藝と思ふのと同樣だと言はれた。此は實に面白い說である。それで私は賢母良妻も忠孝同樣鯱鉾立ちだと思ふ。賢母良妻といふのはあたりまへの事で、人間ともあらうものがそれ位な藝當で滿足し喜んで居るやうでは困る忠實な下男下女を以て喜んで居るのと同じである。それで喜んで滿足して居る余の如きは例外として、これからの婦人たちはモー少し立派な考を持たなければならぬ。さりとて余は高等女中を惡いといふのではないむしろ普通以上にその務が出來なければならぬといふのであるが、同時にそれ以上の事を求めるのである。斯樣な考から余は今日の女學校のやり方に異議がある下女をこしらへる事を終極の主眼として居るのである



から已を得ぬとするも、實際馬鹿々々しい事である、たとへば此前も言つたが料理とか家政とかいふ事を珍らしさうに、且つ大事さうに學校で敎へて居る事である。そんな事は學校で敎はらなくても一家を持てばどんな馬鹿でも出來る事だ。また敎つた處で自體其ものの性質が實際的のものであるから、イザといふ場合に役に立つ筈がない。何故なればそれは性質上家々場合場合に依つて異るものであるから、到底敎へられるものではない、また敎ふべきものでもない。疊の上の水練よりも更に愚なものである。而もそんな愚な事が學科として立派に存在するのは敎育の大方針の下女をこしらへるといふに在るからである。

それでは女學生はどんな事を考へ、どんな事を學んだら良いのかといふであらう。それは自から別問題で下男下女のする以外に面白い事も高尙な事もあらうではないか。そんな事は下男たる余には解せぬ處であるが、今後の時代の後繼者たる今の若い方々の胸中には解つて居る筈であるが併し强ひて余の考を言へとならばそれは言ぬでもない。が、今茲に夫を述ては永なつて雜誌の迷惑になるであらうから暫く預つて置く。

洋服を着た日本婦人の醜態

紐育　バーロース夫人

私が日本に滯在した日數は僅に百三十餘日に過ぎないから、日本婦人の觀察は或は淺薄であるかも知れぬが然かし在米の婦人と比較して、直ちに感得し得べき多くの點を認むる事ができた。

▲服裝上より見たる美醜の比較

日本婦人は言ふまでもなく皆日本服を着て居る。在米の婦人は一樣に洋服である。嘗て日本で見た日本服の婦人は誠に優美であつた。日本服が優美であるのみでなく其身體のこなし方が實に優美である。畢竟、身體つきと衣服とが能く調和して居るからであらう。然るに米國に來て彼等がその故國の服飾を脫して洋服に着換へた時に、如何なる感想を吾人に與へるか。氣の毒ながら其の風は全く滑稽寧ろ醜に化して了ふ。吾よ、彼等の身體は曲つて居る。其の胴の太くして極めて長きに比し、其足は極めて短く、而して全身を搖りつゝ內股に步るく姿は家鴨の如くである。そして洋服を着た彼等の顏は大きく見え、鼻は殊更に低く感ぜられる。何處も彼處も缺點だらけで、彼等特有の美を悉く失ふてしまつて、醜劣の姿に變ぜしめる。吾等米國婦人にして一度日本を訪ひ、其國風を見、婦人の姿を知る者は、何人も洋裝して居る彼等日本婦人が其特種の美を沒却されて居るのに對して　同情を禁じ得ないであらう。

▲何故洋服を着たがるや

現時日本婦人は日本に居ながら頻りに洋服を着たがる。尤もそれは多く中流以上の婦人であるが、若し經濟上に餘裕があるならば、彼等は喜むで之を着るであらう。私は日本の流行語たる「ハイカラ」といふ語の意味を完全に理解し能はぬけれども、日本婦人の洋裝するのを日本ではハイカラといふ樣に覺えて居る。即ち日本婦人は皆ハイカラの氣風を好むのである。併し其洋裝の點は米國で見る日本婦人よりも、一層滑稽で且つ醜い。何故彼等は其優美なる故國の風を見捨てるのであるか。私は之を不思議の一として居る。

▲ゲイシヤ、ガール

日本ではゲイシヤ、ガールとは曰はぬ。單にゲイシヤと呼んでゐる。私は嘗て藝者をインモーラル、ウイメン（醜業婦）とのみ信じて居た。處が今回實際に就て必らずしも皆さうでない事を認めたのである。私が最も能くゲイシヤ美を認め得たのは紅葉館に於てゞあつた。此處は料理店ではあるが、幾多のゲイシヤが居る。彼等の美は普通の日本美人に比して確に異彩を放つて居る。彼等の或者はダンサー（舞女）である。又或者はシンガー（歌女）である。更に他の者はコーラス（合唱者）である。若しくは其孰れをも一人に備へて居る者も尠くない。要するに彼等は女優として誇るべき藝術を持つて居る。決して醜業婦ではない。彼等の美は優に世界を濶歩し得る者である。（經濟島ジヨーナル所載在米山村生）

何故に十歳の小兒を單身で渡米させたか

某西洋婦人

△校長が桑港へ迎ひにくる

本誌の去年三月號に、「世界同胞會の事業」と云ふ記事が其の會の寫眞と一緒に載せて有りました。其の記事に此の會の本部なる米國加州サンディエゴ(San Diego)のポイントローマ(Point Loma)と云ふ處で經營されて居るラヂャヨガ(Raja Yoga)學校の事が書いて有りました。此の學校は米國に在るけれども、其の性質は世界的で有つて、各國の子供が大勢入學して居ります。日本の子供で始めて此の學校に入學する生徒が單身で三月廿日地洋丸に乘つて渡米の途に就きました。此の生徒は某外人の養子荒井鐵雄と云ふ九年十ケ月の男子で御座います。日本人で此の樣な年の少かん子供が單身で渡米した事は恐らくは是れ迄に有りますまい

扨て如何云ふ譯で親が此の樣な幼い子供を其の樣な遠方の學校へ遣つたのでせうか。此の學校が普通の學校で有つたならなか〳〵此の樣な事はできません。併し今度此の生徒が入學する學校は決して普通ありふれた學校ではありません。前記鐵雄氏はRaja Yoga學校の校長並に世界同胞會會長なるカセリン、チングリ(Katherine Tingley)夫人から此の度特に入學を許されたのですが、鐵雄氏が桑港に着けば其の校長の代理人が迎へに來て居て、其の學校の所在地なるポイント、ローマ(Point Loma)迄伴れて行かれ、而して親切な待遇を受けるので御座います。

△斯る學校は他に類ひなし

此の學校の生徒は各自分の國を愛する樣に敎へられ自國の同胞の爲めに一生を捧げる樣に仕込まれるのです。此の學校の目的は有用な事業に適する敎育を子供に授けるので、且つ其の主義は利己的ではなくて利他的です。

女(その一)

太平洋 第八巻第十號 増刊

五月十日發行

發明界の四十七士

◎國家の文運に最も多く貢獻したる發明家四十七人を當局者專門學者等に相談の上嚴格に選出し◎その人物、性行、逸話、發明品その物を詳細に論評す◎之れ實に明治發明史唯一の側面觀なり

△玉村勇介君の鑛山用索道運搬用自動車、△大野正君の發明、△安中孫次郎君の電氣機械、△高戸彥松君の織物機械△鈴木藤三郎君の諸機械、△山田伊三郎君の輕氣球、△岸敬次郎君のモータル△御木本幸吉君の養殖眞珠、△眞崎照鄉君の製麵機△高峰讓吉君のタカヂャスターゼ、△仁科遠平君の保溫劑と防火劑、△屋井先藏君の乾電池△廣瀨君の卷烟草機械、△山口龜太郎君の絣製造機、△深川文十君の螺旋推進機、△中村隆三君の編網機、△飯田新七君の織物機械、△新田長次郎君の調帶、△茂木重次郎君のペエント△伏田清三郎君の石油發動機、△石川文次郎君の鳴海絞、△渡邊君の測量機械、△御法川直三郎君の生糸機械、△須藤式の精米機、△松居元右衛門君の織物機械△萬木九兵君の義手義足△豐田佐吉君の織物機械、△淺野新八君の織物機械、△寺島昇君の素麵編機、△志賀泰山君の木材防腐劑、△山葉寅楠君の音樂器、△坂根精一君の絹糸紡績機△池谷君の鑄鐵機械△國武喜次郎君の久留米絣織機、△中原作太郎君の乾燥器、△欄木松次郎君の時計ゼンマイ及びペン、△二階堂篤彌君の羽、二重織機△磯崎高三郎君の花莚△名和靖君の昆虫に關するもの、△宮崎林三郎君の繩絢機、△河合林三郎君の板硝子、△井口博士のポンプ、△高橋新作君のヨット△白峰君の軍器鐵舟、△齋藤外市君の織機、△宮原次郎君の汽罐、△鳥潟右一君の無線電信檢波機、(順序不同)

◎聖代の一恨事庶幾くば補ふに足らん◎奇擗奇行を有する發明家の面目誌面に躍如たるべし

洋裝四六二倍判紙數百十餘頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

東京 博文館 本町

女(ろの三)

文章世界 第四卷第六號 增刊

新緑號

洋裝菊判本文二百四十頁
石版數度刷水彩畫二葉
寫眞版口畫六頁
正價金二十錢 郵稅二錢

文學の趣味なき
人には薦めず

五月一日發行

一、古今文學の新研究
萬葉集、源氏物語、枕草紙、西鶴、ゴンクール、フロオベル、イプセン、ツルゲーチフ、ゴーリキイ、チエーホフ、モウパッサン、ズーデルマン、其の他の諸家に對する諸文士の新印象錄也

一、名家の文話詩話

一、記者の文章講話

一、諸家の小品十篇

一、讀者の應募小品十數篇

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

豫告の項目は大體に止む、一々記載せんには餘りに題目の多きに堪へざれば也

博文館

文學博士 姉崎嘲風君著



全一冊洋裝四六判
上製裝幀優美
紙數五百五十頁

近刊

東京日本橋本町三
博文館
振替東京二四〇番

南イタリアの美國、北スコットの山地、野邊には草花を摘み、古寺に美術の花を賞でし日記一篇。その中には湖畔の佛誕會に異國の友を會して佛教を語り、ロマの寺院に聖教會の生命活動を視察し、南歐に北歐にあらゆる種類の交友に接したる跡を傳ふ。天然、美術の記錄、宗教、文明の評論として江湖の一讀を薦む。

女（ゐの七）

女(るの八)

此の學校の教師は世界各國から選任されて居つて、中には英國の大學から出た人も有り、美術、音樂、數學、科學、又養蠶やヴァイオリン製造の老練家などが居ります。此の教師の中には財產家も有れば、又無財產の人も有ります。併し皆な厚意で教鞭を執つて居るので、一錢たりとも報酬を受ける者はありません。教師のみならず、會長を初め下々に至る迄、會には澤山の人が居るけれ共、俸給を少しでも受ける者は無いのです。教師は皆な其の事業を好んでするので、其の任に選ばれた人は之を大なる名譽と思つて居ります。特に子供の教育を非常に神聖な事業として居ります。それ故其れに選ばるゝ教師達は道德的品性の高い人ばかりで御座います。教師と生徒との關係は昔の日本の師弟の情誼の厚かつた時代によく似て居ります。即ち教師は生徒を愛し、生徒は教師を敬愛致します。生徒は十人位宛一團に成つて花木の中に有る美しい小さい家に住まつて居つて、教師は常に其の生徒と寢食を共にして居ります。Raja Yoga と云ふ梵語は、文字通りに云へば「大結合」と云ふ意味で有つて、肉體、智、靈の官能を凡て完全に平均せしむる教育の目的を表はして居るので有ります。生徒は各個人的に教育され、高尙なる品性を造る事に最も注意を拂ひます。

△ラジヤヨガ教育の內容

此の會の教は耶蘇教や其他の宗教の流を酌むもので は無くて、永久の哲學的眞理に基ゐた教で御座います人間は善惡の二性質を備へて居る事は子供でも知つて居ります。それ故學校では、若し善性に從へば健康、幸福、堅固の心、潔白で强健の體を得、若し惡性に從へば不健康、惡性情、强情、狂迷の心、惡しき品性を得て、自分のみならず他人にも不幸を及ぼすと云ふ事を最初から教へて居ります。孔子の所謂「性は善なり」の教の如く、會の教も矢張此の神の樣な性質を發揮させるので、此の良心こそ眞の自我で、情慾や驕黠の有る肉體は眞の自我ではなく奴隷と看做す可きものだと云ふ事を能く教へて居ります。良心が代表して居る此

の眞の自我の中に大なる力が潜伏して居るので、Raja Yoga 敎育は此の潜伏して居る力を啓發するのです、若し子供を只小さい動物と看做し、或は自ら左樣思はせる樣に敎へられたならば、如何して其の下等の性質を高めてそれを支配する事が出來ませうか。誰でも椅子の上に坐つて居ながら椅子を持ち上げる事は出來ない道理と同じ樣に、人が下等の性を向上せしむるには、自分は夫れ以上に超越して居ると云ふ事を實際に悟り、又は夫れに打ち勝つて、夫れから後之れに應じて行ひをしなければなりません。ラジャヨガ學校の如き精神的敎育を施せば、生徒は自分で心身を共に支配する事を覺えます。即ち彼等は眞の禪學を學ぶのです。



△學校所在地の景況

夫れ故に凡ての學問が此の學校の生徒には易くなり一番年少の子供でも外國語を二つ或は三つを話し、年長の生徒は七つ或は八つ又十一も話します。而して凡べての學課に於て此の學校の生徒は他の學校の生徒よりも遙に進歩して居ります。誰でも皆なポイントローマへ行つて見る人は、其所の子供が發達して居るのには非常に驚きます。慥に遠からず世界中の敎育家が此の學校に注目する樣になるのは疑ひ有りません。此の學校では子供の敎育に關する凡ての問題が解決されて居り、其の敎育法が立派に成功して居ると云ふ事は其の著しい結果に依つて明かで有ります。

世界同胞會はポイントローマで約十二方哩の土地を有つて居つて、其處には種々の模範的工業が經營されて居ります。例へばヴアイオリン製造、美術織物業、養蠶、養林、製本、養蜜など色々のものが有ります。而して生徒は學業のみならず種々の有用な仕事を學びます。そして十年程前に此の會が此の土地を買つた時に、會長チングリ（Tingley）夫人は、此の敷地內で鳥類を捕へてはならぬと云ふ命令を發しました。夫れ故に加州のあらゆる種類の鳴く鳥が此處へ來て住み、安心して巣を造り、鳥はラジヤヨガ學校の生徒は自分に害を加へないと云ふ事を知つて居るから、能く人に馴れて居ります。ポイントローマの敷地內には世界の諸國から輸入した花や木が澤山植ゑて有つて、何でも能く成長します。實際此の學校は他に例のない處で有るから、日本の敎育家も此處へ行つて見て、此の驚くべき効果を奏する敎育法を實見されたらよいかと思ひます。此の稿を書き了つた時に、鐵雄氏は四月七日無事にポイント、ローマへ着いたと云ふ電報が其の會から來ました。同氏は頗る健康で喜んで居るさうで御座います。



子供を育てる方法に就ての研究會



婦人記者

女子大學家庭部例會は何ういふ會であるかと申しますに、つまり同校の卒業生即ち櫻楓會員中の家庭部に屬する會員（既に家庭を持つた奥樣を初め、將來家庭に入るべき人達、家庭教師をして居る人、家政學を研究して居る人など）が毎月一回會合して、婦人に關する時事問題とか、家庭の日常問題とかいふ卑近な必要問題を捉へて通俗的に研究して居られる集まりなので御座います。研究する問題は前月から定めて置くことゝし、會のある五日前迄に會員はその答案を本部に送り、本部に於ける主任がそれを一つのものに纏めて會の時に發表されるといふ順序なさうですが、試に今迄に研究された問題の主なるものを擧げて見ますれば、

▲衛生に就いて
▲衣服の流行に對する吾人の態度
▲下女の使用に就いて
▲家庭の讀ものに就いて
▲贈答品に就いて
▲家庭の儀式及び風習について

などでありますが、或は暑中休暇を利用して、有志の人達がミシンの會を開き、子供洋服の仕立方を研究された事もあるさうです。

で、私が傍聽いたしましたのは、三月の例會で御座いますが、場所は學校の食堂で清麗とお掃除が行届い

て、まことに心持のよい室に、眞白いテーブルを圍んで腰かけられたは、若いお母様や、奥様やお袴姿の在校の方達など、入り混りで、すべて卅人許りの婦人が御座いましたらうが、例よりも出席者が少いとの事でした、當日の問題は育兒に就いてといふので、初生兒（生後一週間）及び乳兒期（一歳より滿二歳）に於ける養育上の研究が御座いました。主任の宮崎氏から答案を發表されると會員はそれに就いて互に意見を述べ經驗をかたり、さて是非を批評するといふ風でありましたがとに角其御話は一般の人の參考にもなることと存じますから、次に其大略を記すことにいたします。

○初生兒養育上の注意

▲産湯及び入浴

1. 温度　攝氏卅八九度とす。大人の手を入れて丁度よい位。或る説には卅二三度とありますけれども、日本の家屋では湯が冷めやすいから温くては風を冒かせる要があります、入浴させる時に湯呑に一杯位の鹽を入れると湯が冷め難くてよいとの事で御座いますが、それは生理上からいつても、衛生上から申しても大變よい事なさうです。

2. 度數　一日一回とす。一日一回以上に及ぶのは普通よろしくないとしてあるけれども早産の子供には二回づゝつかはせる必要があるとの事にて、實際早生兒を育てられた某氏の經驗談がありました。

3. 時間　十分乃至十五分位が適當ならむ。赤坊を沐浴せしむる時は、盥の湯の上に布を敷いて、其上でつかはせた方が宜しい。そして目とか耳とか鼻とか口とかいふ處からはことに黴菌が入り易いものであるから赤坊の顏は全然別の湯か、もしくは硼酸水などで洗つてやるやうにしなければなりません。沐浴などは軟きタオル又はフランネルやうのものにてよく拭ひ、ことにタヾレるやうな場所は最もよく乾すやうに注意して、亞鉛化澱粉など

を塗つて置くが宜しい。しかしこの亞鉛化澱粉の中毒といふことがあるから注意しなければならないとて、さる會員の語られた經驗談は、病院でお產をして、入院中亞鉛化澱粉をつけて居つたから、退院の後も病院から從いて來た看護婦がつけて呉れて居つた。處がそれを塗つた部分がだん／＼おできのやうになり遂には一皮むけて了つて赤肌をあらはすやうになつたから、驚いて醫者に診せると、澱粉を餘り多く塗り過ぎたためとわかつたとの事で御座いました、硼酸水なども强いと赤坊の弱い皮膚を傷めるから、五十倍以上に薄めたものがよいさうで御座います。

▲產衣及び襁褓

○襦袢　は糊のつかぬ軟いもので、成る丈け縫目少に仕立て、且つ裏返しに着せた方が宜しい。そして產衣の丈は成べく長くして置いて寢せた時に折り返すことが出來るやうでなければいけません。ある醫者の說には一尺位長くして置いて、手足が動くやうにならば直ぐ惜まずに切り捨てなければならぬ。上げをするのもよくないとの事です、西洋人などは丁度倍丈け長くこしらへ、あとでは中程から切つて二つに用ゐられるやうにするさうで御座います。

○つけ紐　一二週間の內は後に一筋つけたのもよいがだん／＼手足が動き出すと前が擴がるから合羽の紐のやうにつけると都合がよいとの御話。なほ赤坊の着物は洋服よりも和服の方がよいとの說で御座います。そして會員の內から、佐々の奧樣とやらはお子樣方に決して綿の入つたものを御着せにならない。洗濯が出來て溫いからとてネルの單衣を幾枚も重ねて用ゐられるといふ事ですが、これは何ういふものでせうとのお話が出まして、よしあしの論が御座いましたが、結局單衣を重ねるのはギゴチなくて少くとも赤坊には不適當であらうといふことになりました。

○襁褓　極柔い木綿を矢張り普通用ゐて居るやうに作つたのが一番よいといふ皆樣の御經驗。三角のが

よいといふ人もあれど實際試して見ると工合がわるいさうです。赤坊が生れて二三日間は、俗にカニババといふものが出ますがこのカニババは洗つてもなかなか落ちぬもの故、ガーゼとか脱脂綿とかいふものを用ゐてとる方がよい。そして襁褓を清潔にするといふことはいふ迄もないことなれど、これが濕つて居つたゝめに成長の後リウマチスなどを起すことは珍しくないとの事故、くれぐれも御注意ありたしとの御話で御座います。


稚児の領

▲寢床につきて

成るべく暖にすることが必要であります。毛布は輕いものを撰んで上掩をかけて用ふべきこと寢かす時には一方に偏らないやうに注意しなければなりません、片寢は頭の格好を醜くするばかりでなく、内臓にも關係があるさうです、枕は羽蒲團が一番よいやうなれど病院などでは脱脂綿を用ゐて居るやうで御座います。

敷ぶとんは大人のでもさうだけれど、赤坊のはことに縁の綿を厚くして身體がトップリ中に入るやうでなければいけません。寢臺を用ゐるのが一番よいのですけれど、なか〳〵それは及ばぬ事だから行李に入れるとよいと西洋人から敎へられて試して見ましたが成程よいものですと、ある方が御話になりました。そして袖なしの綿を入れたものを作らへてそれにくるんで置くといふ方もあり、又蒲團の一角をとつたもので三方からつゝむやうにして置くといふ方もありました。

抱き寢といふことは申迄もなくわるいことで御座います。

▲室内の注意

一二週間はことに注意して餘り强い光線の射す處へ置かぬやうにしなければ、眼を損ふに至る。空氣の流通をよくすることは勿論なれど直接に風の入るやうな處はよくない、間接に換氣が出來るやうでなければいけません。溫度は冬は七十度位に保つたならばよからうとの事で御座います。

▲授乳及び臍のこと

、、マクリ　母乳を直ぐ飮ませることが出來ればマクリを用ゐる必要はないとのこと、つまりマクリといふものは下劑であるが、出産直ぐの母乳には其成分が含まれて居るさうで御座います。また牛乳に砂糖を加へて用ゐても濟むと申ます。

、乳房　乳は早く飮ませるやうにしなければ分秘が止まるものですから、房乳の小さい人は其儘にして置かず、わざと引き出しても吸はせるやうにしなければなりません。そして授乳の前後に於て乳房や赤坊の口中を硼酸水に浸した布などで拭ふて淸潔に保つことが必要で御座います。

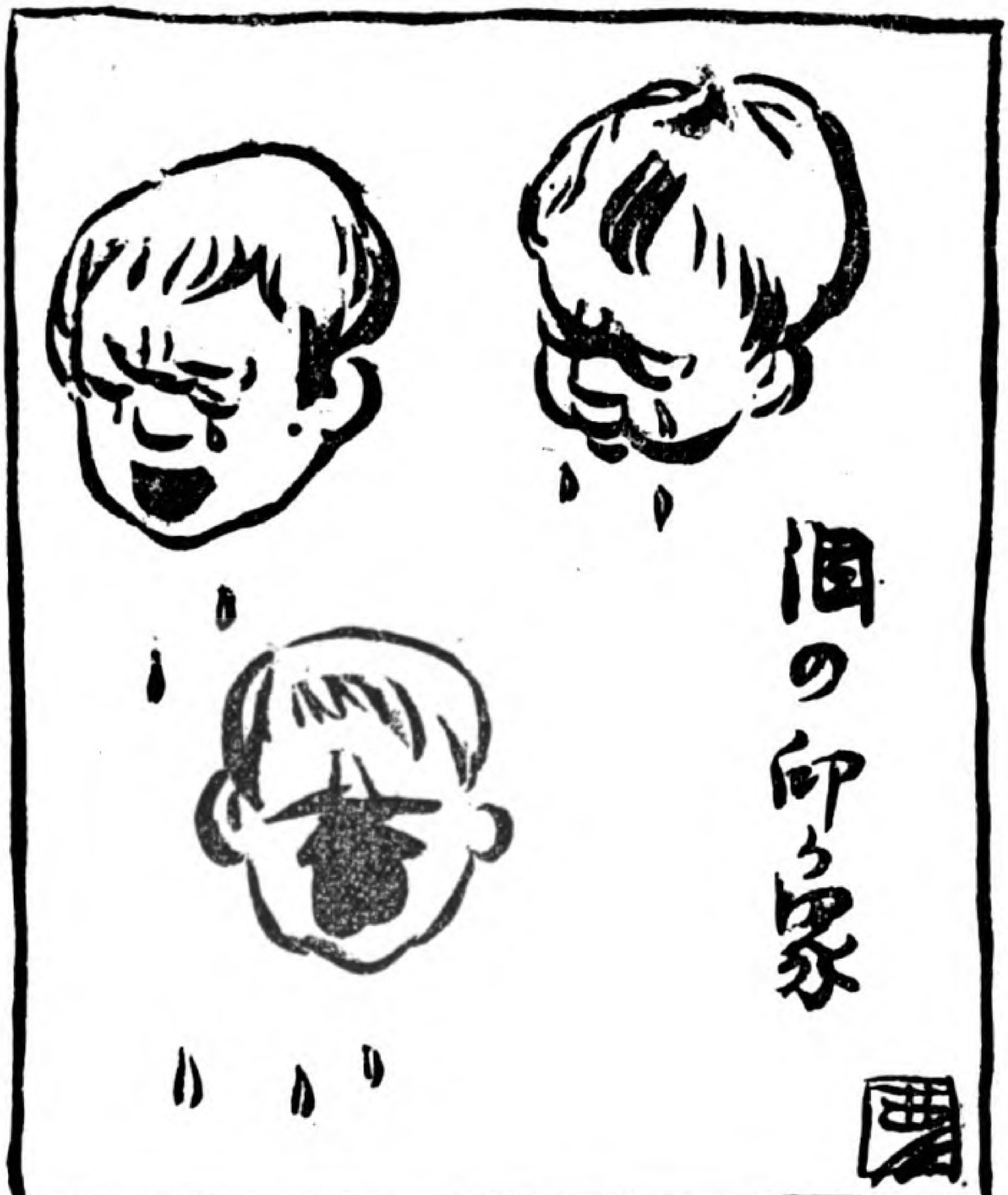
、臍は一週間或は十日位で大抵は落ちるものでありますが、其あとにヨードホルムなどをつけてやらなければ黴菌が侵して多く腹膜炎などを患ふことがあるから注意ありたしとのこと。

▲産婆と醫者と看護婦

これに就いては種々の說やら經驗談やらが出ましたが、要するに入院してお產をするのが一番安全であります。けれどもそれに及ばないまでも一週間位看護婦を雇ふことが出來れば幸で御座います。產婆は信用すべき產科醫に賴んで選んで貰つた方が確かにして、また萬一間違の起つた時にも都合がよいとの御話。

○乳兒養育上の注意

普通乳兒期といへば生後一年間のことでありますが、こゝでは必ずしも一年間とは限らないで、一年から二年前後の頃に涉つて調べて見たので御座います。とにかく此時分は發達の最も早い時でありますから、よく〳〵注意しなければなりません。



○體重　は一週間おき位にはかつた方がよろしう御座います。生れたばかりの赤坊は女の子六百五十目位、男の子七百目から八百五十目位のもので、六ケ月目には之に二倍し、十二ケ月目には三倍するのが普通であるから、これよりも少いやうな場合には發達不十分か心身に異狀あるかであるから醫者の診察を乞ふ必要がある。

○入浴　これは好む習慣をつけなければなりません。小兒沐浴の時に最も注意しなければならぬことは、風を冒かせないやうに

することでありますが、寢て起きに湯をつかはせるといふことも亦甚だ宜しくないのであります、申すまでもなく睡眠の時は身體の工合が餘程常態と異つて居るからのことです。これに就いてさる方が赤坊の寢て起きに沐浴をおさせになつた處が眞白になつて了つた。摩擦して漸くなほつたといふ御話をなさいました。つまり血管が收縮するので御座いませうが、注意すべきことであります。頭や耳の垢の落ちぬものはオレーフ油をつけて置いて洗ふとよくとれる。汚いものゝ五官から入らないやうに注意すべきは前にも申した通りでありますが從つて湯屋に連れてゆくことはまことに危險であります。

○睡眠＝は十分にとらせなければならぬが、かの搖籃に入れたり、強くゆすぶつたりして眠らせるのは甚だよくないのです。搖ぶられると實際は眠くないのに神經が痲痺してつい睡るものなさうで御座います。たゞ肩や背を極輕くなでゝやる位にとゞめた方がよろしい。ある會員は背骨の筋をズーッと撫で下してやるとよく眠るやうだといはれました。そして睡眠中は皮膚の作用が弱くなつて居るものでありますから、一層暖にしてやることを忘れてはなりません。

○授乳につきて＝授乳の時間は一定しなければならぬ事申すまでもありません、大抵二時間半おき或は三時間おき位に、一日七八回或は六回位與へるのが適度でありませう、二時間内に與へると先きに飲んだものが未だ消化しないで居るさうです。そして味覺の發達しない間に牛乳を飲み習はせることが必要であります、牛乳をいやがるのは味のみならず乳首が違ふためな事もあるが、兎に角いづれにしても早く與へつける方がよろしいのです。そして乳は成るべく夜飲ませぬ習慣をつけた方が乳ばなれの上にも大變よいとの御話で御座います。

▲生齒期に於ける注意

生齒期は生兒の身體に大變々化を來す時であります。發熱するのは通常であるが、事によると腦膜炎

などを起し易いから注意しなければなりません。歯の生へる時には歯齦が痒いので、子供は何かものをシャブリたがるものですが、それは妨げないで相當のものを與へた方が宜しう御座います。かのゴム人形などもよいが、別にゴムのおしやぶりといふものが出來て居ります。それは一寸乳首のやうな形で、子供が持つために輪がついて居り、隨分堅いものであるけれども木や石のやうな堅さではない



よき嫁とよき姑の話圖

から非常に都合がよいとの御話。西洋小間物店にあるさうで御座います。

▲離乳期に於ける注意

一年と二ケ月目ですつかり離乳が出來たといふ方もあれば、御年寄が八ケ間敷仰しやるので、つい長くなつて居るといふ方もありましたが、晝丈けは離れても夜は矢張り縋つて困るといはれる方が多いやうでした。とにかく一年も經つたならば乳以外少しづゝ他の食物

を與へるやうにするがよろしい。それにはオートミル、カルヤキ、玉子等のやうなものがよく、大人と一緒に食事をさせるのは最もよくないとのことで御座いました。そして食物の好き嫌ひは遺傳らしいといふ御話が出て、いろ〳〵說がありましたが、ある方は實際食物と心身とは何んな關係をもつて居つて、何れ丈け影響を及ぼして居るものであるかを研究なさるため、目下寮生に就いて統計をとつてお出でになるとの事で御座いました。或は其の結果で豪傑とか賢婦人とかを自由につくられるやうになるかも知れませぬ。

▲精神上の發達は如何

此時代は身體の發育につれて、精神上の發育にも、見るべきものがあるのでありますが、まづ感覺の發達について會員の一人が御經驗なされた處は次のやうなものであつたと申ます。

●視覺　三週間位にして光りを認め、四ヶ月目になつて庭の木に鳥の飛び來るを見付け、また家の内外を見別ける。五ヶ月目に色の識別が出來、六七ヶ月目で父母と他人との顏を見分け、特に母を見てはあまへるが如き聲を出して抱かれむことを望む。

●味覺　二ヶ月位までは母乳と牛乳の區別を知らぬやうなり。

●聽覺　三週間目位から音に耳を立てるの氣味あり。廿ヶ月位になると唱歌などをきゝわけ、いくらか曲のついた歌をうたふことを好む。

●觸覺　も以上の感覺と相前後して發達するやうであるが、一番おそいのは、

●味覺　のやうである。

なほ快不快は一ヶ月位にしてわかるらしく五十日目に湯をつかはせた時には、手を擴げて快をあらはし、七十日目に笑ふ。

右はもとよりある會員の經驗によるものでありますから、之れを以て一般を推す理には參りますまいと思ひます。とにかくこの間の注意としては、出來る丈け自由にさせて束縛をしないことであります。してまた

愛に溺れずして善習を養ふことは最も必要であるといふ御話で御座いました。

以上で今回集つた答案の發表といふのは濟み、主任から次回の問題として、

一、幼兒期(六歳迄)に於ける養育に就いて

1. 身體發達

2. 精神發育の狀況

3. 教導に就いての注意

二、少年期(十六歳迄)に於ける子女教育に就いて、

を御報告になり、さて茶菓が運ばれて雜談に移つたので御座いますが、いつの會でもこの本問題が濟んだあとの御話がなか〳〵興深く、また有益なものとなつて居るさうであります。それは廢物利用とか、洗濯裁縫の仕方とか、其折々の行事に就いてとか、新發明品の紹介及び試用の結果とか、新刊書の紹介批評とか、すべて會員の考案、觀察、經驗及び質問等は何でも此時に語り合はれると申ます。此日も隨分いろ〳〵と面白い御話が出たやうで御座いましたが、其中で毛布の洗ひ方についての御話と、端午の節句の祝ひ方に就いての御話とを左に御紹介いたします。



▲毛布の洗濯法＝毛布の洗濯は普通洗濯屋に出さなければならぬものゝやうに考へられて居りますけれども、過酸化ソーダを用ふれば、自宅でも容易に洗濯が出來るさうです。その方法は盥一ぱいの溫湯に過酸化ソーダを一スプーン程とかし、それに毛布を入れてゴチャ／＼攪きまはした後、盥の水に酢又は硫酸の少量を加へたものゝ中に浸し、さて水にてよくよく濯げば苦もなく奇麗になるのであります。

▲端午の節句の祝ひ方　三寶に熨斗を載せて床の間に備へ、其兩側に瓶子を置き、旗などはすべて適宜に飾ります。で、當日は祝はれる男の子を正座に家族打揃ひ座敷に並んで坐るのでありますが、皆々の座が定まつた處で、床の間から熨斗を下し、座の中央に持ち出してお辭儀するのです。そして再びそれをもとの場所に納めたならば、お盃を初めるのでありますが、まづ當人の男の子が飲んでから兩親に獻じ、兩親からまた男の子に返し、男の子から兄弟にさし、兄弟からまた男の子に返すといふ順序で廻します、そしてお盃が濟んだならば粽を持ち出して賞味し、さて次に當日の御馳走を食べるので御座います。これは會員某氏が小笠原先生に就いて聞かれたもの故、本式の祝ひ方なのでありませう。



新綠





英國藝術家リビー孃を訪ふ

婦人記者

リビー孃はロンドン大學卒業生の文學士で、今はローヤル、アカデミーに入つて繪畫の研究をして居られる方で御座います。少し身體の工合が惡いので昨年の春頃保養かた〴〵日本に來遊せられたのですが去月十二日に歸國の途に向はれました。日本に留まられたのは僅か一年に過ぎませんけれども、實に能く日本を見て居られます。そして非常に謙遜で柔和な方で、一度孃に接したものは、誰でも其床しさに引きつけられます、記者の御訪問いたしましたのは丁度御出發の前日で非常に御多忙な處で御座いました。

▲日本に趣味を有ちし動機

日露戰爭の起る前迄、西洋人は日本の文明を以て歐米の模倣に過ぎぬものと考へて居りました。しかし日露戰爭に於て日本が勝利を占むるに及び、これは單に模倣などいふ借りものでは到底出來ないことである、技術以外何かそこに理由がなくてはならぬことゝ誰でもが思ふやうになりました。丁度其時に私はかの小泉八雲氏のこゝろといふ書物を讀みまして、大層得る處が御座いました。私はそれまで主に希臘文學を研究して居りましたが、之を讀んで始めて日本の思想に接し少からず興味を感じましたので、それから八雲氏の著書はすべて申すに及ばず、其他日本に關する書物を出來る丈け調べて見まして、それでます〳〵日本の愛すべき點を認めたので御座いますが、折柄幸か不幸か

私は病氣にかゝつて保養を要することゝなりましたから、それをよい機會に日頃慕ふて居た日本の實際に接して見やうと思ひ立つて遊びに參つたやうな次第で御座います。

▲總て樂しい記憶ばかり

私は成る丈け眞の日本を知らうと思ひましたから宿なども決して西洋風のホテルにはとまりませんで、いつも日本風の旅館に泊り、（京都では東福寺に泊つて居りました）食物も寢具もすつかり日本風にして居りますが、何處へ參つても親切な取り扱ひ



を受けて、凡て樂しい記憶ばかりで御座います。私が昨年日本に參る船の中で近づきになつた西洋人に、日本に就いての私の考を話しました時に、其人は『それは想像に過ぎない、實際を見れば夢がさめるでせう』といふやうな事を申して居りましたそして此間久しぶりで其人に逢ひますと、其人は直ぐ『貴孃の日本に就いての感情はすつかり變つてしまつたでせう』ときくのですそれで私は『イヽエ私は考へて居りました事を實際に見聞して自分の考の誤つて居らなかつた事を確めて、

愈々深く日本が好きになりました—と答へました處、其人は大層不思議がつて居りました。一體西洋人は日本の外觀にのみ注目するから日本を誤るので御座います。

▲泉岳寺に於ける感懷

私が日本に參つて方々見て歩きました中で何ともいはれぬ感じを與へられた處が三ケ所あります。それは宮城をめぐつて居る濠端と九段の招魂社と、も一つは四十七士の眠つて居る泉岳寺とであります。私は忠臣藏の中で一番赤垣源藏が好きで御座いますが、これは私の感情ばかりではないと見えます、先日友人と共に泉岳寺に參りました時、どの石碑を見てもかけて居りますから、これは一體何うした譯かとたづねますと田舍から出て來た參詣者などが義士を慕ふの餘り、其の石碑をうち碎いてその碎片を持ち歸るのだときゝました。で、あたりを見廻して居りますと、特別に澤山かけて居る石碑が目に入りましたから、もしや赤垣源藏の墓ではないかと思ひまして、友人に碑面を見てもらひますと、果してさうで御座いました。それにしても、もしも大石良雄や力の墓にかこひがありませんでしたならば、少しも殘らずに打碎かれて持ち去られることで御座いませうと思ひました。

▲藝術としての芝居と能樂

芝居は舊劇の方は歌舞伎座で忠臣藏、新劇の方は本鄕座で不如歸を見ましたが、新劇の方は成程同情をひくやうに出來ては居りますけれど、何うも實がないやうに感ぜられます、藝術といふ點から申しても舊劇の方に價値があるやうに思はれます。一體西洋の芝居は單に娛樂といふことが目的になつて居りますけれど、日本のは意味——精神——を表はすといふことに重きを置いて居り、從つて敎訓的で御座います、それに西洋の芝居は幾何か敎育を受けた上流社會の人でなければ見られないやうな風ですが、日本のは一字を知らぬ下流社會の人が見てもよく其意味を解することが出

來、しかもたゞ面白いといふ許りではなく、それによつて必ず何かを與へられて歸ります。昔希臘では敎訓的に芝居を演じ、下等の人民には切符を與へて觀せるやうにして居りましたが、これらの點は一寸日本と希臘と似通ふて居る樣に思はれます。

能樂は美術の參考として、わざ〳〵出立の日を延ばして、九段の能樂堂へ觀に參りましたのでしたが、あれはアートの中の最上なものだらうと思ます。價値は實際と遠かつて居るところにあるのでせう、まことに上品なもので御座います。併しそれと同時に觀者の階級といふものが限られて居るやうです。よほど學問でもあつて其趣味を解することの出來る人でなければ面白味はないだらうと思はれます、實際は何ういふものでせうか。



▲日本畫と西洋畫

美術上の觀察、と申しても西洋のものと日本のものとは全然違つて居るのですから、強ち比較していふべきものではなからうと思ひますが、一寸繪畫に就いて申して見ますならば、西洋の方は技巧といふことに餘り力を用ゐ過ぎて居る傾きがあります。それ故隨分詳細の點に渉つて實際を寫して居るので御座い

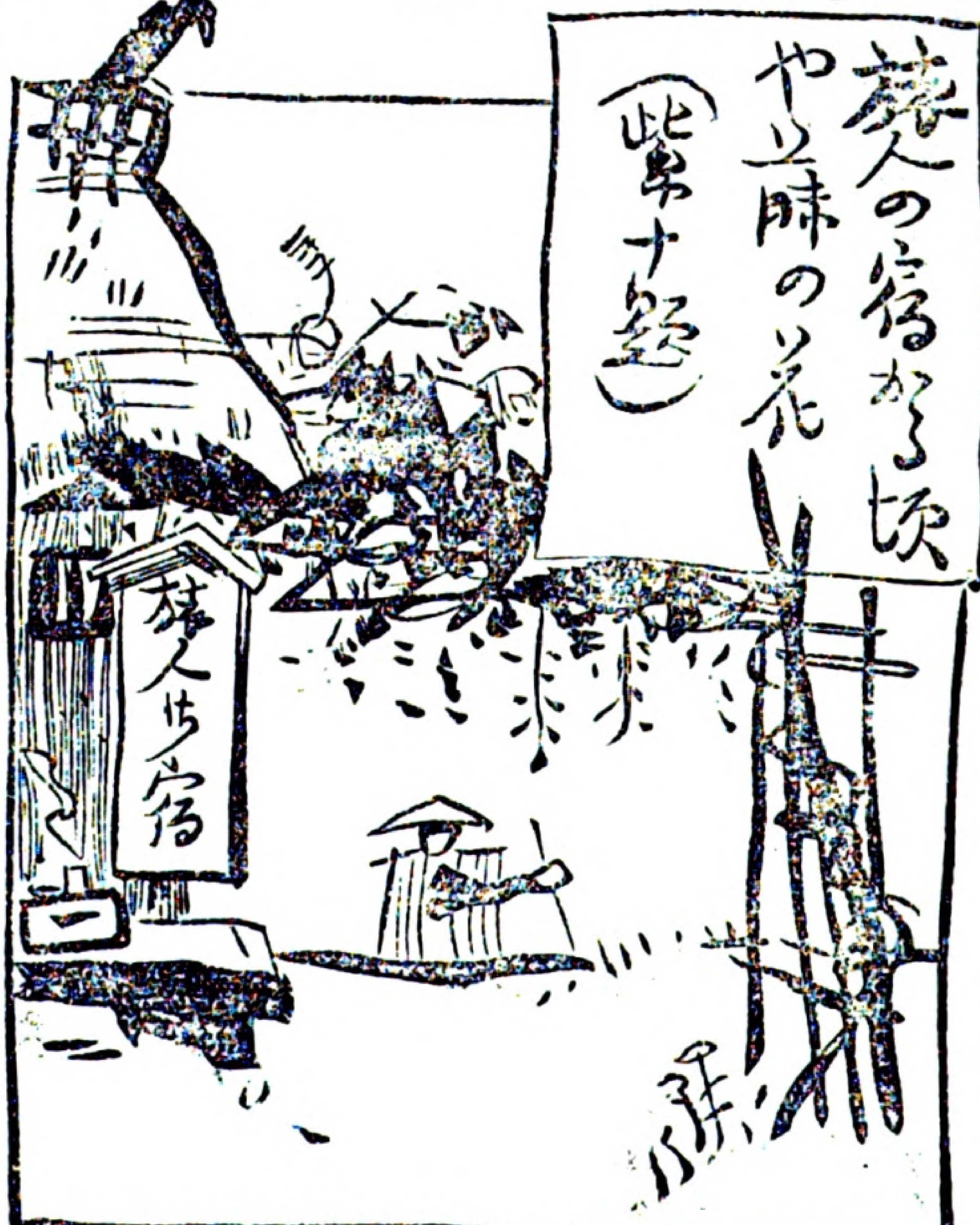
ますけれども、何方かといへば詩趣といふものに乏しい樣です、之れに反して日本の繪は大體に目をつけて技よりもまづ精神をあらはすことにつとめて居りますから、たゞ繪畫といふ外に氣品といふものが御座います。例へば西洋人は花にしても草花の如き小さい美を好み、日本人は梅とか櫻とかいふ比較的大きいものゝ趣を愛するといふ風であります。要するに日本の氣候景色が日本人の趣味を生み、西洋の風土が西洋人の好尚をつくつて居り、これが東西の美術に影響を及ぼすのでありますが全體から申ますと、日本人は西洋人よりも美術的でありまた詩的であるといふことが出來るだらうと思ひます。

▲小泉八雲氏をしのぶ

私は日本に參つて嬉しい事、面白い事、樂しい事のかづ／＼に遭遇いたしましたが、其中で特に趣味ふかき紀念となるべき一事があります。それは他でもない小泉八雲氏の墓參りをいたし其遺族を訪ねた事で御座います日本といふものを私に紹介して下すつたのは小泉さんで御座いますから、かねて日本に參つたらばまづ第一に小泉さんの墓參をいたし度いと考へて居りました、しかしいろ／＼と都合あつて早速思ひにまかせる譯に參りませんでしたが、この一月になつて漸く雜司ケ谷の墓地を訪づれることが出來ました、携へて參つたいさゝかの花を手向け無言の墓石に對して暫く故人を思ひしのんで居りましたが、序に故人の著書中ですでに御ちかづきになつて居ります一雄さん初め可愛らしい子供達にも逢ひたく思ひましたから其足で大久保のお宅に訪ねて參りました、子供達は生憎他に招かれて不在との事にいさゝか失望しながら未亡人といろ／＼話して居りますと、幸にも長子の一雄さん丈け先きに歸つて來られました。一雄さんは鳥を飼つて居るので、それを見るために遊びを半にして歸つて來られたのなさうですが、さすがにお父さんの子、實に優しい心根を持つて居られます。

▲お馴染の一雄さん

一雄さんが戸を開けて、私共の居る室内に入つて來られた時、私はきかぬにもうそれとわかりましたので思はず『一雄さん』と呼んで皆に驚かれましたが、私はこの家や家族の人達にはもう前からお馴染であるやうな氣がいたしまして少しも初めてといふ感じがありませんでした。書齋の前に一つの櫻の木がありましたから、未亡人に『これは小泉さんが死亡なられる前に一輪咲いたといふ其の櫻の木ですか』とたづねました處、矢張さうでした、そして丁度其處に一人の園丁が居りましたので、私は直ぐ、源二郎といつて小泉さんと宗教について議論をしたといふ園丁は此人だらうと思ひましたから、これも夫人に質して見ましたところ、夫人は『それは實際ではありません、小泉の想像なのでせう』と笑つて居られました。其他萬兵衞といふ執事が居りましたかとか、何の部屋には恁ういふ額がかかつて居りますかとか、誰々の寫眞が飾つてありますかなど〻、私が書物の上で知つた事柄について一々夫人と問答いたしたので御座います。



とにかく私は小泉さんの墓參をして、なほ遺族の方にまで御目にかゝる事が出來ましたことを非常に滿足に思ひます。英國に歸つてもいつまでも忘られない紀念となることでせう。

▲仇討と切腹は賛成

日本人の最も尊ぶべき處は申すまでもなく大和魂のあることでせうが、殊に私の最も慕ふところは、日本人が君國のために獻身をする、犠牲になるといふつまり大きいものに奉仕するといふ點であります、西洋人は自由とか獨立とかいふことを除りにいひ過ぎて居ると思ひます。もとより獨立自由といふ事は人間にとつて尊ぶべきものであるには相違ありません、それでもその自由の眞意義といふものは決して我儘勝手に振舞ふことではない、寧ろ高い大きいものに仕へるといふ處に得られるものだと思ひます。近頃歐洲の文明は非常に物質的に傾き極端な個人主義に流れて參りましたが人々はそれがために凡てに不滿を感ずることゝなり、却つて心の自由を失うて居る樣な有樣で御座います。

あの義士の義理がたい處は、實に日本人の美點であると思ひます。大概の人は復讐といふ事を嫌ひますけれども日本に於ける仇討は憎惡といふことが原因ではなく、畢竟愛といふことが土臺になつて居ります。即ち君に忠義を盡す、主人を愛するといふ極めて美しい心から起るのです。また日本武士の切腹とか自殺とかいふ事を絶對にわるいとして非難する人が多くありますけれども、私の考ではある目的のためならば、決して差支ないばかりではなく、寧ろ立派な意義を有して居ると思つて居ます。言ひ換へれば、日本人は死んでも働いて居るのです。忠臣藏に於ける勘平の如きも身は死んだけれども魂は義士の中に入つて働いて居ります。近くは日露戰爭に於ても、戰死者の魂が生きて働いたといふ事は日本を勝たしめた原因の一つと申して宜しいでせう。かの旅順の陷落いたしました時に乃木大將はまづ第一に戰死者の靈に謝するといはれたさうですが、實に尤もな事と存じます。

▲家庭に於ける日本婦人

日本婦人の外國婦人にまさつて居る點もまた人に仕へるといふ心にあると思ひます。西洋の婦人は少し學

間でもして家庭に入りますと、たゞもう自分の樂しみを得るといふことにのみ氣を取られて、舞踏だとか、茶話會だとかいふ事にばかり心を用ゐて居る有樣ですが、日本婦人はまづ親とか夫とか子供とかの爲を考へ自分の事はいつでも後まはしにするといふ風です。この、他のために捧げるといふ心は實に何よりも尊い日本婦人の美點であると思ひます。而かもこのやうに服從を旨として居るならば、日本婦人には權力といふものがないかと申しますに、決してさうでない、少くとも私の見た家庭の婦人方はいづれもみな相當の威嚴をたもつて居つて立派に家庭を治めて居られます。

▲良人の邪魔にならぬ妻

そして日本婦人は常には實に溫順で優美で虛弱なやうであるけれども、いざといふ場合に於ては非常に強くなります。日本の男子がよく身命を惜しますに君國のために盡すといふに就いて感ずることは、女が少しも男の行爲を妨げない、のみならず却つてそれを勵まして居るといふことで御座います。忠臣藏に於て見るも、其中にあらはれて來る女性はいづれも夫なり子供なりの妨げとなることなく、かの赤垣源藏の母の如きは自分の身を殺してまでも息子を訓戒奬勵して居ります。西洋の方になりますと何うも女が男の仕事の邪魔をいたします。それは文學にもよくあらはれて居る。例へばかのキングアーサーの中のグヰビアの如きもそれですが、有名なるホーマアの書中にもさういふ例があります。

私の考では日本の婦人にもつと高等の教育を授けましたならば、なほ一層よく其の天職を盡す事が出來るだらうと思ひますが、しかしその教育も方法如何によりては考ものでありませう、もしも手段を誤つて却つて今迄の日本婦人固有の美德を失ふやうなことがあらば、どんなに殘念かわかりません。寧ろ教育を授けない方が遙かに增しであらうと思ひます。

嬢は日本に御出でになる前、さる集會で演說なされたものだと言つて、「ジャパニースアイデアルス」といふ印刷物を貸して下さいましたが、それを見て嬢は日本の歷史を非常に委しく調られたものと思ひました。


YUME

寫眞を寫す時の態度

寫眞師 阿部亨正

▲威嚴を現はす型

やんごとなき方々の御寫眞を拜見致すと何となく崇高の感に打たれますが、それは身體全體の泰然として動かぬと云ふ態度の爲で、此動かぬと云ふ態度の威嚴を表はす一つの型で御座います。動かない態度と言つた丈では甚だ漠然として居ますが、畢竟寫す時に顏が上向でも下向でもなく、反身でもなく前屈みでもなく、身體と顏との方向が逆になつて居ると云ふ樣な事もなく、實に順當なスラリとした位置に在るのです。併し此の順當な位置に多少變化を加へた位置を寫すのも、一寸面白いもので、皆樣の御目にもよく留りませうが故兒玉大將の眞横の寫眞などは實によく帝國參謀總長の智相を表はして居りますあれは身體と反對にズーッと顏を背けて居らるゝのと逆光線との加減です。勿論此等の方々は態々寫眞師が工夫せずとも自然の品位が寫眞に現はれるのは當然の事ですが、此型を利用して百姓の息子さんを貴公子に見せ、裏店の内儀さんを貴婦人に見せ得られるのが寫眞術の面白い處で御座います。

▲紀念に殘す寫眞像

だから寫眞師は可憐な乙女の服裝其儘でも、態度の變化に依つて忽ち奸惡な辨天小僧に見せる事も出來ますし、又御望に依ては猫を虎に見せる樣な趣向もあります、併し地位や職業に依り、又其人々の性格に依つて大抵それ相應の風采に寫すと云ふ事も必要ですから、そこは十分注意を致します、飄輕な風を裝て娛樂的に寫さるゝ方は別として永遠の紀念に殘される普通の寫眞像には何處までも其人らしい態度が表はれた方が良いと思ひます。猫には猫の特色があり、虎には虎の特色がありますから、奥樣ならば如何にも貞淑らしく下婢ならば如何にも忠實らしい各自の特色を發揮する

やうに撮影したいものと考へ居ります。

▲寫さるゝ人々の望み

近頃はよく男子方からは肥つた樣に寫して呉れと望まれ、又中學生などからは滑稽に寫して呉れと望まれます或は中には我輩の理想の顏は黒木大將だなぞと言はれる方もあります。又博士方は輕く寫して呉れと云ふ御望の向が多い樣です。で寫眞は畫のやうに自由は利きませんけれども、一寸した加減で或程度までは御客に滿足を與へる事が能きます。クロパトキンは露兵の强勇を日本軍に表はすために、胸幅を擴げ身體を偉大に見せかける事を露兵に命じたと云ふ話を聞きました。又演劇の勇士が泣く時は仰向いて泣きます、是れが大層强さうに見えるものです。勇氣を寫眞に表はすには斯樣呼吸を注意すれば良いのでせう、又輕くとか眞率とか云ふ御望ならば顏のかしげ方や手の形等で之を表はします。だから寫さるゝ方々は寫眞師に向つて充分に御自分の趣味を御話になるがいゝのでせう。處が御婦人方特に令孃方なぞは大概何も仰らないのですから寫眞師は其風采に就て其方の趣味を推測いたし、之に投じるやうに寫して居るのです。

▲銀座邊は面長本郷邊は丸顏

私共は恁う云ふ事ばかり注意して居ますから、種々な事が目に着きます。場所柄に依つて婦人の容姿が違ふと云ふのは一寸可笑しな事實でせう。本郷邊の婦人は大抵丸顏で、銀座邊の婦人は細長い顏が多いやうです。夫れから女子師範、跡見女學校、女子美術學校なぞの生徒方も各々特有の風采があります。左樣ですね女子師範の生徒方は他に染附されないで天眞な處があり極淡白な態度です。跡見の方は何處までも內輪で遠慮勝な樣子があるし、女子美術學校は瀟洒な風采が多い樣です。又可なりの年輩の御婦人が同じ位のおつくりを爲て居られても、御子持の方と、未婚の方とは、直に分ります。畢竟寫眞師は其人々の嗜好に適するやうに工夫する處から自然觀察眼が銳敏になるのでせう

△令嬢として無難の態度

西洋令嬢の寫眞は日本令嬢の寫眞に比べると天眞爛熳で男子に近い態度が現はれて居るけれ共、之を見ておはねだとか、下品だとか評する者はありませんが、日本令嬢の寫眞は如何しても一定の紋切形でなければ見る人が承知いたしません。餘り反身であつたり。仰向であつたり、顔と身體を甚しくねぢつたり爲て居ては令嬢の品位を下げると云ふ批難が起ります。快活な面白味のある位置取りが必ずしも令嬢の資格を下げると云ふ次第はないのですが、つゝまやかで謙遜な態度は日本令嬢固有の光りとなつて居るのですから、位置は平凡



でも活動がなくても素直に寫した方が習慣上無難でありませう。

△奥様の氣品と衣服

妙齢の婦人が華美な裝を凝したのは櫻花の如く艶麗ですし、質素な常着姿でも山椿の美しさがあるものですが盛りを過ぎた奥様になると頰には尖りが見え、肩から帶際の處が何んとなく淋しくなるものです。併し此盛りを過ぎた奥様は家庭の女王と云ふ立派な實を結ばれて妙齢婦人の迚も及ばぬ慕はしい氣品が具つて居られるのですから、年齢相當な奥床しい服裝が寫眞されたのは誠に美しいものです。近頃は西洋流の老婦人華美粧りが大分かぶれた所爲か可なり老けた

婦人が令孃と同じ位の艶麗な服装で寫眞される方が大分あるやうですが、實に遺憾な次第です、何か適當な老若共通服が發明されゝば格別ですが、在來の日本服では、三十振袖四十島田とか言ふ通り、何となく厭な感じを人に與へ、老けた顔と艶な服装との調和がどうも面白くないやうに思はれます。矢張老けた婦人方は艶麗より超脱した高雅な御つくりで撮影されたいものと思ひます。寫眞師の分際として餘計な世話を焼く奴と思召すかも知れませんが、平常深く感じてゐる所から一寸申した次第です。

▲手の置工合と表情

同じ握り拳でも腰の邊に垂れゝば平和を表はし胸の邊に置けば決心を示し、頭の上に振り上ると勇猛に見えます。畫師が能辯家を畫くにも口形よりも手付で其れを表はします。手は不思議な表情力を持つて居るものですから、寫眞は手に依つて其人物に趣を添へる事が出來ます。併し美人向の寫眞ならば餘り手を表さない方が無難でせう。一體日本人の眼には方外に手の小さい錦繪美人が深く染み込んで居ますから、寫眞美人の手が格別に大きいやうに見えて玉に瑕の感を起させます。加之寫眞では手の甲の筋が明瞭に表はれて實物よりも餘程汚見えるものですから、箸より他重い物を持たぬ白魚の様な手でない以上は先づ隱した方が良いやうです。但し手を隱すと言つても懐手を爲たり後へ廻したりすると下品になりますし、芝居の御姫様のやうに重ね振袖の下へ隱しても故とらしくて可笑しくなります、此邊は寫眞師の工夫を用ゆべき處で例令ば握つた花や葉の一部分で手先を少し隱すとか、扇子の陰影で掩ふとか、重ね手した膝の衣服の皺で一寸隱すやうに爲るといゝのです。

▲寫眞と化粧の關係

純白の衣服は神々しく寫りますが、餘程肌の美しい婦人でないと似合ひません。又粗末な衣服も餘り風情がありません。丁度鼠色位に映じる色合の衣服が何人

にも宜しい樣です。肉色の黒い方は、白く見せるために後背地を暗く寫しますが、恁う云ふ時に衣服が黒いと全體の調子が燻つて面白くありません。老けた婦人は被布が一番釣合よく寫るやうです。髪は、結立では油が光つて白く寫ると仰る方がありますが、それは修正の際に何樣でもなりますから一向構ひません。廂髪と島田とは、是はどちらも良い樣です。尤も廂髪は額が暗くなるから生際の工合が都合よく寫ります、次に白粉は濃いと肉のふつくりとした處が寫りませんし、特に色の黒い方は白粉が斑に寫つて汚く見えますから先づ一體に素顔の方が良くなるでせう。



▲全身と半身と得失

容姿の美しい方なら全身でも半身でも結構ですが、醜い方は先づ全身が良い樣です。半身だと視線が顔にばかり集つて缺點が多く見えますが、全身は顔が小く寫るのと周圍の裝飾に視線を散すのとで餘程缺點を隱す事が出來ます又身丈の低い方は半身か七分身位が宜しい樣ですそして婦人が全身に寫さるゝ際には前に出した足の膝頭を一寸屈め、足先は内方へ寄るやう、即ち内輪にされると、腰の邊がふつきら棒にならないで誠に恰好良く寫ります。踊を習つた婦人は必らず此足形で寫します。けれども袴を着けた際には前の足先

を一寸外方へ向けられた方が宜い様です。

▲レンズの前に立つ時

十年前頃の令孃方は、寫眞場で耻かしがつて眞紅な顔になり、レンズの蓋をあける時には全然俯向いて了はれ、實に困つたのでしたが、當節は新教育の力で妙齢の婦人も淡泊になられ、工合よく撮影が出來るやうになりました。總て男女に限らずレンズの前に立つ時は虚心平氣が必要です。イザと云ふ場合に故らに顔を整頓されると何うしても平常と違つた顔に寫ります。氣品の點は無論ゼロですが、藝妓なぞは寫眞に慣れて居て平氣ですから、旨い表情が寫ります。寫眞する際の感情は、正直に現はれるもので、新婚の寫眞は美しい顔に出來、受驗者の寫眞は謹直に見え、警察で寫眞した罪人の顔は悄然として居ります、だからレンズの前に立たれた時心が落着かなかつたら何か樂しい事を空想して見るのが一番良いやうで、自然と顔が和らいで寫ります。で寫眞師の方でも餘り嚴正な身構へで御客に對しますと、若い御婦人なぞは窮屈に堅くなつて了はれますから、成る可く目障りにならぬやう影法師の如くにして居ります。

▲將來の輝きのある寫眞

七五三の祝ひ日に、羽織袴を着て大人びた男の兒や、振袖に朱色の帶を立矢の字に結んだ女の兒の寫眞を見ますと、將來の輝があるやうで嬉しい感じが致します。其他肥えた裸體の男兒でも、袖無しにカブ切りの女兒でも、其不用意に寫つた樣子が誠に限りなき妙味のあるものです。私が三歳位の頃、祖父に抱かれて菓子を啗つて居る寫眞が在りますが、祖父は此寫眞を出されて昔の腕白を話されますと、只今でも生意氣な事は言へなくなり、昔の無邪氣に歸へつた心地になります。實に子供の寫眞は家の歷史に於る寶物でありませう。次に青春時代の希望に充ちた姿、此れも是非紀念に撮影して置く必要があります。特に令孃方の寫眞は數十年の後に必ず光を現はすに違ひありません。斯樣

梅干婆でも鶯啼せた春もあつだと云ふやうな野卑な誇りを云はれないでも、花羞かしき妙齢時代の寫眞に依つて充分に説明が出來ます。夫れから老人の寫眞は其仙骨を帯びた高雅な顔に云はれぬ趣味があるもので、寫眞師は皆老人の撮影を怡び、プロマイドとして保存すべき價値があると云て居る程ですから、其樣云ふ人達も之を寫して置かれたなら、どれ丈け樂しみか知れません。

▲家庭用の寫眞器械

婦人方が家事を執らるゝ餘暇に寫眞術を研究さるゝのも有益で興味ある事と思ひます。御子樣の成長さるゝ樣子を、順々に寫して置くのにも便利であるし、旅行の際なぞは往く處に隨ひ撮影して置かれますと、紀行文に勝る價値がありませう。家庭用の器械も種々ありますが、先づ通例コダック（十五圓なり）なぞが一番宜しいでせう。

（阿部氏は本郷區弓町一丁目二十六番地なり）



◎社會は恰も反響する丘のごときものなり、人が語れば社會は其語つた儘に反響を傳へ呻吟すれば呻吟し歌へば歌ふものなり。

◎人間は世に必要なる教を得んよりは寧ろ物珍らしき奇妙な事を聞きたがるものなり。

名醫の忠告に依って命を拾ひし産婦の話

岡さき子

三日、未明、汽船は無事川口に着いて、すぐに俥を○○○町の兄の宅へ飛ばしました。嫂は二度目のお産で、本來は實家の母親が參るのでありましたが出發の間際に例の持病、到底來る事が出來ませず、女中は居るものゝ、身寄りの女手があると、妻も心丈夫であらうからと、兄よりの來狀で、手助けの爲めに參りました、かねて聞いて居りましたが、身體中隨分甚い浮腫です、左れど長男の生るゝときも、却々大した腫れで、殊に初産ではあるし、皆々大層心配致しましたが産後の肥立ちも宜く、續いて浮腫も退きました故、今度も前の通りであらうと多寡を括つて、本人も傍も安心して居りました。

午後に産婆が來診て、まだ二三日は間がありませうと言つた。

翌日午前六時安産、しかも玉のやうな男の子で、一同大安心、大喜悅に滿たされ、東生駒山の嶺にパツと射す朝日の瑞光にも、切に斯兒の前途に祝福あれと祈りました。

五日、昨日より安産を賀せらるゝお客樣絶えず、加之に嬰兒には浮腫の爲め母乳を呑ますことが出來ませぬので、煉乳を與りました、お夕飯後フト嫂は寒氣がして、甚う嘔氣つくと申しますので、臥床を暖にし、しづかに脊部を擦つて居ますと、一しきりせくり上げて、粘い米汁のやうなものを吐しました。續いて逆息がして止まりません、兄も驚いて取敢へず産婆を迎へましたが、丁寧に診た上案外造作もなう『これは腹帶を緩めたから、寒氣がして震いが來たので、隨つて食物も納まらないのです、腹帶を緊くするのは隨分辛いもの殊に大分浮腫れて居られるので、自然喰入つてお苦しいでせうが、暫く御辛抱なすつて下さい、腹帶を緩めた計りに、取返しの付かぬ事になる例は隨分多う

ムいますから」と呉々もゆるめてはならぬ由を申され、其内少しく治まつてまゐりましたので、先づ安心と胸撫下して、ものゝ一時間も經たぬ内、嫂は再び以前の容體で苦みます故、念のため醫師を呼んで診せますと醫師も『お案じなさることはありません、餘り室を暖かにして產婦を逆上させぬやうに、又成るべく氣を落付けるやうになさい、決して此上のことはありません、お藥を進げませう」と醫師も歸り、やがて嫂のスヤスヤと眠りに就いたのを見て產婆もかへりました。



　六日、朝早く私は女中と臺所をしてゐますと、嫂が微な聲で呼びますので、急いで參りますと、驚きました、一夜の内に斯うも變るものでせうか、面が非常に腫れて居ります、私の來たのを見て『今朝は何だか餘計に面が腫ればつたいが、昨日より甚く腫れては居ないでせうか」と張切つて鼠色のやうな手を出して面中撫廻しますので、私は更に愕きました、それに心臓が苦うて、息切れがして叶はぬと申しますから私はおどろきましたが、氣を痛ましては可けないとわざと落付いて兄とも相談の上、○○病院の院長に來診を賴みました。

　間もなく、院長さんが見えました、まだ居診中であるのを、特に來て呉れられたさうで、嬉し

う心剛う思ひました、やがて脈を檢り、聽診器を當てた其瞬間、如何なる言葉が院長さんの口から出ようかと、私も兄も片唾を呑み、思はず身を硬固めました。數秒して院長は、徐かに兄を顧眄りました、同時に兄の面色がサッと變りましたが、之を眺めた私も、恐らく血の氣を失つたでせう、一切が無言、嫂は何をも知りません、聽診器を納め、兄より詳しい經過を聞きつつ『御承知でありませうが、所謂る產脚氣で、既に心臟を侵して居ります、何分通じがないから浮腫る一方です、今度も矢張り初產の時のやうに、お國許でなさつた方が宜かつた、どうも大阪は土地が惡いですから――併し大した事はありますまい、十分骨を折りませう、兎に角轉地をなさい、此の病氣にはそれが何よりの良藥です轉地と申してもこの病人を連れ、迚も百里の荒海は越せませぬから、箕面へお出なさい、箕面は土地も宜し景色も佳し、專門の病院があつて、院長は懇意の間柄ですから、添書しませう、釣臺で行けば四里や五里は造作はないです、是非お出なさい、お勸めします、それからこの腹帶は、決して緊める事はなりませんよ、解らぬ產婆が折々大間違をやるには困る、すぐお除りになる樣に』と申され、なほ當人や看護人の心得をも色々親切に注意せられました、玄關へお送りすると、小聲で兄に對つて『誠にお氣の毒ですが、ナト後れました』兄は悄然として『どうも色々……先生何でせうか最早絕對に望みはないでせうか』『ナニ絕對にともいへませんが、最惡性の脚氣が那れまで心臟を侵しては到底難しからうと思ひます、此家へ此儘置けば、それこそ今數時間の命で、斷じて助かる見込はありませんが、唯だ一縷の望みを囑するのは、轉地にあるのです併しながら何分あの重體ですから、無事に箕面へまで保つのか、途中で可けなくなるのか、それは未定の問題ですが、要するに死なるものが、正に數時間の後に切迫せる今に於て、他に萬一を僥倖する道ありとすれば、差詰め其れに向つて進むより外に手段はないと思ひます、御決心なさい、左樣です、一分、否、一秒、其極微細な間に、病勢は實に恐るべき速力を以

て突進します、直ぐ添書とお藥を調へますから、出來得るだけ早く行くことになさい」俥は矢の如く馳去つたが、兄私は茫然として、少時は氣拔の體でした。「院長も多年の經驗上から勸告るし、又宅に三十日寢るより、箕面で十五日で癒れば結構だから、一つ奮發して行く事にしては如何か」と兄が手輕う申しますと、元來が生死の問題に接觸して居る程の觀念なき嫂は、それに同意して、玆に愈ゝ箕面行の諸般の準備に掛りました、私は長男を連れ、兄が密かに認めた數通の電報を袂に、電信局へ參り、歸路に病院へ廻りました。宅へ歸ると四五人の見舞客があつて、別室で兄と交



話して居ます、あゝ昨日は目出度いと祝ひを受けた身が、今日は倏忽ち重き病を見舞はる、若しや明日は悔みを聞くやうになりはすまいかと、氣も焦るばかりで、肝腎の人足が容易に出來ませず、徒らに時を移す内に、嫂の容體は益ゝ惡くなるのです、漸う四時に人足が參りましたが、愈ゝといふ段になつて、計らずも非箕面論者が出ました、それは上町の御老人で「やつと一昨日のお產で、たゞさへ血の若いのに、况して此の病氣、この寒空に、荒風に吹晒され、四里も五里も擔いで往て堪るものか、私は今一度他のお醫師に診て貰つて、其上の事にしたいと思ひますが……」と口を切りますと、婦人達が多うムいますから「さあ

私共も左樣なさる方がと存じます」との贊成で、皆樣の視線は一齊に兄の面上に集注がれました、兄は院長さんの先刻の御注意を、能く服膺ては居りますものゝ、宜かれと仰つて下さる皆樣方の厚意、無にする譯にも參りませず、人足を待たしておいて、大急ぎで二ケ所から名あるお醫師を迎へました、お歸り際に別室で御意見を伺ひますと、お二人とも同じ診斷で、「强ひて箕面へ行けとお勸めはしないが、併し此儘では迚も夜明けまで存命ますまい」今はとて滿場一致、箕面行に定まり、すぐ大戸を開けて釣臺を舁込み、寢床の儘靜に媼を其上に載せ、裾に桑名炬燵、兩側に湯たんぽを入れ、前額と心臟部に氷囊を置き、風の中らぬ樣外部を大毛布にて蔽ひ、着替の二三枚と四五斤の氷塊を人足に持たせ、三つの提灯に火を點して、悉皆用意が整ひました、見れば表の間に初男は東枕、嬰兒は西を枕にして、炬燵を中にスヤ〳〵と眠つてゐます可哀想に二人共、此後永遠に母の面を見ることが出來ぬであらうと、又しても先立つは涙、エ、延喜でもない、と氣を取直し、釣臺に隨いて兄と倶に表へ出ました、時正に八時五分前。

心無の風はビューッ〳〵と電線に叫び、仰けば物悲しさうな星の瞬き、まだ初宵だのに、犬の遠吠が幽かに聞えてゐます。

人足は四人、二人宛の交代で、毎も二人は先に立ち提灯の火に足元を照らして、道路の高低、泥濘の有無遺憾なく注意を與へ、臺上の病者に微動だに及ばさゝらんことを期するなど、流石專門の舁夫だけあつて、其熟練には感心しました、大阪の町々もいつしか過ぎ、十三の長橋を渡つて、北へ〳〵と進みます、神崎川の三國橋をわたり、二三丁も參りますと、大層苦悶しますので、直に臺を下し、用意の樟腦香高い藥を服まし氷の小片を口に入れ、氷囊を仕替へました、些いと治まつて、再び舁上ぐる途端、餌に餓えてや、ツイ其處でケエーン〳〵と野狐の聲、なんといふ忌な心持でせう、幾度か休み、いくたびか下し、服部に着いたのは十一時前でありました、夜も漸々更けますし、是から

先は茶店もないと申しますので、天神の鳥居前の茶亭に舁込み、玆處で傾斜いた釣臺を締直し、人足に食事をさせ、服藥、氷嚢、蠟燭などの手當をする內、迷信ながら脚氣の天神と申す神前に額づき我身の生命を短縮めても、嫂の病を癒し給へと祈願を籠めお供水を頂戴いて、唇を濕しましたが、目は腫塞つて糸のやうにしか見えませでした、彼是二十分間を費し、又も暗路を辿ります、其間兄は折々容體を覗うのみで、寒い、暗い、前の野路を、北に南に無意味に歩んで居りましたが、岡を外れましたとき、



俄然に容體が變りました、ソレ藥よ氷よと兄も私も應急の手當を盡し、交々力を付けましたが、唯だウン〳〵と呻吟くのみで、其慘狀目も當てられません、少時すると呼吸も斷れ斷れに『同じ死ぬるなら自宅で死にたいから、引返して下さい……』更に息を繼ぎ『ふ、二人の子供を賴みます……』と私の手を取らうとしましたが最早握る力はありませんでした、兄もそれではといふので、大阪へ引還すことにし、今來た道を二三丁も後に戻ると、兄は歩みながら微聲で私に申しますのに『此村は大阪から箕面へ

の半程である、だから息のある内無事に大阪の宅へ歸ることが出來れば、箕面の病院へ着くことも出來る、箕面へ迄保たず野の中で死ぬる命なら、大阪へ向つた所で矢張途中で死なねばならぬ、詰り北へ行くか、南へ行くかだけの違ひだ、情は同一さ、併し茲處は決斷すべきところ俺は初めから引返す意志はない、たゞ妻に安心さして置いて密つと箕面へやる心算であつた、分曉つたか」と手眞似で人足に合圖しますと、兼て申含めてあつたと見え靜に大きな輪を畫いて、棒先は再び箕面の山に向つて進みました、苦悶めばハツと魂を消し、眠つてしづかなと、呼吸は有無かと胸を冷し、安き心もなく、殆んど宙宇で病院に着いたのは、曉の四時過でした、添書を受付へ渡すと、遽然に各室が明るくなり、宿直の醫員が釣臺の儘玄關で一應診察し、其指揮で病室へ運びました、幸ひ娘は三十分位ゐ前から眠つてましたが、この時微かに目を開けて「初男は……嬰兒は……」と申して、又も昏々と眠に入りました、宅へ還つた積りなんでせう、兄は入院の手續やら詳悉しい經過を逃べるため、醫員室へ參りましたが、却々の重症で、能く當院まで來られたと思ふ、目下の所何れとも申上難いが、其内院長も見えるから、餘り心配せぬやうにといはれたさうです。

夜は東の窓より白み初めて、滿谿の楓樹霜に飽き、累々たる柿、蜜柑など、その色に誇つてゐます。

七日、娘は目覺めて不審げに天井を眺め、宅かと申しますので、兄は此處は箕面の病院であると、大阪へ引返さなかつたことを、簡單に諭しますと、能く納得して首肯きました、お陰様で急變も來ず、現狀持續。

今日からは手馴れた看護婦が詰切りますし、身體の何處かに餘裕が出來て、同時に疲勞を覺え、坐つた儘ウツラ〳〵と致しました。

九時に院長來診、娘にはナニ大丈夫と手輕く仰いましたが、其實今明日が極危險との事でした、午後再び來診、別に變りなし、何卒けふあす此狀態を持續さしたい、其内通じさへつけば、望があると申されました。

八日、院長來診、異狀なし、午後同樣

夕暮より風吹きしきつて、獵々たる山氣膚に迫り、落葉窓をうつて、さながら急霰の如うでした。

九日、未明、初めて少量の便通がありまして、院長さんは占めた〳〵と大層お喜びでした、午後の再診までに、續いて數回の快通、最早愈ゝ大丈夫との診斷で一同愁眉を披きました。

夜、神識明確、はじめて少量の粥と玉子を口にしました。

十日、經過極めて良好、兄は午後無據役所用の爲め歸阪しました、申す迄もなく喜色滿面で……

十六日、浮腫も漸々に退き、痲痺も大分除れて、根が若盛りの事ですから、メキ〳〵力付いて參りました私は宅の樣子も見度うムいますので、萬事を看護婦と實家の母親とに托して、一寸歸阪することに致しました、山を下れば追分道、おゝこの道よ、十日前の夜は如何にこの道を通つたであらうかと、いふに言へぬ感じが致しました、汽車に乘る間も懊かしく、梅田から俥を馳せて我家近くなると、門に遊んで居た初男が早く見付け、玩具の陸軍旗を高く捧げて、萬歲ーッと叫びました、留守を預つて呉れし親類の方や竹も喜んで出迎へられ、まだ表情の能きぬ嬰兒の面すら、活々として見えました。

師走も既に半を過ぎ、往來の下駄音も、勇みを帶びて何となう忙しい、左しも重かつた嫂の病氣も、日一日と快方に向ひ、月末までには退院が出來ますので、斯樣な嬉しいことはありません。

（そはり）





黄金結婚の元祖

巴里婦人生活の內容

新歸朝者　伊澤乙女子

孃は伊澤修二氏の三女で、音樂學校を卒業後佛蘭西巴里に遊學して居られましたが、この三月十二日目出度歸朝せられました。左に記すは同孃を訪問して伺つた御話で御座います。

私が佛蘭西に參りましたのは音樂を專門に研究しやうといふ目的ではありませんでした。まあ語學と音樂とを勉强し、かたがた彼國の風習などを見に參つたやうなもので御座います。實は私があまり内氣で御座いましたものですから、兩親共は大變それを心配いたしまして、少し西洋人の間にでも入つて見たらよからうといふて、昨年叔父が佛蘭西へ從妹を迎ひに參りますのに頼んで、連れて往つて貰ひましたので御座います。ハイ叔父は稻田と申しまして長い間佛蘭西に居りました人ですが、いたして居ります仕事がまた佛蘭西と關係の深いことなものですから、彼國へは度々參るので御座います。そして二人の娘は極幼い時から神田の佛和女學校に入れて置いたので御座いますが、先年彼校の尼さんが佛蘭西に歸られる時に一緒に連れて往つて貰つて居つたのです。叔父は昨年其の娘共を迎ひに參りましたので、私は丁度從妹達と入れ代りに彼國に殘りました。最少し長く彼國に居る積りで、この夏神戸さん（文部省の留學生）と御一緒に歸る筈でしたけ

れど、今度叔父の工場に居る人が佛蘭西へ參りましたので、恰度よい序だからと申され、豫定よりも早く歸ることになりました。船の中には隨分弊風が御座いますさうで婦人の旅はなかなか危險だと申ます參る時は敦賀から出發ちまして、西比利亞鐵道を經て佛蘭西に入りましたが、歸りは倫敦に出て船に乗りました。



▲子供は大抵寄宿舍に入れる

私の入りましたのは加特力教の學校で御座いますが教へます事は矢張り普通の學問で日本で申ますならば小學校と高等女學校とを一緒にしたやうなもので御座います。私は參ると直ぐそこへ入つて今

度歸りますまで寄宿舍に居りましたが、尼さんの親切なのには實に感心致します。教師の職務を職業として義務的に盡して居るのではなく、全然献身的に致して居りますから、生徒への世話もあのやうに行届くので御座いませう。從つて生徒の方でも尼さんを叔母さん叔母さんといつて恰もお母さんのやうに慕ふて居ります。巴里では家が學校の近くでも、子供を大抵寄宿舍に入れるやうですが、お母さんが餘りかまつてくれない故か、生徒は一般に實家へ歸ることを好みません。何うも佛蘭西のお母さん達は日本のお母さんに比べますと、子供に對する愛情が餘程薄いやうに思はれます。其處へ參りますと英國のお母さんはなかなかよく子供にかまつてやるやうで御座います。今度船の中で一緒になりました英國の實業家の奧さんなどは、實によく子供の世話を致して居りました。

▲入浴は三週間に一度位

寄宿舍は食堂、寢室、自習室などがあつて、其處にみな一緒に居ります。自分丈けの部屋をもつといふことは出來ません。私は初め自分丈の部屋を一つ與へてほしいと願ひましたけれど、さうすると他の國の人(波蘭の人でお母さんは支那人とかいふやうな生徒もありましたから)にもそれを許さなければならぬ事になるから我慢して下さいとの事でした。たゞお湯丈けは、日本人はよく入浴するさうだからとて、特別にたてゝくれましたので、度々入ることが出來ました。彼國の人は餘りお湯に入りません。尤も其代り身體を常によく拭ひて置きます。入浴いたしますのは三週間に一度位のもので御座いませう。寄宿舍では尼さんが小さい子供達に毎晩手足を拭ひてやつて臥せさせて居ります一體に彼國の女學生は私共から見ますと、年の割合に子供つぽくて、隨分年をとつた人でも、つまらぬ事まで他から世話をやいて貰つて居ります。

▲奧ゆかしき女學生

然し私の感心いたしました事は、彼國の人の、すべ

て年長者を尊敬することで御座います。學校などでも一つでも年の多い人は部屋に入る時にも先きになり、坐る時にも先きに坐るといふ風ですから、從つて先生に對する尊敬の念もあつう御座います。尤も面と向つては隨分遠慮なく先生の缺點や癖を申ますけれども、蔭で惡口をするといふやうな事は決してありません。そして巴里の女學生が質素で地味な風をして居りますのも意外で御座います。衣服は一般に黒か紺のやうな色で、偶に縞などにいたしましても決して



華やかなものを用ゐません。リボンなども極しぶい色で、赤などをつける人はありません。私の參つて居つた學校では、サブリエと申しまして、丁度下田さんの學校の方がなさるやうなものをかけ、制服制帽リボンに至るまでみな同色で御座いますから、揃つて出かけます時などはなか／＼奥ゆかしく見えます

日本では近頃女學生の服裝がます／＼華美になり、お化粧なども隨分厚いやうで御座いますが、是等の風を彼國の人が見ましたならば、不思議に思ふだらうと思

ひます。彼國では學校時代は寧ろ世間とすつかり離れて居るといふ有樣で、身なりなどには一向かまひません。芝居、オペラ、音樂會などの如きものへも、學生の間は決して出かけないものとなつて居ります。其代り十九になつて學校が了みますと、急に大人びます。衣服の裾を長くし、髮も上げて、母親に連れられて交際社會へも出かけるといふ風です。昨年私が參つてから卒業した人達が、夏同窓會があつた時に學校へ參りましたのを見て見違へるばかり奇麗になつて居るので驚きました。

▲男子禁制の學校

私の居りました學校の先生は、普通の女教師が二三人居られた許り、あとは皆尼さんばかりで、男の先生は一人も御座いませんでした。一體に男子を冷遇することは寧ろをかしい程で、生徒の面會人などでも、お母さんですとずつと學校の內部に通して、生徒の部屋などを見せますけれど、父親ですとたゞ入口の應接室で一寸面會する丈けで御座います。それでも私の學校などはまだよい方で、他の宗教學校ではすべて面會人には格子のやうなものを隔てゝ御話をするやうになつて居るさうで御座います。佛蘭西では近頃宗教と教育とを別にするとか申しまして、宗教の學校はだん〳〵閉ぢられて了ひます。私の居りました學校はよほどよく出來て居りますものですから、政府からあまり嫌はれないで、まづ〳〵無事で居るので御座いますが、それでも四五年の內には閉校になるかも知れないとの事で御座いました。しかし只今の處では他の閉ぢられた宗教學校の生徒が皆參りますので、學校は大繁昌で御座いました。とにかく彼地では宗教が大變盛んで、子供達はたとへ宗教學校に參つて居らぬにいたしましても、會堂に參ることを悦んで居ります。日曜日には一番よい衣服を着て、御馳走も一番よいものをいたゞき一日たのしく遊び暮すので御座います。學校では日曜日には二度づゝ禮拜堂に集ることになつて居りましたけれど、私は特別に出ないで居りました。それでも、

リアの誕生日の賑はひは見て置いたがよからうと申されまして、佛國第一といふ大きな會堂に參つて見ましたが、成程その御祭り騷ぎの甚しいには驚きました。銀で作らへましたマリアの御輿が出まして、それが廣い會堂をぐる／＼廻りますと、金銀の色でピカ／＼する衣ものを着た僧侶達がそれに對つてお祈りをいたします。その儀式は實に華やかなもので御座います。

▲神戸さんの御勉強

神戸絢子さんは私と同じ學校の中には入らつしやいましたけれど、學校の生徒としてゝはありません。あの方はお小さい時から神田の佛和女學校に入らつしやいましたので、あの學校から佛蘭西の學校の方へ御紹介になつたのださうで、



つまり御部屋を借りて入らつしやるといふやうな譯で御座います。勿論私共の居ります寄宿舍とは建物も別になつて居りましたし、御部屋も御自分丈けの御部屋にピアノを置いて御勉强で御座います。神戸さんは私が音樂學校に居ります時の先生でかねて御慕ひ申して居つたので御座いますから彼國に參りましてからは一層御懷しく御姉様のやうに思つて、買物などにはいつも御一緒を願ひ、洋服などを買ひます時はすべて神戸さんに見立てゝ頂いて居りました。しかし神戸さん

はなか〳〵御忙しいので、常に御話をいたしますのは御飯の時丈け位のものでした。ハイ初めは私も寄宿舍で皆と一緒に御飯を頂いて居りましたけれど、神戸さんが御一人では御淋しからうと申すので、私は別になつて神戸さんと御一緒に頂くことになつたので御座いました。神戸さんは彼國の音樂大學とでもいふべき學校の一番よい先生に就いてお稽古遊してゞ御座いますが、そのお稽古の時間が日に十時間以上も御ありで、お歸りになるとお部屋で復習をなさる。其間にまた方方の音樂會へも出てお聽きになるといふ風で、全く音樂のために全力を注いで居られました。あの方は御主人もお子樣もおありになりますのに、よく外國まで御出懸けになつて、御熱心に御勉强遊ばすといつて、彼地の人達は皆感心して居ります。留學生でも男の方などは、隨分お遊びになるといふ事ですから、文部省などで折角お金をかけて留學をおさせになるならば、女の方をおやりになつた方がよいと思ひます。

▲佛蘭西の音樂と獨逸の音樂

音樂は獨逸と佛蘭西が一番よいさうですが、其仕方はすつかり違つて居るとの事で御座います。日本の音樂學校は獨逸風で神戸さんなども實際獨逸の先生にお習ひになつたのですから、佛蘭西にお出でになると、指の動かし方からすつかりお直されになつたさうで、初めは隨分御困りになつたと仰しやつてゞ御座いました。佛蘭西の音樂の進んで居りますことは非常なもので、大抵の人は日本の音樂學校卒業位の技倆をもつて居ります。私の居りました學校などは、音樂專門の學校ではありませんけれど、日本の專門學校以上に進んで居りました。何しろ手の方は練習さへすれば出來ない事はありませんでせうけれど、聲の方になりますと日本人は身體が小さい故か、何うも音量が少くていけません、ことにオペラに至つては日本のは表情がいかにもわざとらしくつて見られませんが、佛蘭西ではさすがに六七歲の頃から練習させる丈けあつて、實に自

然によく出來るので御座います。

▲黃金結婚は佛蘭西が元祖

日本でも近頃は黃金結婚と申すことが大分流行いたしますさうですが、佛蘭西の婦人は虛榮心が强う御座いますから、それが最も甚しいやうで御座います。私が叔父に連れられてさる金持の實業家に招かれて參つた時、初めお孃樣とばかり思つて御挨拶いたして居りました方が、あとで奧樣とわかつて驚いた事が御座いますが、實際御主人はもう白髮が生へて腰のまがつたやうな老爺さんで御座いますのに、奧樣はまだ廿代位のみづ〳〵しい御若さなので御座います。巴里にはこのやうな御夫婦が澤山ありますが、これは男子が家庭をもつ程の財產をこしらへるまでには、餘程年をとるといふことにもよるのでせうが、一般に婦人が地位財產と結婚する風のあることは爭はれない事實で御座います。一體佛蘭西では夫婦の財產は共有といふことになつて居りますので（英米などではたしか婦人の持參金は妻君の專有となつて居るやうにきゝました）單に婦人から男子の財產を望むばかりではなく、男子の方から妻となる婦人の財產を目あてに結婚するのがあるさうです。ですから彼地の家庭には隨分面白くないのが多く、從つて離婚が頻りに行はれるさうで御座います。

▲婦人は世話女房的

亞米利加などではほんとうに婦人の權力が强いのかも知れませんが、佛蘭西では外に出た時丈けは成程男子が婦人を勞つて、旦那樣が奧樣の靴の紐を結んでやッたり、外套をかけてやッたりなさるのですけれど、內に入ると全然反對で、旦那樣はなか〳〵よくお威張になるといふ事で御座います。これに思ひ較べますと、日本の婦人は何んでも夫の言ふ處に從つて居りますけれども家庭に於ては十分實權をもつて居るので御座いますから、實に幸だと存じます。しかしまた彼地の婦人は實によく夫に仕へます。巴里の婦人といへばたゞ

華美やかに着飾つて遊んで居るかのやうに思はれますけれども、實際は極世話女房的で、經濟が非常に巧く、家政をよく治めて居るので御座います。夜會にでも出ます時は隨分飾りたてゝ立派な服裝をいたしますけれども、內に居ります時は、紙切れ一つでも皺を伸ばして藏つて置くといふ風です。

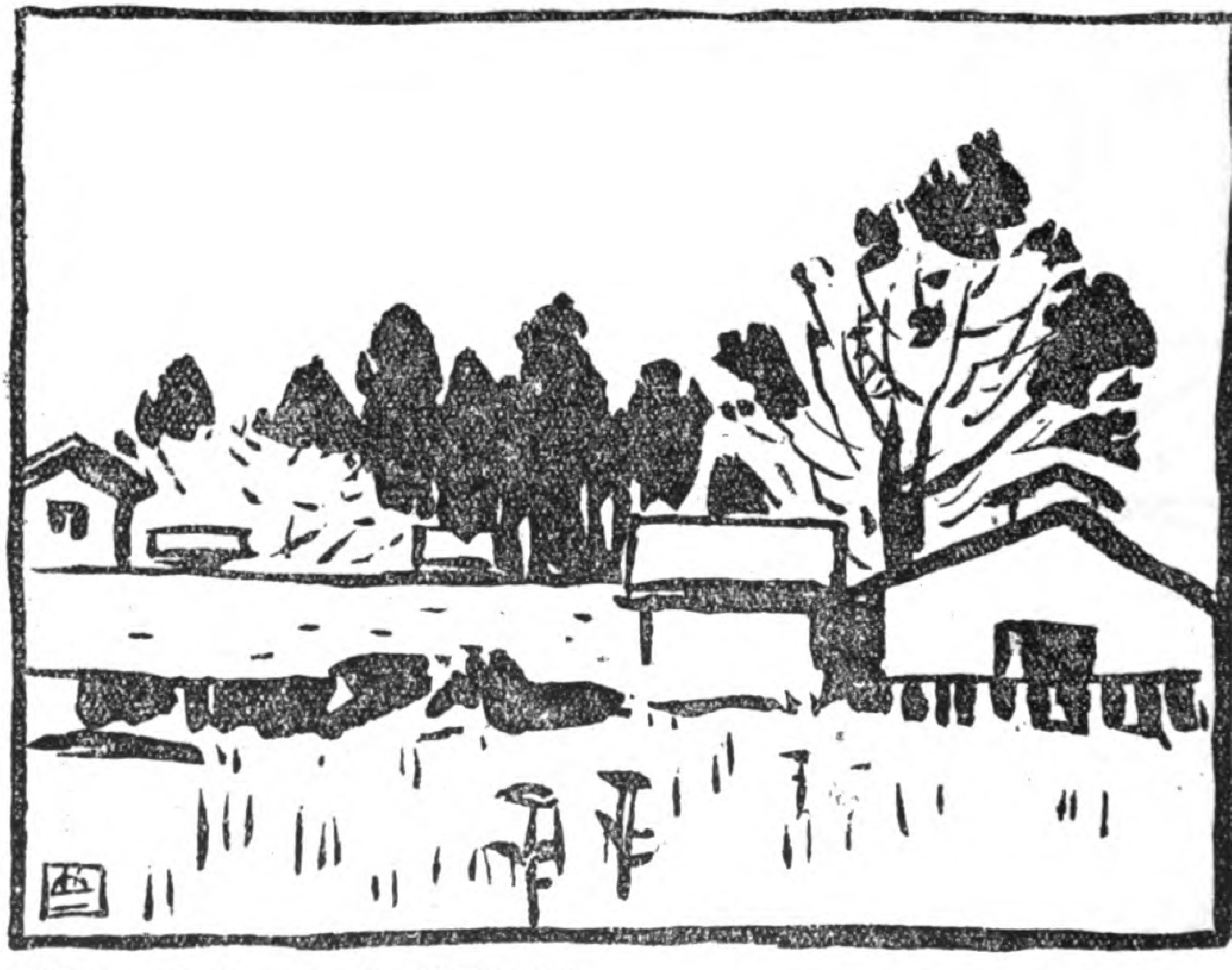
▲一人つ子が多い

佛蘭西の人は子供の時から財産を餘程大切なものと思つて居ります。彼地では一人つ子が多くて兄弟のある人は實に少く、ありましても二人か三人位のもので四人までの人は私の知つた範圍では御座いませんでした。私の兄弟は五人あると申しました處、皆ホントかといつて吃驚して居りました。そしてお世辭にはそんなに澤山兄弟があつて羨しいなどゝ申しますけれど、實際は一人つ子の方を喜んで居るので御座います。何故かと申しますと其方が財産を一人で皆貰へるからよいといふので御座います。佛蘭西は世界で最も富で居る國とか申ますが、實際巴里で奢つて居るのは自國の人ではなくて、外國人なので、その外國人から落ちるお金は大したものだといふことです。兎に角佛蘭西といふ國は遊びに參る處で、勉强に行くのは或は間違つて居るかも知れません。

▲佛蘭西の婦人と英吉利の婦人

佛蘭西の婦人は餘り烈しい運動をいたしません。學校でもクロッケットのやうなものがまあ活潑な運動のうちで、多くは公園へでも參つて散歩する位です。英國の人は佛蘭西の女は運動をしないからあんなに肥るのだと申すさうですが、肥ると申して別にデブ〳〵いたして居る譯ではありませんけれど、それは英國の婦人に比べますとよほどフク〳〵いたして居ります。其代り佛蘭西ではまた英吉利の女はまるで板のやうだと惡口を申て居るので御座います。私は今度船の中で、成程英國の婦人は活潑な運動をすると知りましたが、單に運動ばかりではなく、食のよい事もよほどまさつ

て居ります。佛人は世界で一番朝寢坊な國民だとか申しますが、それは多分夜、芝居とかオペラとか音樂會とかいふやうなもので更かすからなので御座いませうともかく朝のおそい事は事實で、朝食は大抵お茶で濟して居るので御座いますが英國の人は朝の食事でもなかなかよく頂きます。餘程早起なのでせう。そしても一つをかしい事は佛人は自國の語を一番よいと思つて居りますから、滅多に外國語を學びません。それ故佛蘭西の婦人で英語を知つて居る人は極少いので御座い

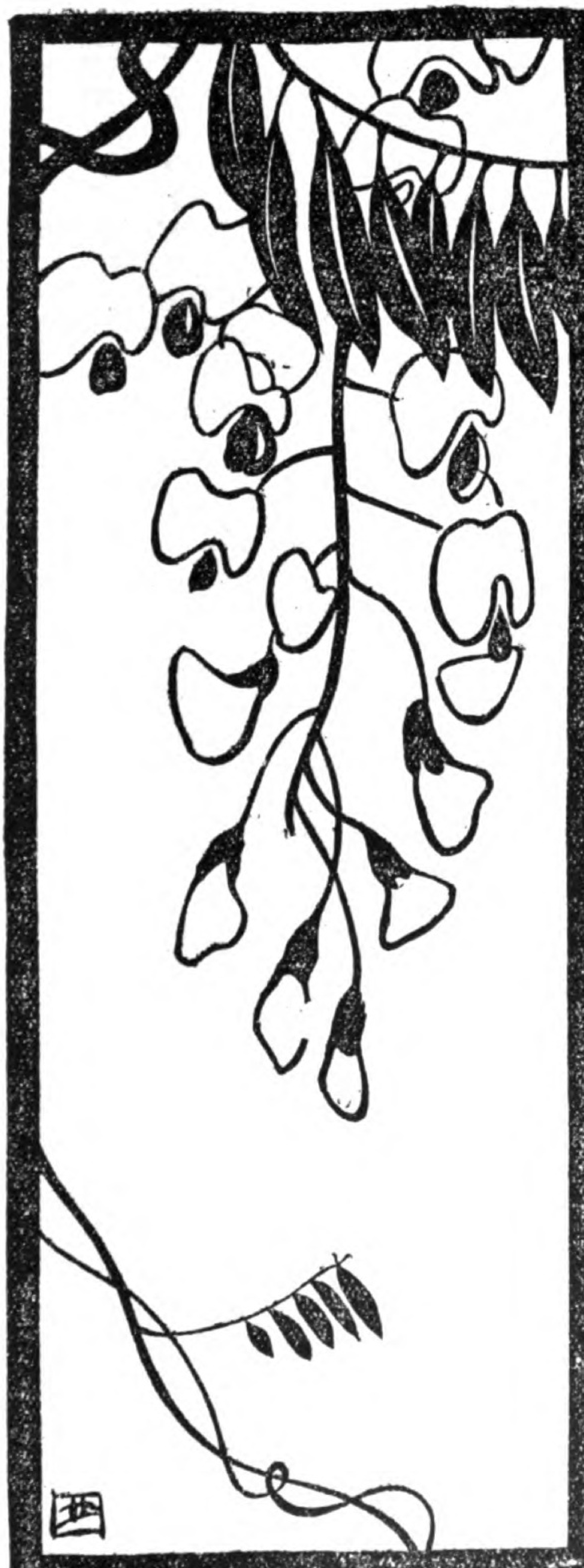


ますが、そこへ參りますと英國の人は餘程ずるくて、佛語をちやんと知つて居つても決してそれを話さないので御座います。

▲これ程迄にも變るものか

佛蘭西の人は外國人に少しも隔てをおきませんから誠に交際ひよう御座います學生でもなか〳〵愛嬌がありて、始終笑をたゝえて人を迎へて居ります。私は前にも申上ます通り大變內氣で御座いましたから、初めは不活潑だとか、何うして笑はないかといつて、尼さ

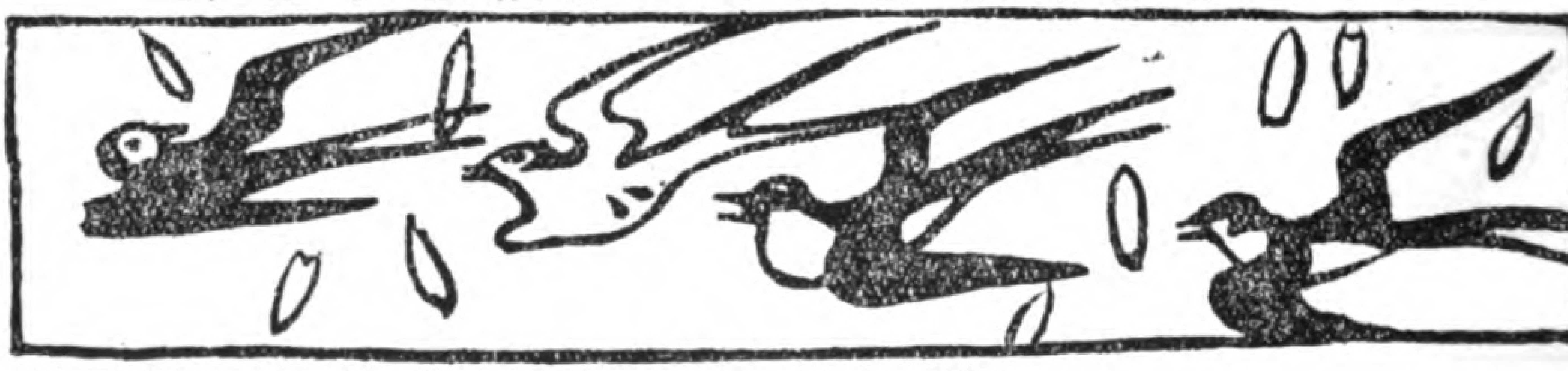
んや友達などが心配してくれましたが、だん〴〵馴れるに從ひまして快活になり、よく話しよく笑ふやうになりました。船の中であなたは何うして洋行したのかと問はれました時、『私はあまり内氣でしたゝめ、兩親が心配して、せめて西洋の方の中へでも入つて見たなら、少しは直るだらうとの事で、佛蘭西へやられたので御座います』と申しますと、皆さんが吃驚して『何うしてもあなたが内氣であつたなどゝは想像が出來ない。それは嘘だらう』と本統になさらなかつた程で、私の氣質は大變變つて參りました。第一兩親がこれを喜んでくれまして、歸りました時も船にもよく醉はなかつたといはれましたから、『外國の婦人達は少しも船に醉はないのに、私が一人弱つたとあつては、日本婦人の名折れだからと思ひまして、氣を丈夫に持つて居つたのです』と申して、大變な氣焔だと笑はれました。



はなごよみ

端午

端午の節句は平安朝時代より行はれたる五節句の一にして女子の雛節句に對する男子の幟節句として其立身を祝し、家の軒頭に菖蒲を挿し、菖蒲湯に浴し、旗幟を建て、粽を造りて食ふ習例あり、菖蒲には蓬を添へて一二莖を檐の周圍に挿したるが、これは火災を除く所以なりと、菖蒲湯とは菖蒲の根葉を取去り、これを浴槽の中に入れ、浴して惡氣を祓ふなりとぞ又此の日菖蒲酒を飮み、女子の頭に菖蒲をかざしなどしたるものなり、幟は武家にて出陣の時の模樣に擬し男子の出世を祝ふものなり、幟はのぼりにして上に騰るの意なり、鯉の吹流しを樹つるも鯉は出世の魚なりとするに因みたるものなり、粽は粳粉を水にて捏れ細長くまろめ、これを菰或は笹の葉に包みて蒸したるものにてもと茅の葉にて卷きたるより此の名ありとぞ、五月五日の節句の儀式は以前武家にていと嚴肅に行はれたりしが今は多く廢絶に歸して唯男子ある家々にては戸外に鯉の吹流しを樹て、内には内幟を飾り、武者人形、兜人形、鍾馗など並べ飾ざりて此日を祝す。



あやめ草一夜ばかりの枕だに　むすびもはてぬ夢のみじかさ　前中納言雅具

引むすぶあやめの草の枕をば　旅とやいはんひと夜ねにけり　前關白近衞

なほざりに袖のあやめをかさし來て　枕も夢も結ぶともなし　後京極攝政

つゝじ

躑躅は落葉の灌木にして幹は高さ三四尺乃至丈餘に達するものあり、其種類頗る多く、山つゝじは山野に自生するものにて幹の高さ三四尺に達し四月末より五月初頃紅色の花開く、故に紅つゝじの名あり、きりしまは形ち山つゝじに似て花は通常紅色初夏の頃一齊に開花して頗る壯觀を呈す、もと日向の霧島山より出でたるが故にこの名あり、花に大小、單瓣、紫、白色等の各種あり、さつきは、きりしまに似てやゝ大きく葉は深綠色、花は紅、紫、又は白色等の各種あり陰曆五月に開くを以てこの名あり。

つゝじは寒暖肥瘠いづれの土地にも適し且つ閑寂幽靜の妙趣あるが故に、一般に栽培せられ、大いに愛玩を受く、特に枝條を剪伐整理して人物、器物、又は山岳等隨意に種々の形態を作り出すことを得る故庭園の裝飾物として園藝の一に加へら

る、されど一時に多くの枝條を伐りて形態に急激なる變化を施さんとするは望むべからず、又羊躑躅及び山つゝじの花又は葉を嚥み下さば忽ち腹痛を始め暴吐瀉を起し甚だしきに至りては人事不省となりて斃るゝことあれば注意すべし、故に羊躑躅のごときは羊若しこれを見る時は畏怖して進むこと能はず空しく躑躅るか故にこの名ありと言ひ傳へたり。この植物は古來和漢ともにいたく賞翫せしものにて古くより詩歌に詠まれたり、又中古時代の衣服の襲れの色目にも表の紅にして裏の紫なるものをいはつゝじと稱せられしを見ても其の愛翫せられしを知るべし。

花をしぞ思ふなりく赤つゝじ　　宗鑑

山鳥やつゝじ分行く尾のひねり　　探光

つゝじ咲て片山里の飯白し　　蕪村

つゝじ咲く立場の庭や自然石　　一具

笠にさし手にも折行躑躅かな　　史千

白妙のつゝじ花さくしば人の
かへるさ遲き頃し來にけり　　蘆庵

旅人のいほろ山べにたく火かと
こぐれに見えて咲く躑躅かな　　同

藤



藤は荳科に屬する落葉の纏繞植物なり。春の末葉と共に花穗を生じ下垂して蛾形花を開く、普通は紫色なれども又白色なるものあり、又四季咲ととなへて一年に必らず二度咲くものもあり、元來藤は山野に自生するものなれど、多くは庭園に植ゑて棚をつくり、これを蔓こらしめて花を賞し、また盆栽ともなす、繁殖せしむるには接木をよしとす、藤の嫩葉は食用に供せられ、或は茶に代用す、花も又藤花菜と稱し煠でゝ搾り酢みそにて食ふべし、支那にては其花の半開なるを鹽湯に浸し甑に入れて蒸して乾かし貯へて食用となす、又酒の醉を醒すに用ふ、實は燒きて食はゞ味はゞ栗に似たり、又實をあぶりて腐敗酒に入れなばその味を舊に復すともいふ、春末發芽に先だち蔓を採りて皮をむき、釜に入れて木灰を加へて一と煎じゝ、取出して再び外皮を去り乾燥して藤布、索繩、或は草履の裏等に用ふ、木曾の山民はこの皮にて布を織るこれをたこぬのと稱し遠江にてはふぢたこと呼べり、又藤蔓は非常に長く蔓こり、且つ丈夫なれば山中にてはこれを編みて橋をつくり絕崖に渡せるところあり。

藤の花たゝうつふきて別れかな　　越人

五六反しさりて見ばや松の藤　　爲有

山もとに米ふむ音や藤の花　　蕪村

氣に入らぬ宿もとりけり藤の花　　五蘂

山陰や藤の下家また見ゆる　三千彦

よもすがら松の雫のひまもなし
うつりやすらん藤なみの花　景樹

折りて見む夏をかけては匂ふとも
かへらぬ春のふぢ浪の花　蘆庵

いつしかと藤さく池の水かゞみ
うつりにけりな春の日數は　同

牡丹

牡丹は毛茛科に屬する落葉の灌木にして幹は高さ三四尺に至り、三月頃嫩芽を出して後ち花を着く、花は白色、紅色、紫色等種々にして一重なるあり、八重なるありて一樣ならず、花散りて後莢を結び、實はその中に包まる、九月の頃莢裂けて實地に落つ、黑色にして豆粒のごとく、これを蒔かば春芽を生じ恰も豆の發生に異ならず、實生より五六年にして初めて花を見る培養するには夏川底の砂泥と園地の土とを篩ひ交ぜ、九月の頃赤き芽を出したる時これを植ゑかへ、冬油粕をその根本に入れ或は鮮魚の洗汁をそゝぎ置く時は四月頃に至りて花を生ず、肥料は通常馬糞を用ふ、繁殖は主として實蒔によれど近來接木の法によりて殊に其種を繁殖す、又牡丹は向陽の場所を好み、寒さきらふが故に、寒地に培養するには殊に防霜の用意をなさゞるべからず、防霜には藁にて圍ふか、又は温暖にして日當よき地に室を設けこれに移植するを最もよしとす、牡丹は花の頗る美麗なるより庭園に植ゑて賞せらる、花の普通に最も貴重せらるゝは純白なると純紅なるとにあり、根は藥用に供しまた花を食用にすることあり、この花原來支那の産にして我國に移植されしは遠く奈良朝の頃よりなりといふ。



花の影殘して散るゝ牡丹かな　飯侍

牡丹散りて心もおかす別れけり　北枝

隱れ家や人の臭たる白牡丹　闌更

つばめ

燕は候鳥の著しきものにて本邦に去來するものに五種あり、通常燕、琉球つばめ、腰赤つばめ、しやうどう燕、岩燕等なり通常燕は額及び咽喉部は栗茶色にて咽喉と胸部の間に暗色帶あり、胸部以下腹部は純白なれども體の上部は頭上より尾根に至るまで黑色にて靑紫色の光澤を閃かす、四月初旬に南方より渡來し夏季人家に巢を營みて雛を生育し、九月十月の頃再び南方に向つて去る、これ冬間は暖國に移りて食物の缺乏と寒氣とを避けんが爲めなり、この燕に限らず燕屬は一般に其舊巢を愛慕するの念深く、其巢だに毀たざれば今年來りたる燕は明年も又來る、腰赤燕は一名徳利燕といふこれは屋壁の高所に徳利

形の巣を營みて雛を育つるによりてなり、又しやうど燕は海濱又は河岸等の土砂に穴を穿ちて産卵す、故に又砂燕の稱あり、岩燕は夏季本邦の深山に於て無數群を成し、絕壁に土巣を懸けて茲に産卵し秋季に入れば南方に渡り、ボルネオ島にて冬越すといふ、日光華嚴瀧の邊にて夥しく見るはこのつばめなり。

燕は概ね食蟲性にして夏季空中に飛迸する蚊蠅などの有害蟲を驅除す、これを保護鳥とすれば獨り農業上の利益のみならず又人體衛生上にも極めて効あるなり。

玄鳥や巳が月日を子に譲る　　磁嶽

馬の耳すぼめて通すつばめかな　　梅笠

つばくらよ顔な濡らしぞ波がしら　　曉齋

恥かしい世帶見らるゝ乙鳥かな　　百齢

此春もふる巣たづれて山かづの
　やどをわすれぬつばくらめ哉　　頓阿

蛙

蛙は水陸兩棲の小動物なり、體短く幅廣くして尾を有せず眼は大きくして金光を放ち、耳は眼の後に接して鼓膜多く露出せり。皮膚は滑かにして濕氣を帶び、且つ一種の枯液腺を藏す口は濶くして顎上に數多の細齒を具ふ、四肢の中後肢は殊に長大にして趾に蹼あり、好んで陰地に棲み、性敏捷にして水



中にありては巧みに泳ぎ地上にありてはよく飛躍す、雄の咽喉には鳴囊と稱する特異の器管ありてこれによりて鳴聲を發す、これを歌袋ともいふ、雌は春に至りて卵を水中に産む、卵は十日許り經て蝌斗となる。

蛙の種類は甚だ多し、ひきがへるは蛙の最大なるものにして通例灰褐色を帶び醜きものなり、口に齒を有せず、趾間に蹼なく、産卵期の外は水に入らず、殆んと陸生動物なり好んで昆蟲類を食す、とのさまがへる及び赤がへるは口に齒を具へ、趾間に蹼を張りて常に水邊に棲み、往々水田に群居して喧騷を極む、雨蛙は脊綠色にして腹白く、趾端に吸盤を具へて巧みに樹上に攀ぢのぼる、鳴聲は高くさわがしくして聽くに堪へざれども其性降雨の前必らず鳴くを以てこれを飼養して降雨をトするところありといふ、河鹿がへるは山間の溪流に棲み、其聲淸くして愛すべし、人家に飼ふには淺き鉢に水、石、岩などを入れ高き鐵網にておほひ其中に入れ置くなり、生きたる蠅を食とす、蛙は一般に昆蟲を食するが故に蟲害を驅除するの効あり且つ赤蛙は疳を治する効ありといふ。皮と腸とを去り炙りて小兒に食はす。

浮替て見ては啼出す蛙かな　　洞天

闇き夜のはるかの奥やはつ蛙　　鳳瑚

春深き井手のわたりの夕まぐれ
霞むみぎはに蛙なくなり　　蘆庵

欵冬

欵冬は菊科に屬する宿根草にして野生のものと圃養のものとあり、葉は心臓形にして長き葉柄を有し花は小さき頭狀花をなして花軸の上部に密生す、北海道及び陸中の南部羽後の秋田等によく繁茂す、殊に秋田地方に產するものは葉の大さ傘のごとく、莖は小柱のごとくにして高さ六七尺に至るものあり、冬季又は初春に宿根より花軸を抽出す、これを欵冬の薹といふ、莖は煮て食す、少し苦味あれど芳香を帶びて味ひ佳良なり、又葉及び莖を取りて陰干となす、葉は薔薇紙又は唐紙などの襖紙屏風紙に刷り、又紙紗女帶地等に印刷す、これを欵冬摺と稱して雅致あり、近頃窓掛用として海外に輸出するもの多し、又葉莖を砂糖づけとなし或は鹽糠に和してつけものとなし、又菓子にも代用す、又煠でゝ水に浸し苦味を去り、酢醤油にて浸物とし酒の下物となすべし、葉は毒蟲の刺したるに揉みつけて効ありといふ。

杜鵑

杜鵑は候鳥の一種にして鳩よりは稍や小さく、體の上面は灰黑色にして下面は白色に數多の橫黑條を帶ぶ、嘴はやゝ大なる方にて少しく曲りて尖れり、脚は全部黄色にして、恰も啄木鳥



に類す、時鳥類は晩春我が國に渡來して各地の深山中に棲息し夏月中、鶯、頬白等の巣中に產卵して孵育せしめ、初秋南方に向つて去る、食蟲性にして樹木の綠葉を食害する毛蟲類を食するが故に益鳥として保護せらる、されどこの鳥は天蠶兒をも食ふが故にその爲めには有害なり、時鳥は夜陰に空中を鳴き渡ること多し、形體は見ること稀なれども聲は屢々人の聞くところにして頗る悽愴、一種の詩情を喚起せしめ、古來盛んに詩歌に入る、郭公、筒鳥共に時鳥の一種にして郭公は形狀羽毛時鳥と大差なけれど、體はやゝ大なり。夏日山地に見るものにて鳴聲のカツコウと聞ゆるよりこの名あり、又筒鳥は其鳴聲恰も筒を吹くがごとくぽん／＼と聞ゆ。

時鳥一二の橋の夜あけかな　其角

行燈を月の夜にせん時鳥　嵐雪

ふる雨に位つけたりほとゝぎす　乙二

さてはあの月が鳴たか郭公　瓢水

時鳥まつは久しき夏の夜を
れぬに明けぬと誰かいひけん　按察使公通

思ふ事なき身ならずば時鳥
夢に聞く夜もあらましものを　攝政前右大臣

羽蟻

蟻は昆蟲類の中、蜂と粗々同様のものにして身體各部の構造は蜂に同じ、雌雄及び、生殖器の發達せざる中性の別ありて、中性は生涯翅を生ぜざるも雌雄は生殖時期に至りて二對の翅を生ず、卵生にして幼蟲、蛹、成蟲の三期を經過す、土中に巢を營み、動物質を食とし、かれて穀粒、種子等の如き植物質をも食ふ、蟻は蜂のごとく、往々同族相集まりて一の社會を組織す其社會は共和政治のごときものにして雌雄中の三性各々その天分に應じて事務を分擔し、よく協同一致して甘味の食物を見附くれば必らず仲間に告知し又疾病の時若しくは變災のありし時などにはよく親切に相助け、巧みにこれを運搬して巢中に納め、扶養の務めをなす、故に古人も蟻を稱して義虫となす、又蟻は時として他の社會と戰爭を開くことあり、この戰爭は毎日打つゞき、降雨の爲め數日間外出し難き場合に至り始めて相忘れて止むといふ、蟻は又牧畜を營み奴隷を使役することあり奴隷といふは戰爭して獲たる捕虜を勞役に使役するをいふ。而してこの牧畜といふは蚜蟲を養ふをいふ、元來蚜蟲は樹木の嫩葉につきてその液汁を吸ひて生活するものなるが、體を動かすこと遲鈍なれども體の後部より分泌する蜜汁は最も蟻の好む物なれば蟻は其蜜汁の收獲を得んと欲してこの蟲を牧養するなりといふ、その方法はこれを樹上に擔ひ上せて利益ある場所に配置し、時々其間を巡り、觸角を以てこれを打ち蚜蟲がこ



れに應じて蜜汁を出せば、それを舐りつゝ全牧場を監督するなり、その狀恰も人が乳牛を飼ひて汁を採るがごとし、又蟻の垤は泥土を積みあげて作り、全體細孔をなすこと海綿のごとしこれを成すには往々五六年の歲月を費やすことありといふ。

羽蟻とふや富士の裾野の小家より　蕪村

大川に吹流さるゝ飛蟻かな　寥松

何處までも知れぬ羽蟻や竹の奧　南枝

養生の術

まづ心法をよくつゝしみ守らざれば行はれがたし、心を靜かにして、さわがしからず、怒りを抑へ、慾をすくなくして常に樂しみて憂ひず、是れ養生の術にして心を守る道なり心法を守らざれば養生の術行はれず、故に心を養ひ身を養ふの工夫二なし一術なり。

女學校評判記（四）

上野の音樂學校

河岡潮風

△藤井環女史との會話▽

潮風生『東京音樂學校は同じ官立であり乍ら、頗る毛色の變つた、自由主義だと聞き及びますが、校風特色はどんなものでせう？』

環女史『左樣ですねエ、校風と云つて別に氣附きませんが、專門學校中で全く飛びはなれた性質のものである事は實際で御座います。美術學校なんかも藝術を主義の兄弟同樣の學校ではありますゐけれども、空氣は夫れとも違はうと思はれます。特色と申すのは、敎授方と學生との間柄が、如何にも親密で、師弟と云ふよりも、寧ろ先輩と後輩との關係を保つてゐます。御承知の通り、半ばは天才に待つ學課なので御座いますから、資性のよい生徒になりますと、先生よりも勝れた點がないでもありません。ソコデかう云ふ狀態となつたのかとも考へられます。

潮風生『僕は禮にならはぬ野人であるから、不遠慮に手つとり早くお尋ね致しますが、近時、音樂學校の校風について兎や角の非難を耳にします。是は男女混合敎育の弊害ではありますまいか。分離敎育は不可能なものでありませうか？』

環女史『非難とおつしやるのは新聞紙上に現はれた記事に基ゐたお言葉なのでせうが、私は夫んな覺ひは無いと存じまする。夫れは澤山の中ですもの、一二の間違ひは免れませんが、大體に於て、混合敎育は禍を釀すものでは御座いませぬ。また分離は到底六ケ敷いので、御案内の通り、合唱には、男女の聲が合はさつて、一つの音色を爲すものでありますから、練習上から申しても、男は男だけ、女は女だけと敎へる事は出來ないのです。』

潮風生「ハヽア成程、さう云ふ理窟があると始めて伺いました。さてそこで、なほ色々質問したいのでありますが、元來が武骨者で、音樂界など丶優にやさしい別天地の消息に通じませぬから、問を設ける法さへ知りません。何でもよう御座いますから、驚天動地の——發表したら音樂社界一同がデングリ返るやうな、奇話珍談を內々傳授して下さる譯には參りますまいか？」

環女史「……どうも大變な難題で、お答へに苦しみます。私は音樂學校に居りまするもの丶、燈臺もと暗しとやらで、何んにも存じませぬので御座いますよ。この御近所にいらつしやる、——女史(聞き洩せり)などはお詳しくていらつしやいますから、そちらへお尋ねになつた方がよいでありませう！」

讀者諸君！此會話は、去る四月九日午後七時、麴町六番町の後藤氏宅の、銀燭金屛、恐ろしく物々しき洋風應接室に、卓を挾んで、潮風生が、藤井環女史と交換したものであつた。憐れむべき哉、種とりに拙なる小生、ヘマな問を出して女史を驚かし、折角取れかけた緒を逸走さして仕舞つた。女史は大いに警戒して、顧みて他の事柄ばかり云つてゐる。致し方ないから辭し去つた。この上は、吾輩一流の探索を行つて、事實の眞相を調べ出すより外にない！！

△來觀御隨意の練習室▽

今を昔に溯る四十餘年のその春には、矢玉飛びかひ、鯨波、雲の色を動かし、碧血を流した上野彰義隊の戰も、過ぎし惡夢と消えて、此頃では、上野は平和な〳〵場所となつた。博物館、動物園、パノラマ、何號館などは、遊びに杖を曳く所、腹が減つたら精養軒。懐都合が怪しかつたら、樹下のかけ茶屋の姉さんが、圓盆に載せて出す、たべ物パクついてもよろし。花は紅、樹々の深緑、東照宮のガラン〳〵にも穩かなる有樣は知らるゝ。

本題の眼目たる音樂學校は、その森の奥ふかく、都塵を避けて、お隣りに帝國博物館、お向ひに美術學校を控へて立てる校舍である。暑中休暇以外の時ならば

この前をよぎる人は、血汐を湧き立たすやうな、洋々たるピアノの響、コーラスの聲が、野吹分く日も、風薫る日も一様に洩るゝを聞くであらう。非常に自由放任の學校とて、參觀を希望する者は大抵許してくれる。案内係りの敎務の下川惇氏はさぞ迷惑――イヤ面倒な事であらう。

本校の目的は「汎く音樂を敎授し、及び攻究する」にあるので、明治十二年十月、創めて文部省内に音樂取調係を置かれたに濫觴してゐる。かつては高師に附屬した時代もあつたが、三十二年四月改められて、現在の校名を附せられたのだ。

學課を大別して

豫科｛修業年限一年、學科目は倫理、國語、英語、唱歌、ピアノ、樂典、寫譜、體操、方舞、授業料一年に十五圓。

本科｛聲學部――倫理、獨唱歌、諸重音唱歌、器樂、和聲樂、樂典、音樂史、音響學、樂式一般、美學、歌文、外國語、體操、方舞。器樂部――倫理、器樂、諸重音唱歌、和聲學、樂典、音樂史、音響學、樂式一般、美學、歌文、外國語、體操、方舞。樂歌部――倫理、歌文、支那詩文、西洋詩文、歷史、諸重音唱歌、器學、和聲學、樂典、樂式一般、音樂史、音響學、美學、外國語、方舞。

（備考。本科豫科の以外に師範科といふのがある。甲は年限三年。師範學校、中學、高等女學校。乙は年限一年。小學校の敎員志望者に適切な學科をさづく。官費生の制度もあり。別に選科は神田今川小路の分校でやつて百名あまりの男女に別々に特種の學課を授けてゐる。市内の稽古屋の規則があつて、大規模なものと思へば可也。）

△井オリン一挺三百五十圓▽

是を見ても單に音樂ばかり授けるのでないといふ事がわからう。一週の時間は二十時間から二十八時間迄の間で。大半は實地練習である。本校には大小七十有餘の室ある内、半數は練習室なので、ピアノ、オルガン、バヰオリンと、各々一人か二人づゝ、たてこもつて勝手なるものを演奏してる。壁が特別念入りに厚いから、隣同志でも左程八ケ間敷ない。情緒纏綿たる戀の譜も奏でるであらう。若き子の眉をあからしむる壯快な曲も彈ずるであらう。何にしても却々にお賑やかな事だ。

敎場ではシンミリと講義のあるのもあるし、また、實地敎授中のもある。金髮碧眼の外國敎師が、指にま

かせて、かき鳴らすピアノの響、神に入り、折々大口あけて歌ふ聲の狼の何やらに似たるを、一方に女生、一方に男生が居ながれて聞いてるなどは、門外漢の想像しがたい光景なんめり。

校長湯原氏以下教授には、幸田（延子女史）鳥居（元老）武島（羽衣文學士）富尾（此人も文學士）橘（糸重女史）安藤（舊性幸田）島崎（本校唯一の男子留學生、世の氏に期待する處深し）吉丸（倫理の文學士）今井（從七位、箏の先生）乙骨（文學十で）語學受持の諸氏がある。助教授の主なのは、佛國留學より今、歸朝の途にある神戸絢子。ボーカリスト柴田環女史。オルガンの田村虎藏氏だらう。外人はコイベル氏の露人なる外は、ユンケル氏、ハイドリツヒ氏、フレック氏、ウエルクマイステル氏など皆な獨人だ。獨逸崇拜に過ぎると批評してる人もある位。

數年前には音樂學校氣質なるものは、質素を尊んだもので、演奏會などにさへ、男女ともに黑木綿の紋つきで平氣だつた。縮緬でも着やうものなら指はぢきされたのである。處が此頃では全く反對の現象を示して相爭ふてオシヤレとなつた。尤も其代り、その頃の學生は素寒貧が多く、樂器もろくに買へなかつた（ピアノの安物にても三百圓はする。バヰオリンは一寸人に見せて耻かしくないのは三十圓以上だ。安藤女史のは三百五十圓との噂）今の生徒は感心に、借錢質においても、樂器だけは備へつけてゐる。

△聲すれども姿は見えぬ▽

一言にして掩へば、本校は男が幅の氣かぬ學校である。その理由は總人數が女生に比して幾割か少ない點もあるだらうが、一つは立派な男が多からぬからだ。

今はさうでもなからうが、以前の男學生ときたらあまりエラクないものであつた。高等學校の入學試驗で手傷を負ふて、目的を變更したなどは上の部で、中學で落第を重ねた天晴れ敗軍の勇將もある。生れつき骨細で、體力もプアーだから致し方がない、まあ音樂學校ニデモ入らうかと云ふ風なのが大分多かつた。勿論皆がさうとは斷言しない。神聖なるべき藝術の聖壇へニデモ位な觀念を抱いて立つのだもの、成績や推知すべきのみ――ではあるまいか。

反對に女生には、左程落武者は見あたらぬ。そして

男生の意氣地なきを知悉するが故に、つねに〱威張つてゐる。從つて同敎室で敎はつても「あんな男！」と思つてるからたんと間違ひもおこらぬのだ。とはさても世の中は巧く出來たものである。小膽なる參觀人は、廊下で男女學生の肩と肩とが擦れ合ふを見て、風敎に及ぼす結果を氣づかふ者もあるさうだが、男性には慣れて、胸さわぎしたり、血が上つたりする時代は通り越してるのだもの、外國の大學校で男女混合敎育を施すと同じく別に大した事もない。尤も當局者は、世間の非難攻擊の手痛きに堪えかねて、數ケ月以前からは演奏會もなるべくは別々に開くやう。また男女生徒の談話も嚴格に取り締ると規定したさうだ。然し冒頭の環女史の答にもある如く、合唱はどうしても男女の會合を要するのだから、絕對に取締らんとするには、會場の男女席を板塀か何かで區分し、お互に聲はすれども姿は見えぬの工夫でもせねば追つくまい。處が、さうなれば人情は妙なもので、今迄相對して、大口あけて歌ひあつても何ともなかつたのが、急に意味がある様になり、何か方法を設けて相見んとするに到るであらう。背理、不自然の斷行を企つるは、水の流れを塞くが如し——竟に溢れではおかぬ。當局者たるもの、是に鑑みて、區々たる男女制限手段は講せぬがよろしい。

△宦官的人物集合？▽

筆は思はず橫道へ外れたが、要する處、女天下の觀ある大原因は幸田延子女史が權を振へるが爲めぢや。女史が音樂學校第一番目の留學生で七年海外にあるや、兄弟に露伴氏、成友文學士、郡司大尉を有し、バヰオリンの天才、安藤幸子女史を妹に持てる事は誰も承知してるだらう。女は從五位である。同校長湯原氏は正六位である。位階に於て一枚下なる如く、萬事について、女性なる幸田氏に負け氣味が少なからぬのだ。樹高ければ風多く、女、才あれば嫉み多し。女史亦御多分に洩れず、兎や角と、攻擊の的になる事夥しい。近くは東京の某紙數日を費して女史に毒言を放ち、西太

后と迄極言し、私行に立ち入つて潮風生如き正道者は聞いても身の毛のよだつ事柄を書いてゐる。無論同校の實權は女史の掌中に握られてるは眞實で、內外國の教授も學生も、一たび女史に睨まれては、榮えた例ないとは嘘ッ八で御座らぬ。海外留學生も殆んど女性にばかり任命されるのも、現在わかりきつた事である。覇氣のある者、女史の意に逆ふ者は、片端から首はねられて、殘るに宦官的人物ばかり――と某氏は評した。是も半面の眞理を傳へてゐる。何しろ技術監であるから、校長も女史が目して見込みなしとする學生は置いておく事は出來ぬ始末なのだ。けれども私行について云爲するのはヒドイ。人間は神樣でないから、お互樣に立派な顏は出來まい。なき名ぞと人には云ひてやみなまし。心の問はゞ如何答へむ。美しい白魚でさへ洗へば水の濁るものを――と、達觀した樣な事を書き添へておくより外に辭はありません。

何しろ女史は事業家である。つねに語るらく、「男ならば、やりたい事もやれるでせうに」と、女史は餘ッ程遠慮してるのである。

上の好む處、下是より甚だしきはなし。未來の女史を理想とする、音樂女生徒が、見まね聞きまね、男性を白眼で見るのは止むを得まい。男子たるもの、これが癪にさはらば、奮起して、女史のお株を奪へかし。

△月は雲より上に澄み皃▽

音樂學校に目下二ッの事件が發生してゐる。其第一は先頃新聞紙が八ケ間敷書き立てた藤井環女史の離婚が卽ちそれである。

すでに冒頭を讀むで御承知の如く、吾輩は先日本校の事情を聞かうとして女史に面會したが、どうも氣の毒でならんかつた。その後、ほかで聞けば女史が同棲八年の夫、藤井軍醫と別れたのは、色々云ふに云はれぬ幾多の事情が伏在してゐるのであつて、決して〳〵趣味の背馳など云ふ單純な問題でないさうである。それを、、、、なます、身分のある處から、兎や角新聞に書かれて、頗る迷惑らしい。お陰で學校へも行かぬといふ始

末。吾輩は對話してゐても腫れ物に觸る樣にハラ〳〵した。女史は自分の名が印刷される每に、身が縮む樣に感せらるゝにより、どうか音樂學校の評判記には、私の名を書いて下さるなと頼まれた。其時は承諾したものゝ、サテ紙に向つて見るとさうも行かぬ。愚按するに女史はあまりに細心に過ぎる!! 根性まがりの多き音樂界に於て、女史の盛名を嫉んで、ケチをつけやうとする者が、何を云つたとて、一々氣にかけてはたまるものか。俯仰して天地神明に耻ずんば、人の噂も七十五日――健忘なる衆愚の唇にのぼらぬ樣になるの日を待たるゝがよろしからう。古人歌あり。

隱すとも隱されたりと思はずて
月は雲より上に澄みけり

あゝ欽すべき哉この大度量。豈ひとり女史のみと申さむや。天下、悶えたる人、譏らるゝ人、悩みある人、壓迫されつゝあるの人、朝夕三誦して、超然と乾坤の外に、靈氣を呼吸してほしい!

第二は目下出願中の規則の大改正だ。要點は第一修業年限の延長で、從來の三年を五年以内にせやうと云ふのである。潮風生大贊成で御座る。琴だの三味線なぞいふ、幼年の昔から見なれてゐるものですら、人の前で眠氣をさゝしめぬ樣に彈く迄に漕ぎつけるには、十年の歳月を要するでないか。況んや、見慣れず、扱ひなれなかつた洋樂器での學習が、三年やそこいらでは出來やう道理がない。ヤット個中の趣味がわかり初めた時に卒業――つまり半熟の音樂家が出來するのだ。理想から云へば、五年が十年でも習ふがよろしい。

學科では主科、副科、兼科の三つを置き、主科は目的學科――即ち聲樂や、器樂に於ては、ピアノ科、オルガン科などである。副科は、音樂史、和聲樂等で、兼科は外國語又は國語の類で、從來の樣な各科平等の採點法を改め、主科百點、副科五十點、兼科三十點滿點とし、兼科は人によつて隨意とし、なるべく個人本位にして各々腕を伸べさせやうと云ふのださうな。ウマク行つたら適材教育の本旨に合し、日本樂界を振起

さす一端にもなるであらう。

△パン問題と藝術▽

本校は是迄各科にわたつて六百名以上の卒業生を出してゐる。而かも純然たる藝術家を以て立たんとする者は、北村季晴氏と其の夫人姉妹の外に殆んどないと云つてよろしい。他は皆な教師だ。是では頗る心細いわけで、進歩發達期して待つべしなどゝは、お世辭にも申上げる事は不可能である。つまりその源は只一ッ――パンの問題から來るのである。

泰西では藝術家は藝術家として、社會から充分に尊敬を拂はれて、衣食住に事餧かぬ。日本では社會惡しきか、藝術未熟なるかわからねど、教師にでもならなければ食つて行けぬのは爭ふべからざる、悲しむべき事實である。教師決してイケないと云ふ譯ではないが地方の學校などへ行けば、秀でたる音樂を聽いて刺戟せられる機會も少なく、忽ちのうちに腕は鈍るのである。又た幸にして東京にゐるとしても專門にやるのでないから、長足の進歩をしやう筈はない。獨よがりの天狗樣になつて、無意義な一生を送るのである。吾輩想ふに、人生の事業には何等かの意義がなければならぬ。然らずんば生き甲斐と云ふものはあるものでない、音樂だつて同じ事だ。諸君は各種の音樂會へ出席して、意義あり、主張ある音樂を聽きし事ありや。否や、簡單に言へば、音樂に泣かされし事ありや。多くは是れ蛙鳴蟬奏の類。歌、一たび歇むで深き印象の殘らぬは奇妙な程なり、藝術とは斷じて、かゝる淺薄なものではない!

その癖、演奏者の態度は高慢チキなのが大抵だ。鳩胸そらせてソナタを彈ずるあり。長い手を伸ばして、バイオリンを鳴らすもあり。虚榮と、衒氣の權化の樣に見えるヂ。

われ卿らに告げん。昔、樂聖ベイトーベンは、盲目なる一貧少女の爲めに、月光の曲を奏でたではないか。又た話は異れど、クリストは、使徒の足を滌いだと云ふではないか。かの同情、この恭虔、ともに吾人の師



糸の解き易い和服兼用の……

新式シンガーミシン

洋式裁縫書並ニミシン使用法書付

月賦販賣

東京、大阪、横濱、京都市内

無料出張教授

全國一般　裁縫巡回講習

東京市銀座通　横濱市山下町
大阪市心齋橋　神戸市明石町

シンガーミシン會社

……●明細書御申越次第無代送呈●……

女（その一）

森鷗外君　嚴谷小波君
坪谷水哉君　大町桂月君　序
今井翠巖君著

最近調査 女子東京遊學案内

●附録 東京實測明細地圖

全一冊洋装四六判美本
紙數……約四百頁
各學校寫眞版十頁挿入

（近刊）

（その二）

女子遊學の好指針

近時女子敎育の勃興と共に、各種の女學校年を逐つて其數を増し現今都下のみにても實に百を以て算するに至れり然り而して從來地方の女子が是等の學校に遊學する案内として刊行せられたるもの甚だ多きも、而も此種の編作は概ね粗漏杜撰單に各學校の規則を拔萃配列したるが如きものに過ぎず甚だしきに至りては、數年前既に廢滅せるものをも其儘記載し却て遊學者を惑らしむるの恐あり概して遊學者の良指針たり、好伴侶たるべきものなかりしは、著者の夙に遺憾とせし處なり、是に於て本書は此缺陷を補はん爲めに、普く都下各學校に亘りて其最近の組織、學則、校風等を詳細に調査し、凡ての遊學に關する事項は細大漏さず左の各項に區別説示せり、されば女子が將來志望する學校撰擇の上に好指針たるは勿論亦敎育界の一斑を窺ふことを得べければ各學校の經營上絶好の良參考書なり。乞ふ一本を備へよ。

▶本書目次◀

同君著 ●最近調査 男子東京遊學案内

附録……東京實測明細地圖

洋装四六判美本紙數五百八十頁
定價五拾錢　郵税八錢

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替東京二百四十番

文學士 大町桂月君著

行雲流水

正價金卅錢
郵税六錢

全一册洋裝
菊半截判
美本
紙數三百餘頁

大町桂月先生の近業數十篇を收む議論叙事抒情何くに往くとして可ならざるは無く高きを求めずして自から高く衒はず佯らず風骨稜々として氣韻生動す行雲流水の趣は當代の文壇獨桂月先生の筆にのみ見らるべし

大和田建樹君著

散文韻文 野菊

正價金四十五錢
郵税六錢

洋裝菊半截 紙數四百九十頁

大和田先生の近作出づ。漫筆の清楚輕快なる、紀行の畫趣詩味多き、歌篇の瀏喨燦爛たる、特色集めて小冊子にあり、壺中の天地、眞に作文の模範たるべし、徒然の清友たるべし。

文學士 大町桂月君著 近刊

關東の山水

四六判上製美本 紙數五百五十頁
（風景寫眞版三拾餘圖挿入）

露を吮ひ霞を喰い飄々乎として行き悠々然として止まる高山の巓窮谷の奥健脚到らぬ隈もなく筆に縱横關八州の名所細大漏らさず文章山水渾然一致し高十紙表に躍動し雲烟机邊を擦繞し人をして遺世超俗の思あらしむ洵にこれ大町桂月先生獨得の文境加ふるに地圖あり數十葉の寫眞あり中村不折小杉未醒丸山晚霞高村眞夫諸先生の挿畫あり皆當代の逸品錦上花を添ふるの觀あらむ



東京本町博文館

女(その三)

◎小賣部業務擴張ニ付謹告

各位愈御清穆之段奉恭賀候陳者從來弊館小賣部ニ於テハ單ニ弊館發行ノ書籍雜誌並ニ早稻田大學出版部其他ノ發刊ニ係ル一手販賣品ニ限リ取次販賣仕來候處在地方顧客各位ヨリ弊館發賣品ト同時ニ他店出版品ヲモ御註文相成候向尠ナカラズ其都度他店品丈ハ不得已送本方御斷申上居候次第ニテ之ガ爲メ各位ニ於テ折角御希望被成候品モ容易ニ御手ニ入ラザル等誠ニ多大ノ御不便ヲ與ヘ候ノミナラス御送金ニ關スル手數入費及御通信等ニ付テモ餘分ノ御失費ヲ釀シ候事ト相成候ニ付此等ノ不利不便ヲ除カン爲メ今回弊館小賣部ノ業務ヲ擴張シ汎ク他店出版品ヲモ御註文ニ應ジ御取次申上候事ニ改正仕リ尚一層機敏確實ヲ旨トシ各位ノ御愛顧ニ酬ヒ度存候間左記規定御高覽之上何卒倍舊ノ御眷愛アランコトヲ偏ニ奉希候

追テ他店出版定期刊行雜誌ヲ繼續御購讀ノ節ハ各發行所ヘ直接御註文相成候方御便利ニ有之候ニ付弊館ニ於テハ取次不申候

東京日本橋本町　博文館營業部

小賣部規定

一、販賣圖書

弊館發行書籍雜誌數萬種及一手販賣品數百種ノ外他店出版書籍ヲモ御註文ニヨリ取次販賣可仕候

二、御註文の事

御註文ハ總ベテ前金ニテ必ズ代價ニ遞送料ヲ添ヘ御送金相願度、御送金ナキ場合ハ一切送本仕ラズ候尤モ市內ノ御註文及各官衙學校等ヨリノ御註文ハ特ニ代金引替ニテ送本取計ヒ可申候

ルコト可有之又購買組合ニ對シテハ特ニ五歩以内割引ナスコト可有之候

三、割引及特待の事

御註文金額ニ應ジ左ノ通割引特待仕候

一金一圓以上　五歩引
一金三圓以上　一割引
一金五圓以上　一割引
外ニ乙種館友證（二ケ年有効）ヲ呈ス
一金十圓以上　一割引
外ニ甲種館友證（五ケ年有効）ヲ呈ス

四、割引の範圍

前記ノ割引ハ凡テ定價ニ對スル割引ニシテ雜誌全書並ニ豫約出版ノ如キ前金割引、部數割引、若クハ期限付割引賣價ヲ定メタルモノニハ適用セザル次第ニ有之候

例令バ中學世界半ケ年分一圓四十五錢帝國百科全書十冊三圓七拾錢世界年鑑定價五圓豫約募集中金四圓是等ハ凡テ割引賣價ヲ定メタルモノニ付割引ヲナサヾルモノトス

五、館友證割引の歩合

館友證ヲ有セラル、向ノ御註文ニ對シテハ有効期間ハ金額ノ多少ニ拘ラス凡テ一割引トス

但前項ニ掲ゲタル特別割引ノモノニ對シテハ凡テ實價ノ五歩引トス

六、割引せざる品

文部省檢定濟ノ書籍ニ限リ御送金ノ多少ニ拘ラズ又館友證ヲ有セラル、御方ノ御註文ニテモ一切割引不仕候

但學校町村役場等ヨリノ多數御註文ハ當店ニ於テ其送費ヲ負擔ス

七、御註文狀認め方

御註文狀ハ可成明瞭ニ著者ノ氏名製本別（特製並製又ハ和裝）及數冊モノニテ分賣スルモノハ編次別ヲ記入セラレ度候、「他店出版品」ニアリテハ右ノ外發行所及定價ヲモ附記セラレ候樣願上候

八、御發信の注意

御書信ハ御住所姓名等洩レナク可成明瞭ニ御認被下度又宛名ハ「東京市日本橋區本町三丁目博文館小賣係」ト御明記願上候

往々博文館編輯部又ハ小石川博文館印刷所等ヘ宛御送付セラル、向有之爲メニ行違等ヲ生ズルトモ小賣係ニ於テハ其責ニ任ジ兼ヌル次第ニ有之候

九、御送金に關する事

御送金ハ振替貯金、郵便爲替又ハ銀行爲替ニテ御送附相願度、郵便爲替ハ拂渡局ヲ（十軒店）受取人ヲ（博文館）ト御記入願上候若シ御都合ニヨリ郵劵代用ノ節ハ必ラズ一割增ニテ御送付相願度候

但普通郵便物ハ途中ニ於テ往々紛失ノ憂有之カヽル場合ニ於テハ郵劵封入ノ分ハ取調上非常ニ困難ヲ感ズルヲ以テ成ルベク振替貯金ニ依ラレンコトヲ望ム、弊館振替口座（東京二一四〇）ニシテ拂込用紙ハ各地郵便局ニ有之候

十、運賃並送本の事

送費ハ普通郵稅ニヨリ御計算ノ上御送金相願度又送本方法ニ付テハ御指圖ニ從ヒ如何樣ニモ取計可申候ヘ共當店ニ於テハ適宜成ルベク低廉且敏速ナル方法ヲ撰ビ可申候

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五十冊

毎月一回發行

和裝頗美本 ◉紙數各三百頁 ◉石版彩色口繪一葉 挿畫十數箇

▲定價一册金四拾五錢——郵稅八錢

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

第一編 **新家庭訓** 三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著

第二編 **四季料理** 宮中臣民兩流料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著

第三編 **裁縫指南** 女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著

第四編 **和洋菓子製法** 東京治庖會講師 龜井まき子女史著

第八編 **簡易治療法** 新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎭子女史著

第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君共著 赤堀菊子女史

第十一編 **編物指南** 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

(その六)

▶販賣用電話 本局二六二〇◀ 發兌元 東京日本橋區

婦女必讀の大全書

第五編 茶道と香道
水原翠香女史著

第六編 諸流生花指南
琴松園文雅君
松幸齋理常君 共著

第七編 育兒の務
醫學士 田村貞策君
朝夷孤舟君 共著

第十二編 婦人の生理と衛生
青山學院教授 牧野清子女史著

第十三編 教育お伽噺
少年世界記者 木村小舟君著

第十四編 女徳の養成
前田長太君著

第十五編 家屋と庭園
内山正如君著

◎第一章 緒論＝●家屋の意義、●家屋の目的、●家屋の種類、外六項◎第二章 各論＝●住宅、別莊、數寄屋（茶室）外二項◎第三章 間取＝●玄關、居間、座敷（客間）外六項◎第四章 門墻＝●門墻及塀、湯殿と便所、臺所◎第五章 庭園＝●庭園築造の目的、大なる庭園と小なる庭園、庭園の趣味、日本式の庭園と歐洲式の庭園、外十四項◎附錄＝●名園見聞記

第十六編 魚鳥家畜の飼養
農業世界記者 鹿野化骨君著

◎鶯の飼養●鶯の種類●鶯の繁殖●鶯の飼育◎鷲の飼養●鷲の種類●鷲の繁殖●鷲の飼育●鷲の産卵◎七面鳥の飼養●七面鳥の種類●七面鳥の繁殖●七面鳥の飼育◎珠鳥の飼養●珠鳥の産卵孵化●珠鳥の飼育◎鷄の飼養●卵を孵化する事●雛を育てる事●鷄の飼育●鷄舍●鷄の管理●鷄の種類●鷄の鑑識法●鷄の病害●鷄卵の貯藏◎小鳥の飼養●かなりや●鸚鵡●めじろ●文鳥●駒鳥●杜鵑●くいな●雲雀●雀●もず●十姉妹●四十雀●五十雀●燕●相思鳥●ひは●鶸●むくどり●木叩鳥●烏●鷹●べに雀●錦鶏鳥●白鳥●九官鳥●いすか●天人鳥●ありすい●みゝづく●ふくろ●鷲●鷹●ひたき●三光鳥●みそさゞい●おほさゞい●鶺鴒●菊頂●かけす●つぐみ●雉●孔雀●鴇●千鳥●鷺●鴨●鸚鵡●かさゝぎ●綾鳥●いかる●ひがら●こがら●やまがら●頭高●赤●うそ●おなが●鳩●田鳥●けり●鵲●鴛鴦●白鳥●かすい●しき鳥●鶉●眉毛鳥●鵐●いんこ●こきん鳥●けんくわ鳥●よし鳥●せうびく●めはそ●鶴●れんじやく●あなじ●あとり●頬白●黒鳥●大宮島●河鳥●じつしん鳥◎小鳥類の病氣と其療法●生殖と産卵作巢と抱卵◎鯉の飼養（七項◎鮫の飼養◎鯔の飼養◎鮒の飼養◎鰡の飼養◎金魚の飼養（九項）◎家兎の飼養（三項）◎羊の飼養（四項）◎山羊の飼養（三項）◎豚の飼養（七項）◎牛の飼養（五項）◎馬の飼養（五項）

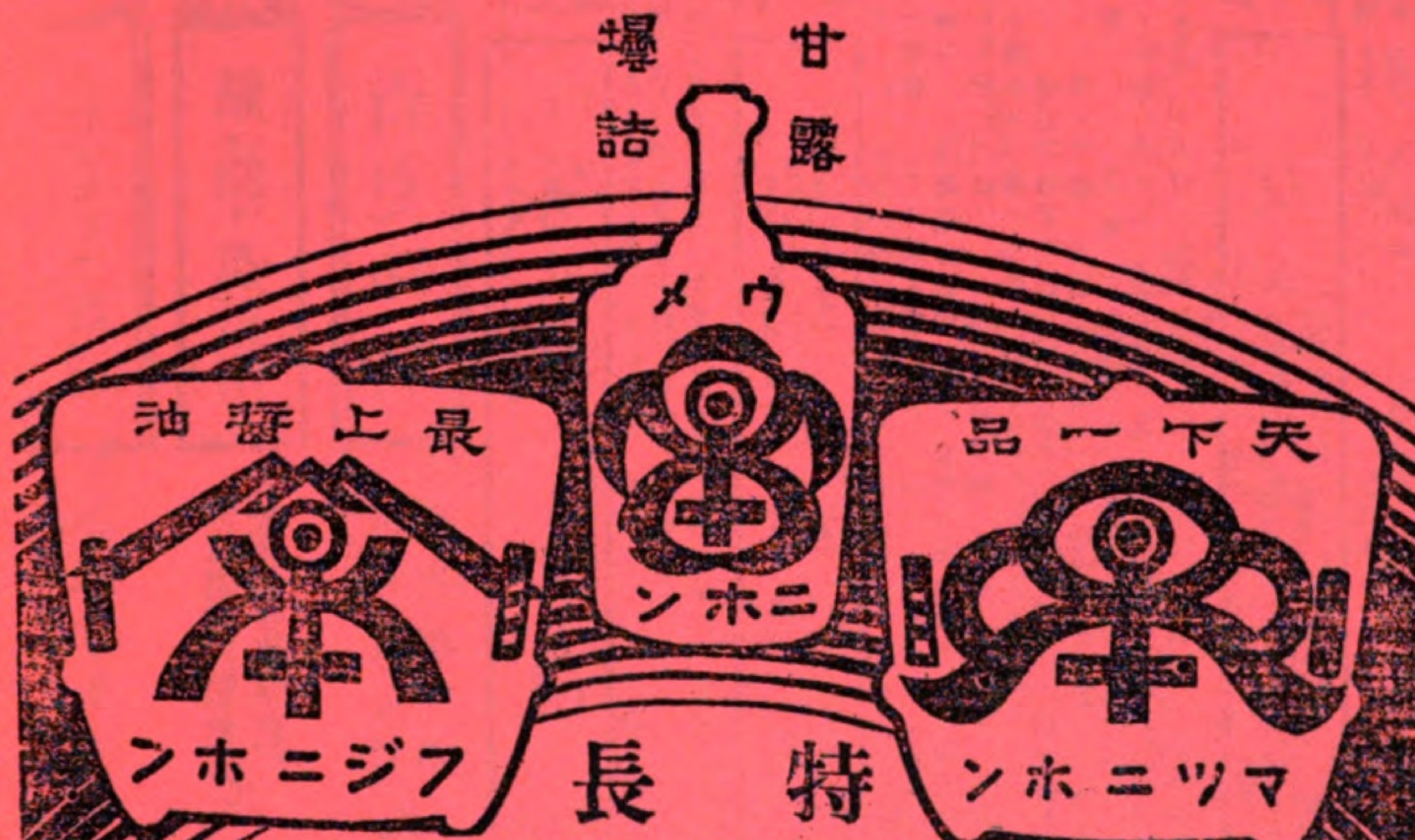
第十七編 女子作文法
遠藤ふみ子女史
松崎ふく子女史 共著

○第一章 思想○第二章 思想の整頓排列○第三章 口語文○第四章 口語と文語○第五章 文章○第六章 文の構練（其一）○第七章 文の精練（其二）○第八章 文の種類○第九章 普通文○第十章 書簡文●名家文例●附錄＝形容語○同訓の文字

（その七）

本町三丁目 博文館 ◀ ▶ 振替貯金口座 東京二四〇〇番 ◀

日本醤油



特長

色澤香味共に純良最も調理に適す

●ウメニホン印甘露醤油は弊社獨特の再製品にして品質濃厚、香味佳絶**生醤油**として使用するに適し又「ソース」代用として極めて妙也

●マツニホン印は品質優秀香味佳良にして滋養分に富み普通一般の最上醤油に一頭地を抜き極めて優等の品なり

●フジニホン印は品質最良比較的價格低廉にして割の利く頗る徳用向の品なり

●山サ、龜甲萬等と御使用比べの上優劣の御判定を乞ふ

廿（その八）

日本醤油醸造株式會社

京橋區本八丁堀櫻橋際
東京出張所
電話新橋長三一一一、四一四、四六六八、二三三五

大阪市南區新町橋東詰
大阪販賣所
電話東一三四五

世上に、取つて以て模とすべきものではないか。三省を望む！

△私立音樂學校一束▽

本校出身者が敎師になると、月給は先づ三十五圓以上である。けれど、前項にある如く將來の發展は先づおぼつかない。本項には、音樂學校に關係ありし人々で、自身主幹となつて廣く音樂を敎授しつゝあるものを列記しておく。

◎皐月會――本鄕弓町二丁目二十二番地にある。女子のみにピアノ、ヴアイオリン、唱歌の三科目が敎授するので、各一週三回づゝ、時間は正午より夕景迄 授業料三圓、毎月十日以內に納むべしと規定されてあるが、夫んな事はどうでもよい。會主 三十八年器樂部卒業生、天野アイ子女史。

◎私立東洋音樂學校――處在地、神田裏猿樂町六番地。却々ハイカラな校舍なり。本科（三年）特別科（期限なし）二科に分つ。毎週十八時間內外の授業あり。月謝ともに二圓。目下學生募集中、設立者兼校長は二十一年卒業の鈴木米次郎氏。ヴアキオリンやピアノの音は、つれに道ゆく人の足を停めしめてゐる。學生百三十名。男女相仲ばす。但、授業は全く別々。

◎私立女子音樂學校――神田區錦町三丁目十一番地にあり目的は「正則に音樂を敎めんと欲し、又は音樂敎員たらん事を志望し、若しくは官立音樂學校に入學せんとする女子の爲めに適當なる敎授を施す」と。普通科（官立音樂學校の豫備科や。一ヶ年）本科專修科（各二ヶ年）月謝は專修科の一圓五十錢を除く外二圓づゝ授業時間は九時から三時迄。校長は故と音樂學校敎授たりし山田源一郎氏。この間に色ンな書きたい事もあるが預つておく。矢つ張、生徒募集中。

◎私立東京音樂院――神田區今川小路二丁目十二番地だ。座敷まめ屋の横の露路を入ると、玄關がある。學課が別つて、普通科（小學敎員養成が目的、一ヶ年）高等科（音樂專門、二ヶ年）受驗科（東京音樂學校の下ごしらへ。一ヶ年）選科（唱歌、ピアノ、オルガン、丼オリンの內、其一を撰む。二年）とし、月謝は高等科一圓八十錢を除く外は一圓五十錢均一也。校長に三宅彌禎博士を擔さ、學監に天谷秀氏（音樂學校出身）鎭座す。學生男女合して百名以上。機關雜誌を音樂界と名づく。

日本女子商業學校

△女學校の不景氣▽

今春各女學校の新學期入學志願者は著しく減少の勢を示したのは大なる事實である。堂々と女子敎育一手販賣所と云はぬばかりでやつてゐた某々黌も、定員に滿たぬ程――ヒドいのは、定員の半分も三分の一もない始末。あゝ是れ何の現象であらうか！

高低極まりなき、日本特有の流行の波の、退潮の運に向つたと云ふのもあらう。實業家を靑くする不景氣風の仕業もあらう。誤りたる女子敎育を施したる結果、蓮葉孃の輩出したにアテられた氣味もあらう。シカシ何にせよ、帶に短し、襷に長し的の敎育たるに愛惜をつかしたのが、最大原因を爲してゐまいか？

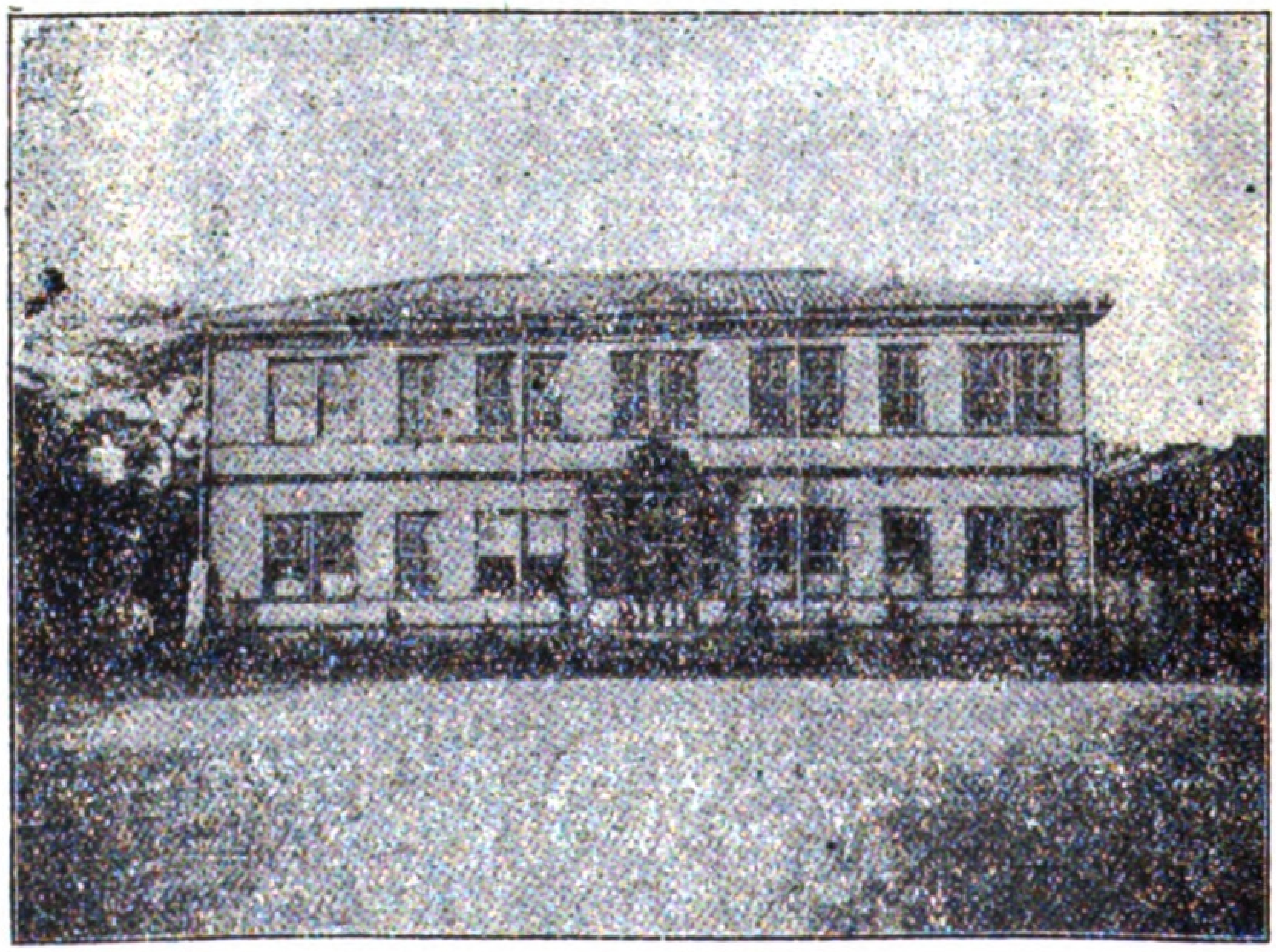
潮風生の知り合に、母一人、娘一人。生計の豐かでないのを忍んで、其の娘を、さる最高學府の家政科とやらに入れたのがあつた。過日目出度卒業した事はしたが、サテ目出度ないのは賣れ口がない一件だ。氣位が高くて妻君にはなれず、と云つて銀行會社の女事務員は先方から御免を蒙るし、終に致し方なく。母校の小學部の敎師となつたが、驚く勿れ、月俸タッタ六圓也。諸式の高い今日これではやつて行けやうはない。惡くすると、婆さんの干物と、若い女のミイラが出來さうだ。親が凹めば、娘は倘更ショゲ込んで、日々割引電車を利用して、職を求むべく血眼になつてゐる。

皆な皆こんなでは女子敎育も考へ物だ。處がこゝに風變りな學校あり。その名を日本女子商業學校と申侍る。麴町區土手三番町二十一番地にある木造洋館が夫れだ面積はタッタ三百五十坪に過ぎざれども、抱負の大なるは、大千世界も物かは、專ら時勢の要求に應じて、立派な腕のある活動的實用婦人を作ると云ふ。夫れかあらぬか、先頭の新學期には豫定以上の申込者があつたさうな。是から一歩立ち入つて、此學校の評判を試みる

△六年間に廿倍の増加▽

明治の女子教育界の一異彩、嘉悦孝子女史は、九州の政治家、嘉悦氏房氏の娘である。男まさりのシッカリ者、理想の夫と定めた人を先だゝせてよりは、雨の如くふる結婚の申込をハネつけて、生涯を獨身で暮らすと決心した。家庭に注がるべかりし愛を社會に注いで、創策奇拔、つとに育英の事業に從つてゐた。明治三十六年女子敎育の風潮が、長袖式、お孃樣本位なるを慨して、女子商業學校をおこさんとし、先輩土子金四郎氏に計つた處、大いに贊成され、法學博士和田垣謙三氏を校長に戴いて、同年一月神田錦町の東京商業學校の一隅に呱呱の聲をあげたのであつた。(愚按するに、和田垣氏を校長とした理由は、文部省へ交渉の便宜、早稲田その他の名士を引つぱり出すに都合よい爲であらう。但し此事内證內證!)

日本女子商業學校



最初の生徒は僅かに十一人。流石の女史も面くらつた。是ではならぬと、人に知られぬ苦心をした。かげ幽かなる殘燈のもとに、思案投首、儘ならぬ世をかこちて、吐く溜息も白き冬の夜。如何に悶えた事であつたらう!

かくて兩三年する中に追々生徒も加はつた。運命開拓に力めるは、山を登るが如きもの——苦しくとも、歩一歩に眼界は展けてゆく。苦しみの樂しみとは正に此事だ。もう一と奮發と振ひおこす勇猛心を扶け

たのは矢野次郎氏。大田黒重五郎氏へ口をキイて、今の校舍を安くゆづる樣に云つてくれた。一方當時の成金の一派、鈴木善五郎氏の夫人が、女史の幼な友達であるより、手をまはし、女史が所持する鐵道公債を高く買つてもらひ、不足の分は貸してもらつて、三萬金を得粗末ながらも獨立した今の校舍を建てたのであるとは云へ敎師に充分の手あてをする事はまだ出來ぬから、なるべく只で働いて吳れる人に願ひ、女史も眞黑になつて働いた。東京に移り住む、で廿數年、まだ三越、松屋を知らぬ位の奮闘主義。六尺男子も三舍を避けねはならぬでないか。夫れでも借財二千圓——さて〳〵


校長和田垣博士

私學の經營は六ヶ敷いものであるわい。

尤も今日では、借財も美事に返却され、學校全體女史のものとなり、學生總數二百六十一名創業當時の二十倍となつた。

『ホンニあの時は苦しう御座いました。今は少しは樂でもありますが、まだ〳〵前途は遠う御座います！』と、安部磯雄氏の口調を女にした樣な齒ぎれのよい辯舌で吾輩にも語つた。眞に同感の至りである。

△放任主義の敎育▽

本校の課目を分つて、

本科（修業年限四ヶ年、入學資格小學卒業程度）

高等科（修業年限二ヶ年、入學資格、本科及高等女學校卒業

速成科、裁縫高等科、同普通科（修業年限各一年）とする。生徒の父兄はどうしても商家の子弟が半數を占め、農工、官公吏これに亞ぐ。新聞記者と、僧さまの子はタッタ一人づゝだ。年齢は十三位から二十まで位が一番多く最低十歳、最高二十六歳——但し是は速成科の生徒で例外であるといふ。

生徒の風俗は質素である。校長の『放任主義』のセイか、思ひ思ひで、髪の結ひ方の如きも、桃われあり。マガレットあり。島田、ちご輪、ひさしがみ。精しく捜せば丸髷もありさうだ。リボンも殆んど用ゐてる者がなく、ヨシあつたにしても幅の狹い、色の澁いのが多い。從つて、顔容も是に準じ『勤儉主義につき造作簡略に致候事」と云はんばかりだ。その代り衞生美人に富むでゐる。先日も嘉悦女史が數人引卒して上野へ出かけた時、櫻樹の下の計量機で計つた處、『妾十六貫二百よ』『妾は十五貫カッキリなの チト痩せたワ。』など話しあつてるので驚いたとか。强壯の子孫を得んとせば、本校の出身者を娶るべきであらう。若い男に忘れない間に敎へておく。

學監嘉悦女史



敎師は男女十數人あれど、別にとり立てゝ申すべき事もない樣也。背が低かつたり、高かつたり。眼鏡と髭の有る無しは、世界の大勢に影響ないから畧す。學課では簿記とタイプラ

イターがすぐれてゐると云ふ事。

生徒の中で特に志望するものは校舍の裏の寄宿に收容する事になつてゐる。六疊に三人づゝの割合でドシ込むで六十二人の少女事務員を起居せしめつゝあり。一ケ月の賄料七圓。十六貫女學生連のいかに健啖なるかは左表を見て知るべしだ。

寄宿舍un一日分消費高（四月十二日獻立）

朝　味噌汁	晝　すまし汁	玉子やき若菜むし盛合せ
米　六升（一圓廿六錢）	米　六升（一圓廿六錢）	米　六升（一圓廿六錢）
麥　一升（九錢）	麥　五合（四錢五厘）	麥　一升（九錢）
味噌五百目（十七錢半）	豆腐（十錢）	玉子六十（一圓八十錢）
みつば（二十五錢）	白魚（五十五錢）	あこう（一圓七十錢）
たくわん七本（卅五錢）	煮だし（十五錢）	小松菜（三錢）
醬油二合（十錢）	あをみ（五錢）	たくわん（卅五錢）
	醬油五合（廿五錢）	醬油三合（十五錢）
	たくわん七本（卅五錢）	だし（十錢）
		さとう（五錢）
計二圓二十二錢五厘	計二圓五十七錢五厘	計五圓四十八錢

計十圓二十八錢。外に瓦斯代六十錢。炭代二十錢。

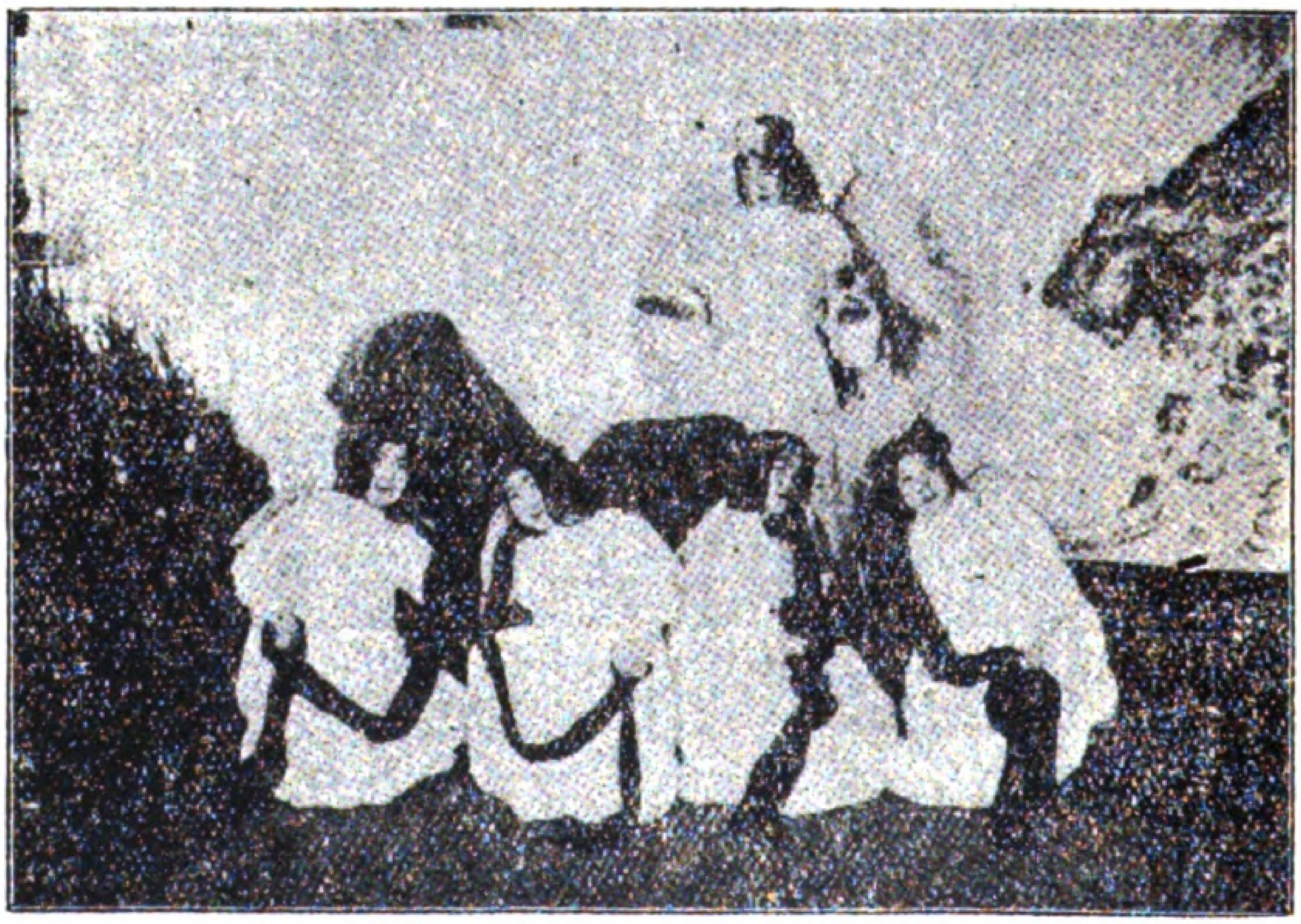
舍生は却々活潑である。よく騒ぐ、嘉悅女史は母ともなり姉ともなりして、坐臥進退、何くれとなく世話し、怒るな働けの校訓の活きたる模範を示しつゝあるのだ。

△共稼ぎの樂しみ▽

飽く迄も流暢りなる和田垣博士、かつて駒場農科の試驗に「細長主義と、太短主義との別を示せ」と、禪の問答的の出題をした。智奇ソロモンにも勝る智惠者の一生徒あり、墨くろ〲と答へて曰く「シンポーのポーは、細くして長し。ドロボーのボーは、太くして短し」と。博士案を打つて叫ぶらく、是なる哉、是なる哉と、滿點を與へたとやら。

博士がその主宰する本校學生に教ゆる處は、この細長主義である。辛棒萬能である。忍べ堪えよ。心變りする勿れ。軒の雫の石を穿つが如く氣長かれと云ふのである。この點に於ては消極的の訓戒を垂れ〲あるのだ。

また學監の嘉悦女史は寧ろ積極的に活動を强ひつゝあり。「怒るな。働け」は、女史の今日あらしめた金言で、精力主義を意味してる、人生誰か憤怒あらむや。シカモ濫りに怒り妄りに行動するは、害あつて益なき業と申すべし。憤らば、努力一番して、力行し、禍を轉じて福とする樣に心がけねばならぬ。それには働くのが一等ぢや西哲は「勞働は萬事を征伏す」と云ひ、わが俚諺に「稼ぐに追つく貧乏なし」と說けるみな勞役の報酬の如何を闡明したものなのである。吾人はみな苦を避けて樂を希ふ。勿論樂にして求むるまゝに來るならば、願つたり、叶つたり、これ程結構はないが、さうは問屋でおろさない。極く少數の人を除くの外は、皆な衣食住に腐心せなきやならぬお互ひである。然るに馬車に乘つて三越へ行く事をのみ夢みて、手鍋さげて、流しで立ち働く世話女房とならんとする者は曉の星にも似たものである。たゞ身に持てる才と勇とを無二の資本として、赤手空拳を振つて、成功城の正門を打破せんと試むるが如き、男らしき覺悟の良人を扶けて、倶に偕に額に汗して稼ぎ、自己の領土と運命を開拓し、共白髮の曉には、馬車にも乘れば、自働車も飛ばし、二人の肩に背負されぬ位の譽と富とを作らうと心がける娘は少ないのである。女史の主義は滔々たる此風潮を憂ひて、本校生をして



卒業式の餘興「羽衣天女」

この共稼ぎの快樂を歡迎する女生徒を作らうと云ふのである。女事務員や、女店員も惡くはないが、願くば「家庭に缺くべからざる働き手」を供給せやうとするのだ。校長の細長主義と、學監の勞働主義とが經となり緯となつて完全なる日本女子商業學校風は織りなされるものと云はねばならぬ。

一例を擧ぐれば、本校第一回卒業生に、岩谷梓子と云ふのがあつた。嫁して海を越えて、天津の中東石印局主、富成富吉氏の夫人となつた。數年嘉悅女史に鍛はれた効能は忽ちにあらはれ、算盤も簿記も、金錢出納も敏捷だ。頭を低くして身の程を知つて働く――と云つて、主義なく、理想なきグウタラ女とは違ふ。この好内助者を得たる石印局の繁昌は察すべきではないか？

德は孤ならず、隣近所の獨身者もはじめ噂に聞き、後には實地に見て、大に感心し『あんな嫁なら貰ひたい。女子商業學校はエラキ哉』と馬鹿に感服仕つてるといふ話。それとは變れど、近く落手した手紙を添えて、日進月進のこの女學校を祝福しておく。

△早稻田商科生よりの手紙▽

拜啓先日は御多用中參堂失禮仕候。その折お話しの評判記如何相成候や、女子商業の方については、小生面白き話を左に御報申上候間お氣にめしたら御採用願上候

去る頃の水曜、丁度和田垣博士の經濟史の講座にあたり候。號鐘鳴りても出席にならねば休講かと思ひ居る際、例の肥滿したる體軀を運びて入り來り、『ドーデス諸君、よい時候になつたね』とばかり椅子に倚られ候。『此前はスミスの富國論の話をした筈だ。今日は續きをやるのだが、櫻が咲いて人が浮かれ出すと、死學問は無用の長物さね――諸君も性根が坐らんでせうハ、ハ、ヽ。時に先日の陸上運動會はどうでしたナ婦人席に觀覽者が多くて滿足したでせう。駒場や大學の運動會でもさうだが、現在の日本の狀態では、慶すべき風習かも知れんです』と、ソロ／＼脫線しかけ申

候。

『現に昨秋大學の運動會で、僕は活例二三を見たよ。就中その一つは私の知り合ひの陸軍少將の娘と、醫科大學生なのだ。僕は友人の肩をツヽいて『かしこを見よ。好配偶はまさに成り立たんとしつゝあるではないか』と云つたて、果して幾干もなく、結婚式を擧げたでも妙齡の淑女が、智勇兼備の青年の競技を觀、嘆賞しかつは、終に是をラブするに至るは當然の事だ。古句に「嘆賞變じて戀となる」とあるも此の消息を云つたのであらう。宜なる哉、有名なる男子專門學校の運動會には、佳人集る雲の如く。勢力ある女學校

演奏場の飾り



のそれには、男學生手づるを求めて入場を希ふの事、渇者の水を想ふが如し。とでも云ふか乎。ワッハ、ハハ！』と天井が拔けんばかりに笑はれ候。なほ言をつぎて、

『女學校の話で思ひ出したが、諸君も御承知の通り、僕は女子商業學校の校長に擔ぎ上げられてゐる。幸ひと校運隆盛に赴いて、出身者の評判もよろしい。けれども何と云たとて女は男に合て一となるもの……無論男だつてさうだが……生涯ミスで暮せるものでなし。どうで良妻賢母とならねばならぬ。會社銀行に賣口のあるも有難いが、一般敎育ある男子諸君が、滿腔の同情を注いでほしいと思つてます。

僕は當早稻田の商科生諸君に望む。イヤ願ふです。僕の學校出を貰て下さい！媒妁口を利ではないが、躾は充分にしてあるし。活動婦人の要素を備へた立派な淑女です。決して、和田垣謙三に廂髪を結した樣な女性ではありませんよ。「ハツハツハヽ！」と又候卓を打て笑はれ候。あゝ是ある哉。是ある哉、博士の本能寺はこの點にあるに候ひき。嘘より實に入り、飴に藥を含ます底の手段の巧妙さ。髭男百五十人、戀愛論を聽く心算なりしを、いつしか變じて、女子商業出身者賣込策となりしには、いさゝか荒膽ひしがれ候。博士が二時間にわたる大演說、をり〳〵それとなく、この事を繰りかへされて、少なからず生徒を感動させ候。成程小生もよく考へて見れば、此のセチ辛き時節には、生やさしい方法で渡れるものにては無之、毎七月早大商科より出づる和製商學士三百名に近きも、不景氣の矢先、買はれて行くは、オタマジヤクシが孵る程の割合にて、他は無官の大夫に御座候。小生も是ではならじと覺悟候ものから、卒業後は蝸牛の樣な店でも開かむと考案中に候。夫れには矢張り貰ふべき者を貰つた上で、二人とも稼ぎせねばならじと存候。小生とても赤い血のある人間。木から生れた男ならねば、妻を娶らば須らくなどゝ吟じたり、又た時には天に祈りを立てたりしてをり候へ共、さて飜つて、冷かに考へれば川柳子の所謂「オマハンとワタイで家がおさまらず」とか、沙翁の「薔薇に刺あり、泥土銀を產す」とか、昔の堅いおぢさんの「女房は臺處から貰へ」など云ふ語の思ひ出され花一と時の眺めに百年の幸を棒に振つては算盤玉に合ひ申さず、かつは小生の身上では、簿記のペンより、歌筆嚙むで「月夜よし……」などゝ、すぐに亭主を尻に敷島の三十一文字つらぬる嫁御寮では、閉口頓首と存じられ候。「闇」の枕言葉が、ぬば玉であらうが、人魂であらうがコチヤ關はぬわいなど云ふ風に澄して、其代りに仕切書とか、手形、書換などの解る婦がほしく相成申候。今の靑年は小悧巧にて、新聞も安くて面白い萬朝を眼の疲れるを忘れて購讀し雜誌は大抵本屋の前の立よみにて埒をあけ。授業料は

出來るだけ滯納さすが得。賄の飯を食はぬ日はパンにして貰つてくるなど云ふ術を知り居れど。愚なる哉、細君の撰擇に、ハイカラを好むで、屋臺骨に大穴あけらるゝに思ひ及ばずとは、何ぼう無念に候はずや。小生は爾今和田垣博士の子分となつて、女商出身者歡迎論を天下に呼號し、近々同校學監の嘉悦孝子女史にあつて、一二八見本の提供を請はんと存居候。先づは和田垣博士の熱心と機敏御紹介に及び申候也。

四月下旬　早稲田の古狸

河岡潮風翁卓下

小ピットが宰相となつた年齢に同じだと威張れる潮風生を捉へて翁とは心得ぬ呼び方だが、此の外の文句は皆な吾が意を得てゐる。血眼になつて容貌のみを求むる青年紳士にこの手紙を見せてやりたい。



お孃さんの洋行土産

扇　子

◎新歸朝者高橋わき子

さる三十九年紐育の富豪シップ氏夫妻に伴はれて、渡米せられた高橋男爵の令孃和紀子は、この三月二十三日横濱到着の汽船コレア號にて目出度歸朝いたされました。孃が彼地にあつてシップ氏夫妻より親身の娘以上の鍾愛を受け、ことに賢婦人として有名な同夫人の感化によりて、そが天與の美質に愈々光彩を添へ、社交界に出でゝは到る所日本の美花として持て囃されたといふ事は、すでに新聞紙にも傳へられた處で御座います。讀者の中には和紀子孃の幸福を羨んで御出での方も、恐らく少い事では御座いますまい。それにしても類稀なる良家庭と知らるゝシップ氏の家庭は如何いふ有樣であるか、夫人の孃に對する躾方は何ういふ風であつたか、シップ氏夫妻はいかに孃を可愛がられたか、さてはまた孃が交際に就いての感想は何うであらうか、これらの事どもに就いて目のあたり令孃の物語らるゝを伺ひますならば、感ずべき事、學ぶべきこと面白きことも隨分多いことゝ存じましたから、記者は令孃が御歸朝の日より三日ばかりを經て、赤坂表町なる男爵家を訪づれました。御門を入りますと金紋付の奇麗な俥が二三臺待つて居りますので、大方お孃樣へのお客樣であらうと思ひながら御玄關に進んで案内を乞ひました、十四五歳の少年がお取次に出て、丁寧に挨拶をして奥へ入りましたが、やがて出て參つて、「お孃樣は今來客の爲に御目にかゝり兼れますけれど、御一緒に彼地へ御出でになりました周防さんが御逢ひ申して御話申上げませう」との事でした、導かれましたは大玄關傍の應接間。掩ひのない黑檀の卓子を始めとして、敷物から窓掛からすべてシブいものばかり、華かな色とてないお部屋には、茶菓などとりはこばれた人が矢張り袴を着けた男の子で、其の態度の極めて慇懃で御座いましたのもいかにも、相應はしいやうに思はれました、周防女史はお年の頃は卅歳計り。もの腰、お言葉すべて飾氣なく眞率で、確固した御婦人で御座います「折角の御出で故、お孃樣が一寸でも御目にかゝるとよいので御座いますけれど、御歸朝後非常に御忙しくて、只今も丁度五六人のお客樣が御出でになつて居りますやうな譯で殘念ながら私が御目にかゝる事といたしました。もとより御滿足おさせ申すやうな事は出來ますまいけれど、お孃樣につきましてならば、一通りの御話は出來ようと存じます」とまづ御挨拶があつて、さて色々と話されました。

◎身體の發達驚くばかり

私は以前から此方樣と御親しみがありました譯でもなく、お孃樣の御渡米に就いて、ふとした御緣からお伴をいたす事となつたので御座いま

すが、何でもお嬢様は亞米利加へ御出になる前、お身體が弱くて、學習院の方をやめたなりで一年許り遊んで居らしつたとの事で、私が初め御目にかゝりました時分は、お顔の色なども至つてお勝れになりませんでした。それが彼地へ御出でになりまして、シップ家の規則正しい御生活にお入りになりましてからといふもの、お顔の色もだん／＼赤くおなりになり、お胸なども大層立派に廣くおなりで御座います。ことにお身の丈などは一年許りの中に三寸もお延びになつたのです。私は長らく看護婦をいたして居りましたから、人の身體は注意するとしないとでどれ丈け影響するものであるかと申すやうな事は、よく／＼承知いたして居りましたので御座いますけれど、實際これ程まで違ふものかと驚いた事で御座いました。一體シップ夫人もなか／＼よく御運動なさる方でして夏などパヘパといふ處の御別莊へ往らつしやいますと、殊更烈しい御運動をなさいます。パヘパと申す處は、山海の風景を集めた小さな島で御座いまして、私共も其處へ御伴いたしましてはよく山へ登りましたり、森に入りましたりいたしましたが、何うしても夫人のお元氣には敵ひませんでした。

◎何處までも行屆いた夫人の監督

御身體もさうですけれど、御氣質も餘程お變りになつたと思ひます。もとよりお嬢様は以前から、極温順なよい御性質で入らしやいましたのですけれど、シップ夫人の御感化は愈々それに光りを添へられたと申して宜しう御座います。何しろシップさんの御家庭は彼地でも類稀なる眞家庭で御座いますし、シップ夫人も有名な賢婦人で入らつしやるので御座いますから、お嬢様が其夫人の愛撫を受けられたといふことは、此上もない仕合と申さなければなりません。夫はもうシップ夫人がお嬢様に對して、萬事にお心遣の行屆かれます事は、實に驚くばかりで御座いました。お嬢様の御勉強につきましても初めは土地も馴れないし、言葉もわからないから、學校へ入つてもホームシックなどをお起しになるやうではいけないといつて、お宅へ一々教師を招んで、英語、ピアノ、鉛筆畫などをお稽古で御座いました。一體お嬢様は何でもよくお出來になる質で入らつしやいますけれど、ことにピアノのお上手な事は天性と申上げてよい程で、お手よりもお耳の方が非常に敏く、一度おきゝになつた曲などは、早速諳誦してお彈きになるといふ風でしたから、彼地の人達も驚いて居りました。鉛筆畫は初めお嬢様がチョイ／＼物のはしへ御畫きつけになりますものをシップ夫人が御覧になりまして、これはものになりさうだから本統にお稽古した方がよからうとて、先生をお招びになつたのでしたが、夫人の御眼鏡は違はず果してよくお出來になるので御座いました。

◎ナックス孃の學校に入學

一年許り經ちましてから、學校の生活をして見ることも必要であらうとて、御嬢様はこゝに夫人の御膝元をはなれて、ホドソン河畔なるナッ

クス孃の學校へ御入學の事となりました。この學校を御撰定なさる時も夫人の御詮索はなか〳〵大層なもので、一二の學校を御聞きになつた丈けでは承知なさらないのです。方々の學校を委しく調べて、これなら愈愈自分の預つて來た大事の娘を入れてもよからうといふ處で、幸と御決心なすつたやうな譯で御座いました。このナックス孃の學校は餘り大きいものではありませんけれども、大變評判のよい學校で御座いまして、而かもナックス孃の兄さんのプロフエッサーナックスといふ方は、廿年程も日本に居られた方で、お子さんなどは日本語をお話しになるといふ位ですからナックス孃は非常に日本とは縁が深いやうに思はれるのでせう。シップ夫人から問合せの手紙をお出しになりました返事に、お孃さんは是非私の方へ御遣し下さい、さうすれば私は出來る丈け盡力してお世話いたしますからと、申して寄越されました。この學校は紐育から一里許り離れた處にありますので、お孃さんは一週間に一度位シップ家に歸られませんでしたから、シップさん御夫妻は大待兼で居らしやいました。



◎交際社會に出られた時

彼地では娘さんが十八歳になりますと學校が濟んで交際社會に出るやうになつて居りますが、此時にはまづ自分の家でダンスの會を催して、これから私の娘が交際社會に出ますといふ披露をいたします、お孃樣はまた滿十八歳にはおなりになりませんでしたけれど、シップ夫人が交際社會の有樣をも一通り見せて歸したいからとて、丁度今年の一月、大きなダンス會をなさいまして、お孃樣を紐育の交際社會に御出しになつたので御座いました、御孃樣には彼地の婦人達のやうに、つとめて人の氣を引くやうな處はおなりにならな

いのでそれほど、日本風の床しさと、無邪氣なおむばせとが人々の心を引き付けて、交際社會の花と持囃されて御出でになりました。お嬢様を交際社會にお出しになるにつきましても、シップ夫人の御心遣ひは大抵の事ではありませんでした。夫人は若い人の衣服に就いては久しく氣をつけた事がないからとて（シップさんのお嬢様方はもうみな相當のお年で、他へ嫁いで了はれたのであります）方々へ流行のものなどをお聞合になるやら、リボンは何んな色がよからうとか、洋服はどんなのが似合ふとか仰しやつて實によくお氣をおつけになりました。人に對つては私は新に娘一人をもつたので、誠に樂しく氣が若くなつたと申して居られたことも御座います。

◎看護婦は大學教育まで

私は赤十字社で長らく看護婦をつとめて居りましたが、彼地へ參つて見たいとの希望は豫てもつて居りました處から、さる方の御勸めに從つてお嬢様のお伴をいたしたやうな譯でした。丁度お嬢様が學校にお入りになつてます間は私も暇で御座いましたから、方々の病院を見て廻つたり、看護婦の仕事を觀察いたしたり、或はまた自分で看護婦の學校へも入つて見ました。彼地の看護婦には大學教育まで受けた人も少くないのですから、從つて其社會上の地位といふやうなものも、日本などに比べますと、餘程高いものになつて居ります。勿論彼地の看護婦にもひどいのは隨分居るやうで御座いますけれど、一般に向上心が强く、一通りの看護婦免狀を得た位ではなか〳〵滿足いたしませず、上へ〳〵と進んで參ります。病院の看護婦長位になつた人は大抵學資を作つて大學の講義をきゝに參るやうで御座います。斯ういふ風で彼地の看護婦は教育もあり學識もありますから、其手によつて行はれて居る仕事にはなか〳〵見るべきものが澤山御座います。

◎看護婦の慈善事業

ことに貧民に對する諸種の慈善事業は、看護婦の手によりて最もよく行はれて居ります。或は病院を建てるとか、或は學校を起すとか、いふやうな事もいたして居りますが、最も私の注意をひきましたのは、見廻り看護婦のことで御座いました、見廻り看護婦と申しますのは、矢張り其團體がありまして、それに入つて居る看護婦が、交代に貧乏人の家を見廻つて歩き、病人でも御座いませば實際それを看護してやりまして、かた〳〵其家人に看護は斯うすべきもの、衞生は何う氣を付けなければならないものといふやうな事をも敎へるやうにして居ります。この見廻り看護婦には實際私もなつて見たので御座いますが、その工合はよほどよく出來て居りまして、それがために人がどれ丈け助かるかわかりません。其他病院の構造に出來て居る浮船がありまして、貧乏で轉地などの出來かねる家の病人を乘せ、海の沖合に出て一日を過さしてやるといふやうな事も行はれて居りますが、これらはまことに有益なことで御座いますから、日本などでも模倣をいたして見たいものだと考へて歸りました。

社會百生活（二）

罪惡の潛める料理店

覆面女史

△朝の二時間

時計を見ると丁度六時、少し早いけれどこれから眠れば寢過ごすだらうと一思ひに起きて終ふ、素足に冷たい廊下を踏んで湯殿へ行つて面を洗ふ、風呂番の男が誰も居ないと思つて大きい聲で唄ひながら湯殿の戶を開ける、私が居たので、びつくりして、あはてゝ頭をさげる、楕圓形の水溜の中へ、籠に入れてつけてある黄色の千兩と水仙の花が落ちて來る水の響に震へてゐる私は湯殿から出て頭髮を撫でつけて、着物きかへて、誰もゐない店の方へ行くと、未だ大戶が閉つてゐる、暗い下駄段の前の方でカラコンと吾妻下駄を履く音がする、これは女中のお春が朝詣をするのであつた。何處の神樣へ何を願ひに行くのか……茶番のお國が又怒つた樣な顏をして、一人女中部屋から出て來た、私に逢つても、ちよいと頭りをさげた儘、お早うも、いはない、何がそんなに面白くないのか年中ぷり／＼してゐる、尤も朝起きてから晩寢るまで暗いみづやの簀子のそばで土瓶や茶碗を洗つたり拭ひたりお茶を入れたりこぼしたり、年が年中變化のない同じ樣な事をして居るのだから、嘸ぞつまらないとおもふであらう。もし私がその身になつたら矢張あんなにふくれるかしら臺所の方も大分がた／＼して來た、生洲の魚に瀧をかける、ポンプの音がする「大火鉢に火が入りましたよ」と臺處の受持の女中が眞赤な顏して報せに來た、男達も未だ起きない樣だから、その間に一寸あたりに行くまあ大變なあぶら蟲！　先月の晦日掃除に丼に一杯も殺したのが、最早こんなに殖えて終つた、柱のわれ目火地輪の後にぎつしりと詰つてゐる、義母が見たら又きたないと言ふだらう、お早うと勢よく魚屋の若衆が勝手口から入つて來た「おゝ寒い／＼馬鹿げて寒いや

と大火鉢のそばへ坐る、私しが盛臺のわきに立つてゐるのを知らないで妙な踊りの手つきをする。

ほどなく、洗ひ方も、板場の者も臺處の二階の男部屋から下て來る、ガラガラと店の重い大戸が開いた、茶の間の方へ來てみると箱部屋の前の雨戸も繰られて今日の火鉢番のおかよとお富士とが、姉さん冠りに紫だすきで灰ふるひをやつてゐる、茶棚の前のお國は相變らず口をきいて損した樣な顔、私は薄暗い帳場で昨夜殘つたおさしみを葱と煮て朝御飯をたべる、御詣りに行つたお春が主婦の



起きぬ間を忍びながら歸つて來た、間もなくどやどやと女中部屋から出て來た人達は面も洗はずに掃除にかゝる、彼方此方に賑はしい紙拂の響、箒の音、義太夫、清元、常磐津とおもひおもひのかくし藝も出て、お客の噂、藝人の評、こゝ一時間は百鳥の百囀り、笑ひさゞめいての大掃除がすむと、みな面を洗ひに行つて終ふ、大風の後、音もなく靜まつた室室の花の水を入れ替へて、欝金の布と水注を持つて、廣間、松の間、桐の間と順を追つて通つて行く、梅の間の障子を開けて池の方を眺めると

樅の古木や武者立の蔭から朽木の橋の斜に見える處は何となく中川の宿を思はせて、私しをいつも空想に耽らせる、あら鶺鴒が來て居るわ、「伊弉諾、伊弉冊夫婦より」と横丁の雛妓の寒浚が始まつた。

あゝ、彼れも又人の子、人鬼の手に賣り渡されて學び盛りの貴重な時を徒に過すのみか、神からうけた淸い身を汚れるにまかせて末は泥沼の根なし草、ひく人もなく底ひもしらぬ墮落の淵に…………浮き草のうき身の果を思はぬのである、私しも同じ孤兒の父母は都の嵯峨のほとりに在せど名のりあふ事も叶はぬ私しの不幸、三年前の夏の夕ぐれ中の橋のたもとではからずも戀しい母樣に行き逢ふた其時！　心を淸く、麗はしく、泥中の蓮の樣に身を保つて、立派な末を外ながら見せて下さい、最早云ふ事は何もないと淚を押さへて行つてお終ひなされたその傷はしの後影は、今目に見ゆるやう…………

四室の床の艶ぶきして大急ぎで店へ出ると、茶の間の火鉢の前に養母が坐つてゐる、「お早うございます」と申上ると「最早すんだのかえ」と案じてゐた程機嫌は惡るくもない眠のたらぬ爲か、目が赤くなつてゐる、夜更しは體の毒、養母さんの吩咐で帳場へ煙草の箱を取りに行く序に時計を見るともう十時前、二重まはしに鳥打帽の脊の低い人がこそ〳〵と下駄段の處から廊下へ上る誰だらうと、障子の隙から覗いてみると每日調べに來る〇〇署の刑事である。「誰方か居ませんか」と云ふので女中頭のお千代を呼んで來ると、まづ昨夜の客の名前を尋ね、それから何の問題で集つたのかと根ほり葉ほり問ひたゞして、一々手帳に控へてゐる、何だかお客を侮辱する樣な、裏切でも客に對してする樣な、一種いやな心地がする、それはまづ可いとして何時かの樣に混み入つた會合のあつた時、隣りの部屋へ新聞記者を忍ばせたのを見た時は、私は確に罪惡だと思つた、しかし又ある程度までお客の秘密を守るのも此の稼業の意氣地とやら、そこは矢張江戸氣性で、交際ふ人の心象も推はかられる、養母は朝の御飯を十一時に晝飯と兼帯今時の衞生論など、全く馬の耳に念

僞である。

午後一時から清元の師匠の處へ稽古に行く、金物屋の娘と、向ふ河岸の雛妓とが私しより前に來てゐた、私の稽古がすんだ處へ、向ふ横町の紺やの娘、角の袋物屋の伜、隣の菓子屋の息子達がどや〳〵と入つて來た、此一組はいつも〳〵の月浚ひに神田祭をどなる連中で、今日三人一緒に夕立を浚つてもらふつもりで來たとは、さぞ雷鳴がはげしからうと早々逃げて歸ると、昨日伯母の處へ泊りがけで行つた



義妹のお蝶が歸つて居た、鮮かなお納戸地に、白の鹿の子の青海波、處々に源氏模様の貝をあらはした紬友仙の中振袖に、緋鹿子の帶を胸高にしめておもちやの鳥籠を餘念なく眺めてゐる、振分け髪の童姿は美くしい紫の上を偲ばせる、店から手が鳴る、出て見ると玄關に二三臺の車がついて居た、此分では又今夜も却々忙がしからう。

△お客來

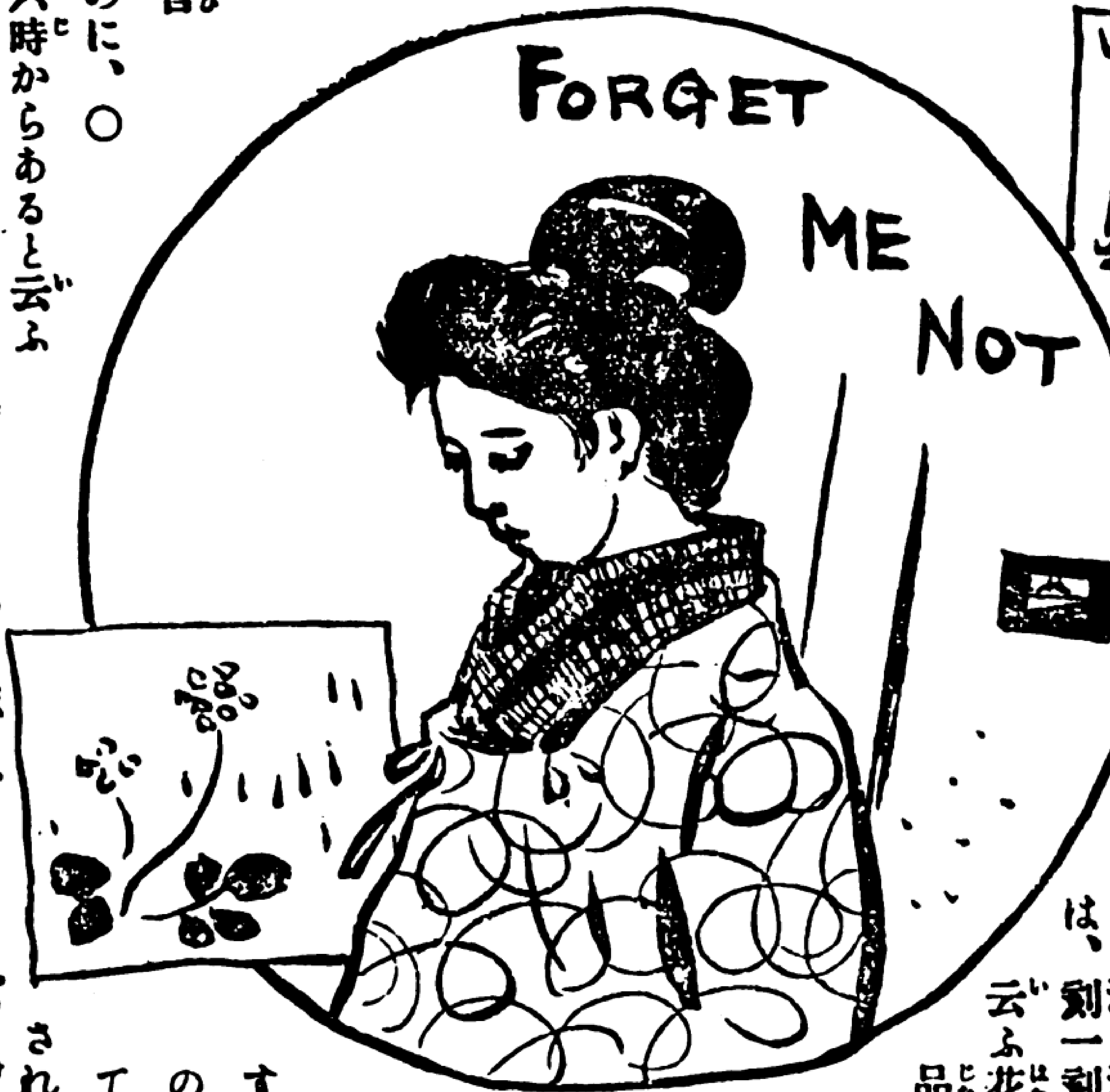
今日は義母の機嫌が惡るさう、又部屋へ引込んで畫譜なんか見て居樣もの

なら、どんなに怒られるかしれない、習字も明日にしてと本包片づけてゐると果して呼びつけられた、帳場へ行つてみると義母は苦い顔「今日は忙しいのだからね稽古事はお休みにして少し店番をしてお呉れ、お前も最早十七におなりだから少しは家の補にならなければいけませんよ」と命令だか叱言だかわからない、仕方なしに茶の間の圓窓から店の方を氣をつけてゐる、何時になつたらお客が來るのだか的のないものを、猫が鼠でも待つ様に見張つてゐるのも詰らないと思つて活版本の紫式部日記を出して讀みはじめるだん／＼に引込まれて身は上東門院の泉殿の欄に寄つてゐる様な氣になつて、うつとりとなつてゐる、耳元へ霹靂一聲『誰か居ないかお店だよ』とよく透る母の聲、見ると一人の客が上り際に立つてゐる、ハツと思つて女中をさがす、生憎其邊に一人も見えない、帳場の窓の障子に手をかけて義母が私しをみる、絶體絶命、呼び出されぬうちにと店へ出て挨拶する「潮出は來てゐるか」と大柄な物のいひ振、「一寸お待ち下さい」と女中をよびに行かうとすると「おい姉さん、僕は牧野と云ふ者だ」と突慳貪な尖り聲、いかに辨らない人だとて女中と娘とは一見して知れさうな物、天ぷらやか牛肉屋へでも來やしまいし、本當に失敬な、憎らしいと思つた爲か、返事が喉に詰つて出て來ない、其儘にして奥へ女中を探がしに行つた、先でも嘸不躾な女だと思つたらう、程なく女中のお千代が出て挨拶すると「ム、左様かヤ失敬した」と書生下馱をガラ／＼させながら歸つて行つた、お母さんに何か言れはしまいかと思つてゐると、案の條「お露、一寸お出なさい」とあつた覺悟して帳場へ行くと「お前さん今の風はあれは何です、よく御聞きなさい、此商賣をして御飯を食てゐる間は大切なのは御客樣、たとへ什麼卑しい人でも、禮儀を以つて迎へなければ今日樣に澄ません、返事もしないでつんと立つて、それで自分が澄むとお思ひかえ、お客樣はお胸で馬鹿な奴だと笑つてゐらつしやる、いつも私しが云ふ通りそれがお前の惡い癖だ、今にわかるがね……世の中は、却々それぢや渡れませんよ和歌や

手習ばかり爲てゐて何になる、お嫁に行つて御覧、むづかしいお姑の機嫌も取らなきやならないのに……いゝやさ今日喰て行く事も出來まいが、何だ馬鹿々々しい、本なんぞ最早よしておしまひ」と嚴しいお叱言で此日はもう何も讀ます、書かず、夜一夜いろ／＼と考へる、さうしてつひに「謙遜の誇」と云ふ事を見出した。

△忙中閑

今日は△△會社の連中の言込が四時からあると云ふのに、○○新聞の主筆の送別會が六時からあると云ふのでなか／＼いそがしい、臺處で蒲鉾をたゝく音がせ



氣せこましさをそへて、罪のない猫は彼方此方で蹴飛ばされる、美くしい人の姿、あでやかな衣の袖は、刻一刻に増して來て、茶の間は物云ふ花の山、梅、櫻、桃、李の品品牡丹花の艶なるもあれば水仙の清らなるもあり、人間界の春は今まさに此一室に宿つてゐる樣である、今の處、どちら附かずの私は、まあ用のない體と見られて彼處でも此方でも立退きを命ぜられる、遂にこの花園へ追ひ込まれてしまつた。すると、さあ艶を競へる百花の中で妙な香がひとつになつて空中に漂つてゐるのに醉はされてしまつて、むつとして暖室の中に入れられた樣な氣持になる、疊の上の乞食と

は聞けど流石に鮫が橋の貧民窟を通る樣な心地はしなかつた、女のさがのお化粧に目をつければ、是は將た天生の麗質、さても女を生むを重んずる親の子が、集まれば、集まつたものかな、臙脂の濃きを爭そひ黛の艶なるを競ふて一生をかげらふの夢と送るこの人達の理想を聞けば。好な物を食べ、好な物着、したい事して、高位の人を友達の樣にして、氣樂に暢氣に華やかに一生を送りたいと云つてゐる、それも一種の悟りかと私しは眞面目に考へて見た、迷ひか悟りか、悟りが迷ひか、高根に澄める秋の月、かはらぬ眞如のひとつの影もたゞ見る人の心々とどうやら悟つた樣な事を……さあ皆さんと、聲がかゝると、みな立上つて容姿をとゝのへながら、ぞろ〳〵と廣間の方へ流れて行く奥二階の會社の連中方では最早踊りが始まる、雛妓共が四五人扇子や三味線を箱部屋へ取りに來て持つて行つた、義妹が馳けて來て『姉さん踊見に行きませうと云ふ詰らないから私しいや』と斷る、泣き聲になつて『後生だから來て頂戴とせつくので仕方なしに奥二階の階子段を上り中硝子の障子の蔭から覗いて見た。

△干潮滿潮

今日義母は市村座へ義妹を連れて行つた。鬼の居ぬ間の洗濯だとみんな寄つて「あみだ」をする、茶番のお國は始終怒つた樣な顔ばかりしてゐるので、福の神にも逃られたか、お使ひの籤にあたつた、さらぬだに赤くふくらかつた顔の、風に吹かれて買物してきた時の圖は今から思ひやられるとお富士が云ふ、なんの〳〵杜丹餅で頰どころか、好きなおさつのにほひばかりでもふくらがつてはゐられぬ義理とはお千代の惡口、今夜は昨夜に引かへて五時と云ふ潮時にもお客は影も見せぬ、今年になつてこんな事は初めて『あゝ今晩は……』と例の悲観的におかよが云ふと『まだお前さん早いのだものさう云つたものでもないよ』とお千代が景氣をつける、私しはからつぽの帳場で枕の草紙をよむ、お富士が種々な御馳走を持つて來て與れた、暫くすると電話の鈴が頻りになる、廊子へ出て見ると大黒頭巾の

樣なものを冠つた中老紳士が店の上り際に立つてゐる、とり敢へず女中にしらせて、電話口にかゝる先は○○商會の××氏、明後日の六時に二十人許り行くから座敷を都合して呉れとの事、料理は並の處で其他注文は何に何々を、これ〳〵何は何に何人を見立てゝ置いて呉れとの事であつた、お千代にその通り話すと『そら私の見込が當つたらう、お茶だなんて延喜でもない、口切りがあつたから、これからはづん〳〵よ』と云ひながら、明後日の云ひ込みを臺處の番頭まで通じにゆく、ガラ〳〵ッと二臺車が店へ着く、一人は代議士の某氏一人は○○銀行の某氏全く別の一人づゝ、尤も銀行家の方へは後から二人同客があるさうな主婦が留守の爲め倔强の安息日と羽を延してゐた女中共が急に活動を始めて、彼方此方でガタ〳〵ゴト〳〵。



各地風俗の變遷

温泉場を控へたる松山市

伊豫　櫻子

伊豫の松山は皆様御存じでも御座いませう、先月伊藤公が道後温泉に入浴の爲め滯在された時に市費で以て當地撰り抜の醜業婦を甲斐無く立たん春の夜の御伽に公爵の君に奉つた處なのでございます。

△松　山　市

愛媛縣廳がある。媛を愛する縣なるからには、噪々一笑城を傾むくる様な美人揃ひの土地であらうと思つて來たとは新任某參事官殿の御述懐ぢやげな。そして茲を中心として三津、高濱、森松、平井河原、道後に通ずる鐵道もあり、毎日阪神、九州、廣島へ航海する蒸汽船の汽笛の音にも日一日と交通の便も備り、凡ての點に進歩發達して行く。之も文明とかの御陰なのでせう。

市の中央樹木の茂り美しい勝山の頂に殘る城、世の變遷の中に在りて獨り三百年の昔を偲ばせて昔の儘を誇り顔なる天主閣、松の緑を映す御濠の水。之れが久松伯の舊領地なのです。

△教　育　機　關

此頃は何地にても雨後の竹の子見る様に學校が續々出來る。然し當地にはさういつた様な種類で無く、素性卑しからざる學校が比較的に多いのはうれしい。まづ指を折つて見ますと、尋常師範學校（女子部もあり）高等女學校、農業學校、商業學校、此他に手藝何々學校と門札うつて居るのも數校ある様であります。

△五年前の松山市

は電氣燈も無く、電話は勿論汽車といつても殆で以て姫様のお辨當箱の様で、人力車つては車體の小さいそしていやにぐら／＼がた／＼もの、それであつたのに、此節では、すかしほろのうちぞゆかしいといつた様な風になりました。東京から來られた江戸子ちやき

ちやきの奥樣が眞箇に松山は萬事お公卿樣式ですねと批評されましたが、それに相違はございません。然し日露戰役の當時に、此地が捕虜の收容地となりまして市内の寺々より、神社、とう〱しまひには新築のまだ煙のたつて居る避病院迄其爲に使用される有樣で、當時は露助はんが唯一の御花客。從つて阪神九州邊の外人向の商人が入り込んで舊式の松山市は一時居留地に變化されてしまつた。東京では日本橋通りといつたやうな港町の如きは、多く一時店をしまつて、高價で貸し付ける、そこへ外人相手の店が開かれる、長崎の諫早あたりから來た凄いひさし前髪の別嬪さんがオッチンハラショと愛嬌を振り撒くのですもの。隨分間の拔けたイヤ偉大なる敗戰の勇士達は浮名を流したものでした。特に二年



前に松山開市三百年祭を擧行したので、久松伯には令夫人御同伴で久々の御入國、公園では一大歡迎會が催される、知事官舍で當地交際界の婦人連が園遊會をする、市は全く滿街飾で各商店では景物付の大割引に客を呼び、商品の展覽會もあるといふ騷ぎが二ケ月ばかりも續いたので市の外見體面はずん〱發達して昨年などは隨分無鐵砲の樣な土木工事起工を出願する迄に進歩致してまゐりました。（挿圖は松山高濱附近の海水浴場）

△當地名産伊豫絣

伊豫絣は産額は久留米の二倍で、實價は其二分の一なりとは少々酷評でありませうが、順次に品質の改良價格の低減は斯道の重立つ人々が注意して居るらしく、其他菓子は一寸戴けるのがあつて羊羹なども種々の名を付けて賣出して居る樣でござい

ます。又此砥部燒と申す瀬戸物が一寸面白いやうに存じます。これは帶淡黄色の白燒で、松山市から三里ばかり離れた砥部と申す地方が製造元になつて居ますが見たところも高尚だし價も安値なところから、外國にも販路も開けて居るさうで、名もしれない色彩たつぷりの鉢皿などよりも衞生上から申しても數等よい樣で御座います。

△生活の程度

も前に申した樣に物價も追々高くなり、交通の便も時時刻々と開けて種々の人の往復につれ自然と高進しつゝある樣に見うけられますが、でも東京などゝ比ますれば實に易いものです。衣食住などゝ大樣でなく申して見ますと、衣服の流行と申してもたいした變動があるでなく、商品の多くは京大阪仕込みだけれども、花柳社會は別として年々に流行を追ふ樣に餘儀なくされるなんて云ふ事もなし、たまに婦人の集合する會にいつて見ても分りますが、氣候の爲で若い者は綿入などを着る必要もなく、晴着は多く口綿入、紋付などは吉凶の外に簞笥から出る機會もあまり無いといつた有樣で、若い軍人の奧さん達が、やれ何會、それ此集りと、ぴら／＼される位が關の山で、土着の婦人は意氣地の無い程多く出嫁の樣であります。家賃だつて敷金なんて申ものは無し、立派な家敷門で玄關構へもいかめしく、七間、八間の土藏附でも、泉水築山迄控へた庭を眺めて十五圓も出せば鼻高々。六疊に四疊半といつた樣なのは七十五錢から二圓も出せば安心なもので收入に限りのある中等敎員などは大に都合がよろしいさうです。

米や醬油は餘り相違もありますまいが、少し住み馴て御覽遊せ、妙珍奇な松山一流の賣聲で薪炭を賣りに來る。それも炭燒のぢいさん御自身の御出馬。薪も山かづ其人が馬にどつさり積んで、炭や炭、薪や薪、と呼び歩く。魚野菜なども花の都や塵の巷では夢にも見る事の出來ぬ新鮮なのを百姓が賣りに來ます。勿論所謂官員さんお出入の八百屋が今日御用と勝手口から伺ひもします故、あの奧樣は大樣だとほめられたい方

は御勝手たるべしですが、家政に少し志ざゝるゝ奥様は、大根にゝんじん、蕗に牛蒡、と呼び歩くのをよび留めて御覧あそばしたら、意外に安値なのにびつくりあそばすでせう。

魚は瀬戸内海で昨夜獲たのを三津高濱から潑溂たるものを擔ひ込みます。此價は先年よりは大分に昇つたとのうはさですが、でも東京市内の水たつぷりの砂がさい、さよりはほんとに味のよいのが戴けます。それ故盡過てから魚を買人は近所の笑ひの種子といつた有様。序に松山から南に三里許り行くと松前村と云ふ漁村があります。茲の女は一種の姿で行商にあるく。直徑二尺もある擂鉢形の桶を頭にのせて、前帶に筒袖、魚オカインカー、鰮ノトリタテオカインカー、と始めて來た人が珍らしく思ふのも其はずです。何でも昔京の公卿の姫様が、年頃になつて自由主義を行つたので、父の君の御勘氣蒙り、習はぬ旅の心もとなく、乳人であつた此村の某女をたよつて來られたが、其家は餘り豐で無のを見た姫君は、やん事ない姿で魚の行商、それが星移り時變りて此風習となつたとか。



（挿圖は松山附近松前城址の松）

三百年前加藤嘉明が勝山の山上に城を建設される時、此女丈夫の一群が、桶に石を入れ頭に載て工事を助けた。それで其桶には今に御用櫃との燒判を用ふるさうです。三百年祭に久松伯が來松の砌り、此女魚賣連中の行列がありましたが、全く金にあかしてこれ見よとずゐ分振つたなりをしてたのが少なくはありませんでした兎に角地勢上山にも

海にも近く、溫和な氣候をうけて生活も先々易いと申してよいでせう。宜なる哉一度び數年間當所に在住された奧方樣の御評判のよろしきことや。

△此地は商業地か

否。さらば敎育の地か、否。工業？、否。たゞ長き眠の夢の醒めた場合。これからうんと力こぶ入れる所であるらしい。茲に申したいのは女の働く地と申す事で、即ち內職は伊豫絣の下ごしらへ、絣絞りに機織、之れでも一日三十錢以上一圓位の收入があり、仕事は何時も豐かであるから、嬶天下と迄行かぬとも、奧樣といはるゝ人でも隨分やつてござる。中流以下では爲ぬが馬鹿で、つまりよく働き、よく遊ぶ、とでも申しませらうか、其樂みは、貯蓄よりも、たまには衣服の一枚も新調したり、芝居見物位であらう。それ故いつもいつもお芝居は大入叶とはお目出度い事です。

△人情と方言

皮膚の觀察なれど、人は惡い方で無い、と申して質朴勤勉でも無い。之れも地理上多年の習慣の然らしむる所ですけれども、敎育には一般に熱心である樣です。勿論向ふの山口縣には頭は上らぬが、肉彈の著者櫻井中尉や子規氏は松山出身の人物です。言葉は昔京都から藩公の招きで所謂語學の先生が來られたので京式の頗る長文口が多い樣ですが、松山人は大威張で『乃公のは日本一品國語文法上一も欠所が無い』と言つて居ります。少し拾つて見ると、

有難うは（ダンダン）、左樣ならは（アバナ）、側は（キキ）、平常は（ジバ）、ですからは（ジャンケン）、下さいは（ツカアサイ）、人形は（デコ）、こんな有樣なのです。

△特に御紹介申度きもの

女性の方に御耳障りかも知れませんが、例の薩摩芋は當所では琉球芋と申します。南下して琉球ではフイリツピン芋か。まさかそんな事もありますまいが、これが誠に美味で安値です、種類は赤芋、白芋、源氏芋で、赤は東京の程美味のでありません、源氏芋と申すのは中間の代物で、其行商人は大八車に滿載して、芋や琉球芋、と呼んで步きます。一貫目の價走りで三十

錢位。盛りには八錢位に下落する。これは白芋でも此通りです。貧民は多く之を常食として居る。年二回の收穫期には近在の小島邊から小民が松山在の農家に出稼に來るが、彼等の常食は殆んどおさつで其連中が出稼中にお米のまんまを食べるのが無上の樂みとはさても〳〵。

△附道後温泉記

市から十六町。鐵道の便もある。恐れ多くも昔人皇十數代の帝には、わざ〳〵行幸遊ばした温泉で、近所に行幸村と云ふのがある。そこの龍穏寺境内に、十六日櫻とて舊正月十六日には必ず數十輪の開花を見るのがあるが、之れには孝子物語があります。温泉は澄透つて居て誠に心地がよい。それに建築も一寸面白い。周圍の鐵柵には各白鷺が頸を傾けて二の足踏んだ體。其曰く因縁は何でも一人の正直な老農が畑で仕事をして居ると、毎日の樣に一羽の極々病氣さうな鷺が飛び來つてはまた去る。そして日一日と活潑になつて來た。おいさん不思議に思つて其場所にいつて見たところ、地面から少しづゝ温い湯が湧出して居る大に驚いて村人を集めたのが抑〻温泉の始りだとか。其後幾星霜を經て今日の有樣。建築も立派に出來、貴賓の爲の設けさへおろそかならず。上は竹の園生のやんごと無き御方より、下萬民に至る迄誠に僅かのお鳥目で以て滔々と湧き來り流れ去る此靈泉に飽く迄も〳〵浴する事が出來るのも、全く聖代の餘慶でありませう。

裏面より見たる神戸市

小柳さと子

△花賣の專業

神佛への供へ花は、清淨無垢のものを撰びてこそ、信念の深かるべきに、此地の花賣娘は、特殊部落宇治野町出に限られ候は、何人も奇怪の念を抱く處に候、これには深き因縁の有候事にて、今より三十餘年前時の湊川神社宮司、折田年秀翁が、特殊部落の定業な

く而かも横暴不遜にして良民を害するの甚だしきを愛ひ、彼等をして草花を作らせ、これを市に鬻がしめなば、少しはやさしき心にもなり且つは衣食の資にもならんとて、種子を與へて奬勵し自から其草花を神前に供するなどして清淨なるを市人に示しければ、遂に今日に及び候よし、外人の食卓にも彼等の作れる草花を以て裝飾せられ候抔、よく吟味いたし候へば、あまり氣持のよきものに無之候へ共、因襲の久しき誰れも不淨がらざる所、偏に年秀翁の餘德と申すべく候。

△洋妾の跋扈

洋妾の跋扈は、開港場至る所、同一に候へ共、別して此地は甚だしく、山手近傍少しく閑雅な場所は多く彼等の住宅にて占領され居り候、見るも齒がいゝく候へ共、何も黄金の力致し方無之候、彼等は平常出來る丈け贅澤三昧を爲盡し、虛榮の本家は此方で御座いと言はぬ計りの服裝、到底も高等官や富商等の奥樣方もそばへはよりつかれ申さず候、いくら當世流行の粹を選んで、綺羅びやかなものを身に飾り、眩ゆいやうな、美しい光線を引いて、人目を惹く市中を濶歩いたし候とて、お里は拔けぬもの少し眼の肥えた人には、直ぐそれと悟られ折角の華美も何の價値なき事の氣の毒さ何んでも月の活計だけに、百圓以上頂戴して、其上四季の流行物は、旦那がお越しのせつ、ねだり候よし、神戸は洋妾本位と申候が、全くに御座候、流行物の魁は、先づ彼等より始まり申候とは穢がらはしき次第に候。

黑死病、赤痢、天然痘は、此地著名の特產病に候が年中のべつに蔓延する譯にも無之、大方は季節に起り候今も尙鼠一匹五錢にて、市の衞生課にて買入候爲め、捕鼠を專業とせるもの夥多有之候、そして平均一日、七八拾錢の收入有之候へば、下手な月給取よりもよろしく候。

△名所の荒廢

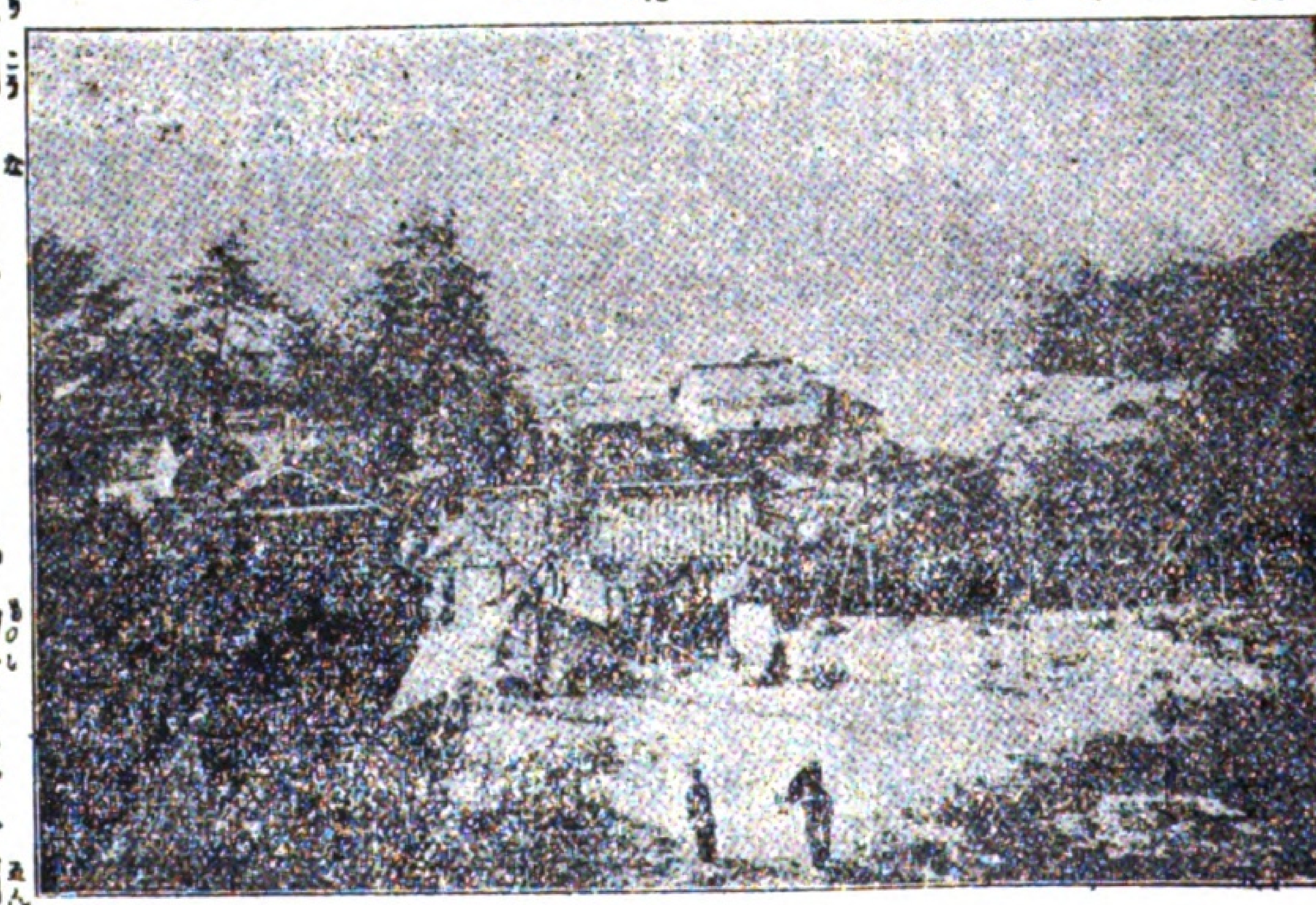
湊川は何時の間にやら消亡せ申候、それも洪水や海嘯のせいでなく、全く人爲的に、多年コツコツ鍬や鋤で取除き、今は全く平地と相成、舊河口近傍だけは

少しは有益なる建築物も有之候へ共、他は劇場寄席などの、見世物を以て充され、あたら古戰場をだいなしに致し候、兎角市人は名所破壞主義にて、今に忠臣楠子の墓も、どこかへ移さるべくと推察致し居候嗚呼。

人情は寧ろ輕薄の方に候、何を申すも諸國よりの寄り集り者、向三軒兩隣り位は、殊更別懇にいたし候へ共、こは萬一吉凶のあつた場合、手傳を頼むの伏線、一度外の町内へ轉宅いたし候へば途中で相互に顔見合せても、知らぬふりに候。

△商人の無愛想

商賣人は至つて、無愛嬌、それに法外の懸値を申候には驚き入候、四五年前迄は、外人相手になか〱甘き儲も致し候へ共、近來は彼等も怜悧に成り、どしどし代價をねぎり候爲め、従つて十錢のものを一圓に賣飛す様な、ポロイこともなくなり申候、鳥渡買物に店へ這入りても、お世辭一ッ言ふでなく、品物を手に取れば、汚れるからと云はぬ計の顔付、その代り氣に入らねば、ズンズン出て來るまでのこと、氣の毒とも何とも思ひ不申候へば、無理に氣に入らぬもの買はざる心配もなく、至極氣樂に御座候。(圖は有馬溫泉場)



市中に借家長家の多きこと、迚も他所に見られぬ圖に候、造作付にても敷金は取らず、家賃さへ月々先拂にいたし候へば、何時にても貸し呉れ申候。どうせ寄集り者の住宅、これ程簡便でなくては、間に合ひ不申されど家賃は至つて高く、疊數三十枚位の家にて二階の一つもある家なら、物言はず十圓は取られ申候、阪神電鐵の開通以來會社の營利事業として、沿道に借家を建築いたし、

比較的安く需用に應じ候爲め、中以下の勤め人は、續續移轉いたし候、假令往復に乘車するとも、此方が餘程經濟と相成申候。

△女子の職業

女子の職業は、近年餘程範圍を擴張いたし、女教員看護婦、電話交換手抔は、何處も同じくと存候へ共、なか〳〵此地にも勢力有之候、女子判任官になる目的にて、郵便局部内に雇員に相成り居候もの數多有之、大方は市民に接する、方面に奉職いたし居候、市役所なども、二三十名事務員として、採用いたし居り、近頃は給仕まで追〻女子と相成り候、停車場の出札、兩換所、花賣抔も女子の受持ち、市中を廻り候へば、賣藥行商、露店の古本屋迄に、女子の顏相見え、散髮床に女子の出現する抔勢力範圍を擴張いたし候。其他内職には、輸出雜貨品の手細工もの、多々有之收入も一日三四拾錢位と相成候へば、窮屈な目をして下女奉公せんよりは、ヅット安樂、從つて女中の拂底態〻田舍より旅費を出して、お迎ひいたす向も有之候それも少しく土地馴れいたし候へば、相當の儲口をさがし出し、親が病氣を言ひ立てゝ去り申候。

△土地の名物

此地には格別名物といふもの無之候、强ひて申せば瓦煎餅位のものに候、人は神戸牛肉と申候へ共、何も此地で飼養する譯ではなく、實に但馬より出す牛に御座候、併し同じ牛でも、但馬でほふり候ものと、神戸でほふり候ものとは、味全く異り候は、而して未だ其理窟相分り申さず候、多分氣候のせいかと存じ候が、こゝが或は名物の名物たる所かも知れ申さず候。

名物は何國でも、吹聽して誇といたすものに候へ共神戸に限つて、自慢の出來ぬ、お耻かしき名物有之候其名を南京虫と唱へ候が、外貌は犬の皮膚に嚙付居る「ダニ」と申すものに酷似し、歩行の至つて速かなるもの、四十年前、伊藤さんが、兵庫の知事たりし頃、支那より傳來したのだ、と古老の物語、今では、市中至る所の人家に繁殖し、晝間は其姿を現さゞるも、暗夜

人の静まりたる頃、宿坊とする敷居、柱の破目より熟睡せる人體に、突撃し來り、所撰はず嚙付き、その痛さ掻さは堪らず、婦人などは、其跡が直ぐ腫物と成り困難いたし候、多年官私とも、之れが撲滅に苦心焦慮いたし候へ共、一向其効力なく益ゝ繁殖いたし候、此地へ御逗留に成れば、成るべく新築の旅宿御撰定相成度候。

神宮を中心とせる宇治山田町

角田千代子

△旅客の待遇法

先づ當地に入りて多く目に付く廣告の中にて、最も奇異に感じ候ものは「何々太夫」の文字にて候。或は三日市大郎太夫とか、福島太夫とか云ふものにて、誰しも一寸其の如何なるものかを怪み候。之れは現今旅宿業を營めるものにて、昔神官とか代官衆の官を退めて、自宅の大きなるに依り、此業を營めるものに候、以前はおん師と稱へ、所謂参宮道者の常宿に有之候。二百人三百人の人を容るゝも、何處に人が在るかと怪まるゝ程に廣大の構に御座候。この参宮客は毎年諸國参宮講なるものありて、太夫の主人は秋季より冬季に掛けて、各其の得意客の國々を遍歴遊説して、來春の参宮を勧誘するものにて、この廻國を爲すと爲さゞるとによりて翌年の客數が相違して收入に餘程の影響ある由に候。之等道者の送迎やら御飯時の給仕には、決して女子を使用せず、雇ひ男が羽織袴に禮儀を正して接待する習慣にて上客になれば主人自ら送迎に力むるものに候。蓋しこの接待法は、素と神宮の尊嚴を保つの主旨にて候、併し現今は参宮團體と變じて、斯かる舊風の待遇法を喜ばぬ人多く、太夫に宿る者少く相成候。

△旅客の奪合

汽車の便開けてより、旅館は各自に構造の立派なるを競ひて、萬金を費やす者多く、一年中の收穫時は、櫻花爛熳たる陽春四月の頃にて、秋季より冬季にかけては、旅館の廣々たる店頭も客間も、誠に寂寥なる有様にて候、随て参宮客の取合を爲す有様、各自輪奐の美を競ふて軒を列らぶる幾多の旅店の軒先には旅店の若者が、身振り手振りをなし畢生の力を盡くし皆々聲を嗄らして其收客に勉むる様は眞に一場の奇觀に候。

△家屋の構造

御師の家屋の建築方は他に一寸類なきものに候。一見したるところでは、土藏式の形狀にて正面に扉なく恰も普通の家の側面の如き様子に

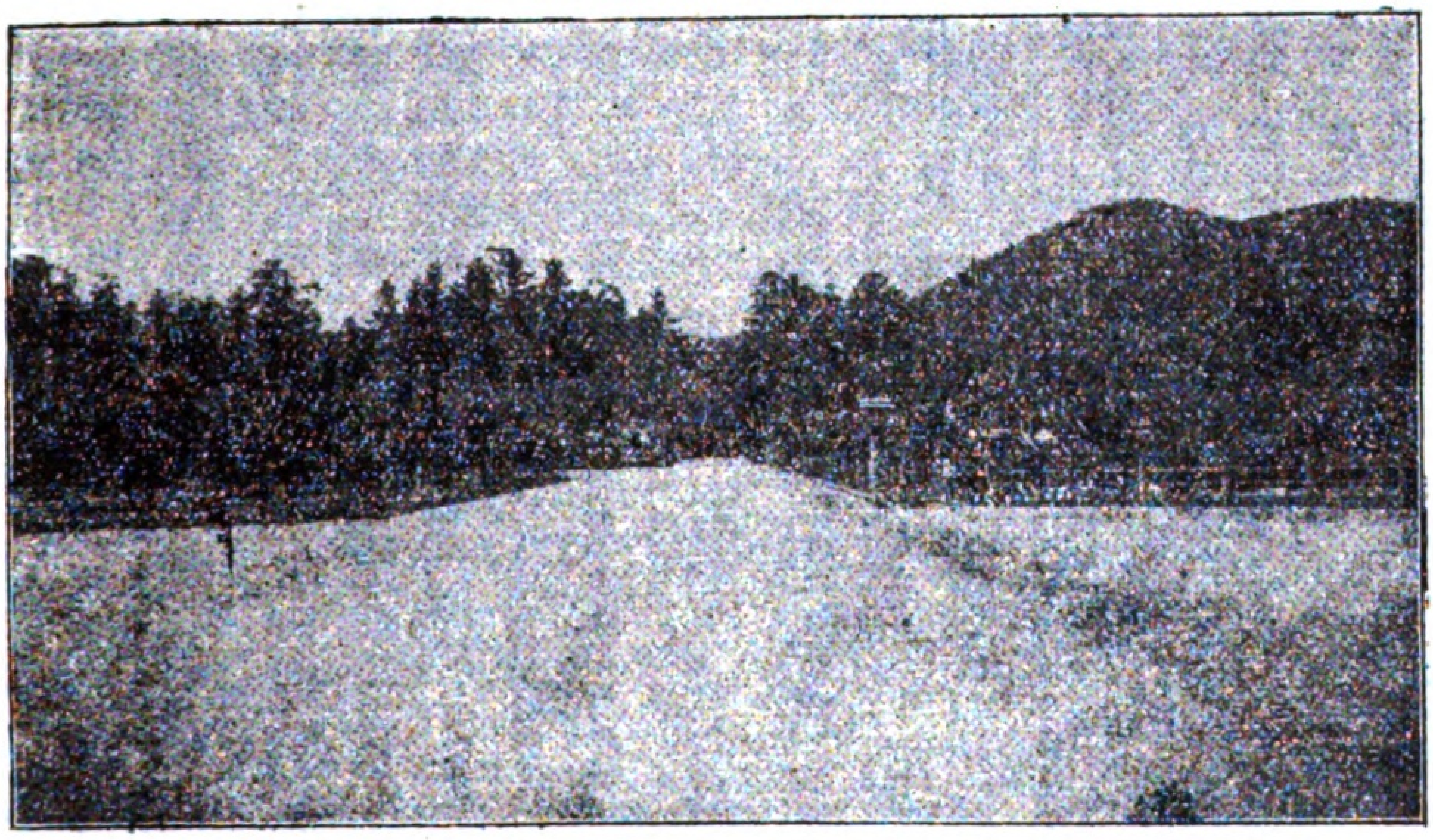
候。これ何故かと申せば、大神宮の築造に似せては、恐れ多しとの遠慮より、神宮殿の側面より見たる形に造りたるなりとの事に候。

借家の構造とても他市に見る如き長家流のものは殆んど無之、一軒毎に區別せられて、棟續きのものは御座なく候。井戸も大抵一軒一つ宛は如何に小さき借家にても設けられ候家賃は二三圓より五六圓の處に候。

△土地の風習

飛び放れての富豪は少なく候へ共、又極貧者も少なく候、一體に質素の風習にて、諸國人の多く入込むにも拘はらず、華美の風に染み申さず候、隨て思想も保守的にて生活向は槪して消極的に候、中流以下の者にても多く自分持の家屋に住ひ候。併し前と比較致し候得ば餘程派手な風俗に傾き、以前は吳服屋等にても多く地味な田舍向のもの仕入候處現今は特に新柄の賣行多き模樣に見受けられ候。

人情も浮薄に傾き候も他國人を相手とする昔より自然に注入したる思想かと存ぜられ候、親子の情愛も存外に思ひ切り能きものに有之、子供を他に養はす事など朝飯前の事の樣に思はれ候、格別に別れを惜む深き情もなく子供も却々に意思强く、平氣にて貰れ行き候。



内宮の神苑

△土産商

元來他國人の入込む土地に候へば、土產物其他の賣店の氣質は隨分不德のもの夥しく候少し變つた風を致し居れば土地の者に對しても思ひ切つた掛け直を申候、其筋よりの注意も有之餘程其風を矯め候も、未だ容易に其惡風を脫しかれ候。之れは當地繁榮の爲めになげかはしき事に候。

土產物商の陳列する物品は、貝細工、石類、掛軸、竹籠等を主として之等の物品は凡べて當地にて出來るには無之、貝細工は名古屋より石類は美濃・近江邊より、輸入するものに候。

△夜間の出入口

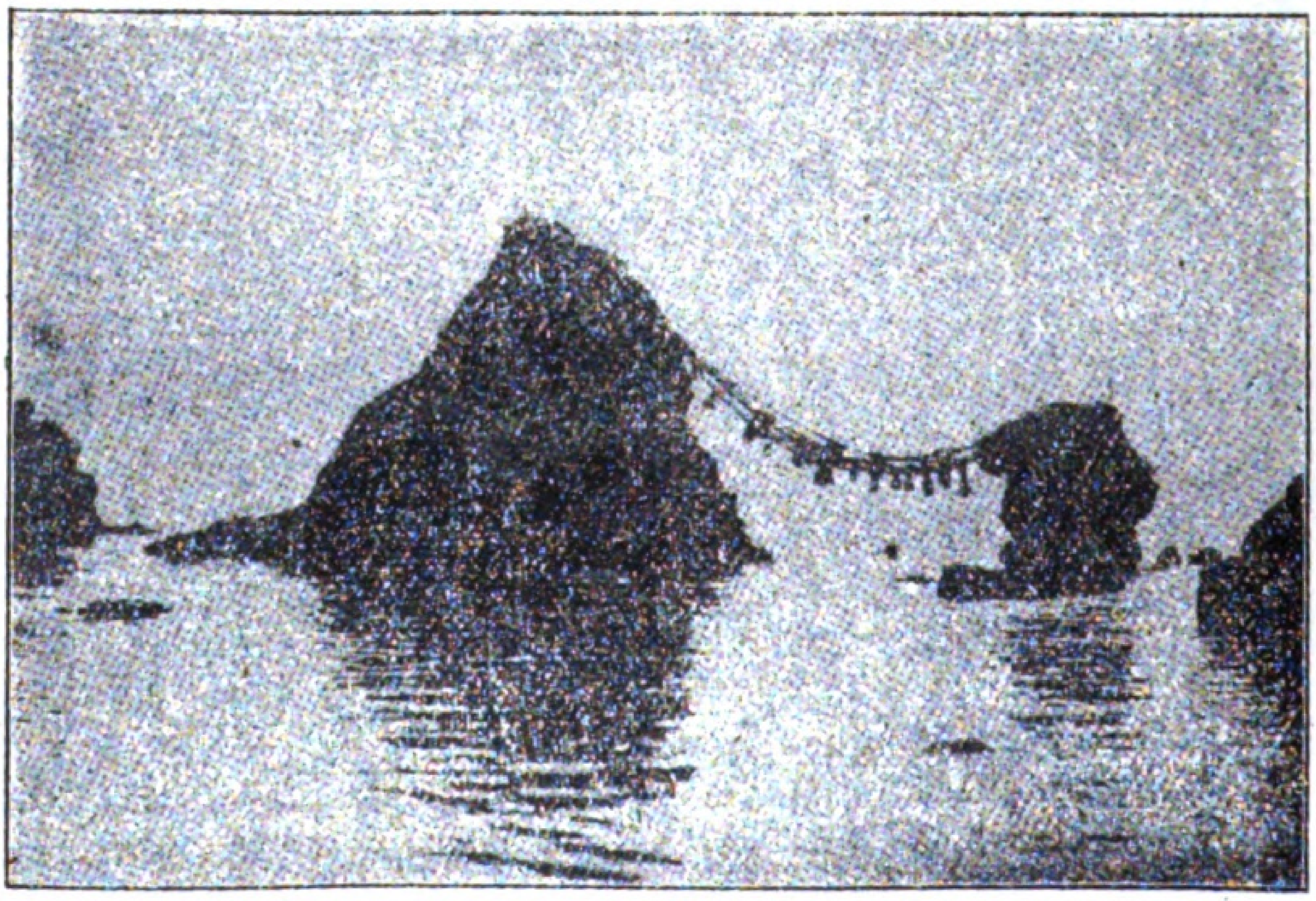
或る場所を除き候ては夜間の淋しさは又格

別に候、各商店は日の暮るゝを待ちて戸を閉じ候故、街道寂しく電信柱一本置きに點ずる電燈の輝き候のみに候。家の出入口に三尺四方許りの障子をハメそこより出入の不便さ實に御話にならず候、敷石は膝までもあり、體を二つに折らねば出入り出來ざる樣に候。

△女の魚賣

魚類は隨分安く候。普通魚市又は魚店にて商ふものは格別、他に毎日肩に荷ひて市中に賣り歩く者有之候、これは近き漁村より來るものにて漁師の妻が聲高に呼びあるくものに候。之れは餘り大きな魚は少なく候へ得共、最も新鮮なるものに候、其直段は始めての者には實に驚くべき掛け直を云ふものにて、永住者にして始終顏を見知合ふものにも買手の風を見ては二倍三倍の掛直を言ひ、其掛引の上手なる事は又一驚に値する程に候。大概言ひ直の三分の一には賣け候故、其の呼吸を知らぬ買手は隨分馬鹿を見る事に候。

△市人の遊樂



二見浦

遊樂として別に出掛ける處も御座なく候、神宮の御膝元丈けに大抵月一回は遊樂外に兩宮に參拜致し候。其他は二見が浦に遊び、春は宮川堤の觀櫻を唯一の樂みといたし候。

只此の地は其の名の如く山と田とのみ空氣は誠に宜しく氣候も寒暑中を得て、健康上よろしき土地に候故流行病等は極て少數に候。

△出産に就て

懷姙五ヶ月になれば、夫婦連れ立ちて神宮へ參詣する習慣に候其後は出産後百日目に、始めてお宮詣りとて内外兩宮へ參詣する事に候。

分娩して七夜には、命名し其御祝として翌日小やす餅といふのを知己親類の家へ配り候が其形は一種の奇形にて小やす貝に似せて作り、中には砂糖氣なしの餡を入れあり、通常七つか九つづゝ蒔繪の重箱に男子なれば皆伏せて女子なれば一つ丈け仰向けて入れ、配送するの風習に候。尚其あんの鹽加減が、からき時は、怜悧なりと致し候、之れは命名祝と申、出産祝としては、赤飯を配り候。

紀淡海峽の濤聲

伊越糸子

紀伊の國加太町と申す所は淡路島を遙かに望み山と海と相せまつた狹隘なる地區で昔しの浦町として風土人情に趣きを異にした所が多いかとおもはれます。

△風土人情

私共は一昨年橫須賀から初めて轉じましたが氣候は大分暖かで雪がつもると申す事はありません、從つて櫻花なども三月の終りに至りますと滿開致します、併し風はよく吹きます雨は少ない方で加太町より海岸傳ひ中道許の所に重砲兵第三聯隊の大隊が置かれて御座います(聯隊本部は淡路由良)もし此土地にして大隊でもなかつたら此村の開化はおぼつかないので御座います皆樣のお話によりますと元はずゐぶんひどい處でまるで島國へでも行つたやうに女子供は帶すらしめるすべを知らなかつたと申す事で私共が參つてからは一年增しに村の狀態が展開されて來りました、初めて參つた時は島流しにでもなつた樣な心地がされて每日々々故鄕を戀しがつて居りました、和歌山のステーシヨンから當地までは寂しい山道や峠が三里もあります。土地の人情は薄情ではありませんが一寸子供を使に賴みましても一々、賃金を求めます親切をしてくれるかと思つて喜こんで居りますと思はぬ賃金を請求され驚く事が度々あります併し盜人は少ない方で亦火事と申す事は實に皆無と申してもよい位各々注意致す結果は感ずべきものでございます。

△住人と職業

當地居住人は漁師ばかりで男は十三四歲に成りますともう半人前の漁師で(十七歲と成れば一人前の漁師)奉公とか學校などへ參るものは御座いませぬ、女子は十三四歲から布織です所々に機場があつて多人數集つては絕間なしに織つて居ります、それから女房連は大方山に行き薪をかるので或は布織に出るのもあります、此織物は自分達の着る品或は彼の紀州ネルを專門に致すのも御座います、住民が漁人故町の狀態は不潔極まるもので亦子供の多數なるには一驚致します。

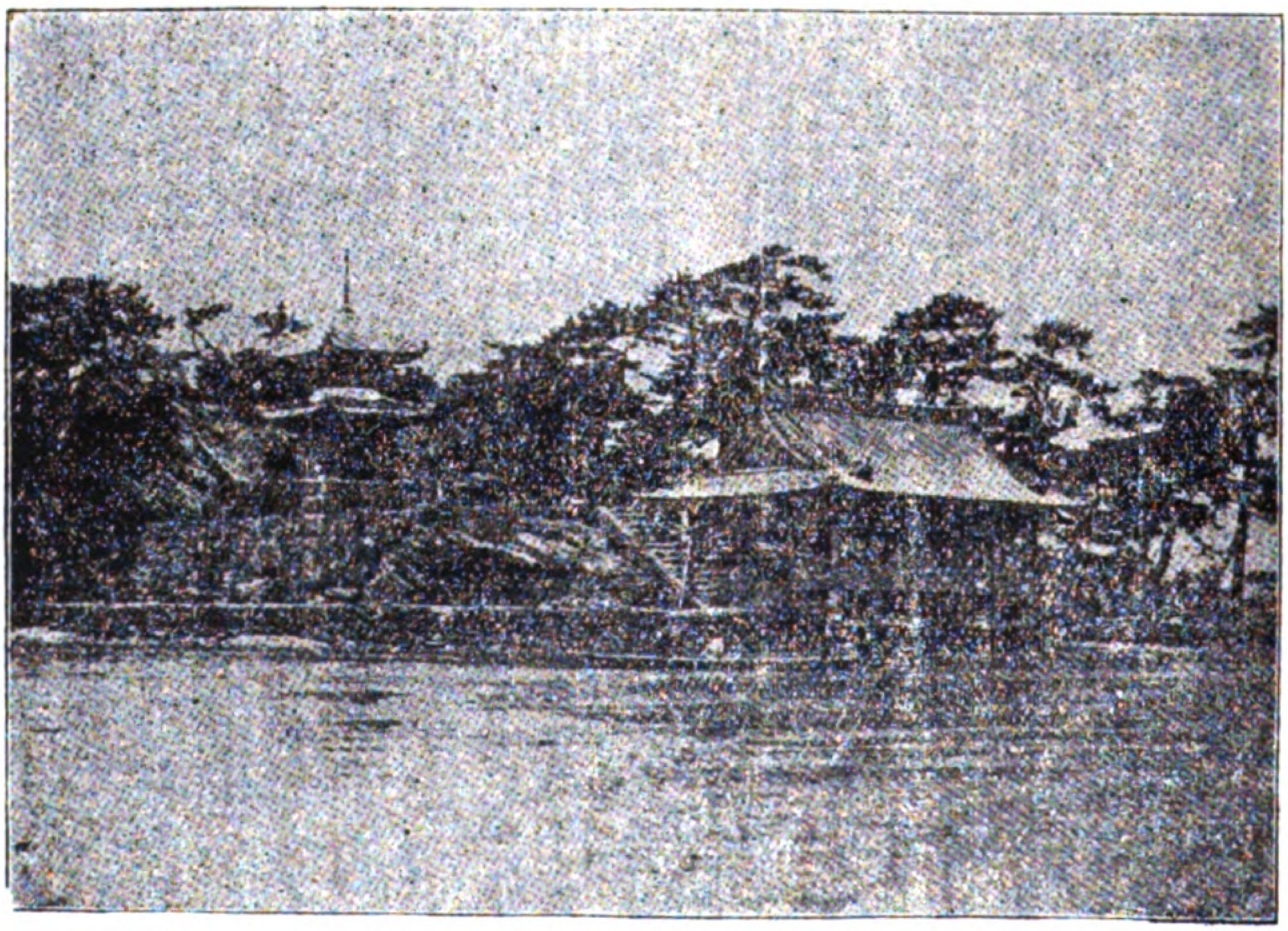
△家屋と飲用水

漁師ばかりですから隊付將校家族の住宅がほとんどありません、皆樣困難を忍んでむさい家に住つて居られます、飲用水と申しては實にお話しに成りません、住民に對して井戸が甚だ少數なので夏は濁水で大變です。そして其水は底が見えぬ位濁つて茶色をして居て氣味あしく飲まれたものではありませんから皆こして用ゐて居りますが、土地の人は昔しからの習慣で一向無頓着です。

△言語及風習

關東から參りますと當地の言葉は甚だ分りにくう何が注文していくら待つても待つても來ないと思ひますと言語の不通の結果と云ふわけで初めの內は困りました關東で「さうですれ」と云ふ所を當地では「そうノシ」と申します何を言ふのでも皆語尾にノシを付けます是れは一種の敬語ださうですが非常に異様に感じます。

亦いかなる時でも商人などが客に向つて「有難う」きりで決して「御座います」を申しませぬ亦商人が用を聞きに來ると云ふ事はありません、魚屋なども滅多に賣り歩くと云ふ事はなく、これは皆漁師故買手もないとの事は仕方がないから問屋に賴んで置いて毎日持つて來てゝらつて居ります。彼の名高い淡島神社は當地海岸にあります毎年四月三日に祭禮がありまして薙刀ふりと申して空中に薙刀をきらめかしながら道中をれり歩くと云ふので一寸名を得て居ります、和歌の浦では毎年五月十七日に和歌祭りとてこれはまた大したおまつりがあります混雜のあまり命がけで見物を致すのださうです。



和歌の浦の景

△紀州の名産

阿波の鳴戸の赤鯛は實に鯛類の美味で(鳴戸若目)に(鳴戸ミカン)(サンポー)此二種は夏ミカン同様の品で小鯛の酢漬木の葉鰈。和歌浦煎餅。(これは東京で瓦煎餅と申すのと同じで和歌浦の景を畫きたるもの)駿河屋のヨーカン。蔵柄の打扇(是も和歌浦の景を畫たるものなり)▲紀州ネル。紀州足袋。紀州スキ油。紀州ミカン。

まづ此位です。紀州ミカンは決して當地などでは見る事は出來ませぬそれは上等本場のものは都へ皆出す由で其中での屑を賣つて居ります。

△和歌山市

和歌山ステーションから和歌浦見物と申しますと、人力車一臺五十錢で紀三井寺から親切に案内してくれます。和歌の勝景は拙い筆で申すまでも御座いませぬから略します、和歌ノ浦には松の老木の化石が澤山御座いまして全くこれが木かと怪しまれる位、階段などは皆此松の化石で成つて居りますそれは〱立派な石で御座いますが、元は木でありますから明かに木目が付いて居るので漸く合點が行くので御座います。樓上り松片男波、など名を得て居ります此浦に有名な蘆湾館と云ふ旅館が御座いますこゝで休息致し景を眺めますと實によい保養に成ります。

琴歌などにも御座います通り、昔しは此浦の蘆の生へて居る處に鶴が舞ひ下りたと申す事で御座います。和歌山市には彼の名高い城廓があります、昔しの繪のとほりで天守閣に登つて見ますと遠く四國までも望みまして氣が晴々と致します。

此巍然たる城廓を下りましてしばらくしますと物產の陳列場がありまして其傍に公園があります春の花さく頃は甚だ宜しう御座います。紀三井寺から加太までは四里中和歌の浦からは四里程御座います、當市はずゐぶん繁華で何品でも御座いますから加太町には「飛脚」と申すものがありまして、野菜物より肉類何でも彼でも月每に用を聞いて歩いて當市まで荷車を挽いて買出しに參るので其日に間に合ひますから、不便利中の便利で御座います。物價はあまり安價と申す事は出來ませぬ、亦蚊の多き事は當市始め加太も非常であります、和歌山市の如きは十二月と一月だけしか蚊帳をつらぬと申す事で御座います、

△紀淡峽の風景

のどかな春の日を空しく家に暮すでもないと、日曜などには連れ立ち淡島神社に詣でます、子供を授かる神樣とておもに婦人が參詣を致します從つて奉納品は髮飾、人形などでそれは〱澤山御座います。

それから波打際に出て海と山との間の細道を傳ひますと、其あたりは奇岩奇石相迷つて奇しき階段が出來て居ります、打波のために出來るので御座います二三丁も參りますと、もう町らしい元來た道も見えずさながら岩の上に生れて來た樣な感が致ます、模糊たる四國の地を遙かに望み近く淡路の青巒を控ゆる水道、友が島を横たへたる海峽の自然は絶景と申す外は御座いませぬ、是れより岸は和歌山方面に迂回し松籟颯たるほとりは海邊の勝景を一つに集めたやうで、波穩かに靜かな日には千鳥が群れとび愛らしい聲で千代八千代と鳴きます、人跡はたへてなくたまた木をこる翁に會ひますばかり。

特賞（伊豫　櫻子）　甲賞（伊越　糸子）

乙賞（小柳さと子）　乙賞（角田千代子）

新派和歌評釋

筑波子の歌

窪田空穗

筑波子は土岐頼房といふ人の妻、賀茂眞淵に就いて歌を學び、歌人としての名を殘して居る人です。眞淵には女の門人も少なくはなかつたやうですが、筑波子は、よの子、しづ子の三人と共に、當時縣門の三才女と唄はれて居たさうで、眞淵は特に彼の才を愛して、天暦の頃の女房の口つきが思はれると賞めたさうです又筑波子といふ名は、かの「筑波山は山しげ山」といふ古歌を思ひ寄せて、眞淵が命けてくれたもので、一體は茂子といふ名であつたとか。此等のことも其當時にあつては名譽のことであつたやうです。

歿後、家集が編まれて居ます。短歌が二百首ばかり他に僅かのものが添つて居ます。

我々が今、筑波子の家集を讀んで見ると、ありやう多くの興味を感じない。此れ位の作が其當時にあつては、さまでに珍重されたのかと、寧ろ不思議に感じます。全く我が國文學が新たに勃興した當時、よしや一部の間からでも盛んに推賞された作が、僅かに此れだけのものであるか、といふ感が押へられません。

併し我々が、今に於いて其當時の歌を讀むには、當然割引をして讀まなければならない。其れは當時と今とは歌といふものに對する見解が餘程異つて居るからです。

其當時の歌は、今のやうに、自分の感じることを卒直に、何の支ふるものもなく歌つたのではない、先づ眼の前の歌といふものを置き、成るべく其れに背かないやうにと心懸けつゝ自分の感じを歌つたです。

此れは言葉にして見ると、僅かな異ひに過ぎませんが、事實作品として現はれたものを見ると、非常なる異ひとなつて來ます。今の歌であると、我々其れを讀んで、其作者の其時の感じのそつくらと歌はれて居る

所から、直ぐには解らないやうな狹いものであるにも關らず、しかも鋭く力强い所があつて、胸を衝かれるやうな感じを起します。即ち活きた感じに觸れられます。所が、其當時の歌となると、其作者の感じといふものは引込みがちになり、誰しもさう思ふであらうといふ、云はゞ世間並の感じより以上には歌つてない、そして其れを歌ふにも、所謂歌といふ何所までもおほらかな、雅びた趣を失ふまいとする所から、其感じの輪廓だけを、あつさりと説明したゞけといふ趣があります。即ち歌といふものに包まれた、我々の感情の水平より外は見られないといふのが普通のやうです。

斯ういふ心持が、一般を包む空氣であつた其當時の歌界の作としますに、筑波子の歌には流石に相應の面白味があります。

其一つは、女性の歌人に通然であり且つ特色である所の抒情的な所です。女性を男性に較べると、物を物として眺め、其物の持つてゐる趣を味ふといふことが少く、多少ないとも物の趣を感じると、其れを直ちに我身に引きつけてしまつて悲喜するといふ傾向があります。即ち客觀的でなくて主觀的です。隨つて其作は單純となり、其味も淺薄となる憾みはありますが、同時に、微かながらも染々として胸に觸れて來るといふ所があります。筑波子の歌にも此れがあります。

今一つは、上のやうな傾向によつて作られた歌である所から、其作の少ないにも關らず、其れを通じて作者の面目の窺はれる所です。何所までも物優しく、控目に思ひのまゝには物も云はないといふ、德川時代の武家の妻らしい物ごしの偲ばれる所です。此れは其當時の歌風の影響もありませうが、必ずしもさうばかりでもないと思はれます。この女らしい心持が、我々を動かします。

○

限りなく來れども同じ春なれば
　　飽かぬ心もかはらざりけり

年々に立ちかへり來る春の姿、その甦り來る春に對

して新たなる喜びを感じ、それを單純に歌つたもので何の蟠りもなく、すなほに、喜びを喜びとして受け入れた所は、讀んで快く感じられます。が、春の姿の美しさ、それに對する喜びをそのまゝには云はず、抽象して其喜びを云つて居る所が、今の我々の趣味から見ると飽き足らず思ひます。特に、其喜びを云ふにも、同じ春であるから其れで喜びも變らないと、理窟めかして云つてあるのが、正しく我々の趣味から見て飽き足らず感じます。

○

何となく心ぞ春になりにける
かすみもあへぬ空を見つゝも



此れも心は前の歌と同樣です。調子は此方が低いが自分の心持を靜かに寫生して、前ほど抽象してなく隨つて自然な所があつて、面白みに於いては勝つて居ます。が、「心ぞ春に」といふ中に、何となく理窟めかしい所があつて、其れが趣を害して居ます。

○

葛飾の野邊の霞に立ち
まじり若菜つむべき
春は來にけり

此歌は今までの中、一番に面白みがあります。それは其景色が幽かながらも描出されて、靜かに心を誘ふ所があるからですが、其面白い所が、春といふものゝ説明になつて居て、實景でないので、それが著しく其味を減ぐと

いふ憾みがあります。「葛飾」と東京遊郊の名を現はしてある爲め、平凡な景色ではあるが、其れが生きて來て居ます。

前二首と此歌とを比較すると、恐らく作者が内々得意であつたらうと思ふ前二首の理窟が、却つて我々には淺々しく感じられ、卒直に追想――間接ながら――を語つたのが一番に面白いといふ作者の豫期しない結果になつて居るのを思ひます。

○

霞立ち梅のかをりもまさゆくむ
　月の空ぞうれしかりける

極めて平凡な、誰しも一様に思ひ得る境を云つて居るに過ぎないが、前の歌を讀んで此歌に來ると、何等の感心も抱かず、あるがまゝに物を見て、其趣を喜ぶといふ態度が、聊か目新しく感じられます。其意味に於いて多少の面白みがあります。

石淸水の臨時の祭

花をしも見つゝ越ゆれば男山
　世にねぎごともあらぬ今日かな

此歌を讀んで、初めて歌らしい歌を讀み得たといふ感がします。石淸水の臨時の祭、自分も人そへ向きに神に祈るべき多くのことのあるやうな思ひがし、參詣にと出懸けたが、路すがら、男山を越えるとて其所の櫻を見つゝ行くと、何時か心は花の美しさに奪はれてしまつて、我身も我世も一向に樂しく、さて改めて祈るべき不足も無いやうに思はれるといふのです。

其れと云はずして、十分に花の美しさを思はせ、境によりて改まりゆく心の中を思はせた所、歌だ、歌でなくては現はせない思ひだと頷かせます。

八月十五夜

はしゐして今宵の月の影見れば
　おもなきまでぞ照りわたりける

さやかに照る月、家の外にまでは出ず、つゝましく小縁などに坐つて、靜かに其月に對つてゐる女。餘りにもさやかに照つて居るので、物皆が蔽はれる所もなく其中に映るやうに覺え、何となくきまり惡くさへ思

はれるといふ我々の深ひ思ひ、すべてが自然に、やすらかに歌はれて、身に染みて覺えます。佳作です。前の歌も優れた歌ですが、何所となく口拍子で言つたと思はれる所、そして窮屈に感じられる所がありますが



此歌になると、如何にも心の中から溢れ出たといふ趣があつて、品の高いのを思はせます。

冬の始の歌にて

しぐれつゝ淺茅色づく鳰鳥の
　葛飾野べに冬は來にけり

何といふ程の作でもないが、武藏野の冬――遠く開けた平野、秋と冬の差別の目立たない趣が、微かながらに味はれます。

埋火

とばかりも立ち離るれば堪へやらで

やがて寄りそふ埋火のもと

寒さの佗しさと埋火の戀しさとを、其儘に歌つてゐると讀めます。がその中に、一味の主觀、——無意識に持つてゐる女性の心持ともいふべきものが潜んで居て、其れが仄かながら感じられる思ひがします。もの柔らかな、懐かしいと思ふものに引かれがちなともいふべき心持が附きまとつて居ます。女性の歌で、女性ふうでは歌へぬ歌といふ所に趣があります。

雲

風をいたみ過ぎにすぎゆく浮雲の
かさふる果やいづこなるらむ

風に吹き散らされて、慌しく逃ぐるがやうに飛んで行く雲、唯それだけの景色です。それを眺めて居ると風はつれなくも雲を吹きわけるもの、雲は吹き分けられながらも、末終に一つに合ふべきものと思ふがやう重なる所を張合に飛んで行くのだと云ふのです。佳い作だとも思へず、前のに較べても劣つてゐますが、此れも如何にも女性の歌だと思はせる所があります。

強ひて擧げばまだ幾らもありますが、以上で大體は窺はれます。

○繊維おさいくもの　伊藤文子著
本書は共立女子職業學校教師として令名ある伊藤文子、小川錠子、高田久子の三女史の共著にして、小袋類、飾置物類、飾襟類、巾着類、手提袋類、シャツ、ズボン下類其他實用小物類等の製作法を說たるものにして、各小學校に於ける女子手藝教材に適すると共に家庭に於て廢物たらんとする布片の利用法を考ふる人の參考としても亦恰好の書なり、定價金九拾錢、日本橋區通一丁目大倉書店發行、

○家庭實用新式美術造花　鈴木松子著
本書の特色は從來流布の造花術書とは違ひ、徒に外見の美に重きを置かず、成るべく自然と接近する樣に說かれたる點にあり、のみならず技術の上にも所々改良を加へられたるものあるを見る、定價金五拾五錢、博文館發行、

○乳人政岡　續編　碧瑠璃園著
本書は曾て東京日々新聞に連載して好評ありしを纒めたるものにして、東國六十四郡を震動したる伊達騷動に於ける忠義の政岡が實歷は、著者の筆に依りて殆んど遺漏なく敍述せらる、定價金七拾五錢、京橋區中橋廣小路梁江堂發行、

○トルストイ小說集　百島操譯
先にトルストイ短編集を譯したる著者は此度又本書を出せり、こはトルストイ翁の單篇中主として家庭向のものを譯出したるものにして、本書に於ては熊狩、大惡魔小惡魔、富の力、愛の勝利、世捨人、親子三代、珈琲店、唯六尺等を收む譯文流暢、能く原書の面影を傳ふ、定價金四拾錢府下巢鴨上駒込內外出版協會發行、

卒業の人

垣わらび

襦袢の白襟を懸け更へたり、もうこれがはき納めであるといふ袴を畳いたりして、曉方漸々二三時間夢に入つたかとおもふともう七時ですよと枕を叩かれ吃驚して眼を覚ました。起きがけに戸の隙間から漏れる旭を見た時は天にも上るやうな心持になつて急いで洗面所に行かうとすると。同じ部屋の妹が「きぬ子姉様お風呂が沸いて居りますよ」と知らして下すつた。まあ何から何迄氣が利いたなさりようと嬉しくていそ〳〵湯殿に這入る。

と最早そこには、はつ子様もたれ子さんも前に來て居らしつた。

「きぬ子様お早う御座います、大分御ゆつくりね」

と聲をおかけになつたのがひさ子さん。

「あらもうそんなにおそいのでせうか？」

と眼を瞬ると皆なして一時にホヽヽヽヽとお笑ひなさるので自分は極りわるさの、まぎらはしに、

「でも好いお天氣で何よりですわ」

と巧くいひのけた積りでゐると。

「それはその筈ですよ、何時も早起きのきぬ子さんが七時におめざめなすつたといふのですもの」



「あゝそれでゞすわねえ」

とまたしてもからかはれたので、私かに久子さんの何時もながらの皮肉を怨んだが、あゝこんな事いつて戯かはれるのも今日ぎり、あすは別れて西へやら東へやら分らぬものを、とおもひかへして自分も一緒になつて笑つて置いた。

前後してお湯から上ると「三年のかたー　ぢやありません卒業生のかたー」と誰人かの聲がするので、とにかく「ハイ」と返事をする　「あの只今からすぐ唱歌の練習が御座いますからお集まり下さい、といふことで御座います」

まあ困る、支度も出來ないうちから……でも、態々練習して下さる先生の方がこれ迄に御骨折り下さると思へば身にしみて感ぜずには居られない。

「さうですか、ありがたう」

とそれから急いで皆さんを待ちあはして、取りあへず各々生玉子を飲んで唱歌室に馳けつけた。大かた集まつて居らしつた。歌は何時にない元氣で練習せられた。「人は氣持ち一つですねえ」と熟々先生が仰つたので平生餘り忠實でなかつた自分等は少し耳がくすぐつたかつた。強弱の御注意も今日は沁々と身になつた。

程なく終つて教室を出ると、蕾も見えぬ程咲き切つた櫻が何

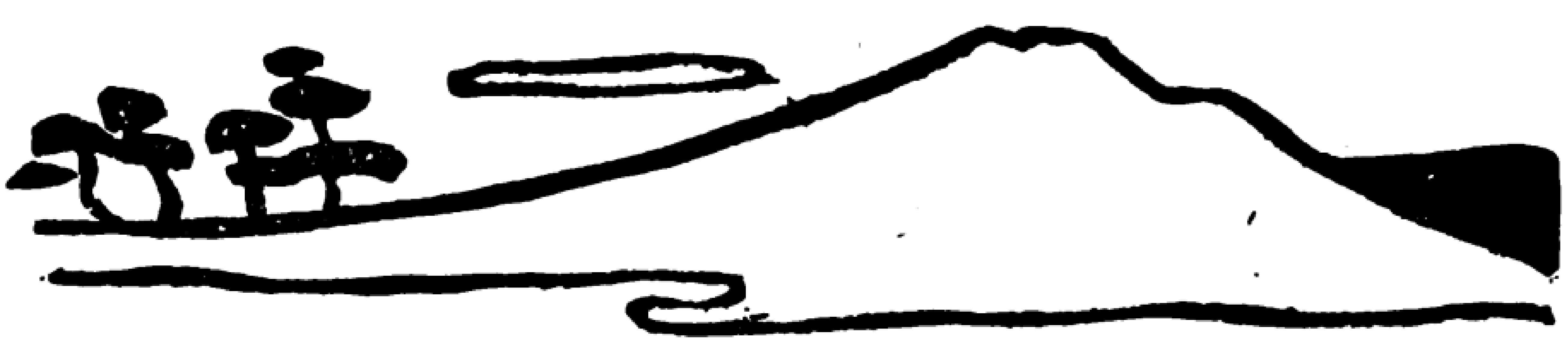
思つたのか抱へて居た幽蘭の筋に二片三片、並んで居たはつ子様と思はず見合せてニツコリした。

歸ればすでに御膳部が調のへてあつた。先生は今日來賓のお接待役なので少し時間は早いけれど〻仰しやり乍ら御紋服に更へて居らしつた。

揃ふて御飯をいたゞく。かうやつて御一緒に頂だくのもあと二三度……とまたしても咽喉が詰つて……ひとつはうれしさがこみあげるのかもしれない。すること爲すこと凡て兩様の感に打たるゝのみであつた。

十二時前にはすつかり支度も出來て、流石無頓着な自分も姿見鏡の前につと立つた。そして覺えず會心の微笑をもらした。但し何の詩があつてゞはない、平常にないことをしたので極りがわるかつたのであらう。そこへ部屋の姉達が私にとて世にも美くしい花簪を求めて來て下すつた。そして手づからさして下すつたのである、朝に夕に隔てなく起き臥しする姉達ではあるが、今日は殊に他人とは思はれず、故郷にある眞實の姉よりも慕はしさ、懷かしさが優つて居た。

豫定の十二時中にもなつたので、五人そろふて玄關に出た。此の時の心持ち、恐らくはあとにも先きにもあるまいとおもはれた。身はこれ一世一代の卒業式に參列す可く出でゝゆくのである。過去も未來も今の瞬間には意識にない、只現在の我れあるのみである、萬感こもごも迫るといはんよりは、むしろ、われか、人か、の無分別なる狀態にあるといつてよい位であるのだ。



靴の紐も確と締つた。袴の額もスイと通つた、一同がそろうて。

「では皆さん行つて參ります……」

と挨拶すると、寮の皆さんが玄關にあふれる許り並んで、

「行つていらつしやいませ」

自分たち六人をさし引いて二十八人の友情に充ちた愛の聲は一時に行つていらつしやいませと送つて下すつたのだ。聲は其時限りであるが響は永久に自分等の胸を鼓つて、「必ず未來は」との確信の答へを促がすであらう。

十二の靴は快き音立てゝ靜かに寮の門を離れた。

朝の間雨催の花曇りであつた空は、十時過ぎから漸々と晴れて晝頃には全然雲もない日和となつた。

丁度今日はお父樣の御命日なので、旦那樣は一時過からお姑と御一緒にお墓まゐりにお出かけになつた、後には自分とさよと二人限り、お線香を立てるやら、お供物を更へるやら、ひとしきりバタ〱して三時頃漸つと部屋の机の前に坐つた。

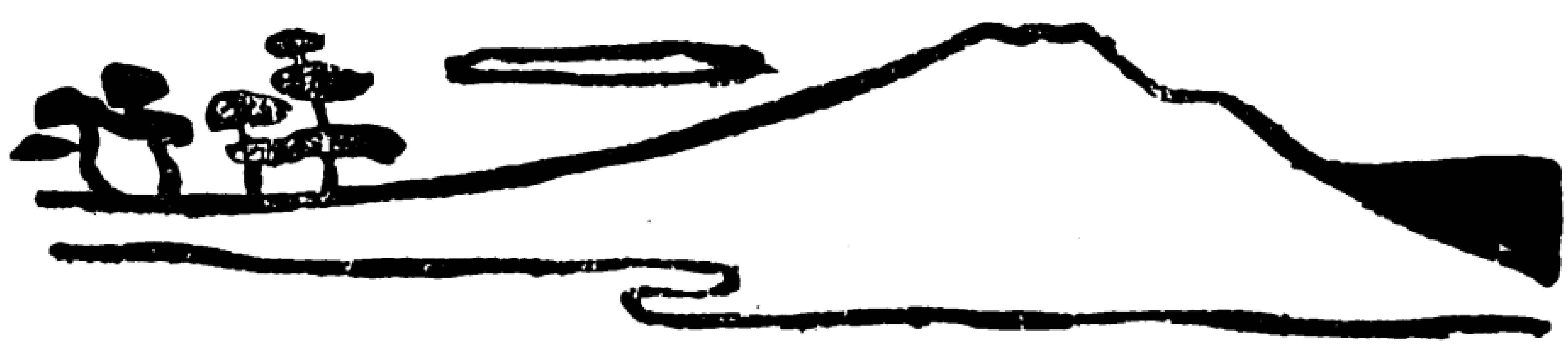
お歸途には宮岡の伯父樣に、お立寄りなさるとか。さすればきつと夜に入つてのおかへり、その間に今日の日記をと。見れ

ばきのふも一昨日も書いてなければ、それはまた寢る前にでも書きつける事として取りあへず今日の感想をかこう。「きよや今日は嬉しい卒の日なのよ」。

＊　＊　＊　＊

去年の花の散つた行方も知らぬ間に、最早今年の花の消息を聞く時分になつたかとは、一昨日、母校の卒業式の招待狀を手にした時、即座に浮んだ感じであるのだ。生憎今日は、留守番がないので參會することは出來なかつたが、さぞ盛な事でもあつたらう。離れてゐても想像の糸が光景を引張つて、歴然と眼前にちらつかせる。自分は此日の嬉しさを思ひ浮べることに、いゝ、みづみづした心持ちが湧くのである、恐らく永久に此日の記憶は、ふりゆく頭腦を刺戟する事であらう。

巍然として聳ゆる煉瓦の建築物、丁度其の希望を表はすかの様、澄んだ紺青の空によく映えてゐる淡色の櫻のアーチ、曾てはテニスにバスケツトに踏み馴れたコンクリートの校庭、一として、今は去年の思ひ出ならぬものはない、殊に當日の式場は記念すべきあの大講堂清楚に裝飾せられた中に朝夕撫で教へて下すつた教員がた始め朝野の貴顯紳士を集めた栄の空氣は靜かに前途の光りとなつて諸人の胸を射た。そして最後の訓言をせられた先生のお聲は、今更のやうに耳の底から響いて來る。生命の糧を他にもとめず、われ自分にこれを求めよ、書に

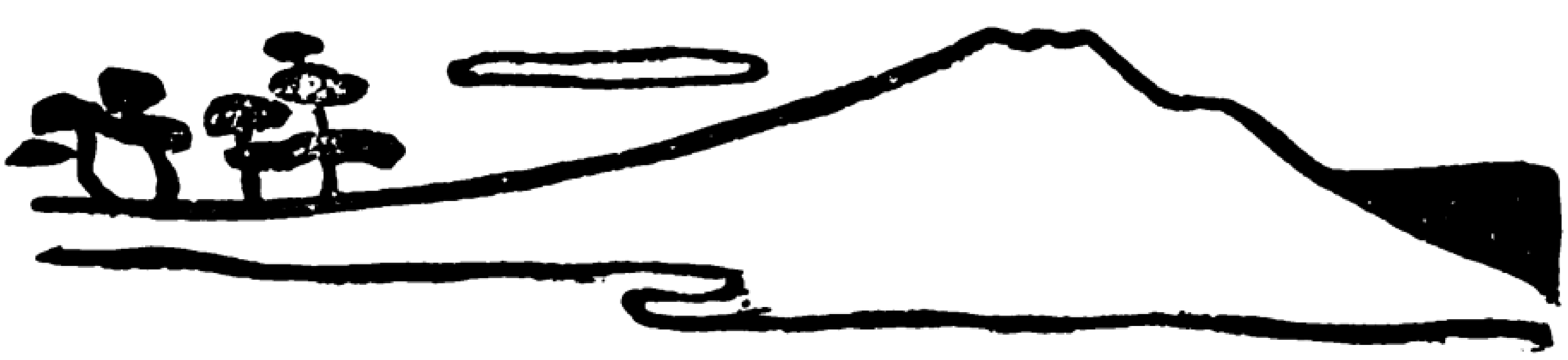


日本一個を天地なる婦人にあらずして世界の日本婦人たるの自覺あれと。此一言は分秒の間も自分は忘れることが出來ぬバイブルであり經文である。爾來一年三百六十五日、此の間、幾多の困難挫折があつたに關はらず、どうか、かうか、失望の谷にも迷はず、落膽の淵にも陷らず、弱いながらにも切り抜けることが出來たといふ所以のものは、あの時與へられた訓旨の導かれて來たからだと信じてゐる。

かくて式は濟むだ、三年螢雪の證書は吾が手に殘つて居た。冷たい紙は無心ながら、只憧憬と理想に活きてゐる處女の美くしかつた歴史を語つて、文字のそとに偉大な生命を湛へてゐたことは無論である。

此刹那ツト胸を衝いて溢れたものは涙であつた。僅かに一滴の涙、併し此一滴は半生—左樣半生といふも過言ではあるまい—のメイムとマテーとの恩以外、更に或る無形の賜ものに對つて謝した聲に外ならないのであつた。そして其の次の瞬間に頬を傳ふて口にこぼれたのは單純な微笑であつた。此の微笑只一抹の唇の動きに過ぎないが、此のうちにこそ後半生、むしろ社會の學齡兒童である自分等の將來に於ける抱負は悉く含まれて居たのである。花ならば花そのものより知らぬ單純な經驗といふ箔のつかぬ眼、映ずる社會は事々物々、凡そ思ふやうになるものとおもふてゐたからこそである。成らずば成るまで爲

て見せるといふ意氣込みを心私かに呑むでゐたからである。
其の夜寮の部屋に歸つて、扨落着いて靜かに來し方行く末を考がへた時、わが胸には、困難の影はもとより知らず、障害の姿は夢にも見る事は出來なかつた。よしや見たにしても、子供の樣な一圖心には何で怖しいとか危ないなんど思ふ心があらう、所謂愛す可き稚氣縱橫といふより外何にもなかつたのだ。
其の日から今日迄丁度まる一年、所は同じ東京ながら、自分はおなじ我れ乍ら、境遇は既に異なつて居る、覺悟は何時も同じ乍ら、處す可き道は、稚氣縱橫といふ譯には行かないのである、譬へば、前後顧りもなく爲た事を後れ乍らも非常識な事と充分後悔して靜かに考がへ樣とおもふ折には、却て何を拗ねると咎められ、まさか、學校時代の遺習とも口にはいはれず、矢張り「ハイ」とやさしくうけ流さればならぬ苦しさ。去年までわれに唯一の武器であつた張りと意地もきのふの樣には立てゝばかりも居られず、正直ばかりが能なりし價値も一段は確に下つた心地、或は世間を昔の友達の國の如く心得て、好意にした事から花でもない感情の齟齬を來したり。思へば凡そ一年以前に描いた地圖は大方玻璃窓を徹して描いた者に過ぎなかつた。籠の中から噴出して飛び度いなあと鬩いた鳥に過ぎなかつた。
此處に至つて自分は、とはいへ失望はせぬ、落膽はせぬ。不滿な感は曾て持つたことはない、自分に斯うして悲しいとおもふたことは一度もない、が歎ぜずには居られなかつた、世にもあはれなものは女であると熟々おもはずには居られなかつた。女自らが女は可哀想なものだとあはれむ人は外にないかもしれぬ、しかし自分はさうおもふ。



此處まで書き綴つた時、きよやが、
「奥樣」と縁の障子の外から聲をかけた。フツと氣がつくともうあたりは薄暗くなつて鐘ヶ淵の笛がボーツといやな聲へつけるやうな音を立てゝ居る。
「え？　なあに？」
とまぐれた聲を出したがわれ乍ら可笑しくて……。
「ハイ今ゆきますよ」
筆を擱いて立ち上つた。

＊　＊　＊　＊

時計を見ればもう六時、あゝ今頃は式も濟むで、去年の樣に證書を手にして寮の皆さんにお目出度の雨を注がれて居らしやる事であらう。そう／＼今夜は祝賀會と送別會とが一緒に開かれる筈である。お炊事の方は、今夜こそ技倆の振ひ時と一生懸命で居らつしやるであらう、ホワイトルーム青燈のもとに面輝く計りの榮ある君の麗人を思ふよりも、ヘツトの烟り燻ぶつて滿足して居らつしやるお炊事の方々の心ばせ美くしい方に同情することが多くなつた迄に自分も考へが地味になつたかとまたしても去年の今日がめにちらつく時、きよはお座敷の洋燈を點して來た。本所小梅の春はかくしてそゞろに暮れて進くのである。



食卓日記

伊越糸子

水曜日

今朝からシト〳〵と降り出した雨、灰色に曇つた空から糸を引いた樣に靜かに、今にも開かうとする庭の彼岸櫻に音もなくそゝぐ。いつ止みさうにもない、何だか氣が滅入るやう、良人が週番になつてから今日でもう五日目此寂しい漁師村の片海邊、波の音、千鳥の鳴く聲を友とする外はないのである、我家族と云ふては良人と二人ぎり、毎日只良人の御歸りのみが待たれる、隣りから隣、皆漁師の家ばかり、すぐ近所に布織る家が有るので夜ひる絶間なくカタン〳〵と節おもしろき小唄に合せていと笑しく聞える、織る主は皆十五六の娘である、これが明けても暮れてもの己れの勤めなのである、あゝ此位呑氣な生活はあるまい、花の都にあればどうしても虚榮にあこがるゝ年ばえである、さりながら相當にそれ〴〵たのしみをもつて、朝から晩までセッセと働いて居るのであらうと思ふと却つて其女等のため幸福なやうな氣もする、十一時頃魚屋が來た、けふは赤鯛の七寸位のといゝかを取つて置く、午後から八百屋が注文を聞きに來る一寸考へて竹の子、木の芽それから土當歸を注文して置くまづけふの献立は左の如し。

(一)刺身 褄。ワサビ、芽シソ、笹打ウド　(二)鹽燒 付合百合根

(三)松かさ燒　(四)蓮根の玉子とじ

1 はまづ赤鯛の片身をおろし刺身となしウドを笹打となして水に浸けおく、「芽シソ」を洗ひ水を切り、ワサビおろしは火に暖ためワサビをおろしなほ細々に刻み附ける。

2 は片身にサッと鹽をふり置き、燒く時に洗ひ落し、

更に少々許り花鹽を撒り、遠火で燒く。百合根を鹽水でよく洗ひ、鹽を少し入れて湯煮す(崩れぬため)そして軟かになりたれば砂糖を適宜に入れて煮上げ、食紅を少々入れて櫻色となし、鹽やきに附け合す。

3 松かさ燒はまづいかの頭足を取り去り、皮の薄皮をも去り、平たく一枚になし、横縱一分位の目に切目を付け置く、一方に醤油、味醂を煮つめておき、いかを初めは素燒とし二度目より其の汁を付けては燒き燒き七度程なし其内にはいかがクル〳〵と卷き上り、松かさの如くなるなり。

4 蓮根の玉子とじはまづ蓮根を薄く切り置き、能くアク出しをなし置き、玉子を泡立て其中に入れおく、一方に並のだし汁を作りかげんを味ひてよく煮立たせた中に右の蓮玉子を入れ一度煮立たせおろす。

すつかり出來上つて御飯をたくやうに仕かけ、火を移す、二十分も經つと時間どほり四時半從來が辨當を取りに來る、殘ものは仕方がないので西洋菓子を入れてあつたビンに入れて、食る時に一寸湯煎にして下さいと賴み注意して包みを渡す。ホツと安心して手元を片付けて自分も淋しく夕食をすます。夜は燈火の下にて一人足袋のつくろひなどす。不在中ゆゑ幾度も念入に家内を見まはり床に就く。

木曜日

目がさめると、丁度五時半、雨戸を繰ると雨は霽れて心地よし、日がうら〳〵と上つて來た、朝の用事を終り、天氣を見こんで洗ものにかゝる、處へきのふ注文した、八百屋が竹ノ子を持つて來た、まだ小さく價も可なりいゝがと思ひながら取つておく、早速湯出、あく出しをして置く、今日は蓴菜、椎茸、他にいろ〳〵乾物品を注文す、次で魚屋が伊勢ゑびの大きなのと鰈を持つて來た、先づけふの献立は、

(一)ゑびのフエタス　ソース付　(二)鰈のあんかけ　付竹の子

(三)竹ノ子　木の芽和へ　(四)ウド　椎茸のすまし汁

1 はゑびを湯出て皮を去り肉のみを取り、一方に玉子に牛乳を少し入れ、泡立たせ、メリケン粉と燒粉即ちベーキングパウダーを入れ、鹽胡椒を入れ能く交せたる中に、右のゑびを入れ丁度天プラの時の如く

バターを多量にフライパンにとかし、フライするなり割合は玉子一個、牛乳大匙二杯、メリケン粉三杯、焼粉小匙三分の一位にて宜し。

2 は鰈をよく洗ひ、一方には醤油、砂糖、味醂を適宜に入れ、並に鰈を煮上げ、其汁にて筍をも煮上げ、残りの汁を薄く湯にて延ばし、葛を少し水にとき入れ薄あんとし、皿に盛りたる鰈の上よりかけて出す。

3 は筍を短冊に切り、砂糖と醤油にて味をつけ、汁氣を切つておく、一方に白味噌に木の芽を摺り込て砂糖を好きなほどに入れ、よく摺り、それより前の筍を和へるなり。

4 は、うどを短冊に切り、水にはなしおき、椎茸をよく水にて洗ひ、水を切り置き、一方に並のだし汁を作り、味をつけ、椎茸を入れ、終りにうどを入れ、あまり煮ないで火よりおろす。

夜に入り戸じまりのため玄關に出ると、ひるの様に明るく思はず一す門に出て見ると眞黒い高い向ふの山の中腹にひるま見ると分らぬので知らなかつたが砲臺守りの家が在る、其家の燈火が只一點淋しく提灯の火ぐらゐに見える、またすぐ近くの砲臺に行く道のだら〳〵坂から登る際に、古蔦の澤山からんだ姿のよい老松が有る、それに丁度今夜の明月がスーとさし出た小枝にかゝつた所はほんとに繪にかいたやう、何とも言はれない背景、枝から遠くかすかに波の打寄する音が聞えて來る、何だか夢のやう、しばらく茫然とたゞずむ内大分夜風が寒いので内に入り寢に就く。

金曜日

けふは全く快晴となり、ぽか〳〵して百千鳥がさへづる、明日はこの地で祭禮がある、即ち紀伊國淡島神社の祭禮なのでいつも寂しい此村も何となく活氣立つて女房娘連は競ふて髪結に行く風呂に行く大みがきにみがき立てる、子供は嬉しさうにさわぐ若者は明日の支度に忙がしさうに走つてゐる、いづれも顏を見るとうれしさうににこ〳〵してゐる

さてけふの獻立は、

(一)鰆のきみ焼　(二)鮑のふくら煮
(三)玉津島　(四)リンゴわさび和へ

1 は鰆の切身を醤油、味醂、砂糖を適宜に調和せし中に一時間程浸け置き、而して焼く時には今の汁の中に玉子の黄味ばかりを入れ、それを塗けては焼き塗けてはやく。そして皿に盛る。

2は鯔の腹をよく出し、よく洗ひ、鹽にて全部こすりヌル〳〵を取り、一分位に縱横に切目を入れ、醤油味醂さとうを適宜に入れ煮詰たるものにて煮上る。

3慈姑を皮を去りおろし金にておろし、鹽少々砂糖少少メリケン粉を少々、玉子を適宜に入れ、よく交せチト〳〵位のかたさになし、ゴマ油にて揚げる、おろしワサビ付けて出す。

4はリンゴをむき、適宜の形に切り、水に浮かしおく一方白味噌にわさびを加へよく摺り裏ごしにかけ、(砂糖少々用ゐてよろし)右のリンゴを和へる(これは酒のさかなに最も妙なり)

土曜日

けふは、正午に御歸宅といふ事なればそれまでに何も彼もこしらへてお待ち申さんと早朝より甲斐々々しく、立働く、祭りなれば友人など見えるかもしれずと馳走の心持にて献立を作る。

(一)鰆の照燒　(二)玉子卷芋
(三)亂菊のおちやら煮　(四)松葉銀杏
(五)椀盛り　(六)筍 うど 落花生和へ
三葉、つくれ鯛、薄くづ、付生姜
(七)茶碗むし
銀杏、椎茸、百合根、岩茸、えび

1は鰆の切身を作り、一方醤油、ミリン、砂糖を煮つめてそれを付けてはやき〳〵なす。

2はサツマ芋を湯出、ウラゴシにかけ、白砂糖及ヒキ茶少々入れて煉り置く、玉子に鹽砂糖を入れ、泡立て、ゴマ油を少々玉子燒に敷きて、一分の薄さに燒き、その中へ芋を細き棒の如くに作り入れ、小口より卷き終りを一寸玉子付けて止めとなす、五分の厚さに切りて皿に盛る。

3は大根の上等を一寸五分の長さに切り、皮をむき、五厘位の目に切目を深く入れ、茶筌の如き形となし酢と砂糖にてよく煮上ぐ即ち亂れたる菊花の風情となる眞中に一寸紅を落す。

4は銀杏のからをつぶし、一寸湯がきて薄皮を去る、それを鹽と砂糖にて煮上げ、松葉を取りてそれに刺して玉子卷の付合せとして用ふ。以上口取のつもりにて。

5小鯛の骨を手際よく切り取り、尾を頭の中に入れ一

寸（小椀子にて止めおく）サッと湯がき、三ッ葉も一寸湯出、一方に並のダシ汁を作り、薄くづを引き、椀に盛る。

6筍とうどを湯出て短册に切り、醤油、味醂、砂糖にて煮上げ、汁を切つて置く、落花生のいりたるを皮むき摺り鉢にて氣長につぶしすり、少々右の煮汁を入れどろ〳〵になし筍、うどを和へる。

7は銀杏椎茸百合根、岩茸をよく洗ひ、醤油、砂糖にて煮上げ、ゑびも湯出、肉を適宜に切り、煮上げ置く別に濃きだし汁を作り、味をつけ、玉子をとき交せ、右の種ものを入れ蒸しにかける。

別に茶菓子用として來客に出すべきものを作らねばならぬので手がるの品を撰みて製法をなす。

（一）ジャーマントースト　（二）マカロン

1は食パンを厚さ三分大さ一寸四方位に切り、一方には牛乳に玉子を入れ、砂糖を入れて煮つめる、其中に右のパンをひたしてバターを澤山の中にて痛める皿に盛るは、上等の新しきマカロニを求め、水に冷しおき、適宜に湯出る（湯出る時鍋にこげ付かぬ様竹の皮を敷く）そして水を切りおき牛乳に玉子と砂糖を入れしを煮つめたるものをかけて出す、二者ともにコ、アに添へて出すなり。

良人は一週間振りで歸宅になつた、志も空しからず二三人の御友人も見えられ心をこめたもてなしを喜こんで下さつた。

午後三時頃から祭禮を見に出かける、却々名高いもので遠く大阪あたりから見物に來て旅舍はいづれも滿員の姿、この地には珍らしい混雜であつた、ことに淡島神社は女の神樣だけに婦人連中にも臨者などが大分見えた。

日曜日

けふは深山精校園一同和歌の浦に遠乘と云ふ事で朝は八時出發。

我家では養生の爲め折々オートミルを朝食として用ふる事になつてゐる、けさはオートミルとして手早くすんだ時に、馬が來たので長閑な野邊を見渡しながら和歌浦さして御出かけになる左にその製法を。

オートミルノマッシ

はオートミルの新らしき上等の品を撰み米を洗ふやうによく〳〵洗ひ一夜水に浸けおき翌朝水を適宜に入れゴト〳〵と煮る常にかきまぜるだん〳〵色も白くなりベト〳〵となる而して牛乳と砂糖を適宜に入れてなほ煮る而して皿に盛り食す。

扨てけふの献立は左の如く作る

(一)サシズマシポテト　(二)ヘレービーフシャンピニオース

(三)蓮根の梅あへ　(四)谷間の梅花

(五)吸もの　(六)松風燒

蓴菜、松茸、吸口、木芽

1は新しきサシズを求めバタにてよく痛めジャガ芋を湯出、ザッとつきて流行の形に作り(鹽コセウを入れる)付合す。

2は牛肉ロースを求め二分の厚さに平たくなし、其中に鑵詰めの松茸を入れ巻き、小楊子にて一寸止め、そしてバタにてフライにす。

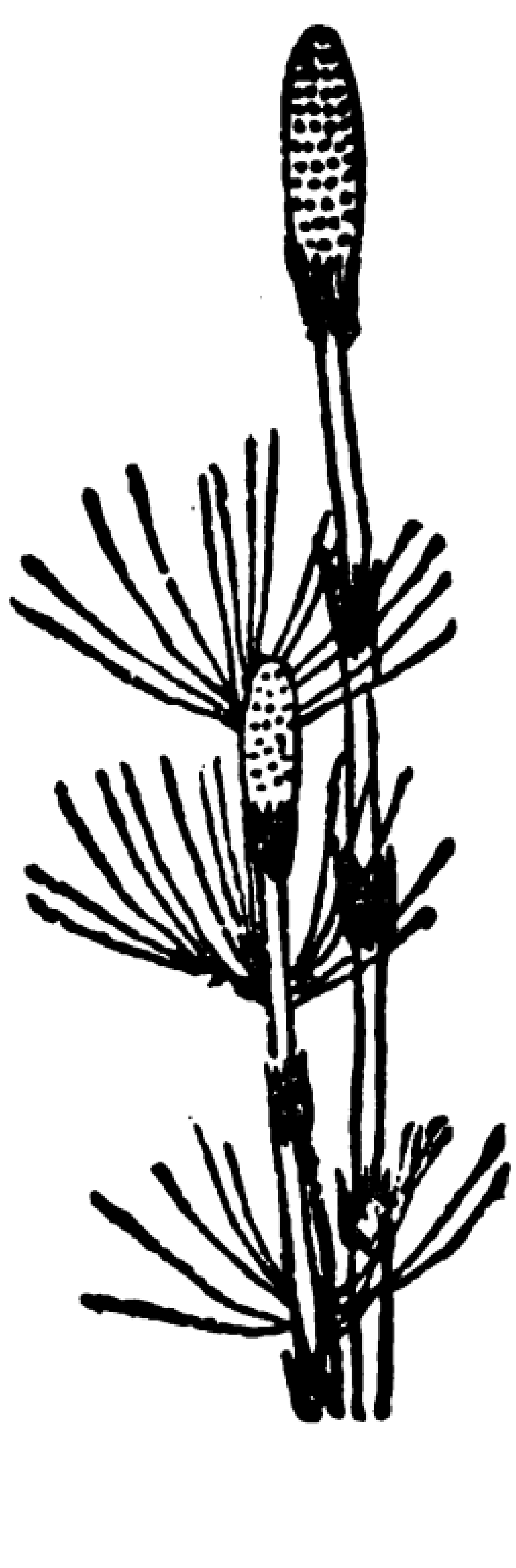
3は蓮根を薄く切り、米の白水にて湯出て、水を切つておく、別に梅ぼしを擂り、種を去り、白砂糖を入れ、ドロ〳〵によく〳〵すり、裏ごしにかけ、今の蓮根を和へる。

4は百合根の大なるを一ヒラ〳〵によく洗ひ、湯出て鹽、砂糖にて煮上げ梅花の如くに深き猪口に盛り、其眞中即ち梅の眞に(三)の時の梅肉を一寸のせて出すなり、即ち谷間の梅花これなり。

5鑵詰の松茸を洗ひ、並の煮切りを作り、味をつけすまし汁とし、今の松茸と蓴菜の美しきをはなつ、吸口として木の芽を用ふ。

6は蓮根をおろし金にておろし、メリケン粉、鹽、砂糖を適宜に入れ交せて、玉子燒鍋に入れて燒く、適宜に切りて罌粟を撒りかけて程よく切り、皿に盛る。

午後五時良人は樂しげに御歸宅、けふはことの外おもしろく、紀三井寺から和歌浦に出で梅花を眺めたとの事、しかし未だ木の若いためあまり見ばえはしない幾年か經つ內には名所ともならうとのお話なり、五時半食卓には新しき西洋花模樣のテーブルかけをなし、我手になれる數々の品を並べたて久しぶりで樂しく晩餐をする。



季節料理



◎ライスプッチング

牛乳五合に九匁のバタを加へ、更に四十匁の米を軟かに煮て丼の中に入れ、冷却せしめたる後、砂糖四十匁を加へ、おろしたるレモン皮と鷄卵の黄身七個を入れよく攪拌してこれに鷄卵の白身を混じ、直ちにバタを塗りたる型に入れてテンピの中に入れて燒くなり。

◎ベークトエッグ

鍋に油を引き其中に八個の鷄卵の黄身のみを崩れざる樣に落し、少量の鹽と、胡椒粉とを撒布し、小片のバタを撒込み、更に大匙三杯のクリームを注ぎ直ちにテンピに入れ二十分間蒸燒にすべし。

◎豌豆のスープ

一升の豌豆に約二升の水を加へ、よく煮て軟かになりたるを取出し、直ぐに搗き碎きて其汁を漉し、大匙二杯のバタ及び食鹽と胡椒とを加へ、又温め置きたる一杯の牛乳又は同量のクリームを加へ、よく煮込みたる後、再び三合の生豌豆を入れ其汁の濃厚になるを度として炙りたるパンを小さく切りスープ皿に盛りその上より右のスープを注けて出すなり。

◎カップカスタード

砂糖二十匁に少量の陳皮を加へ、牛乳三合を和して煮、別に鷄卵五個を鉢の中にて破り、よくかきまぜて右の煮たる牛乳を漉し入れ、これをかきまぜたる後、再び漉し、小茶碗に注ぎ分けて平らなる鍋中に列べ、熱湯を茶碗の半に至るまで注込み、火上或は爐中にて十四五分間炙くべし。

◎ダライハッシ

まづ牛肉百匁を細かに切り、これをラード又はヘットにていため、よく叩きて食鹽及び胡椒粉を撒布し、又玉葱を細かに剉みてラード又はヘットにて揚げ、右を

の牛肉と混和し、これに大匙一杯のメリケン粉と、大匙三杯のスープとを加へ、暫時火にかけて沸騰せしめたる上別に馬鈴薯二百匁の皮を剝きよく煠で其水氣を去り、棒にて砕き鷄卵一個分の白身を加へて適量の鹽と胡椒粉と加味し更に大匙一杯のバタを投じよく混和したるを皿の中に厚さ一分ほどに延ばし、其周圍に馬鈴薯にて高さ一寸ほどの堤のごときものを造り、其中に右の肉を入れ、再び其上に馬鈴薯を加へて堤の高さと同等にし、平面にならして其上に流したる卵の黄身を刷毛にて塗り、これにパン粉を篩ひかけてテンピの中に入れて二三十分間焼き白ソースをかけて出す。

◎林檎のコンポート

七八個の林檎を取り皮を剝き、肉のみを切取りて、これを鍋中に入れ、一合五勺程の水と、少量の葡萄酒と、又多量の砂糖とを入れ、林檎を崩さぬ樣に注意し文火にてよく煮、後ち一個づゝ靜かに匙にて掬ひ取り別に其液汁をよく煮詰めて、これを其上に注ぐべし。

◎苺菓子

まづバタ大匙四杯を擂鉢に入れ、これに大匙二杯の砂糖を加へてよく擂ませ、後ち八個分の鷄卵の黄身を加へ大匙八杯のメリケン粉を篩ひ込み、ベーキンパウダ茶匙一杯半と、バニエル三滴とを混じ、別にブリキ製テンパンに油を引きて紙を載せ、其中に右の材料を入れて焼きたるもの二個を製し、苺の粒の揃ひたるを二個の中間に列べて挾み、輕き壓石を置き、其上にパウダー砂糖か、又はクリームの泡を立てゝ其中に苺を混じたるを塗るべし。

◎牛肉の卵子卷

牛肉を細かにたゝき、玉葱少し交せて、煮出しに醬油を交せ、鹽梅して、たゝきたる肉をざつと煮て汁をしたみ置くべし、さて鷄卵をよきほど劃りて大なる鉢に入れ酒を交せ十分にかきて煮出しと醬油とを少し交せて味をつけ、砂糖を加へて又かきませ、鷄卵焼によきほど入れて焼くべし、稍や焼けたる時、前に煮置きたる肉をいれて卵の焼けたる片はしよりそつと包む樣にして卷き、裏表ともかへして焼くべし、これをよき

ほどの輪切にして食する時は、手輕き洋食に似て味ひよし。

◎筍の肉づめ

牛肉を細かにたゝき鷄卵と朧昆布を其中に交ぜて細長き形に固め、筍を丸ごと茹でゝ根のかたき所を去り小刀にて節をぬき、其中へ前の固め置きたる肉に、メリケン粉をまぶし、かたく詰めこむべし、さてかつをの煮出しに醬油を加へて前の筍を煮て後、よきほどの輪切にして食する時は、おもしろ味ありて風味よきものなり。

◎ころも豆腐

豆腐の水氣を去り、奴豆腐位に切り、別に葛粉を天麩羅のころも位に解き、右の豆腐をころがして衣となし、胡麻油又はヘットにて揚げおろし大根にて食す、味ひ輕くして甚だ佳なり、尤も揚立をよしとす。

◎むら時雨

牛肉を細かにたゝきて葱と人參とをきざみて交せ、煮出しに醬油を加へて鹽梅し一と煮へしたる中へ前の肉に葱人參を交せたるを入れ煮るべし、さて鷄卵をよき程割りて丼の中にてよくかきたて、味醂を交せて又かき廻し、牛肉の煮へたる時、鍋の中へうつしいれ蓋をして又一と煮へするを見計らひ、椀に盛り針生姜を加へて出すこれは牛肉の鷄卵とぢなれど、牛肉の色赤く其中に人參の黃の濃き色となり葱の靑く、卵の黃色となりて恰も紅葉の村時雨に染りたるやうに見ゆるを以て斯くいふ。

◎鯛のケンチン蒸

鯛を水洗ひして水氣を拭ひ、頭を左りに腹を手前にして爼板にのせ、よく鱗を去り、庖丁の尖にて鰓を除き、脊の方より表裏共に庖丁を入れ、腸と中骨とを去りて水洗ひし、再び布にてよく拭ひ、腹骨と小骨を骨拔にて拔き直ちに醬油の中に浸し、三十分間ほど經て引上げ、醬油氣を拭ひ、中に煎り豆腐をつめこみ、截り口を元の通りに合せ置き手早く蒸籠の中に竹の皮を敷き大根を小形に切りて魚の枕となし、その上に右の魚をならべ、釜中の湯のよく沸きたるとき蒸籠を載せ

蓋をして三十分間ほど蒸しあぐるなり。

◎水煮鯛の仕方

鯛をよく洗ひて大鍋に水を入れて酒三分の一ほど入れて煮るなり、隨分靜かに煮るべし、但し魚のざんぶりとつかるほどに水を入るゝなり夏ならば水に冷し、大鉢に水をためて出す、かけ汁は猪口に山葵醬油を入れて出す、又冬ならば湯に葛粉を少し入れるなり。

◎鹽鮭の蝦夷汁

鹽鮭をよく洗ひ水に浸し四五日間ほど毎日二三度づつ水をかへ其後細かく切りて胡麻油をぬり火にて炙り置きて昆布を適宜に切り、あぶりたる鮭と共に水に浸し味噌をよく摺り圓くかため、火に燒き其まゝ酒水にてのばし兩品を入れざつと煮て、器に盛るなり、尤も汁は多分にあるがよし、又吸口は山椒胡椒の類よし。

◎鱸のフライ

まづ鱸をよく洗ひ、一夜ほど鹽につけ置きたる後、よく其鹽を洗ひ去り、乾かしたる後、頭尾及び鰭を切取り、皮を剝き骨を拔去り、二つに割きてメリケン粉及び細末に碎きたる麵包を、玉子にて溶きたる中に入れ、よく塗りつけたる後ちに、沸騰せる豚の油の鍋中に移し入れ、斷えず打ちかへし、その鳶色になるを待ちて鍋よりあげ、油を滴らしたる後ちオランダ芹を添へて出す。

◎赤貝の酢のもの

赤貝の口へ庖丁を入れて二つに割り、身を出しよく砂をこき、これをよき程に作り、酢は鹽少し加へて浸置き、さて菠薐草又は萵苣などの青物を湯煮して程よく切りたると黑海苔又は蓮根の湯煮して薄く切りたるなどあしらひ盛合せ、針生姜を上に置て用ふべし。

◎赤貝のぬた和へ

前の如く酢に暫時浸け置きたる大根の細打をよく鹽にてもみ、固く絞りたるに、獨活の柔かなるを細かなる短冊切にし、前の大根と一緒にして赤貝を浸け置きたる酢にて味噌のよくすりたるを溶き和へてよし、皿に盛りたる上には蕃椒の粉か又は紅海苔など氣色ばかりふりかけて用ふるなり。

◎牡蠣のたまごむし

牡蠣の充分細かなるを割り、さて鷄卵を割り、よくかきたて、味醂少しと食鹽にて味をつけ、大なる丼の中に牡蠣の割りたるをいれ、其上へ鷄卵のときたるをいれ、かき廻し針生姜を上へまき蒸籠にてむすべし、これの蒸し上りたるを鉢の儘、盆にのせて持出し中皿などに分配して食すべし又茶碗むしの如く、小なる器にて一人毎に宛蒸たるもよし。

◎鮑のふくろ煮

鮑を貝より出し、鍋に水を入れ、その中に鮑を入れ大根の小切を二切ばかりいれ、文火にかけてよく煮るべし、よく煮へつまりたる頃、味醂と醤油を入れ、又よく煮置き、煮へしみたる時、砂糖を加へ、暫時煮つめて、これをよきほどに切りて食すべし。

◎蠑螺の壷焼

貝の儘火に上せて焼くなり、さて泡を吹出し煮へたる時、火より外し、身をぬき出し、笠をさり、庖丁にて食ひよき程に切り、又貝の中へ入れ、味醂、醤油、少し加へて、火にのせ、煮へたる時、中皿に食鹽を盛り、其上へ貝をのせて出す時は、風流なるものなり、又前の如くして焼たる貝を細かに切り、貝の中へ再び入れる時別に椎茸百合根など細かに切り煮置たるを取合せて貝の中へいれたるも上品にして味ひよきものなり。

刺身と酢の物

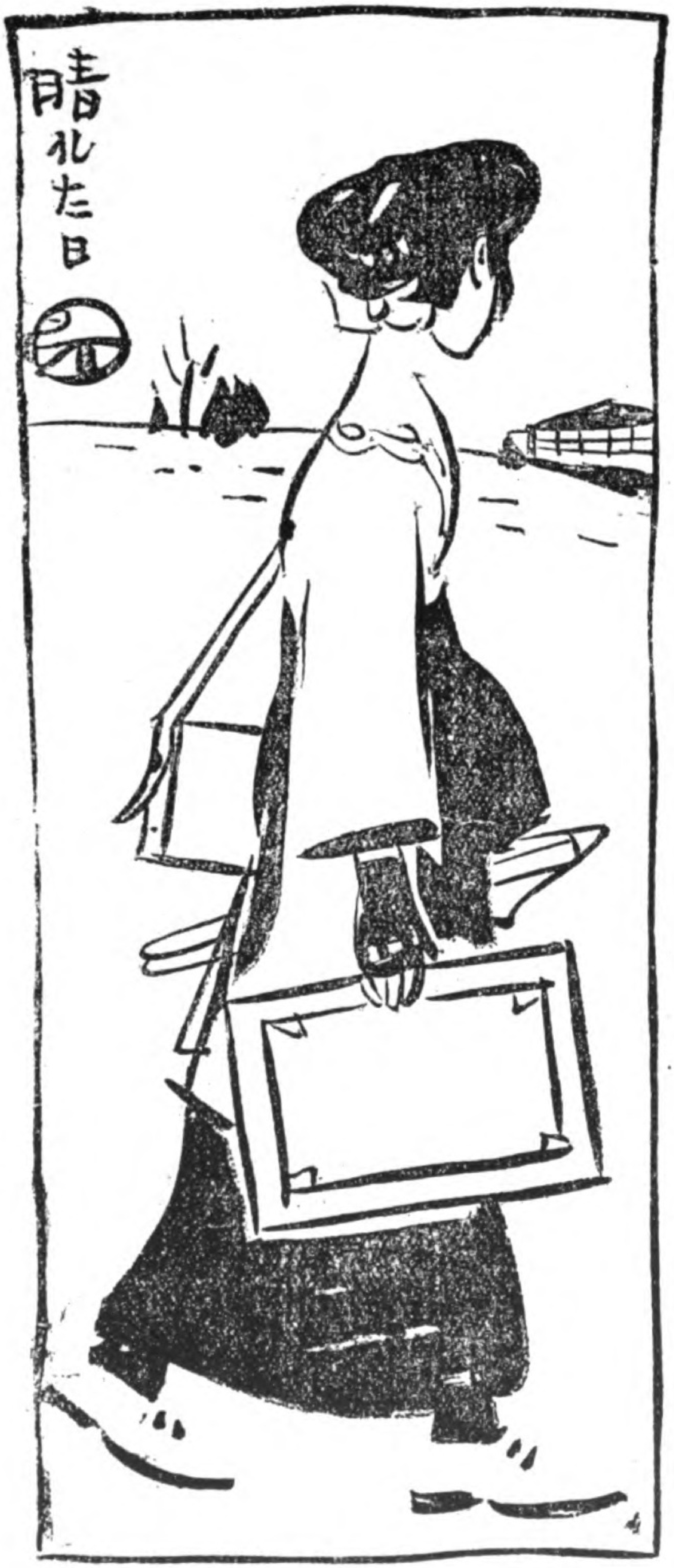
小林増作

科學の應用は日に月に進んで、料理の如きも衛生の注意隈なく行き届き、近頃の家庭には更に昔日の觀が無い、啻に西洋化した許りでなく、美味と滋養を兼ねて、營養價の多いものを食膳に供せられるから、體質の進化は著しく發達して來た、夫れと同時に國粹保存の聲も、隨分傳説せられるので、一方では純日本料理の研究會さへ起つて、庖丁の腕くらべをして居るやうな次第で、云はゞ和食にせよ洋食にせよ、乃至折衷料理にせよ、衛生上の注意は、材料にも器物にも施され

て今日の聖代に生活するものは、誠に多大の幸福を享けて居るのである。

夫に就て按ずるのに、食物衛生は他より彼是云ふ計りでは、却々に實行され難い、如何に衛生當事者が熱心に立ち廻つても、個人衛生が行き屆かなければ、何の甲斐も無い譯である、食物に就て研究する事は現今の進歩した世の中でも、なか／＼澤山あるが、茲に手近い例を一つ演べて見やうなら、日本料理に殆んど欠く事の出來ない、魚肉の刺身である、彼の刺身は清新の魚肉の皮を剝ぎ取つて、其生身を細斷したもので、日本人の多くは之に舌皷を打つから、習慣上まだ何時にても和食料理には用ゐられるであらう、此刺身は造る前に清水で洗淨したのみで皿に盛られるから、特に注意すべきは其洗滌に用ふる水である、水の中には數へ切れぬ程の細菌を含んで、特に都會の河の水には一立方センチメートル（十六滴）の中に數百或は數千の菌を含む事がある、概して冬季より夏季の方が多く、時に依ると數萬といふ菌を數へ出す事がある、尤も單に分裂菌ばかりなら差支もないが、コレラやチブスの病源菌を含む事もあるから、若し傳染病でも流行して居るやうな際には一層注意をせねばならぬ、工業場が河の附近にあると稀れに糸狀菌や醱酵菌が含まれて來る水道の水は河の水を沈澱させ濾過したもので、細菌の數は非常に減つて居るが、尚多い時には三四百の菌を數へ出す事が尠くない、水道の水でも殺菌された水で無いから、傳染病の流行時には殊更、常でも生水は飲む事を避けるが良い、飲む事ばかりでは不用意の至りで、刺身の如きは神經質に云へば、何時も殺菌した水を用ゐなければならぬ、殺菌と云つても容易い話しでよく煮立てた水を冷して夫を用ゐれば良いのである、健康の狀態では其樣な手數を常に要する必要も無いが少しでも傳染病があると聞いたら、是非此注意を要する事は勿論である、水は一立方センチメートル中非病源菌百個まで含むものを善良水としてあるので、市街を流れる河の水には一滴の中にさへ、數千乃至數萬の菌を見出す事がある、泉の水と深い井戸の水には殆ん

ど細菌が含まれて居らぬ、兎に角生水を飲む事は一般に禁じたい、隨分何事も心得た人が水道の水なら差支ないなど〻云つて、煮沸を怠る人があるが、水道の水の煮立たぬのを飲むで赤痢に罹つた例もあるから、傳染病流行時は取分け危險の觀念を以て飲食物を取扱はねばならぬ、刺身は原料の魚が新鮮であるかないかを試むる外、水に對する注意が必要であるから、管々しいけれども茲に長々と書き記した次第である、稀れに鳥の刺身もあるが、是にも同樣の注意が願ひたい、又酢の物も時に依ると危險であるから、前と同じ注意を以て作る必要がある、生蠣の內に腸チブス菌が存在して居た實例もあるから、假令酢の內に酸があつて幾分殺菌の効があつても、原料と之に使ふ水に就ては、常に注意を拂ふ事を忘れてはならぬ。



精神病院參觀記



巢鴨精神病院を參觀して醫員陸軍一等軍醫篠崎清則、醫學士、橋健行の兩氏から左の御話を伺ひました。

▲婦人患者は情の側

男子の患者は學問や職業に關した事を口走るとか、財産の紛紜、生活困難なぞを頻りに訴へるとか、無暗に誇張した態度をするとか、主に智識や意志に傾いた發作をやるのです。婦人の方にも矢張り此種類が在りますが、多くは情に關した言語擧動を現はすので、其中も老年の婦人は是が甚しいやうです。畢竟年を老る程外見が無くなつて忍耐力が弱くなる所爲であらうと思はれます。精神病者は實に天眞爛熳と申すと可笑しい次第でありますが、或點から考へると無邪氣で可憐なものだと感ずる事が往々あるのです。醫員仲間は患者を見廻ると氣が晴れると云つて居る位です。

▲疾病の素因

精神病を發するのは非常に複雜した原因があるには相違ないですが、大抵遺傳的か自發的に精神病が潛伏して居る人が、或事件に觸れて突然發病するのです。畢竟體質が原因で、事件は近因即ち導火線と申して宜しいでせう。病種の無い人は假令如何程の煩悶、失望に陷つても猥りに發病するものではありません。ツイ先達入院した患者は、某中學の五年生で一見好箇の青年ですが、朋友と爭論の末、烈して毆打された其晩から精神に異狀を來したのです。夫で兩親は學校へ談判するとか、相手の朋友を訴へるとか云て非常に激昂して居ましたけれども、此青年には診察上精神病の體質を具へて居る事が分つたので、懇々兩親に說いて訴訟沙汰を思ひ止らせたのです。斯樣工合で精神病の發

するのは持て生れた體質に依るとは申すもの〻、其動機に就てよく注意すれば大事に至らずして濟むのも有ますから、此體質らしい人は男女に限らず自身もよく心を寛かにし、家庭の人達に成る可く刺戟せぬやうに注意するのが肝心でせう。私は主に男患者を取扱つて居ますが、婦人の方は篠崎氏に御尋になると宜しいです。

宮崎氏は婦人患者の中、趣味ある履歴を有するものを選んでノートに集められてあるので、個人に就て其實歴を話されました。

▲上品な隱居とも見ゆる老婦人

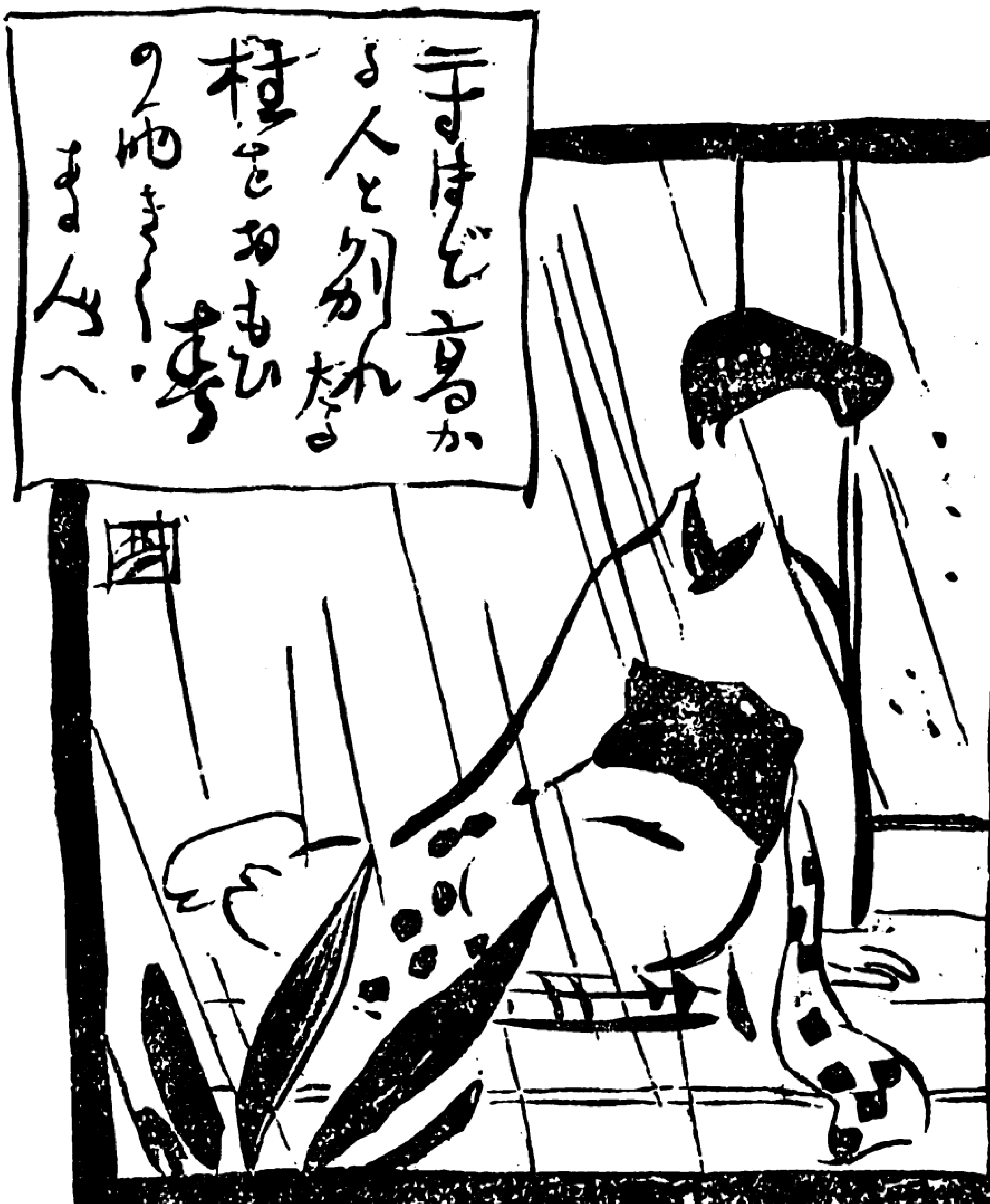
本年五拾九歳の婦人患者は躁狂で拾年前に入院したのですが、此婦人が邸奉公を爲て居た妙齡の頃は類ひ少なき容色であつたので、此邸へ出入する某高等官に思はれ遂に夫人となつたのは、丁度二十歳の時でありました。三十九年前に六七十圓の月給を取つた官吏は却々贅澤な生活で、此婦人は先づ玉の輿に乘つた身分となり、良人と共に婦人の郷里へ旅行した際なぞは、全村擧つて送迎した位でありました。夫婦の交情も人の羨むほど濃かであつたのが、好事魔多しで、婦人が二十七歳の時良人は黄泉の客となつたのです。婦人は悲哀の餘り終生獨身と決心したのですが、近親は未だ衰へぬ婦人の容色を惜んで百方再縁を勸め、某豪商の隱居に嫁がせたのです。隱居と云ても身代を養子に讓つたばかりで未だ其頃四十位の働き盛りでありましたから、株に關する商法を企て一身上起さうと云ふ意氣込で二十人許りの小僧を使つて居りました。婦人は先夫時代の奥樣的思想をサラリと捨て〻自分を愛する今度の良人のために非常な勤儉を爲やうと決心いたし、忙しい家業に下婢も使はず、多勢の小僧の刈込まで自分でやつた位でしたので、身代はメキ〳〵と良くなり、本家を凌ぐ程になつたのです。處が良人は追々放蕩を初め、財產は悉く自分が抑へて婦人にはろく〳〵小遣錢も當がはず、家に寢る夜は稀で偶に歸ると暴々しく婦人に當り散すと云ふ風になりました。けれども婦人は惡い顏も見せず、邸仕込の行儀正しく一時二時まで

端坐して良人の歸るのを待て居たのです。此辛抱は丁度三年間少しも變らなかつたので、流石の良人も其誠心に感じて翻然品行を改め、以前に倍する愛情を婦人に注ぎ婦人の寢衣まで暖めてやると云ふ熱度に上つたので、婦人の苦勞も昔語りとなつたのです。併し此幸福な境遇も本の束の間で此良人も又候病死して了ひました。喜憂の急轉に人生の果なきを感じた婦人は、良人の遺產を悉く養子夫婦に讓り靜かに老を養はんと決心し、月々何がしかの小遣を養子から貰ふ事に定めましたが、元來節儉な婦人ですから小遣錢の內を每月貯蓄して居たのです。此婦人は養子の妻、即ち繼娘をよく愛し、自分の方から詫るやうにして娘の嫌ひな裁縫を仕込んでやつた位でしたが、我儘な娘は母を母とも思はぬ仕向をやるので、不快な感を起して居つた處へ養子は養母から讓られた金に心が弛み相場へ手を出し初め追ゝ身代をすり減すのを、婦人は頻りに心配して居ましたが、其頃から氣晴しのために少しづゝ酒を用ゐ始めました。根が呑める口であるから追ゝ本物の飲酒家になり、時には醉に乘じて藝妓を買ふ事さへあつて貯金を惜氣もなく遣ひ散らし其性質は變化して怒りつぽくなりました。或時フヲリと蕎麥屋へ入て一杯やつて居ましたが、側に飲で居た何處かの車夫を捉へてサン〴〵大平樂を並べ、昔の奥樣風を吹して威張つて居る處へ、養子の家の下男が入つ來て車夫に詫び、『御隱居さん斯樣な處にいらしつたつて詰らない。今日は好い御天氣ですから向島の方へ花見に御供しませう』と誘ひ出しました。婦人は花見の場所へ連れて往かれたと思つたら此病院であつたと云ふのが此婦人の略歷であります。

▲心付かぬ內に發病

此婦人の發病したのは蕎麥屋で車夫と喧嘩した時からのやうに思はれるのですが、其ズツト以前氣晴に少しづゝ酒を用ゐ始めた時已に發病して居たのであります。勤儉で貞淑な婦人が酒を用ゐ始めたと云ふのは、禍福屢ゝ往來して甚しく神經を刺戟した結果で、已に

精神病の初期であつたのです。併し斯様境遇の婦人が氣晴に少量の酒を用ゐる位の事は、世間にいくらも例の有る事ですから大抵の人は等閑に看過して居るのです。前にも申す通り精神病は主に體質に在るので、凡ての人が特別の動機のために發すると云ふ次第ではありませんが、



性質に不相應な行爲を始めた人に就ては、假令杞憂に屬しても宜いから、近親が注意して手當する事が必要です。初期の内に傍人が刺戟を警戒し治療の方法を講すれば、患者も悲慘な狀態に陷らず傍人も大迷惑を爲ずに濟むので、此婦人なども行爲の少しく變化した際、養子夫婦が

婦人の心を休むる處置をしたならは、大事に至らずして恢復したのでありませう。唯今此婦人を一寸此室へ呼んで見ませう。

▲老婦人との對話

篠崎軍醫の命に從ひ、老看護婦が今話題に上つた老婦人を外來診察室へ連れて來ました。老婦人は白髪の少し交つた髪を引詰の銀杏返しに小さく結び、白地に紺の棒縞の患者服の上へ双子の布子をかさね、双子の羽織を引かけて居り、帯や羽織の紐をキチンと締めて粗服ながら旨く着こなして居ました。篠崎氏はどうも御苦勞樣と言て記者の側の椅子を患者に勸められる、老婦人は篠崎氏や橋氏や記者に御辭儀をして微笑んだ。瓜實顔で鼻筋が通つて兩側瞼の愛くるしい眼付、癖のない眉毛に豊かな額、頸脚と云ひ丈恰好と云ひ難の附け處がない、肉色も年の割に艶がある。記者は五十九歳で此位の容貌を保ち得て居る此婦人の半生を想像して眺めて居ますと、篠崎氏は記者に參考の材料を與へるために頻りと老婦人に話し掛けられました。

篠崎氏「今日は好い天氣ですナ。

老婦人「左樣で御座いますチ、マアどうも此御住居の御立派です事、どうも好い御住居……

どうも好い御住居を五六遍も繰返して、顯微鏡器械類や腦神經の解剖圖なぞを珍らしさうに見廻し、少し伸び上つて窓外の櫻を眺めなぞ爲て居ました。

篠崎氏「貴女は此部屋は初めてゞすか、幾度も來た事が在んでせう。

老婦人「イヽエ初めて……、どうも御庭の御立派な事、斯樣御住居へ上りますと晴々いたします子。

まぶしさうな目付をして記者を見た。記者は之をキツカケに對話を試みました。

記者「失禮で御座いますが貴女はもう暫く此院に御住ひで……、ア左樣ですか、貴女も隨分御苦勞をなすつたでせうが、唯今では最早何も御心配は御座いますまいネ。

老婦人「エー〳〵三度々々結構な物を頂いて居りますし、夫れに御八つまで頂きましてネ。

如何にも感謝に堪えぬらしい。而して行儀よく兩方の手先を卓子の上へ上せ、少し話が途切れると窓の外へ目をそらし、どうも好い御住居です事、好い御庭です事を繰返して居る處は、老婦人が邸奉公や高等官夫人時代の貴族的思想が頭腦に深く刻まれて居る事が分ります。

篠崎氏「貴女は何か樂しみな事がありますか、三味線が大分上手ぢやアりませんか、いつか春雨を聴いたが旨いものですナ。
老婦人「イエモウ皆な忘れて了ひましたホヽヽヽ。
壷口をして笑ふ様子は如何にもしほらしく、普通の婦人としか見えません。
記者「ソレはよい御樂みがお在りですネ、失禮ながら御稽古は何な。
老婦人「地は長唄で御座いますが、義太夫も少しばかり……、鏡山を一段ホヽヽ。
と笑つて俯目になつて
「夫れからアノ朝顔。
恥しさうに小聲で言つてホヽヽと又笑ふ態度は、妙齢婦人の嬌羞とでも云つたやうな工合です。
記者「ソレでは今度義太夫を伺ひに出ますからどうぞネ。
老婦人「御ゆつくりネ。私の宅は直此後の御馬の通る所で御座いますから。



御馬の通る所と云ふのは何の事であらうと考へ居ると「此婦人の病室の側を荷馬車が始終通るからです」と篠崎氏が説明されました。
篠崎氏「如何です大森の方へ遊びに出掛ませうか。
老婦人「結構で御座いますネ、櫻も丁度見頃で御座いませうし。
篠崎氏「イヤ彼地は櫻より梅が良いのですよ。
老婦人「でも梅はもう實になつて居りませう。
一寸愛嬌に揚足を取た處は却々確なものだと思ひました。
篠崎氏は「御苦勞様でした」と老婦人に一禮されると、老婦人は用の濟だ事を悟つて叮嚀に御辭儀をして椅子を離れながら又例の良い御住居を繰返して居る、
記者「失禮いたしました、私の宅へも是非御出で下さいまし。

老婦人「有難う、唯今銘仙の着物を縫ひかけて居ますから、夫が出來ますと上ります。アノ而して鏡山だネ。」笑ひながら看護婦に連れられて園外に出ました。

記者「唯今の患者は普通の婦人が調子外れの事を申す位なもので、格別可笑な處も見えませんが。」

篠原氏「ナニ最少し話して居ると妙な事を言ひ出し、卑猥な言語も折々發するのです。第一此室へ何の爲に呼ばれたのかと云ふ考へもなく話して居るのは、精神が蛻拔の殼となつて居る證據であります。併し初對面の人の前では謹直にして居る處は幾分か常識が在るので、あれでも餘程快くなつた方です。」

▲患者の取扱法

當院内に居る可なり騒々しい患者も、醫者や看護婦が懇々と慰諭しますと餘程沈靜して參觀人に御辭儀をする位になるのですから、輕症患者は周圍の待遇に依つて著しく恢復期に向ふのです。精神病患者でも幾分か常識が在るので、狂人取扱ひをされる事は非常に不快に感ずるものであります。當院では凡ての藥劑を精撰いたし、食物、入浴、運動等と充分注意を拂ふて居ますが、患者優遇と云ふ事を第一の急務として居るのです。罵詈暴言は愚か、稍もすれば拳を振り上げて向つて來るやうな患者に對しては、看護婦が特に柔順な態度で詫言をする、偏執で手の付けられん患者には、同情の涙を注いで慰める。自分の排泄物の智覺さへないやうな痴呆に對しても、『貴女斯うなさいませ。』『申上げた事は御分りになりましたか』と云ふ風に敬意の籠つた言葉遣をして居るのです。是等の結果かして追々良い成績が現れるので、唯今でも退院して差支へないものが大分在るのですが、世間へ出て冷遇された場合には如何であらうかと案じられるのであります。院長呉博士は疾より此患者待遇に就て憂慮され、醫學上にも狂と云ふ文字を厭し、例令ば妄想狂を妄想病、騒狂を騒病と云ふ風に訂正する事を主張されたのであります。是から病室へ御案内して健全に近い婦人患者を御紹介致して見ませう。中には英學の素養深き婦人、高等女學校出の婦人なぞ當世向の患者が居りますから研究の材料にならうと思ひます。

博覽會が齎らす智識

發明品博覽會幹事長 窪田勘六

◎博覽會の見方

博覽會はもとより商品紹介の一機關には違ひないけれども、たゞ多くの物品を羅列して販賣を目的とする勸工場の如きものではない。同時に社會各方面に於ける知識技能の產物を博く世人の參考に供し、以て事物の進步發達をはかり、世の福利を增進せしめむとする一大研究の奬勵機關である。それ故歐米各國では、近頃一般博覽會よりも、特殊博覽會を重んずるの傾向があつて、それ〴〵分業專門的の博覽會が催されやうになつて居る。目下上野竹の臺に開催中の發明品博覽會は、我國に於けるこの種博覽會の嚆矢といふべきものであるが、その陳列品は普通博覽會に於ける一般の出品物とは大に趣を異にしたものであつて、何れも發明者なり考案者なりが苦心慘澹の結果になりたるもののみであるから、一として注目に値しないものはない。しかしながらたゞ漫然と見物する丈けでは一向つまらない。矢張り觀覽者が各自自分の見るべき場所に就いて見なければ、眞に博覽會といふものが活きて來ないのである。乃ち婦人には自ら婦人の見るべき場所といふものがあるから、よく其の自己の領分に就いて十分に研究應用せられむことを望む。婦人の見るべき場所といふのは即ち家具とか玩具とか裝身具携帶品とか、或は織物の類とか、すべて婦人に關係する物品を陳列した場所の事である、尤も實物敎育の機關として博覽會を見るに於ては有らゆる部類のものみな注目の値があるのであるけれども、何方かといへば、婦人はあの鑛山で使用すべき機械などよりも、先づ自己に最も近き臺所の道具でも見た方が遙かに必要でまた有益であると思ふ。目下桐生足利あたりの織物業者は泊りがけに出て來て居つて、毎日博覽會へ織物を調べに來る。成程この點が違ふばかりで斯うだとか、これを改良すれば何ういふものになるだらうとかいつて、熱心に研

究して居るが、其人達は田舍者で一見何もわかりさうにもないけれども、さすがは專門家で、其道にかけては實に偉いものである。それと同じ事で臺所の道具なども、我々男子から見ては一向わからぬが、婦人の目から見ると種々研究の價値あるといふものである。

◎博覽會より得る便益

男子が外に出て各自その仕事をして居る間に種々な要求が起るが如く、女子が家政をとり、子供を育てる上にもまたさまざまの要求が起つて居るだらうと思ふ。例へば何うもよい燃付がなくて困るとか、子供の牛乳を夜間温めるに手輕なものがないだらうかとか隨分數々の要求があらうと思ふが、博覽會に往つて見るならばチヤンと其の要求が滿されるのである。それにまた斯ういふ事があらう。何かの要求が起つて、丁度これに適當な發明品があつた筈であるがとまでは思ひ出してもさて何店でそれを賣つて居るやら一向わからないといふやうな事があるだらう。それを一々坊間を尋ねまはるのは大變であるが、博覽會に往くと直ぐわかる。かの蒸氣鍋の如きも多くの婦人は要求はして居るけれどもその賣場を知らぬ、尤もそれは銀座の店を一々きいて歩いても容易に見付かるまいと思ふが、博覽會に往つて見ると直に買ふことが出來る。のみならずそれは何處で製造して居るといふ事がわかるから、今後注文することも容易に出來るのである。それに博覽會では同種類の物品が幾種類も一つの場所に集めてあるから其中で何れが一番よいかといふ比較が出來て、最も便利なもの最も經濟なものを撰ばれるといふ利益がある。更にまた出陳の物品を見ることに依つて、これはも少し簡便に出來さうなものだとか、此處は斯う改良した方がよいとかいふ風に自分自身に發明の動機を與へられるといふやうな事もあるだらうし、かの瓦斯會社の臺所の如きを見ては僅か一間四方の場所に、これ丈け多くの道具を置きならべながらしかも立派に整頓して居る。さうして見ればこの二倍も三倍も廣い自家の臺所などはもつともつとよく整頓すべき筈で

ある。いや整頓させなければならないといふやうな教訓をさへ與へられるであらうと思ふのである。

◎簡易生活の參考品

發明は文明の母である。文明人は盛んに發明品を利用するものでなければならぬ。世の中が複雜になつて來て、仕事はだん〳〵多くなる。女子もいつまでも家の中にばかり引込んで、おさんどんを一日の仕事として居る譯にはゆかない。いろ〳〵社會的に立ち働かなければならなくなつて來たのである。それにつきて近頃よく教育ある婦人達の口から生活をもつと簡易にしなければ〳〵といふ聲が大分聞えるやうであるが、それには今度の博覽會などを見ると、非常に得る處もあらうと思ふ。例へば瓦斯會社の出品裝置の如き、水道自在器の如き、何れもみな好參考品といつてよい。パタパタ手數をして薪炭を燃さないでも、瓦斯をひけば僅の時間で僅の費用で、容易くお料理も出來れば浴湯も沸く。また水道の水を汲むに從來は長いゴム管を用ゐるか、さもなくばバケツを持つて水のたまるまで手を塞げて居らなければならなかつたが、其不便を防ぐために自在器といふものが出來て居る。自在器は水を取らむとする方にそれを捻つてさへ置けば、其間自由に他の仕事が出來るのである。其他幾何も便利なものが出來て居るのであるから、縱令自動的に要求がないにしても、行つて見ると他動的にも要求が起つて、便益を受くることが極めて多いだらうと思ふ。

◎博覽會と興味

とにかく博覽會より受くる便益といふものは非常に多いのであるから、此處に心を致して觀覽するならば、よし演藝館に藝者の手踊がないにしても、百圓の福引券がないにしても十分其處に興趣を見出すことが出來るだらうと思ふ。由來博覽會といふものは決してお祭さわぎをして人を集むべきものではない。種々な餘興を催して騒ぎ出したのは大阪博覽會が始めで、あれは大阪式といつてよい。もとより會場を乾燥無味なら

しめぬやう花を置くとか音樂をやるとかいふ配合は必要な事である。今度の發明品博覽會は場所が狭いために、その配合を十分ならしめ兼ねたのは遺憾であるけれども、其代り外に出ると直ぐ公園であるから、それによりて十分補はれる事と思ふ、それに參考品として休憩室に備へ付けてある自動管絃器の如きは、優に音樂隊の奏樂以上に觀覽者をよろこばせて居ること〻信ずる。自動管絃器は佛國最近の發明で、初めて日本へ送つて來たものを直ぐ買入れたのであるから、佛蘭西の人さへまだよく知らない位である、電力によりて運轉すると數十の樂器を合はせた音調を發するもので、それをきいて居ると全然西洋の音樂會で合奏をきいて居るやうな心持がして實に愉快である。

新刊紹介

▲日本の家庭に應用したる支那料理法　津川千代子著

支那料理といへば、何だか、珍妙に聞こえて迚も普通の家庭などに應用されぬものとも思へぬが、洋食が一般家庭に用ゐらる〻今日、支那料理とて強ち眞似の出來ぬ事はあるまい、この書は成女學校にて實地研究せし料理の仕方を根本として材料も多く日本に有觸たる品を應用し造作なく而かも巧みに出來るやう説明したるものなり、定價五十錢、日本家庭研究會發行

▲小説逆境の勇士　堀内新泉著

貧苦に育ち、欠乏に堪へあらゆる困難と戰ひ種種なる境遇を經て、而かも誘惑に陷らず以て徐ろに身心を鍛錬し、品位を向上せる一個勇壯なる青年を主人公として配するに一個の佳人を以てす、嵐に泣く花、雲を妬む月、才子佳人の情緒描き來つて悽婉又纒綿、自然派以外又乾坤の作なり、實價四十五錢、成功雜誌發行

▲解説女子書翰文　佐藤正範著

文章を書き慣れざる者が手紙を書くは最も困難なる事にて、端書一枚滿足に書かんとして半日を費やす事などあるは珍らしからず、此書は初學者の爲めに手紙を書く方法を丁寧に教へたるものなり、定價一圓、文盟館發行

▲出産前後母のため　辻高俊著

專ら姙産婦の衞生を説きたるものにして産前、産後に亘る一般の注意を經過に隨つて説述し、著者は東京婦人産科病院の副院長にて實地の經驗に基き最も平易切實に解説したるものなり、著者は東京婦人産科病院の副院長にて實地の經驗に基きたるものなれば理論よりも多く實際的なるを以て平素衞生者智識に不十分なる婦人にても一讀よく其の注意の個條を智得して利益する處ろ大なるべし、定價八十錢

▲教育新菓ダルシス

この菓子は製菓機械にて製造したるものにして表面の模樣は種々の意匠をこらしその裏には日、清、英の單語が記してあれば、菓子を味ふと同時に語學が覺へられる趣向なり、味も又淡白にして風味よく四季の進物用として兒童向には至極妙なるべし三越吳服店内兒童博覽會と上野の發明品博覽會にて即賣し其他の菓子店にもあり直段は

十二個詰　壹個　六錢
百個詰　同　六拾錢
二百個詰　同壹圓貳拾錢
五十個詰　同參拾錢
百五十個詰　同九拾錢



金子薫園選

（天）○　　下総　琉登代子

薄れゆく影見つむれば巫女ありてまねくがごとも日は暮れにけり

評、何となく神韻のたゞよふて居る心地がする。「春の夕」の感じ殿かしく出て居る。

（地）○　　讃岐　安藤たか子

のぼる日のすこし曇るを見るときに若きこゝろのなげきを思ふ

評、率直に言ひ下した中に、女らしいと言つても、かよわい一方でない心持があらはれて居る。やさしい力のこもつた作であらう

（人）○　　下谷　村島文子

われは今春てふものを豫想して見るを欲せずおとろへてゆく

評、春愁の切なるを覺えしめる

秀逸

○　　相州　中田園子

春の日や炭燒小屋のかたはらに何ぞ黄いろの花のついける

○　　淺草　塚原けん子

君知らぬわが秘めごとの非を覺りおびえつあれば身はおとろへぬ

○　　下野　片岡浪子

もえがらのいぶるやうなるわが心捨てたる君をなほもわすれず

○　　伊賀　大北蔦子

君を見て如何なる感じ一つだに起らざるまで倦み果てし哉

○　　千葉　齋藤寛子

日は入りぬ戀よ我戀いかなれば空しき闇に燃えんとはする

○　　岡山　熊澤喞子

うつくしきわが夢殿の階殿のたえてくるしきこの夜ご

ろかな

○　本郷　富岡文子
明日はてむ運命の今日も黒髪を花にてかざるをんなの心

○　名古屋　岡田明子
行きちがふ列車の窓に白き顔見しとばかりにとりとめもなき

○　石川　吉川辰尾
白帆ゆく河のあなたの我が家の屋根草そよぎ朝ぎりはれぬ

○　伊勢　岩木淑子
あやまちてありとも知らずあやまちをつゞけ來し日ぞうら安かりし

佳作

○　芝區　須永あや子
薹の蕾白蛇に似たるかたちして椶林の上をながれぬ

○　神戸　柏原みつゑ
初夏やオリーブ色のおなじ傘さして街ゆく二人の少女

○　横濱　阿部常子
春の日やをんなの群は着飾りて町端れより野にいでてむとす

○　足尾　小田けい子
我が里は山深ければ花も見ずあなこちたくも雪のふること

○　豐後　吉見靜子
とはいへど涙のひまに忘れえぬ君がおもわのうかびくるかな

○　下總　小澤まゆみ
目に見えぬ戀しみどもに追はれつゝ心ゆらぎて面影ぞうく

○　尾張　小百合
花芙蓉白きを瓣のみ塵よとかしこみ見つれ凉しき露を

○　伊勢　多田小あさ
暗き街ゆけば後方に人ありてわが名にあらぬ聲かけてけり

○　伯耆　村上靜代
わが心をさなき時を戀ふごとおぼろになりぬ春の夜の月

○　岩代　江口ろく子
潮ぐもり午より吹き立つ南風に死ぬけはひなる海沿ひの街

○　熊本　角田ますこ
身のまはり花の靄湧く春の夜の如き朧の少女の群よ

○　飛驒　高つゆ子
君得むと夜も日もわかずひたすらにあへぎつゝゆく心の隘路

○　武藏　鈴木ゆき子
出雲路や人參畑のかたかけに赤き花さく春の雨の日

○　千葉　齋藤きよ子
春の雨こよひそぼふる亡き姉の優いたはりぬしのばれもして

○　京都　木俣津夜子
水くむと朝霧こむる谷ゆけば花の雫に髮ぬらしけり

○　若狹　津田汐汀女

亡き母のますと思はれ蓮華咲く丘のうす霞すかし見しかな

○　豊後　菅原芳子

よくきけばわれをあざめるやからどもひそめるごとし夜の雨のふる

○　大阪　沖ふく子

何となきあはれさ覚ふわれありぬ栗の花ちり雨ふるひと日

○　岩代　城田和子

いたつきのなやみのひまに袖ふりてしこ女あまたの招く岡見ゆ

○　播磨　森中かず

亡き姉によく似る人と道づれになりて野を来る春のくもの日

○　長崎　竹野孝子

白菫たへて久しき御文の封開く手に萎みて落ちぬ

○　仙台　南もり子

かゝる日に鮎は生れむ水の音ゆるやかにして春雨ぞ降る

○　津市　伊野興志子

花のかげ人のどよみの中ゆきて冬野を辿るごときさみしさ

○　静岡　根岸真子

ほとゝぎす青葉の中にゆく春のさみしさをまたつよく覚えぬ

○　下総　小出保花子

母の背に出で入りし日の門の柳青芽ふくなりきさらぎ来れば

○　伊賀　大北たれ子

君見れば涙流れぬすぎし日の懐かしかりしおもひでのかず

○　高崎　池野たま子

舞ひてまひ姫あまた居ならべる花のまひ殿夕日さすなり

○　神戸　比頁多清枝

むらさきのよき衣着たる京の子の日傘にしけく花は吹寄きぬ

○　美作　性全知惠子

ますらへるいたみの心の身にしみて慎むが如き鐘の音をきく

○　下総　月沖さゆり

相抱きあつき口づけかわしたるそのつかのまにかへりて見たき

○　讃岐　小野定子

あたらしき思湧くなりむらさきの花さく春の野路を歩めば

○　神田　門叶富美子

篝火たく賤か茅屋の畑まで椿咲く春は香に匂ふなり

○　須磨　有村紫芳

まつばやし見おくる人もゆく人ももやごもるなり鐘の鳴るかな

○　山口　倉光芙蓉

よき歌と君もゆるしゝ其歌のなりしあしたよ百合の咲きしは

○　神奈川　飯田白露

なき友がめでしこの花白椿をかざせば袖のあやしくぬれぬ

○　千葉　京相文枝

二月や春草の香の日に匂ふ如しと思ふ我が戀の息

○　千葉　吉松佳芽子

宵の霧小雨となりし嵯峨野路に折々しきる遠音鶯

○　大阪　木村花子

古庭やうつろひがたの山吹の花に音して夕雨の降る

○　鹿児島　樋口友子

うれしさに胸はさわぎぬいひえざる思いつしか君はさとりぬ

○　信濃　いれ子

花ふゞきまたひとしきり汲みおきし手桶の水に散りてうかびぬ

○　須磨　有村紫芳

かれの音は野こえ山こえ海こえて君すむ島にひれきてきえむ

○　伊勢　登美子

君を戀ふいないなあらず美はしき涙を欲りすひとり子なれば

○　府下　はる枝

病人が今はの果のうめきごゑ小草ゆるがす風にきくなり

○　横濱　鈴木まつ子

行水のしぶきかゝりて白き花ほろ〳〵ちりぬ夕やみごろに

○　栃木　新村しげる

二人して逝く春の夜をあかしたる事もありきとそのかみに泣く

○　麹町　しぐれ

まじものゝおそへるけはひ我胸は安まる間なくふるへおのゝく

○　岩代　城田市子

月と日の光のほかのあたゝかきめぐみを欲す少女となりぬ

○　美濃　平田芳子

銀冠にかすみのもすそながうひく女王ぶりなる春の伊吹よ

○　豐後、立川つや子

鐘鳴りぬ北をめぐりて夕暮れの鐘は來りぬ湖の上

○　阿波　ふじ子

まさごぢや君が御名かきわが名かき消しもえやらずなみにまかする

○　山梨　淺井ふじの

我が望み我が幸やがて我がゆくはつめたき墓のかなたならまし

○　岩代　古川つれ子

惱み泣きし顔ふり上げてゆくりなく鏡に涙の跡うつしぬ

○　大和　森崎信榮

なまじひに君にそむきし卵の子のたぢろぐ思ひ今朧月搖る

○　岐阜　潮來あやめ

花の瞳にうつらもたれて目閉づればありし妹の姿おもほゆ、

○　仙臺　加藤たけ子

行く春は只なんとなく惜まるゝせめてこの世は歌にあかさむ

○　上毛　武藤ひさ

牛を追ふ童の笛の音もながく十里の堤なかば暮れゆく

○　埼玉　荻野くに子

わがせこをのせたる船のかげきえて灘にかすむ春の夜の月

○　豐後　加納豐子

うすくろき何ともわかぬものゝ形淡く地にひくたそがれ時を

○　大阪　梅村愛子

病む姉のみ髮結びてまゐらする日向の縁に胡てふとびくる

○　伊勢　下村靜代子

掛茶屋の軒端に干せるからかさに夕日映りて花ちりかゝる

○　小石川　芳江

我がはれの小袖にとしも乞ひてましかすむ夕べの山の紫

○　伊勢　岩本淑子

面知らぬまことの母の面影をふとしも思ふ我がうつしゑよ

○　岩代　横山楓子

美くしき夢路をたどるこゝちして我をわすれて見る櫻かな

○　美作　性全峰代

華やかの春のうたげに緋衣の少女七人手をとりてきぬ

○　美作　性全みれ代

この鐘の君がみ胸にひゞけよと願ひぬ山の一つ家に居て

○　栃木　露子

君ゆきてはや三とせの春はきぬ思出おほき梅の花散る

○ 伊豫 武田米子

おもひ寐の夢なりしかとゆめ心地御こゑもとめて月の戸おしぬ

○ 越後 杉山紫子

このまゝにめしひとならば美しき心の花もしをれはてずや

○ 群馬 林あい

春風に心うごきてなきそむる鶯の音ののどかなる哉

○ 備前 萩村靜子

かなで見む人の胸には沁まずともこや眞心の冴き琴の音

○ 神戸 芳房女

我心たれに語らん人もなみおもひに沈む春の夕ぐれ

○ 新潟 岩本よし子

うみしづか三十五反の帆のかげに聲ほがらかのふな唄ぞする

○ 紀伊 小倉千代子

春千草花にたはむれ飛ぶ蝶は世のうきことも知らぬさまかな

○ 神戸 尾花文子

わがやどのつぼみがちなる山吹にはやくも蝶の尋れ來しかな

○ 本所 磯田靜子

高山の杉のこずゑの殘月もおぼろに匂ふ春のあけぼの

○ 大分 南山きよ子

ちる花を袂にうけて逝びたる昔の春の眼にうかむ日よ

○ 東京 櫻木やよひ

一しきり花散るけはひ一人の姉のうせしもかゝる夜なりき

○ 相州 中田靜枝

月おぼろをみなと見えて片町の柳の下に佇む一人

○ 小石川 高木きん子

こゝろなき風よ散らすな美しきこの花ばかり君の見むまで

○ 信濃 いれ子

わかやぎし軒の鶯きゝなれてそゞろ心に春とおもひぬ

○ 山形 稲毛みつ

眞帆片帆遠くかすみて湖添の桃咲く家に牛低うなく

○ 四日市 水谷靜子

さくら餅ひさぐわらやの袖かきにもゆばかりなるひもゝの花よ

○ 米國 村越光子

うすれ行く夕日に寺のかね一つとほくはてなきかすみにきえて

○ 東京 芝原いれ子

利き刄物われにあたへよわれきらむ自繩自縛のおそろしき繩

○ 千葉 吉松佳芽子

春の日の夢とたゞよふ草川や牛に水飼ふ菅笠の人

○ 信濃 赤津梅子

ある夜我れ亡き母戀ひ打ちふせば死と云ふ國をいつか辿れる

○ 前橋 宮内りき子

物思ふ心に似たり春雨のそぼふる朝の海棠の花

○ 備中 雲庭忠子

春の日は柳に暮れて梅匂ふおぼろ月夜となりにけるかな

○ 千葉 山口秋子

雨やみて鶯なきぬ春の庭梅花は散りてあとなき時を

○ 北河内 小松富士子

鶯の聲も老いゆく春四月梅の梢は若葉ぞしげる

○ 後志 窪谷夢子

桃の花はのに匂へる川のべに仲よう遊ぶ水鳥のむれ

○　群馬　林　きみ

川沿ひの青柳のいとおぼろげに闇に暮れ行く春のしづけさ

○　宮城　鈴木喜久美

東金はさくらの中につゝまれて靜かにのぼる春の月かな

○　大和　門　花

妹が背のなまあたゝかき夜の路遠音のつゞみゆるうきこえて

○　府下　樋口あい子

胡蝶まふ菜畑こえて聞ゆるは草つむ人の歌の聲なり

○　四坂島　渡邊梅子

千草さく花野の中に君待ちて久しくなりぬ日はくれてけり

○　伯耆　安田梅野

丹後路や大江の山は紫に花野に遠したそがれの鐘

○　神奈川　中田その子

梅一輪園のあしたのにはたづみさゞなみかなる風のまに〳〵

○　京都　森本千代

夏くさのしげみが中にうるはしくゆりの花さくをかごえのみち

○　北海道　八幡きわ

笹舟はとある花のせ重たげに浮きつ沈みつながれ行くなり

○　長野　山本なほゑ

煙をおこし灰を降らして燒が岳名もおそろしき山にもあるかな

○　奈良　西島道子

雪消えて鄙ものどけき春なれや名なき山さへ朝霞して

○　紀伊　林たけ子

蕨狩り蝶を追ひ行く子が菜花の吹雪に見失ひけり

○　府下　小室花子

小さき胸包むにあまるかなしさを語るともなきさびしきことよ

○　茨城　大田學子

散る花を何とや見たるうら若き尼が眼にしも露のやどりぬ

○　本郷　板谷貞子

思出のありともなきにゆくりなく柳にふれて心亂るゝ

○　伊勢　佐々木らく子

今更に聞かじ語らじ我もまたつらき運命にもれざりし身よ

○　本所　山田菅子

庭の面ふけて淋しき木の間より光りもうすき朧夜の月

○　茨城　大田學子

胡蝶追ふ妹が袂のふとふれて菜の花散りぬ春の山畠

○　大阪　西戸政江子

紅梅や七色絹の手鞠つく紅友禪の袖長き君

○　山口　倉光英華

おばしまに水をながむる春の夕べ風の少女の唄かすかなり

○　山口　倉光英華

あし原に日は暮れはてゝ蜑(アマ)の苫うちかすめ村雨のふる

○　越後　伊倉ますよ

ちぎりおきし友は來らず鶯も鳴かでくれたる春の雨夜

○　豐後　菅原芳子

うらぶれて裏戸いでたるたそがれやこぼれかかりし金枝雀の花

○　紀伊　松島千枝

まちわぶる君がたよりのけふもあらで春の日ながしいたつきの床



（甲）

友を懐ふ

東京　豊　子

女學世界を讀み始めて短文のページを繰ると、ふと、馬淵千代子の名が見えた、オヤとおもつてよく〳〵見ると、たしかにそれ、絶えて久しき同窓の友、吉田氏今の馬淵令夫人である、とおもふてなつかしさが胸にせまつて來た、あの色白な丸ポチャで眼鼻立のはつきりしたお顔や、眞黒なつや〳〵したお髮など浮んで、あり〳〵と九年前のありさまが見えた、しかも自分の不幸な境遇を、いつも變らぬ同情に富んだやさしいお筆つきでお案じ下さるのであつた、よみ終ると覺はずホロリとした、でもまあこんな意氣地のない境遇にも、共に泣かうとまでいふて下さる方があつたかと思ふて、いるにもこゝろ強い感がした、おもへばお互に寄宿時代には盛んに空想を描いては未來を語つて更かした夜も幾夜であつたらう、聞けばあの方も圓滿ならざる家庭を平和にと御苦心一通りではないとの事、たへがたき苦痛を忍び、立派に馬淵の姓を名のり、婦徳を守つて入らつしやるとおもふと、自分とてもあはす顔もない、どうして語られやう、あゝ自分は今は女の身である、過去現在が胸をついて涙を流した、

（乙）

御出まし後

四谷　櫻　子

「ではいつていらしやいまし」と奥樣を玄關に送り出してホツと一息、扨て後かたづけが思ひやられる、御化粧室に引き返してみると、向ふの隅には御ふだんぎのめいせんが大島つむぎの御羽織と重なつたまゝぬぎすてゝあつて、こつちには一旦お召しになつたけれど具合がわるいとて又おかへになつた緋の長じばんが恨めしさうに廣がつて居る、ちりめんの紐が二すぢ三すぢ蛇の樣に長く橫たはつて、白粉びんがころがつてゐるまん中に、曇りなくふき淸めた大姿見がひとりさびしさうにこの有樣をうつしてゐる、まあどこから手をつけようと思はずお常さんと顔を見合はした、

（丙）

落花

千葉　齋藤清子

桃の花が散る、散りし花片を浮べて里川は夕闇の中を微白う東へ〳〵と流る、無心の樣に行く水を見詰て居た弟は、フト「姉さんは何時歸るの」と問ふ、母を偲ふ涙未だ乾かざるに、明日は殘れる一人の姉とも遠く別

れればならぬなり、よし叔父が情の父母にも變らざるにせよ、幼うして家なく、骨肉の依るなきを思はゞ、小さき胸には哀しかるべし、今明白に十年の後ぞと答へむか、汝の胸は猶も痛まむ、さりとて一二年が程ぞと僞らば、如何許歸らぬ吾を空しう待ち待たむ、迷ひの遑きに、「直き歸るでしよう、デなければ僕も行う」と日頃は元氣な兒も淋しく云ふ、「天董の哀きにも、相依るは只二人のみの吾等、別るゝは忍びざれど、之も家の爲身の爲、しばし叔父の御言葉に從ひてこゝに勉强せよ、無理は云はぬものぞ」と諭せば、唯素直にあゝと答へて目には熱き涙の露、冷い夜の風がサツと袖を吹く、花はしきりに散る。

影法師

大阪　木村花子

「エー勘辨はしれつて事よ」、荒つく語尾に血が滲んで呟が詰まる、貞實なお嫁さんだと路次裏の人にも表屋の人にも評判のいゝお芳さんは、陶酔きの美くしい顔、ぱつちりとした瞼を泣きはらして、可愛相におろおろと取り縋る、「出て行けつたら執拗いわい」、亦も荒けた痛切な聲、あゝ怎うしたのだらう、今宵に限つてつれない良人のお仕打と、お芳さんは怨めしさうに力なく門口まで出て、やる瀬なさゝうに彳む、おぞや煤け障子には旅さんの伏拜む瘦せた影法師、行く春の夜の雨はしよぼしよぼと降つて居る、（秀逸）

櫻花

伊勢　富士子

春の日がぼか／＼と照る、菜の花畑の畦を通ると宮川の堤に出る、河原には陽炎が燃えて、靜かな青い水の上に、白帆の眠つたやう、櫻はまだ散りはじめない、見頃だ、八重の重なつたのは、貴人が晴着をきて煙鍋に構へたやう、一重のまばらなのは、淋しう着ながしてくつろいだやうである、かれは濃艶である、これは瀟洒である、かれを血性としたら、これは貧血性であらう、かれを實業界に濶歩する人の俤といつたなら、これは田園生活を樂む詩人の姿であらう、どこかで鶯の聲がする、（秀逸）

嫂様の死

大阪　櫻井糸子

門近くると、身にしむ一つがれがケーン……ケーンとなつて居る、こんざつした里の家へは入つて兄様に御悔み申さうと思つてそばへ行くと、兄は男だけに涙こそ御出しに成らぬが、愁傷の程が顔にあらはれて居る、「まア兄様何と云ふ……」と云たまゝ、涙が出て先が云はれない、兄様も御心の内では御なき遊ばしたたらう、そして佛間の次の間近行くと中では「嘘、光子や／＼、一言だけ云ておくれ、エ……、母様だよかあいさうに、……二人も子供をのこして……、何と云ふ姿に……、云ひたい事もあつたらうにれ」とさめ／＼なき入らるゝ嫂様の御母子、次の間で私も共になきふした、兄様も御火鉢のそばで、うでぐみしてじつとうつむいて在らしやる、（秀逸）

なびく柳

近江　野崎さみどり

「もう充分よ、もう止して頂戴」、友の八重子は恁う云つた、其眼には涙が溢れて居る、妾は友の辭退するのを無理に迯らうとはせなかつた、「では御機嫌よう、夏季休暇にはきつとお歸りを待つて居ますよ、手紙は月に

五度も六度も下さいな」、妾の聲は震へて居た、友は返事もせず唯首をうな垂れて居る、西風はそよ〳〵とうらゝかな春の野を渡る、友は泣きながら涙に別れた、私は友の姿の霞に消ゆる迄見送つて居た、あの優しい柳の下で(秀逸)

母の寫眞

駿河 きよえ

十日許り前から、首を長くして待つて居た母の寫眞が着いた、氣持笑顔をして立つてゐらつしやる、左の手と袖口を合せる樣にし、右の手に扇を持つて、私をじつと見てゐらしやる樣で、懐しさがわく〳〵と胸に込み上げた、起つて四月許り以前のを出して見比べる、孫を抱いて腰をかけてゐらつしやる半身だが、白い髮の毛、衰へた樣な顏の表情大層老けて見える、私は是を見る度に悲しく思つた、が今度のはどういふ爲か大變若く、誰の目にも十は確に違つて見える、六十に近い人とはどうしても思はれない、私は「お母さんはまだ〳〵大丈夫だ！」と嬉しくむに叫んだ、(秀逸)

立春

金澤 吉川辰尾

靜寂を破つて犬の遠吠が聞える、空車の轍の音に和してつゝましやかな女の方らしい足駄の音が響く、それがまた調子を取つてゐる樣でほんとうに長閑である、風は香うてゐる樣だ、この世を掩ふた汚物は一掃せられて、清い〳〵ものとなつたやうな感じがする、もう春が來たのである、(秀逸)

變る心

千葉 山口秋子

待ちに待つた姉は今汽車から下りた、末の男の子を背なに十文字にしばつて、七つと五つの女の子の手を引いて、私を一目見るとなつかしさうに目に一杯涙が浮んだ、其姿は昔と全然變つて、年より餘程ふけて見えた、心盡しの持てなしを仕て、草臥て被居だらうと、夜は早やく休ませた、寢付く間も無く、末の子が驚いた樣になき出す、とそれ〳〵といふ聲がしてかぶせる樣になきが止む、續いて二番と一番上とが便所だといふよし〳〵と睡むい目をこすり乍ら五月蠅がりも仕ないで連れて行く、餘り聞き飽て次の間から聲を掛けると、何每晩これさ、これでなくちやあ子供は育たぬと平氣だ、これでも一度は理想の抱負のと洋書を手にして四角ばつた時代も有つたのである、(秀逸)

春の夜

熊本 澤井千代子

よう娘さん什麽なすつて？、と私は泣き崩れてる娘さんの華奢な肩に手をかけた、櫺のひま洩る月が朧に娘さんの襟元を白う照らして、白薔薇一輪ざしの響は微に打震ふ、又お母樣がと思ふて私は胸が迫る樣に覺えた、娘さん堪忍して頂戴なと言つて御手を握ると、いゝえ勿體ない私が惡いのだから……と淋しい笑を浮べて、見られまいとうつむかれた膝にハラハラと熱い涙がこぼれた、春の夜を樂しう琴を彈ずるお嫁樣も有るものを、(秀逸)

湯歸へり

四谷 銀波

「ありがたう御座い……」と云ふ聲を後にして外に出ると、今まで湯氣に蒸されて上氣して居た頬が、急にホツと冷めたくなる、湯ざめのしない様に肩掛をしつかり合せて、ぬれた手拭をそつと持つて急いで歩るくお菓子屋の小僧が眠さうな顔をして戸を下ろして居る、顔つすりとつけたお白粉の香が、闇の中にたゞよつてプンと匂ふ、（秀逸）

畑にて

芝　須永あや子

ポカ〳〵と暖かな、春風に身を任せて、くたびれた鍬の手をとめて、恍惚と見るともなしにあたりを見た、

麥は自然とのびてくる、かう肥料もやり、かうして土をかけてやれば、蠶豆は、花が咲いて實が出來る、同じ色でも汚れた世間の黄金よりは菜の花のはうがよつぽど美しい、私の顔の向く處は、山も笑顔であるし、櫻も桃も笑ふて居る、ほんとに私は幸福者だ、

と思う考へて又仕事に取りかゝつたが、扨て世間の人々は、私の今の身の上を、あゝ何と見て居るであらう、（秀逸）

菖蒲湯

牛込　平塚白百合

「今日菖蒲湯」と書いた紙が張つてある腰障子をあけて中に入る、手取り早く着物をぬいてガラス戸をあけると、プーンと菖蒲のすが〳〵しい香が湯氣にまじつてくる、お湯に肌をしめしながら見てゐると、薄くくもつた鏡に向つて、襟足長い桃われ髷の影が小形な鋏でチヨキ〳〵菖蒲を矢形に切つて髷の前にさした、

湯槽に入ると、青い〳〵菖蒲がお湯の中にたゞよつて、香が一しほ高いお湯はすこし熱加減である、

似し人

播磨　森中かず

墓ふにはあられど、何となくゆかしくて、しらず〳〵過ぎ行く人の後をたどりぬ、さても彼姿の亡き兄君に似ませることよ、假山を繞り園亭をすぎて小橋を越せば、もえ出る若草にかこまれたる園池は、石さび水澄みて、えも云はれぬ景色なり、はしたなしとは思ひたれど、パチ〳〵と手をならせば、水にうつりし山吹の咲きみだれたる影動きて、ヒラリと浮き出でし緋鯉眞鯉、打連れて遊ぶ様愛らしとも愛らし、暫し身を忘れて眺れしが、ふと首を擡ぐれば、向岸に廻り給ひし其君、妾の方を見守り居給ふに、さと頬は紅をさしぬ、やさしき人なりき、

この指輪

名古屋　森本やす子

あゝ此指輪は捨てられた夏人の紀念である、捨てむか捨てざらむか、私は今尚其判斷に苦しんでゐる、この一月の後には再び人妻と成るべき身、あゝ思ひ切つて捨てゝしまはうとかう考へると、又懇しい様な情ない様な云ひしらぬ思ひに亂される、うつとりと見下す庭は夢の様に淡い、切なる思ひをこめて之を贈られたのも恰度こんな夕であつた、

五年振り

福井　片山千里

五年振りに歸省して、ふるさとの野原を散歩して見ますと、やちかい青草の上にすわつて、毛糸をあんで居る可愛らしい少女が居ます、どうやら見覺へのある顔だと思つてながめますと、向ふでも思ひ出せないといふやうな顔をして妾をながめて居ます、誰だらう？

あゝさうだ事業がすむとよく負ふてあげた、先生の娘のすみ子さんなのだまああんなに大きくなつて、

利ちやん

大阪　北庄司漣子

この二十七日は利ちやんの誕生日であつた、此頃はよほど口もよくまはつて、何をしてやつても愛想がある、今日も御母さんが西上から戻られた時に、私がおんぶして見せてやると、二三丁先から「オカー〳〵」とよぶ、可愛いやらおかしいやら、そしてお母さんにほめてもらふてきやつきやつと喜んでゐる、ほんとに子供は罪がない、

草深の朝（静岡の地名）

遠江　野末玉涟

瑠璃色の空へ、白い雲がふわりと浮んで、愛鷹山の頂を包む様に漂ふて居る、つい北には幾多の群山を隔てゝ、龍爪山が醒めきらぬ暁の夢の内に横たわつて見へる、空の向ふには氣高い富士が高く聳へて居、眞に一幅の名畫である、と思ひ乍ら、二階の欄干に身を寄せてウツトリと眺めて居ると、和い風が吹いて來て酔つて仕舞ひさうである、櫻の花がヒラヒラと散る、青葉がくれに鶯が鳴く、ふと自分の胸には塔へ雖い微かしさと云ふ可からざる悲哀の情とが起つた、アゝ實に靜かな朝だ、東の空が刻々と變化して行くと、低い雲を縫ふて二三羽の雲雀が樂し相に舞ひ上つた、

春の朝

東京　やよひ子

二日三日降り暮したる春雨の、今朝は霽れて、軒に名殘の玉水さへ音すなりぬ、若き日うらゝかにして、四方に朦朧と霞こめたるに、心地も遥かに春になりぬ、眺めやる庭の面には波枕うき寐の夢の今覺めにけん、鶏鳥の一群、朝晴れの喜びを鳴きかはしつゝ、水かづきては白玉散らし、羽うちとゝのふる様、朝のけはひと覺えたり、

寂實

府下　はる枝

途中で野梅の一枝を拾つて、道でもない畦を、足にまかせて歩行いて見る、咽ぶ如うな小川の流れが耳に響いて、偶然と畜の様な反ある土橋の上に出た、下を見るとハート形をした岩や、獸形をした岩がある、ワザワザ其上に腰を下ろして見る、遠くの方で、微かに水車の靜かに〳〵めぐる音がする、時々名も知らぬ鳥が何處かでチ、と鳴く、ボーと活氣の無い汽笛の音がして、それが山に反響を殘しつゝ夢の如くに消えて逝く、この境の寂實を破る者は、此音と此響との外に何もない、

春の朝

埼玉　内田かど

起床が五時半、一昨日來の雨はやんでしまつた、楊枝片手に井戸傍目がけて行く、オゝ今朝は春の様だと云たのは母上の御聲、高篠山にかすみ

がたなびいて帶の様だ、昨日迄の春雨の露か、夢は一層綠になつた、姉も一日增しに色が濃くなつて行く、青木に花がやうやく一輪咲いた、姉さんもうまいて、と云つて來たのは妹の花子、まあよい花だ事と云つて紅い口びるを花びらに着ける、露を舌の先にあてゝ見た、そして又ア、よいにほひ、わたし帶にほしいのれと云つた、ところ弟の武ちやんが、蝶を取つて來て、僕これが花にとまつて動かぬからつかまへて來たのと大手柄の氣、私がかわいさうれと云ふと、それではと云つて花の上にのせた、朝飯の仕度に家へ入る、あゝ今頃は蝶も花も露で飛び立事が出來たであらう、

病める友に

麹町　よし子

都は花のちまたとなつて、人は淡き歡樂に醉つて居りますけれど、語るに君在はさぬ今日此頃の、芳の心はいひがたき寂しさでございます、波白くゆううつくしき湘南の地に、靜けき御日暮し給ふ御夢に、明暮の御上したふ一人の友をも通はせて給へ、近日に許を得て是非御あたりにしたひ參ります、御座右の御なぐさめにもと造花一鉢、つたなきに情はかへりてこもるものとおぼしゆるさせたまへ、

磯の夕暮

長門　秋山きく子

もえ立つ様な夕日は、いつしか西の空に、餘紅をとゞめて、沈み果てた水や空なる海のかなたには漸く夕もやが立ちそめた、刻一刻とそれがひろがつて、沖の島も指月の山も淡く、ふもとの松のみが、白雲の様にたなびいて、早或世は薄暮色に染められた、空には銀沙子をまき散らした様に、またゝく星が美しく、八日の月は淡く光を放ちそめた、

月の一夜

府下　松岡みどり

美はしい鞠の様な日が、一點の雲もない大空に、艶やかな面から神々しい姿を現はして、下界の隅々迄もてらして如何にも平和である、想へば去年の夏休みの時、私の室で丁度彼の様な澄んだ月を眺めながら、妾より丁度三つ年長の從姉と唯だ二人ぎりで、種々樂しい物語りに此の様に稀な夜をふかした事もある、噫、けれどもそれは唯だ一夜の短い夢に過ぎなかつた、從姉も今頃はあの淋しいそして物凄い青山の墓地に、語り合ふ友もなく、淋しく此の思ひ出多い月を眺めて居るでせう、

兄様の十八番

小石川　高木きん子

時計を見るともう二時、兄様はどうなすつたんだらう、三時には校友會へお出にならなくてはならないのに、又きつと例の通り時間がつまつてから大急ぎでお出かけになるんだよ、カラや何かそろへておくと、やがて友人の家から歸へつていらしつた、兄様どうなすつて、もう二時半よ、早くいらつしやらなければだめよ、といふと、ナア本當だ、もう二時半だれ、八重さんすつかりそろつて居るかれ、なんて自分の部屋へはいつて忙しさうに仕度して、ヂヤ一寸いつてくるよ、僕の部屋を何ぶんと笑つていらしやる、いやな兄様、きつと又例の十八番だらうと思つてお部屋の戸を開けると、案の如く机のひき出しも何もあけつぱなし、ほんとにあきれてしまふわ、

花賣り

兵庫　森中千鶴子

枯芝は少し青みかゝつて來て、陽炎がちら〳〵つと炎えてゐる、畑には菜の花が美しう咲いて、蝶が二つ縺れあつてゐて、一向其處を離れない、

花賣りが畑の下を通ると、蝶は其の居る花の上に、ヒラ〳〵とまひ移つた、

春

周防　廣中靜子

庭箒を持つて縁側に出ると、妹は髪を結つて居る、庭を飛んでゐる蝶が、鏡にちら〳〵と映る、櫻の枝に、干してあつた薄桃色のハンカチが、ふはりと風にとんで、縁先に眠つて居る猫の頭を撫でゝ地に落ちた、障子には、軒に干してある唐辛子や大根の痩せた影がうすくぼんやりとうつゝて居る、

郵便やさん

大阪　山崎すゝ子

郵便やさん！、私にとつては實になつかしい聲である、郵便ッといふ聲を聞いたら、私は一番にかけつける、人のであつたら少々失望はするが自分のであつたら、掃除半ばであらうが、食事最中であらうが、ほつてをいて讀む、手紙は私には實になつかしいものゝ一つである、故郷の兩親はじめ、親しき友のたより、みなこの郵便やさんの手によつて知られる、

故郷の妹へ

神奈川　遠藤清子

靜江さん、今度も亦一等賞ですつてね、母さんに何かいゝご褒美お買ひなさいよ、姉さんもね、試驗がすみましたから靜江さんの一番好きなものをお土産に買つて二三日中に歸りますよ、其時は又お隣の保さんと清水の方へ遊びに行きましようよね、ほら去年の夏休みにポチをつれて行つたら、ポチが水溜りへ落ちて、三人で出してやりましたつけね、お隣のお叔母さんに宜敷申し上げて下さい、左様なら、

雨降りの一日

三河　遠藤久仁子

今日は榛子さんと朝鮮山の桃を見に行く御約束であつたが、意地悪の雨がじやましたものだから、とう〳〵止めになつてしまつた、何だか張合がなく氣が拔けた樣に自分の部屋のお机の前に坐りこんだ、阪正臣さんの御手本出して習字して見たり、御本讀んだりしても、何だか氣がのらぬから、障子をあけてお庭を見ると、桃や櫻が今を盛りと咲いて居る、其花びらの露をふくむでしつとりとぬれて居る樣は得も云はれぬ風情だ、私は雨中の花は格別よいと思ふ、

「殘念乍ら」

牛込　宮成ゆり子

郵便！といふ聲につと立ちて、玄關に擲り込まれた繪葉書を手に取る、見ると房子さんからの御便りで、今度の日曜日に某樣の御邸で盛んな演奏會の催しがあるから御誘合せの上是非……との招待狀、飛び立つ樣に

それを持つて母樣の許へ伺ひに行くと、試驗中は行つてはならぬと母樣は仰せられる。樂書を繰返して見ると、何々の曲の、誰々の三曲合奏の、と讀めば讀む程面白さうな當日の光景が、まのあたり偲ばれる。と共に私は譯も無く悲しくなつた、强ひて御願ひして見たが、終に御ゆるしが無い、「詮方なしに「殘念乍ら」の七八度も書き列れてお斷りの返事を差出す事にした。

去り乍ら來週よりは學年試驗の大切な時期だ、平常復習は怠らぬものの、若し今度の日曜を演奏會に暮した爲め、成績の下るやうな事にでもなつたら、其殘念さは今日のそれに幾倍するであらう、敢て會に行かれぬ負惜みではないが、斯う思ひ返すと暫しでも母樣をお恨み申した淺ましさに氣が付いて、軈てイソ〳〵とかどの。ポストへ行くのであつた。

妾の友人

相摸　石井ふみ子

先生今夜も遊ばれるのと障子の外で小さな聲、遊ぶ日の晩は御定まりである、思はずほゝゑみながらも返事をしない、ねえ先生すこしちよつとでいゝから其かはりこゝで百遍御じぎをしますと云ふ、なかしさをこらへて、して下さるのは有難いが目を廻はされては厄介だから御上りと云ふと、ヘイ〳〵ころげるやうに四五人あがつた、家族合せが初まつたが私は頭痛がするので　おこたつによつて見て居たが、其うちいつかうとうとして居ると、先生お邪魔でした、と口々に云ふ聲、おどろいて起きて見ると、皆歸つてしまつて、いつもの通りふだがちやんと箱に入れてあつた。

京の眺め

京都　相原京子

平凡な京の町から東を眺めると、萌黄の蒲團を若桑の霞の幕を張つて、安々と寢てゐる東山の容姿は、宛ながら繪の樣である。四明の群峰を拔いて、毅然と構へて居る所は、何んとなく雄壯の感が起る。

妾は兄を後者に妹を前者に譬へて、育てやうと思つた。

胡蝶

名古屋　らく子

夏のせみ、秋のすゞむし、何れあはれにはあれど、花にたはむるゝ胡蝶こそ、なかしくもまたあはれなれ、花のおりなす春夏の、けしきにうかれて、色にたはむれ、香にまよひ、薫れる風に身をまかせて、身の秋くることも得しらず、たのしく飛び遊べど　かくて馴れにし花も、うつろひては、美はしき羽をたゝみて、いづかたへか、飛びゆく、胡蝶の身こそ、あはれ、はかなけれ。

寒き日

高知　靜波

灰色の雲はひくゝたれて、ピユー〳〵と吹く風はさながら劍のやう、「ああ寒い今に雪でも」と思つてゐると、はたして、降るは〳〵夜ならばたしか一寸は積んだであらう、暫くして雪は雨にかはつた。しかし相變らず風は寒いまがきの梅は苦笑をしてゐる。

延着

佐賀　長野朝子

三年ぶりのなつかしい山が見える、川が見える。母への土産、妹と約束の人形のつゝみを引きよせて立ち上つた、窓から顔だけ出して見る。電信柱が走る、気があせる、停車場はまだ見えもせぬ。立ちくたびれて手も足もなえたとき、やつと停車した、妹の顔、母の顔、姉さん延着でまちどうかつたと母様のうれしさうなお聲が聞える。

京の姉様

岩代　登紫子

「東寺の塔、圓山の櫻、春雨の此頃はさぞかし……」、と書いて頬杖をしながら京に行かれた姉様を思ひ出す、「京の櫻は寂しいが故郷のおん身が」と言ふお手紙が胸を去らない、今年の春はなぜこんなに淋しいでせう、或は姉様と妾にばかりだかも知れない、ふと櫻の花片が硯の海に散り込んだ、筆の軸で掬ひあげてその儘手紙に巻き込んだがこの花片はまた京の姉様の紅皿に落ちて、巻紙の上を赤い文字になつて妾の憧を書くのでせう。

墓詣

越後　操子

蝶よ花よとお姑様と二人で代る〲抱いてはその林檎の様な頬にキツスしつゝ末の末迄を想像して楽しんでゐた甲斐もなく、鈴やかなりしひとみは長へに閉ぢて、春子といふ其名は既に無形のものとなつてしまつた、けふ花屋のもて来し水仙のあまりに美しければとて急に思ひ立ちて髪もなりも其まゝ走りゆきて彼が奥津城にその一束を手向けた、手向け終つて動きもやらず立ちつくし、彼が生前、その臨終、思ひはそれよりそれへと止めもあへず、縋りさけん許りなる胸のもだえに苦しめる時しもあれ、人なしと思ひしあたりに、幼児の聲、はつと我に歸れば、右手なる新らしき墓石の前に、きりさげの老婦人につれられしふりわけ髪の嬢ちやんが、ツト蹲んで小さな手を合せ、南無阿彌陀佛。

寒き日友の許に

筑前　高松ひで代

「寒い事れ、今朝なんか髪を解うとしたら、瓶の油がパメのやうに凍つてしまつてゐるのですもの、福岡あたりとはちがつて、ほんとに風は寒いのですよ、こんな小屋同様な住居なんですから、障子の破れ目、雨戸のすきまもる風の冷いたらないの、ようこゝに三年も冬を越してきたものだれと母は申してますわ、それに私はおさん役なんでせう、此の冬はまた水鼻が滝と流れるやうに思はれますのよ、ホヽヽヽ、幹さんはどうして被在して？　大方お炬燵のお番人で何處へ影がと……知らぬ顔ですまして被在るでせう……、それでも寒い時には働くに限りますわ、風の神なんか向ふから御免を蒙むつて逃つちまひますわ、でも寒い冷いもこゝ暫くれ此の寒い時にせつせと働いて置けば、花見衣の一枚も作へていたゞけるわけよ、オホヽヽヽ、

花嫁

岡山　貞子

がら〱と二臺の車が止まつた、フロックコートの御主人を先に、つゞいて君子さんが静々と出られる。

濃鼠色に華美な裾模様の御紋附に何やら繻といふ流行の帯を、背中一パイに結んである、重々しい丸髷を重さうにして少し俯向て居らつしやる

お雲は、ほんとに繪にある花嫁そつくりだ、[illegible]飛びや何かして騒ぎ廻つて居た人が一寸見ない間に、こんなにおなりなすたとは、さぞ母様はおよろこび遊ばして居らつしやるだらう、御主人の慇懃な御挨拶の後から、小さい優しいお聲が處女の、それにもまして美しかつた。

結婚の前

大阪　西戸政江子

妾が顏を眞赤にして寫眞も碌々見もせず母様の御居室を逃げ出して來ると妹が「姉さんよく見て？」と言ふ、「アラ」と妾はまた顏を赤くした、「妾が姉さんだつたらすつかり見るわ、お母様の前だつて一生自分のお聟さんになる人だもの、」私はもう一度文さんの年になつて見たいと思ふた。

摘み草

四谷　北村のぶ子

籠の中は、土筆、餅草、嫁菜、蒲公英、菫などで、一ぱいになつた、土手の上を汽車が通る、乳母車の中で太郎が小さな手を上げて萬歳と叫んだ、あの汽車は今晩私の好きなおぢい様の居らつしやる處に着くんだと思ふと、何となくなつかしい、鶴嘴を肩にした線路工夫が、摘めるかれと言つて通つた。

墓參

靜岡　天野ふじ子

長閑な日だ、空には押せばぶく〳〵しさうなまつ白な雲が漂つてゐる、お寺は、本堂も庫裏もひつそりとしてお經も聞えない、垣根の榊の下に里の子守女が二三人鞠をついてゐる。

お墓の周圍を掃除し、お水をあげ、持つて來た桃の花を挿して線香を焚く、細い絲のやうな煙がしづかに〳〵に立あがる、笹藪から鶯の啼聲が長閑にきこえる。

春日和

遠江　石野豊子

暖たかな朝日を受けて縁の柱によりかゝる、ほんとに長閑な春日和である、庭の梅の枝に鶯が時を得顏にうたつて居る、やはらかな花吹雪が何とも云へぬ心地よい香を送つてくる。

愛兒

名古屋　高田秀子

今日は珍らしく靜かで文ちやんおとなしく遊んでゐる、子供つてものは何たる可愛らしいものでせう、お口惡るの伯父さんは折々いらつしやつてはお多福々々とおつしやるけれど、私はあの無邪氣な愛らしい笑顏を見ると誠にほゝずりしてやりたくなる、あゝもう二ケ月も過ぎると文ちやんがそろ〳〵あゆめるかと思ふと嬉しくてならぬ、例年なれば早や三月も夢の間に暮すかと月日のたつをうらむのに引かへ、本年は早く五月頃になればよいがと、子供ならねど指折かぞへて待つ。

春

長野　西條うめ子

サラ〳〵と水の流れる橋の上に立つて、空行く雲を眺めて居ると、いづこともなく、平和と慰安を與へる樣な、暖氣を誘ふ樣な氣がする、ポー

ーと、
顧り見れば若い牛飼が手綱も何も取らずに牛を引いてくる、肩には咲ける桃花一枝。
餘りの美しさに一枝給へと乞へば、心よくうなづく受取らんとすれば花は片々として散り、其の幾片は川に落ちて水と共に流れて行つて、ボーボーとないて去つた。

碁のお客様

岐阜　宮澤けい子

格子がチン〳〵と開く、御主人御在宅ですかとの調高いお聲は、慥に碁好きの山田樣、お父樣はニコ〳〵者で、サー一番お願致しませう、なんて大御機嫌、お母樣は又今日も長くなるよと一寸顔を顰めなさる、姉樣は謡曲は陽氣でいゝが碁は陰氣だから好かぬとおつしやる、最後に私はかるたあそびのお客樣なら私大得意だわ、それこそ丁度お父樣が碁に夢中になりなさる通りよと思はず大聲を出す、マアお座敷へ聞えると大變ですよ、御愼しみなさいと御母樣に睨まれて赤くなつた。

一等室

四谷　大橋雪子

鎭の樣な廊下を幾度か曲つて、西の一等室のハンドルに手を掛けた、ふつくりして居らつしやつた頬が痩おやつれなさつたらうと思ふと、もう涙が泉の如くに湧く、中に入ると、なつかしい花子樣は、寢臺の上に氷枕をして、額のにも氷嚢をのせてすや〳〵と寢て居らつしやる、ヘリオトロープの香がふわ〳〵と、室の中を流れて居る。

姉樣の靈

大阪　中村玉枝

初めて咲いた花園の椿を一枝手折つて、佛間に行くと、誰がおつとめをして居たのか、お線香の烟が、姉樣の靈の上に七重八重に、輪を描いて風もないのにお燈明がゆら〳〵と動いて居る、先の白椿に新しい椿をさしそへて、チーンと鐘をたゝく、小さい時母樣から、佛の前に物を供ふる時には鐘を鳴らしてお知らせするものだときいたから、鐘の音は長く長く響いて居る、其間ジツと、耳を澄せて居るけれど、其音の終る處を知る事がどうしても出來ない、姉樣は此音をどこにきいて居らつしやるのだらう、なつかしい姉樣は、此音の消えて行く、終りの處に居られるのではあるまいか、又二度三度たゝいて見ても、鐘の音の終りはボツーと消えて知る事が出來ない。

眞實な口

横濱　門井愛子

明けてやう〳〵五つですもの、其んなにお叱りなさらずにと口を挾むと「其れ程迄に可愛いなら、是からお前の勝手になさい、私は自分の子供とは思はんから、」とおつしやつた、其翌朝のこと、話の序に、メツメ一人の男の子ですから軍人には……と申しますと、お前許りの子供かの樣に、私と云ふ父のあるのを差措いて、餘計な心配したものだと、カラ〳〵とお笑ひになる、ほんに男の口は眞實なものだ。

令嬢倶樂部

○　大和　すみれ

なこがましくも、前號掲載の短文略評を左に、
○鐘の聲、現實と理想の離反を、緻密な而して綾のある筆つきで書いてある、鐘の音のそれの樣に餘韻がつきない、近來の好文字、
○亡兒、子を思ふ親心は古今東西變らぬものと見える、母親の凹んだ眼に浮んだ一ぱいの涙は蓋し千金の價値がある、
○玄關、荒肝樣に量は隨分振つてゐる、著者の玄關の有樣を極めて輕く表はしてある、達意の文、
○新緑、朽葉を踏んで念力籠むる傷姿を目前に觀る心地がする、筧の水は嘸冷たからう、
○待つ夜、待つ身になるな、とはこの事、車の音は、正しく天使の降臨とでも覺えたであらう
○故郷の天使、嬉しい筆つき、小主人公の得意な佛紙面に躍る、
○春の夜、美しい文、君が筆こそげに春の艶なんめり、
○失題、すら〳〵とこそ、味もなけれど、さりとて捨てたものにも昇す、
○なつかしい妹、歌書の取かはし、風流のお娯み、
○寒紅梅、寒紅梅に積つた雪の得意、末段えも言はれぬ妙趣がある、（乙書）

○　橫濱　松村はる子

姉樣、私今月の女學世界ほどうれしいものはありませんでしたのよ、作文の處を一寸開きましたら、すぐ姉樣の御名が目につきましたの、嬉しくて夢かとばかり思はれて、「あら姉樣のが出て居る」と大きな聲でいひましたの、讀んだらわたくしの下手な歌もかいてあるのね、何だか氣まりがわるくて………、けれども私もこれから精出して勉强して、賞に入る樣にいたしますわ、もし二人のが同時に出ましたら、どんなに嬉しいでせうね、家中で喜んで幾度も拜見しましたのよ。（秀逸）

○　長野　若草若子

竹石はるよ樣のお仰せの通り、私も毎日日記をつけてをります、そして時々幼い時のを出して見ますが、なか〳〵趣味のあるものですね、字こそ下手ですが、いろ〳〵面白い事が書いてあつて、讀んで居ると自然若返りをしたやうな氣がして、一人ほゝ笑むでをりますよ、それから大和のすみれ子樣のお言葉にも私は力贊成で御ざいます、表紙や口繪等を讀者から募集してはいかゞですか、このやうに思つて居りますものは、すみれ子樣や私ばかりではないと思ひます、記者樣どうぞおれがひ申します。

○　大阪　山田芳枝

春暖の候に候處益々御隆盛奉賀候、さて此度誌上に令嬢倶樂部なるものお設けなさいましたがそれに就いて一言申上ます、私は五年以來本誌を愛讀いたして居ります、在學中二年、結婚後三年、只今も矢張引續いて讀んで居ります、併し或人の勸めに依つて他の婦人雜誌を二三ヶ月取りましたが、矢張り本誌の方が趣味があるやうに思つて、四ヶ月目に止めました、と云ふやうな譯でございまして、此の女學世界の愛讀者は令嬢に限らず、奥樣方も澤山にお讀みあそばすことだらうと思ひますから、何うか令嬢の倶樂部のみに止めず、愛讀者一般、即ち廣き範圍の婦人倶樂部をお設けにならんことを希望いたします、早々、

○　埼玉　小山幾代

愛讀者諸嬢よ、私は此の倶樂部に於て一言申しますから、皆樣はどうぞよく御覽んなされて、

賛成且つ實行して戴きたいものです。婦人でも、又男子でも、同じことでせうが、文字の下手なのは、第一品格を落すものですから、どうぞ皆様はお暇の折に文字を習はれむことを、切に希望いたします。私は東都へ遊學して居つたので交際は廣い方ですから、北海道や九州のやうな處の朋友から、綿々しく美しき玉章を折角送つていたゞくけれども文字の下手なため自然と御無沙汰勝になります、従つて疎々しくなる、信用を失ひます、信用がなくなると、遂ひには音信不通、無二の朋友なりし人も知らず知らずの間に絶交になります。のみならず普通高女スクールでも卒業すれば先づ大抵は家庭に居ります、そして今迄でのレターの駄精者がなくなると、一人徒々に月日を過して、終にはメランコリー症なんてのになるかも知れません。それ故どうぞ皆さんそれ〴〵品格を落さない丈に書ける様にしていたゞきたいものです、(丙賞)

○　福井　片山千里

廻覧雑誌

妾も度々本誌に投書させて頂いて居ます者ですが、皆様は何所のお方で、どういふ筆蹟のお方か知れますと、どんなにたのしいでせう。それで妾女學世界誌友廻覧雑誌というのをこしらへて、加入した人に夫から〳〵へと廻したいと思ひますが、御賛成のお方は文藝作品ならば何でも半紙に書いて下名の所まで御投書くださいませ。(福井縣丹生郡吉野村余田片山千里)

○　千葉　山口秋子

東京に住まつた時分には、静かな田舎でのんびりと拗れず生ひ立つ女の身が羨山しかつたが、私は今はねがひ通り田舎に住まつて家庭の人となつた、殊に小さな子供を育だてるには、なほ更、田舎にかぎると思ふ、そして時折り家内打ち連れ立ちて、東京見物に出掛けるのが何より樂のしみだ、來て見る度に變る町の様子に驚き、男女手を引きあつて人ごみの内をゆる〳〵と過ぎ行く御姿に眼を圓うし、水の流れのそれの如く變り行く流行に感心し過ぎて、電車の乗り替を間違へたり仕て、滑稽の有りつたけを仕盡くして、歸つて嗚呼東京はにぎやかだつた、面白かつたと嬉れしくかたりあふのは樂のしいものです。

○　大阪　楠　子

女學世界記者様に御願申上げます、尊き誌上の一部を令嬢くらぶといふ名の許に私達の自由通信の出來る様に遊ばして下さいました事を………然し何だかちと名前が高尚すぎるので、私達の様な者は氣がひけて仕様がございませんわたくし通信とでも遊ばしては如何!?

それから女學世界愛讀の皆様の内開齒に趣味を御持ち遊ばす方に御交際を願ひます。

○　深川　不美子

私は女學校を卒業した年には、花の都に出て之れ以上の學問をし、天晴女學者となつて世に立つたならば等と、東京へ出さえすればたやすくえらくなれる様に思つてゐた、それに二三の友は既に上京したのですから、若き心はいやが上にもえ立つて、兩親に願ひますと、女はそれ丈で澤山だ、後は家に居て家政の事でも覺えなければならぬ、と云つて許してくれません、今迄毎日學校に通つた身が終日家にばかり居るのですもの、手持ちぶさたで其事ばかり考へては幾度泣いたか知れません、其内に一年は夢の様にたつてしまひました、功名心も幾分薄くなりました、そして二年後今日では、私には慈悲深い親がついて居て嫁の爲によかれとのみ決して悪い様にはして下さらぬ、只おとなしく其日其日にすべき事をして居さへすればそれでいゝのだと心附いては、別に不平もなくなりました。

○　　　　四谷　櫻子

ほんとに兄弟のある方はいゝ事れ、どこへ行くのでも御兄弟御揃ひで、姉さま〳〵なんて妹や弟からよばれて、どんなにかお樂しみでせう、私なんか一人ぼつちでそれはさびしいわ、今は父母にかはいがられて人からは幸福者といはれて不自由もないけれど、行末の事考へると心細くつてしみ〳〵いやになり升よ、どうして一人っ子なんかに生まれたのだらう、思ふとほんとにつまらないわ。

笑話

○生命と財布

三重　横山はる子

夫婦にて散歩して居りまする中、如何いふはづみやら、妻君は過まつて川へザブンと落ちました故、夫は大層驚きまして、「ナア…大變だ神様も佛様もどうぞ愚妻を御助けなすつて下さいまし」と切りに祈念を致しまして、漸々の事で助け上げて、扨て夫は妻君に向ひ、「若し那の時お前が死んで終つたなら、己はもう如何しやうと思つたよ、もう懲り〳〵したから以來は決してお前に財布は預けないよ。(丙)

○　　　　麻布　百合子

十五ばかり年上なる夫「お前が若し小林幸子ならば喜んで嫁くだらうれ」、妻、どう致しまして、あんなお爺さんの處へ誰が貴耶、夫「さうか矢張り年の多いのは嫌か」としよげかへる、妻透かさず、「イーエ、でも貴耶位までは却て宜敷ので御座いますよ。」

○　　　　兵庫縣　河中あさ子

女學生二人、公園のベンチに腰をかけて、花子「文子さん、喜んで下さい、昨日あの植原さんから結婚を申込まれたんで、私承諾しましたから、」文子「オヤ、さうですか、花子さん喜んで下さい、一昨夜その植原さんから結婚を申込まれたけれど私キッパリお斷りしましたから、」

○　　　　下野　浪花

父嫁入に行く娘に向ひ「離緣されて歸つて來る様な事があつては二度と家へは入れないよ」、娘「宜いことよ、豫備が澤山ありますから」、(丙)

○新體詩

神戸　中村かね子

星野「薫さん、今月の「新文學」に出た僕の新體詩を讀んで下さいましたか、あれは僕が七月七夜碌々眠らずに心血を灑いで作つたのです。」薫「妾は未だ讀みませんが、昨晩兄が讀んでゐる中に睡くなつて來たと云ひました。」(秀)

○母親の無學

大阪　原つね子

母、加代ちやん、今の内に一生懸命になつて學問しなくては不可ませんよ、
加、學問したら何に成れるの、
母、大きく成つて學問が無ければ お嫁様に成れませんよ、
加、ぢやお母様は如何してお嫁様に成つたの、

○下女の智恵

東京　伊藤花子

奥様「御前あの郵便を出して呉れました? あれは大變大事な手紙なのよ。
下女「ハイ確に出して參りました。
奥様「それでは何故三錢持つて御歸りかえ。
下女「誰も見て居ませんでしたから 切手を貼らずソット郵便函に入れて參りました。

彙　報

△女子大學の卒業式

去月十日第八回卒業證書授與式を擧行したり、君が代の合唱、證書授與、校長の告辭等ありたる後、文相の祝辭、來賓大隈伯、澁澤男の演說あり、次で生徒の謝辭、紀念撮影等ありて式を終れり、此の日大隈伯が「森鷗外君の夫人は有名な賢婦人で、而かも美人である、博士も愛して居られた、然るに此頃博士は例の妙文で夫人の事を書いたさうである、が是れも那處かに高等敎育の何かゞあつたものと見える、彼樣なつては賢婦人も模範とするにちつと困るわけである。」と言ひて生徒を戒めたるが最も振つて居た樣なりき。

△女子美術學校の卒業式

去月一日本鄕區菊坂町の新築校舍に於て卒業式を擧行したり、當日辻男爵は演說して曰く、予の耳に入る所にては家庭風波の原動力となり居れる者は多くは敎育を受けし婦人なり、是れ學覽其の敎育技藝を以て衆人に誇り謙遜貞淑の德を缺くを以てなり、圓滿なる家庭を作るの素地を作らんが爲に敎育を受け、而も其の敎育が風波の種となるに於ては世人が女子敎育を危ぶむ亦故なきに非ず、諸姉は之に鑑み身を愼みて母校の名を墮す事なく、天晴良妻賢母とならん事予の切望する所なり、云々。

△實踐女學校紀念祝賀式

府下中澁谷村同校にては去月廿七日創立滿十年祝賀式を擧行したり、式場は體操場を以て之に充て正面には紫の幕を張り、「惇德」の額を揭げ、薰香馥郁たる生花を飾り、斯くて君が代の合唱を以て式を始め、下田校長の式辭、靑木副校長の報告、來賓土方伯並に犬養毅、井上角五郞氏等の祝辭演說、卒業生並に在學生總代の祝辭等あり、十年紀念の祝歌を合唱し午後五時式を終れり。

△三輪田高等女學校卒業式

麴町四番町なる同校の卒業式は流石に熱誠にして眞摯なる校長の訓戒は生徒一同感淚を流せり嘉納、江原の二氏の演說いづれも卒業生にはよき餞けなりし。

△愛國婦人會總會

同會第八回總會は去月五日日比谷公園に開かれたり、當日は總裁閑院宮妃智惠子殿下御差支の爲め其の御名代として午前十時に東伏見宮妃周子殿下は宮岡御用掛、小野家令を從へ、伏見若妃經子殿下は橋口、田中兩御用掛を從へ御來着御休憩室に於て岩倉會長以下に拜謁を賜り、やがて式が始まるや、岩倉會長開會の挨拶を爲し、總裁御名代伏見宮妃殿下には御擧朗かに左の御諭旨を賜はりたり。

本會は年を趁ふて發展し、玆に第八回總會を開くに當り諸氏と相見るに至りしは最も欣ぶ所なり、諸氏將來の事業に對し、益々協心戮力以て遺族癈兵救護の實を完成せんとを望む

岩倉會長は之れを拜受して直ちに奉答文の朗讀あり、次に有功章の御親授、會務の報告等ありて閉會したり。

△女子高等師範卒業式

各種敎育界の名士數十名を來賓として招請し嚴肅なる講堂にて式を擧げたり、校長の告辭、文部大臣の祝辭、各生徒の答辭いづれも戊申詔勅の聖旨を畏み時弊矯正の意を含みたるは流石に敎育本位の學校と感服せり。

△日本女子商業學校卒業式

麴町區土手三番町同校にては三月廿七日第四回

卒業式を擧行したり、式は午前九時に始まり、來賓天野爲之氏、校長和田垣謙造氏等の講演あり、午後よりは同窓生の組織にかゝる常磐會の年會を開き、箏曲、對話、越後獅子、活人畫等ありて、頗る盛會なりき。

△東京女學館卒業式

虎の門内同校にては三月三十日卒業式を擧行したり、卒業證書授與後、館長土方伯の告辭、之に對する卒業生の答辭等あり、餘興に移りては英語對話、洋琴連彈、英語唱歌等ありたるが、就中英語對話は最も巧妙を極め、生徒の一團が、學者と軍人と何れか國に有益なる、と云ふ討論題を揭げて、喋々互に意見を鬪はしたるあたりを見ては、平生の訓練左こそと思ひやられたり。

△東京音樂學校卒業式

例の如く證書の授與式ありて、各部卒業生の演奏あり、演奏每に來會者の喝采、拍手、堂内崩るるばかりなりしは他學校に見られぬところなりし。

△東洋高等女學校卒業式

小石川區丸山町同校にては三月廿八日卒業證書授與式を擧行せり、君が代の合唱に次で學事報告あり、それより校長村上博士より卒業證書を授與せられ、次に校長の告辭あり、來賓にては井上哲次郎氏の演説ありたるが、婦人の容貌と道德との關係は最も痛切に聽かれたり、最後の生徒の唱歌は大に人を感動せしめたりと見え、どうも近頃の女は歌が旨くなつた樣だと述懷して居たる來賓もありき。

△婦人法話會の園遊會

淺草本願寺内同會は其二十三年紀念會を去月十八日田端の岩倉子爵邸内に催ふし、まづ子爵夫人の開會の辭に次ぎ大谷本願寺前法主の挨拶伊藤大忍師の法話あり終つて邸内園遊會を催ふしたり、來會婦人約四百名。

△精華高等女學校卒業式

府下淀橋町字角筈の同校にては、三月三十日第七回卒業證書授與式を擧行したり、君ヶ代の合唱、卒業證書授與を終るや、校長勝田孫彌氏は立つて卒業生の前途に就て懇々として訓戒を與へられ、それより來賓丸山郡長の祝辭、横井時雄氏の演説等ありて、式を終りしが、式後更に同窓會を開き、離別の名殘を祕めたる藝を演する者もありて却々盛なりき。

△三越の子供博覽會

雜沓せる市中に瑞西山中の景をパノラマ式にあらはしてまづ一般看客の度肝を拔きたり屋上の庭園、噴水の仕掛、大神樂、お伽芝居の演藝、一として婦人小兒の眼を喜ばさゞるはなし、陳列場は美術、教育、裝飾、園藝、動物等の各館ありて種々珍らしきものを蒐集し子供の樂園を展開せり。

△東京婦人倶樂部

藤生貞子の主宰にかゝる牛込區水道町四十八番地同倶樂部にては、從來英語科、和洋裁縫科等を置きて一般生徒に教へ來りしが、今回更に西洋婦人の爲め日本語學科を增設したりと云ふ

△梅香女塾英語科

木村貞子女史の主宰にかゝる小石川區原町百十一番地同塾にては、今回英語科を擴張して寄宿生以外の者の通學をも許す事となしたり、擴張の英語科は、米國スタンフォード大學助教授進藤道太郎氏が主として指導の任に當らるゝ由にて、講義は既に去月中旬頃より開始せるが、生徒には貴婦人令孃連が多しと云ふ。隨時入學を許す。

女學世界増刊

驚ろく手紙

第九巻第七號 五月十五日發行

現代の文明が化育せし或るもの、現代の思想が温醸せし或るもの、幾多の有益なる新事實、幾多の趣味ある新現象は今やこの驚ろくべき手紙の内に収集せられたり、左の目次は即ち其内容の一斑を示すものなり。

讀者文藝　懸賞募集（〆切五月十五日）

▲婦人盛裝の寫眞（結婚前後）

▲大家族の集合寫眞

▲婦人會婦人團體集合寫眞

▲才媛筆蹟

▲家庭重寶日用百事便

▲食卓日記

▲各地風俗の變遷

▲笑話▲短文▲和歌

▲令孃倶樂部（投稿隨意）

投稿規則◎笑話、和歌、短文、令孃倶樂部、百事便は端書に限る但し一枚の端書に二種以上は採用せず◎筆蹟は口繪の寸法に依る◎名宛は博文館內「女學世界」とし原稿に其種類を明記する事

▲賞品

△寫眞は甲參圓、乙貳圓、丙壹圓

△食卓日記、筆蹟は甲貳圓、乙壹圓、丙五拾錢

△和歌、短文、笑話、百事便、令孃倶樂部甲壹圓、乙七拾錢、丙五拾錢　秀逸參拾錢

△風俗の記事特七圓甲五圓乙參圓

每月一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）……金二十錢

四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢

八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢

十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢

內｛定刊數……十二冊｝｛增刊四回……一、五、九、十一月價格同一｝

郵稅　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十二年五月一日發行 第九卷第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番

本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

（後付の一）

女（後付の三）

現代の婦人は

斯の如き書を讀まざるべからず



鳩山春子女史序文　前田雪子女史著

巴里婦人の交際振 奥樣の顧問

全一册三六判
紙數四百四頁
正價四十八錢
郵稅六錢

花園に下りて花の一枝を折らんとせば、先づ必ず其が中の精粹を取るならん、本書は歐米交際界に花の王と稱せらるゝ巴里婦人の輕妙なる應對振、訪問振、談話振、舞踏振を始めとし、宴會法、婚姻法、外出法等あらゆる禮法を網羅したれば、苟も文明の禮法を學ばんとする奥樣方、特に未來の外交官夫人とならるゝ淑女令嬢方は一本を購求し給はゞ、二十世紀の社交界に立ちて華々敷く活動することを得べし。

田村江東君著

活動せる 實業界の婦人

全一册洋裝菊判紙數二百四十頁
卷頭實業家婦人寫眞版挿入
正價金三十八錢　郵稅八錢

（内容）

△勤勉力行の化身：三枝かれ子△文明の美化：菅川英子△發明家の妻：仁科終子△内順の憂なき婦人：山崎ため子△獨立自尊の標本：篠原よれ子△隠れたる偉勳：川合こう子△黒リボン：伊藤なか子△時計の針の撓みなき妻：服部まん子：△夫婦共勵の醫師：篠田せい子△白牡丹の姉妹：松田八十子大西琴子：△寧ろ襯衣を縫はん：秦利舞子△準備敎育を受けし嫁：佐藤歌子△才德並備の豆妻：龜井まき子△商業敎育の産物：富成梓子△福德圓満の内儀：横田鋏子△商賈繁昌の秘訣：内田とめ子△夜店の女書肆：片桐なか子△實踐躬行の才女：山崎きみ子△白美容：丸茂宗子△此母にして此嫁あり：大橋きよ子△妙齢の女書記：秋山德子△中洲の西大后：佐々木賴子△光榮ある襯衣の元祖：茂野蝶子△實業家の理想的婦人：雨宮信子、同てる子

福田琴月君著

當世 奥樣氣質

再版

洋裝四六判紙數二百頁　正價卅錢　郵稅四錢

（目次）

◎奥様十種
◎人の噂
◎結婚前の某嬢に答ふ
◎大みそか
◎土産日記
◎奥様となる事は易く奥様たる事は難し
◎あはれな誇り
◎會社員の奥様
◎母よ
◎霜夜
◎奥様の失望
△餘興
◎滑稽殿の蒲燒

東京本町
博文館
振替口座番號
東京二四〇

女（後付の四）

女(後付の五)

(後付の六)

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱君撰

日本歌選

上古の卷 洋裝四六判總クロース上製紙數約三百餘頁（正價八十錢 郵稅六錢）

上下二千載、我が國文學の精髓として、國民が趣味好尚の中心たりし和歌は、その載籍の傳はれるもの凡そ幾千卷。その歌數に至つては無慮幾萬首。爲にこれを悉く渉獵せむこと、專門の士と雖も容易ならず。研究に志ある士をして、むなしく望洋の嘆あらしむ。佐々木氏乃ち日本歌選の計畫あり。古來の選集家集はた諸書に散見するもの、うちより、各時代各作家を代表すべき作品を選出して、わが國歌の精髓を示さる。氏が該博の學識と、嚴密なる批評眼とは、よく傳統あり歴史ある我が二千年の和歌を縮撮し、選出し得て餘蘊なかるべし。茲に第一卷上古の卷稿成りて刊行せらる。即ち上世歌史の第一期第二期、紀元前より天武帝までの歌謠を輯錄す。而してこの兩期の作は其數少く、かつ普く諸書に渉りて採輯せるものなきを以て、本卷は特に例外として、撰擇を用ゐず、紀記を始め風土記その他の古書よりすべて輯錄せり。從つて本書は、上古の歌謠を研究せむとする士にとりて最も完全なる資料たり。かつ卷末に、上世歌謠の概觀といへる論文を附し、第一に出處と作時代に就いて論じ、古來假託の作を辨別し、第二に兩期の歌謠の性質とその變遷とを論じ、第三に祝詞壽詞誄詞に就いて論じ、第四に兩期の歌謠研究の歴史を記述せり。又附錄として、研究の參考書目、及び時代句數歌體等によりて分類せる表、時代と作者とによりて分類せる表等を添ふ。わが國文學を研究せんとする人和歌に志あり、歌學を學ばむとする人の爲に必須の書なり。

佐々木弘綱翁遺著 佐々木信綱君校訂

和歌 世々のあと

全一冊 洋裝四六判美本 紙數百四十六頁 正價二十八錢 郵稅四錢

和歌世々の跡は明治の歌壇に多大の功勞ありし佐々木弘綱翁の遺著にして、國初より近世に至る凡ての歌人の代表的短歌を、時代を追うて採錄せるもの。專ら初學者の爲にとて、その選出に、或は戀歌を省き或は難解の歌を避けられたれば、和歌の小歴史として、作歌の模範として、獨習用に又高等女學校の教科書等に、最も適當なる書なり。長く草稿の儘秘藏せられしを、昨年翁が十七年祭に、翁の郷里伊勢石藥師村に紀念碑を建設するに際し、その紀念として、息信綱氏の嚴密なる校訂を經、かつ近世歌人年表和歌系統圖を附し、添ふるに井上、小杉、木村、芳賀博士、本居侍講の追悼の文章を以てす。國文和歌に志ある人々の、必ず座右に備ふべき書なり。

東京本町 博文館

佐々木信綱君著

歌學論叢

全一冊 洋裝四六判總布製 美本紙數五八〇頁 正價金壹圓 郵稅八錢

歌學論叢は、佐々木氏が、數年前より帝國大學文科大學に於て、和歌の歴史を講ぜらるゝ、其研究の餘材として成れるものなり。或は燃犀なる眼孔を以て『和歌と時勢』『和歌の將來』『歌學の根本』『上世の和歌』『歌格の研究』等に就て論究し、或は卓拔なる見識を以て『人麿と赤人』『貫之』『西行』『實朝』『景樹』等を論評し、或は『仙覺以前の萬葉研究』『戸田茂睡』等精緻なる考證あり。或は『萬葉集の女歌人』『建禮門院右京大夫』等趣味津々汲めども盡きざるものあり。又『六人部是香』『大隈言道』『野村望東尼』等未だ世に知られざりし歌人歌學者を紹介したるが如き、國分學史上に一新事實を提供せるもの。其他『萬葉集私見』『近世歌人雜話』『家集のいろ〳〵』等すべて廿篇、五百八十頁にわたり、該博なる學識と清新なる文藻と相俟ちて、我國の歌學界に新生命を與へたる書と云ふべく、又上代より新世にいたる側面の日本歌學史と云ふを得べし。苟くも和歌に志あり。國文に興味を有する人々にとりて必讀の好著なり。

女（後付の八）

明治四十二年五月一日發行（每月一回一日發行）

女學世界

第九卷第六號

明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊼
明治42年4月（第9巻第5号）、5月（第9巻第6号）

2009年12月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3732-9　C3321